

---

# 運命の環は巡る

らみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命の環は巡る

### 【Nコード】

N4502T

### 【作者名】

らみ

### 【あらすじ】

夏の終わりの辺境で、護衛士ラウルは一目惚れをした。有り金はたいて手に入れたのは一振の剣。しかし喜びに浸る間もなく奇妙な男装の少女を保護してしまう。襲われ逃げてきたというその少女が一人で隣国に向かうというのを放ってもおけず、ラウルは共に旅立った。そして同じ頃、とある帝国騎士もやはり隣国へと向かっていた。そして国境で出会ったのは、追っていた事件の最重要参考人の女。二人と一人は出会い、別れ、そして世界は動く。

## プロローグ

とろりと冷たい闇の中、小さな蛍火がすいと目の前を横切った。

おじいしゃま

舌足らずのあどけない高い声。

ああ、これは。

遙か昔に失われた、誰より愛しい宝物。こんな真つ暗な寂しい場所に、ずっとひとりでいたのだろうか。

（おお、こちらにおいで。そこは寒い）

呼びかければ光は戸惑うように漂った。しかしすぐに、まっすぐにこちらに向かって飛んでくる。

そして差し出した手に触れようとしたその瞬間、蛍火は滲むように消え失せた。

不意にばかりと目蓋が開いて、老人は目が覚めた。  
室内はまだ夜中と言っていていいほどに暗く、しん、として物音ひとつない。

（ゆめ……？）

懐かしくも切ない夢を見た気がする。

意識が浮上したと同時に淡く消えてしまったが、なぜかひどく悲しかった。

胸に痛みを感じて瞬くと、こめかみを冷たい水が伝って落ちる。

（涙？……なぜ）

不可解なそれを手のひらでぐいと拭い、もう一度目蓋を閉じる。

起床にはまだ早い、そう思ったのだが眠気はとうに出払った後のよう、じっと待っても一向に戻る気配はみられなかった。

仕方なくそのまま眼を開けていると、じわじわと見慣れた天井がわずかな濃淡で浮き上がるように見えてくる。上から下へと視線だけを動かして、梁を数えて眠気に帰宅を呼びかけようとしてみたが、ひとつふたつと数えたところで続きが見えなくなってしまった。

これはもう起きるしかないかと身を起こし、老人は右膝の違和感に気が付いた。

（目が覚めたのは、これのせいか……）

意識しだすと途端に存在を主張する、この厄介な膝。

顔をしかめながらもそろそろと寝台を抜け出し、底のすり減った革靴を引つ掛け3歩移動して分厚いカーテンを開ける。

空は多少明るくなっているかもしれないが、生憎森の奥深くにあるこの小屋にその光はまだまだ遠い。ガラス一面を覆った結露を拳で拭いて見てみたが、かすかに濁った窓の向こうも暗い闇の中に沈んでいた。

昨日の朝から一日中降り続いた雨はもう止んだようだがそのぶん今朝は湿気が酷く、肌寒いこの室内でも息苦しさを感じられる。夏の終わり、雨期の到来を告げるこの雨は、山中では下界ほどの気温を伴わないせいか代わりに湿気が身体の奥までじわりと染み入ってくるようだ。

それが、こうして古傷の存在を思い出させる。

身を返してしくしく痛む膝をさすりつつ、窓から数歩の距離にある暖炉の前で膝を立てて腰を下ろし、老人は火を入れた。

若い頃とは違い、火を熾すことは随分と楽になった。暖炉の脇に積んである薪を数本中に放り込み、目の前に転がっている「点火筒」のバネを引き、薪に当てて筒の突起を押すだけだ。これだけで、あっさり小さな火が立ち上る。

魔術とは、便利なものだ。

だが老人はその便利さに、どこか違和感を覚えてしまう。知人には考え過ぎだと言われたが、これはどうしてもぬぐい去ることができなかった。

新しいものを柔軟に受け入れることができない、これこそが「年をとった」ということだろうか。

そんなことを考えながら老人は白くなった顎髭をゆっくりとしごき、薪にまわりついた火がじわりと大きくなっていくのを黙って見ていた。

老人は、独りだった。

丸太を組み合わせて造った頑丈だけが取り柄のこの小屋に、たった一人で住んでいる。

小屋の周りは深い森。一番近い村までも、獣道をかき分け歩いて半日ほど。あえて人の手の入っていない、山の中腹のこの場所を選んで移り住んだのが10年ほど前のこと。村に住む武器屋の親父は「いい加減にしとけ」と何度も忠告してきたが、老人にここを出るつもりはさらさら無かった。

もう、「人」の世界には戻りたくない。

ただそれだけの想いで仕事も家族も友人も、全てを捨ててここに

来たのだ。今更戻れるはずもない。

かつて鍛えた筋肉はまだまだ太く張っているし、水を運んでも腰が痛むことはない。ただ右膝だけが、時折針を刺したように痛んで動かなくなる。不具合といえればそれだけだ。

食って寝て、それができなくなったら一人で死ぬ。

鳥も鼠も小屋を訪れる動物たちは皆、そうやって生きている。そこに人間が一人加わることに、どんな不都合があるだろう。

そう言えば武器屋の親父は「勝手にしやがれ！」と帰って行ったが、それでも月に一度は訪ねてくる。頼んだ覚えのない酒や煙草、薬、日用品にはては調味料まで携えて。そしてその代わりというように、暇に飽かせて鍛え上げた剣を二つ三つと持ち出していく。

「剣なんて見たくもねえんじゃねえのか？」と訊かれたが、嫌いでもそれしか知らないのだから仕方がない。他の趣味を探すには年を取りすぎていたのだ。

火はだいぶ大きくなり、暖かな光がぼんやりと、室内の輪郭を浮かび上がらせてきた。

暖炉の前にはすり切れた毛織物が敷かれ、そのそばには一人掛けの大きい粗末な椅子と、小さなテーブルがあった。そして暖炉に向かつて左手には寝台と棚があり、その反対側に小さな調理場がある。そして調理場の側にある入り口から寝台までは、10歩も歩かず届いてしまう。ここはたったそれだけの、本当に小さな小屋だった。

老人はまた何度か髭をしごくテーブルに手を伸ばし、パイプと煙草入れを取って膝に乗せた。慣れた手つきでパイプに煙草を詰め、残りをまたテーブルへと戻す。次いで裂いた紙をひねってこよりを作るとそこに暖炉の火を移し、さらにその火をパイプに移した。そ

れからも二度三度とこよりから火を入れて、ゆつくりと煙草をくゆらせる。これがこの老人の、毎朝の儀式だ。

バネと魔石をつかった「点火筒」なるものが発明されて随分経つが、未だにパイプに使えるものはない。火花を散らして火を熾すのではなく、少しの間消えないでいてくれる、小さな炎が欲しいと老人は思っているのだが。

この山奥に閉じ籠りきりの身には、下界でその願いが叶ったのか、知る由もなかった。

老人が居を構えたこの場所は、アルトローラ帝国の東の辺境、大陸の中央にそびえ立つトウルネイ山の西側の中腹にあった。そして小屋のすぐ東側に高く切り立った崖があるせいか、朝はいつも多少遅い。

だが山の影に入っても鳥たちは夜明けをちゃんと知っているようで、毎朝律儀にけたたましく鳴いてくれる。それを合図に老人は起き出して、パイプに火を入れるのだ。

今朝は膝の痛みに起こされたが、それでも日課は変わらない。またいつものようにのんびりと池で釣りでもして過ごすか、気が向けば崖のきわに建てた鍛冶場で剣を鍛え、数日寝食を忘れるか、といったところだ。

綿の大分固くなった椅子に深く座り、老人はぼんやりとパイプをくゆらせた。目蓋を閉じて、暖炉の熱を頬に感じながらじっと耳を澄ませていると、いつしか鳥の声が聞こえてくる。一旦森が眼を覚ますとそのざわめきは波紋が広がるように、素早く確実に広がってゆく。昨日の雨で思うように食べられなかったせいなのか、今朝の鳥はやけに賑々しく鳴いていた。

ふと、鳥の声が変わった。

ギアアギアアと、何かをしきりに警戒している。

蛇でもいたのだろう、そう思つて老人は、ゆっくりとパイプをくわえた口を閉じ、そろそろと息を吸い込んだ。消えかけていた煙草に微かな赤い点が灯り、細く柔らかな煙が立ち上る。これでまだしばらくは楽しめる。老人は眼を細め、また背もたれに身体を預けた。だが、警戒音は森全体に広がつていった。訝しむ老人の耳には小鳥から大型の鳥まで、いや、鳥はおるか動物までの、非常事態を告げる様々な音が飛び込んできた。

小屋の窓も入り口も閉じたままであつたから、正確なところはわからない。だがそれでも森全体が張りつめていようだった。それぞれの生き物がそれぞれの方法で警戒を発し、それがしばらく続いたかと思つと不意におさまり。そして、辺りから一切の音が消えた。

風の音も葉擦れも鳥の羽ばたきも止み、耳が痛くなるほどの静寂の中で聞こえるのは暖炉で薪が爆ぜる小さな音と老人の微かな息だけだ。

こんなことはこの場に移り住んでから、初めてのことだった。

「良くないこと」が起こる時には、動物達は真つ先に逃げる。だがこれは違う。ただただじつと身を潜め、まるで「何か」を待っているようだ。

それが一体なんなのか、老人はひどく気になった。

老人はパイプをテーブルの皿の上に置き、ぎい、と床をきしませ立ち上がった。床を鳴らして数歩の場所にある、立て付けの悪い扉を開ける。その際に結構な音がしたのだが、動物達はそれに驚いて飛び出したりはしなかった。外に出れば、肌をぴりぴりと焼くような緊張感で満ちており、それがますます不思議になつて老人は一歩足を踏み出した。



空は明るくなってきたようだが巨木の影になった小屋の周辺はまだ薄暗く、濃い霧がかかっている。身体の周りにねっとりまとわりつく霧をかき分けながら、老人は木製の階段を下りて顔を挙げた。そのまま辺りをぐるりと見渡すが、藍色の濃淡だけでは何が起きているのか全くわからない。

視界の利かない森の中は、慣れていても危険だ。小屋の中で動物達のようにじっと息を潜めていようか、そう思ったがどうにも胸がざわめいた。濡れた葉で滑らないよう注意しながらもう少し、と外に踏み出してみると、今度は視界の隅になにやら光る物が見えた気がした。

東の崖、鍛冶場のすぐそばに湧水の池があるが、そちらの方だ。ぱきり、と枝を踏みしめながら、老人はゆっくりと坂を下る。鍛冶場の前を通って注意深く池の畔に立てば、その光の全貌が姿を現した。

「蚊柱……？　じゃ、ねえな」

池の左手にある崖の中腹、水底から伸びる大きな岩の上方の、茶色い地肌が見えている辺りにそれはあった。

光の柱だ。

まだここに陽の光は届いていない。しかも濃い霧の向こうにあるというのに、なぜかその光は滲むことなく、はっきりと姿を捉えられる。池を挟んで見上げる岩の上で、きらきら輝く小さな粒子が不規則に動きながら柱の形を成している。光の粒子は踊るように宙を舞っていたが、やがて渦を巻き、集まってひとつの星になると瞬き始めた。

強く、弱く、脈打つようにゆっくりと明滅を繰り返しながら、星は輝きを増してゆく。

やがてその星はひときわ強く輝くと、身震いするように蠢いた。

眩しさのあまり、かざした手の後ろから様子を伺う老人の前で星からなにかが零れ出る。最初に丸いモノが見え、次いで平たく細長いモノが繋がって出てきた。細長いモノは途中から二つに分かれて細くなり、これはまるで

「人、か……？」

星からずるり、と頭から吐き出された人間は、崖の上を転がりながら滑り落ちた。と同時に星はまた粒子に戻って散ってゆく。

息を潜め、じつと様子をつかがっていた森が、ほっと息をついたような気配がした。

風がそよぎ、梢はざわめき、鳥が謳う。

あれほど濃かった霧も、いつの間にか薄くなっていた。

星から出て来た人間は、岩の上で斜めに生えた細い木の根元に胸の辺りでひっかかっていた。

濡れた土の上を転がったせいで泥と落ち葉にまみれていたが、寝間着のような服の下から白い足が覗いている。だがその人間は意識がないようで、身体はだらりとしたままだ。

霧が晴れてわかってきたが、その人間の身体は小さく細く、どうも子供のようだった。

(さて、どうしたものか……)

人と関わりたくないと思っただけでも、これは見過ごせなかった。助けなければ、そう思ったが方法が見つからない。

子供が引っかかっている岩は、丁度池から生えている。池は深いところでも老人の胸までしかないが、下から登ろうにも滑らかな岩

肌には足場になるようなものがない。そして岩の周りは急な崖になつており、ここを伝うにも僅かに生えた草木ではとても老人を支えきれまい。更に濡れた足場と痛んだ右膝を抱えていては、子供のそばに辿り着くことさえできないだろう。残るは上から、となるが崖は高く、果てが見えなかった。

どうする、と顔をしかめた老人の耳に、みし、という小さな音が飛び込んできた。あ、と思う間もなく子供の身体が傾ぎ、たわんだ枝が軽快な音を立てて折れ飛んだ。支えを失った身体はそのまま岩を滑り、水音を立てて池に落ちる。

水飛沫が止んだ後には何事もなかったかのように、もとの穏やかな水面が顔を出し

「こりゃいかん！」

老人は膝の痛みもすっかり忘れ、慌てて池に飛び込んだ。

## プロローグ（後書き）

11 / 11 冒頭部分追加しました。

## 邂逅・1（前書き）

さりげなく造語が入っていたりしますので、ご注意ください。

見上げる山の向こうには一片の雲もなく、空は高く蒼く澄んでい  
る。

天に向かって手を伸ばしたような、奇妙な凹凸のある山頂があら  
わになることは極めて稀で、目にするのは男にとっても初めてのこ  
とだった。

(これを見ると幸運が訪れると言うが さて)

夏でも溶けない雪を冠したその白い山頂をしっかりと眼に焼き付  
けて、男はまた古びた荷車を押し始めた。

大地に根を張るように広がった丘陵地帯のただ中に、一本の道が  
通っている。道幅は馬車がすれ違えるほどあるが、土を固く踏みし  
めただけで舗装はされていなかった。そして周りを見渡せばそこは  
一面緑で覆われて、ところどころで牛や羊が草を食んでいる。

なんとものかな風景だ。絵に描いたような境界の、田舎道。だ  
がこれでもこの道は、国の主要な街道のひとつとして知られていた。  
もっともこの街道を知るほとんどの人間は麓町のブースが終着地  
だと思っている。そのためこの道が隣国まで続いていると知ってい  
るのは、地元の間人か、余程の物好きか、もしくは職業柄地理に詳  
しい者に限られていた。

その忘れられた街道が貫く中でもひととき大きな丘を、一台の荷

車が登っていた。

「すまんなあ、ラウルよお。高名な護衛士さんに、こんなことさせちまってさあ」

「かまわんっ……毎度のことだ」

前方で口バを引く中年の男が、振り返りながら声をかけた。

荷車を押しながらそれに答えたのは、背が高く細身の、だが鍛え上げられた肉体を持つ男だった。年の頃は30代半ばといったところで護衛士組合からは「特級」の称号を貰っている。北方の血を色濃く受け継いで、くすんだ金の短髪に深い翠の瞳を持つこの男は、護衛士としていままさに円熟期を迎えていた。

この護衛士の出身は大陸最北の国ニールということだが、ふとした仕草に気品を感じることがある。街中で見る男達とは明らかに違っていることから、実家は名家であろうと想像できた。さらに仕事柄数多くの実践をくぐり抜けてきたせいか優雅だが隙のない物腰を持ち、そこに独特の風格が加わって、護衛士というより軍の将校と言って良いほどの威厳もあった。

にも関わらずこのラウルという護衛士は、こんな田舎で宿の亭主ごときに破格の値段で雇われて、そのうえ荷車まで押している。こんなことは護衛士の仕事ではないし、断られても文句は言えない。だがラウルは「またか」という顔はしたが、それだけだった。むしろ率先して荷を押ししてくれている。

こうなることを知っていたから、宿の亭主は仕入れ先のブースの街で見かけたのを幸いに、あえて男に声をかけたのだ。

(顔に似合わず人が良いよな、ラウルはさ)

宿の亭主ははくすりと笑って前を向いた。

この護衛士は常に怒ったような顔をしているせいか、見た目が怖

い。

これはどうやら地顔のようだがそのせいで随分と損をしているようだ。護衛だけならそれも良いのかもしれないが人付き合いは苦手のようで、暇になるとあえて人の少ない辺境を訪れているきらいがある。

腕は立つし心根は優しく面倒見も良いのに、この男には弟子はおろか恋人の一人もいないときた。三十路も半ばにして未だ独り身のこの男に、なんとか人並みの幸せを手に入れて欲しいと亭主も妻も願って止まないものだが。

一度知り合えばこれほど良い男もないのに、世の女というものは本当に見る目が無い。

(仕方ない、今晚はとっておきの酒でも出すとするかね)

宿の亭主はそんなことを考えながら、再び足を止めたロバの首筋をぼんと叩いて引っ張った。

「大陸の臍」とも呼ばれるトゥルネイ山が眼前に迫ったこの場所は、ついこの間までの突き刺すような陽射しがまるで嘘のように柔らかくなっている。冷気を含んだ風の気配がそこに残り、秋の訪れは間近だと告げていた。

その冷たい空気を胸一杯に吸い込んで、ラウルは火照った身体から籠った熱気を追い出した。汗ばんだ肌に心地良い、乾いた風がさらりと首筋を撫でてゆく。

平坦に見えて緩やかな傾斜のついたこの丘は、最後にややきつい坂になる。ここを登り切らなければ村に着かないのだが、朝から荷車を引き通しだったロバには堪えるようだ。坂の手前で歩みを止め、どうやっても動こうとしなかった。もう少しだから仕方ないと



荷車を押してやるのだが、毎回これだ。

(コイツ、わかってやってるんじゃないか?)

剣も外套も荷車の上に乗せ、襟を緩め袖を捲り、護衛というよりもはや人夫といった風情でラウルは荷車を押す。

休み休み坂を登り、足を速めた太陽が追われるように西に傾いてきたころ、ようやくカユテの村が見えてきた。

山に抱かれたこの村には、店といえばブース側に宿屋、山側に武器屋が共に一軒ずつあるだけだ。その間には民家が数軒と畑のみで、そのどれもがお世辞にも立派とは言い難い。

けれど帝都イエーツからアクサライの王都サリフリまで、中央公路を行くよりも徒歩なら5日程早いということで、早さに重きを置く者は護衛つきでこの北方公路を使う者が多かった。つまり治安があまり良くないということであるが、それでもわざわざこちらを使うのは他にも理由があるということだ。例えば臍に傷があったり、表に出せない荷を運ぶといったような。必然的に、知る人ぞ知る公路が通るカユテの村には、護衛やらワケアリやらそれを狙った賞金稼ぎやらがちよくちよく見られることになる。

それでも村人達は、適当に距離を取りながらも柔軟に彼らを受け入れていた。

そんな荒くれ者どもを受け入れてくれるカユテの村が、ラウルは嫌いではない。むしろ好ましいとさえ感じている。

なにしろ荒くれ者を相手にしても、一步も引かないどころかやり返すのだ。こんな村は他にはないし、それにここまで来たのだから武器屋にも寄っておきたい。

宿の裏手で荷を降ろしながらそんなことを考えていると、今回の雇い主たる亭主が口バを置いて戻ってきた。

「いつもすまんね。助かるよ」

「これもついでだ」

最後の荷を下ろした後、ラウルは小遣い程度の金を受け取った。そのまま腰を屈めて裏口から中に入ると、物音を聞きつけた女将が表から顔を出す。

「あれ？ あんたかい。うちの人は？」

「じき来るはずだが……空いてるか？」

「運が良かったね。今日はどっという訳か混んでてさ。あんたの部屋で最後だ」

待つてな、と引っ込んだ女将だが、すぐに鍵を手に戻ってきた。

「うちじゃ一番の部屋だよ。お代はサービスだ」

にやりと笑って渡された鍵は見慣れたものだ。護衛というより荷運びだったが、これで一泊できるうえに朝夕の食事が食べ放題なら悪くない。部屋はともかくとして、この宿の料理は絶品なのだ。

ラウルは礼を言つて2階にある客室に向かった。そこは大きな寝台が一つに簡素な椅子とテーブルがあるだけの古い部屋だが、常々女将が「どの部屋もカユテで一番さ！」と豪語するだけはある、手入れが行き届いていて気持ちが良い。

寝台の上で軽く荷を解いて外套を羽織ると、またすぐに外に出る。

（大分日が傾いてきたが、まだ大丈夫だろう）

赤く染まりつつある空を一度見上げ、人の良い護衛士は武器屋に向かつて歩き出した。

ひよろりと縦に長い影が、北方公路を東に向かって進んでいた。

街道沿い、畑の間に点在する煉瓦作りの家からは小さな煙が立ち上り、香ばしい匂いも漂ってくる。加えてかすかに聞こえる犬の鳴き声と子供の笑い声、間を置いてからの母親らしき女性の怒鳴り声に、男は眼を細めて微笑んだ。

もう夕食の準備が始まっているようだ。武器屋の親父が空腹に負け、店を閉めていないといいのだが。

そんなことを考えながら、ラウルは村の東の外れに向かって足を速めた。

カユテ村には、1軒だけ武器屋がある。

武器屋といっても、ちよつとした薬から鍋、防具、はては鋤や鍬まで扱う、ようは「なんでも屋」もしくは「雑貨屋」なのだが、店主はかたくなに武器屋だと言い張っていた。だがそう主張するだけあって実際、ここには所謂「掘り出し物」が出る。そういつた逸品は金を積んでも店主が納得しなければ売ってくれないが、運良く手に入れられれば一生手放せなくなるという。以前知り合いの騎士から見せてもらったその剣は確かに素晴らしいとしか言いようがない出来で、なるほど是非手に入れたいと願ったものだ。

この村を訪れるようになって随分経つが、いまだラウルはそのような逸品に巡り会えてはいなかった。それらの剣はトゥルネイ山の奥深くに住む鍛冶師が作っているということだが、気が向いた時しかその腕を奮わないためそもそも数が少ないのだ。そのうえ仮に店に出ても、程なくして売れてしまう。

逸品と出会えるかどうかは、運次第。だが店主によれば、それも実力のうちらしい。

「剣は己を扱うに相応しい者を選んでいるだけだ」

店主はそう言うてはばからないが、そもそも出会いがなければ話にならない。ということ、ラウルはカユテに来た時は、必ず武器屋に顔を出すことにしていた。

厚手の重い木の扉が、ぎぎいと音を立てて来客を宣言した。

その扉の枠を頭を下げて避けながら、ラウルは薄暗い店内に踏み入り奥に向かう。

自称「武器屋」の狭い店内には、壁にびっしりと商品が積み上げられていた。うかつに商品に触れないよう、ラウルは身体を斜めにして奥に進む。店の奥の梁を腰を屈めてやり過すと、その先の作業場に壮年の男がいた。酒樽に太い手足をつけて、赤銅色の羊毛を丸めて載せたような格好で座っているこの男が、この店の店主だ。

店主は作業台の前に座り、ひどく難しい顔で手元の紙を食い入るように見つめていた。

「親父、出物はあるか？」

ラウルが声をかけるまで、店主は客が入ってきたことに気がついていなかった。肩を揺らして見上げる瞳は驚愕に見開かれ、同じように開かれた口からは、力の抜けた声が漏れてくる。

「なんだ、坊主……また来たのか」

「『銀の鎖亭』の親父に、ブースで捕まってね」

「ふむ……すると、暇だと言うことだな？」  
「まあ、そうとも言える」

前回この武器屋の扉をくぐってから、まだ二月も経っていない。これまでは数ヶ月に一度顔を見せるか見せないか、といったところだったので間を置かず訪れたことに店主は随分と面食らったようだった。

ラウルも次の依頼が無かったためにこんな辺境まで流れてきてしまったが、ここでは護衛の仕事など無いに等しい。依頼を受けるなら一度ブースに戻るか、あるいはアクサライに抜けるか選ばなければならぬだろう。

ここ暫くアルトローラでの仕事ばかりだったから、雨期を避けてアクサライに行こうかと考えている。などと、前回とそう変わらない品揃えの武器を眺めながら話していたが、ラウルはふと、台の上にある細長い布の包みに気がついた。

「それは？」

その何気ない言葉に店主の腕がぴくりと跳ねた。ぐう、と唸り、視線が泳ぐ。しばし迷うような素振りを見せた店主だったが、渋々といった様子で包みをラウルに差し出した。

かつてない店主のその様子に、濃い翠の瞳がすうと細められる。

(隠そうとした……?)

訝しみながらも、ラウルはそれを受け取り無造作に布を開けた。

中身は一振りの剣だった。

柄にも鞘にも装飾は無く、無骨で実用一点張りのやや細身の片手剣だ。変わったところといえば鍔が通常よりも小さいことだろうか。

ラウルが愛用しているのはその長身に見合った大きさの重く長い片手剣で、求めていたのもそうだった物だった。本来なら、この剣は扱うには小さすぎる。

だが鞘から抜いて、ラウルは唸った。

それは、素人でも即座に逸品と判断できるほどの品だった。刃は黒と見紛う鋼灰色に鈍く光り、この薄暗い店内でも一点の曇りもなく輝いている。

一瞬で魅せられた。

その剣のあまりの美しさに眼を奪われ、視線を逸らせなくなったのだ。

刀身には熱に浮かされ翠の瞳を潤ませた、一人の男が写っている。

(これは、お前の剣だ)

呆とする脳裏に男の声が響き渡った。どうしようもなく心が震え、止まらない。

そうだ。これこそ求めていたものだ。

(ずっとお前を待っていた。……受け取れ)

頭の中にわんわんと響き渡る男の声に、ラウルの胸は歓喜で満ちた。やがてそれは溢れて広がり、身体に深く染み入り力となってみなぎってくる。

やっと、見つけた。

剣を鞘に戻して静かに目を閉じ、じっと溢れる想いを噛み締める。

「……親父、これを貰うぞ」

「坊主の得物とは、ちいと違うんじゃないのか？」

呆としていたかと思うと急に我に返った護衛士に、心底嫌そうな顔で店主はそう吐き捨てた。

店主の言うことはもつともだった。だがこのままこの剣と別れるにはもはや遅過ぎた。心はすでに黒剣に捕われ絡めとられ、離れることなど不可能だ。

「ああ。それでも、だ」

「だが、それは……ああ、ダメだ。やはり売れん！」

店主は音を立てて立ち上がり、ラウルの手から剣を奪って抱きしめた。

いったい何が不満なのか、店主は黒剣を手放すことを激しく拒んだ。おおかた自分の収集品に加えようとしてもいうのだから、それでは剣が泣こう。

剣は飾るために存在するのではない。

ラウルは一步踏み出し店主に向かって手を差し出した。常日頃から「怖い」と避けられている身だ。意識して威圧すれば、相当の迫力になる。

「……帝国金貨で7枚だ」

「ごくりと喉を鳴らし、豊かな髭の上からでも知れるほどに頬を引きつらせて店主は頷いた。

それは絞り出すような声であった。が、相場の倍近いその額にラウルはふと我に返り、咄嗟に応と答えられなかった。

そしてその僅かな迷いを見逃すほど、この店主は愚鈍ではなかった。

「嫌なら止めとけ！ ……無理することあねえ」

吹っかけられている。それは理解していたが引けなかった。

ここで手に入れられなかったなら、この剣と二度と会うことはないだろう。その予感確信に変わり、想像すると締め付けられるように胸が痛む。

耐えられない。そう思った瞬間、反射的に身体が動いていた。

無意識のうちに腰のベルトを外し、内側の隠しから金貨を取り出す。帝国金貨を2枚、テネルス金貨を3枚、身につけたすべての金貨をラウルは台の上に差し出した。

通常、帝国金貨1枚はテネルス金貨1・2枚に換算される。帝国金貨の方が金の含有量が高いためだ。しかし流通量と使い勝手はテネルス金貨の方が良いので両方を使い分ける者も多かった。金貨はそれぞれ銀貨20枚と同等とされているが、生憎ラウルの手持ちに銀貨は数枚しかない。

残りのテネルス金貨3枚分をどうするか。考えラウルは耳に手をやったが、それは店主に止められた。

「魔石はいらん。儂じゃ使えんからな。……第一、そりゃいざという時のためのもんだろ」

耳にとめられた小さな耳環には、赤い魔石が嵌められている。これは非常時に最後の手段として使う物で、簡単な言葉とともに閃光を伴った小規模な爆発を起こすのだ。魔術士でもない一般人が扱えるようにしたものだから、一度しか使えないにもかかわらず非常に高価な品だった。

これならテネルス金貨3枚分に間違いなく足りたのだが。

「……手持ちが足りん」

そう言うと、店主は底意地の悪そうな顔でにやりと笑う。



「その剣で、どうだ」

「……っ！」

生命を預け長年愛用してきたこの剣を、いま手放せというのか。いと簡単と言う店主に、言い様のない怒気が膨れ上がる。ぎり、と左手で剣の柄を握り締めて睨みつければ、店主は慌てたように手を振った。

「待て待て、なにもそいつを売っぱらおうってえワケじゃあねえ。預かっどくと言っどるんだ。残りの金を持ってきた時に返してやるさ」

ラウルは歯を食いしばった。

この剣は、実家を出る時に持ってきた唯一の品だ。それこそ駆け出しの頃からの相棒で、何度生命を助けられたかわからない。今更手放せるはずもない、そう思っていたはずなのに、それでも目の前の黒剣を望む自分に、愕然とした。

「……………」

迷いは数瞬だった。抗えないその衝動に負け、剣帯から愛用の剣を抜いて台の上に置き、黒剣を奪い取る。

「貰っどいく」

そのまま踵を返し、ラウルは荒々しく店を出た。

しばし茫然としていた店主だったが、店の扉が閉まる音を聞いてぼつりと呟いた。

「武器が人を選ぶ、か。信じちゃあいなかったが……まあ、お前も良い機会だ。ちいと休んどくといい」

無骨な手で、店主はラウルの残していった剣を慈しむよう優しく撫でた。そして大きく息を吐きだすと、やれやれ、と頭を振って立ち上がり、店を閉めるための準備を始めたのだった。

## 邂逅・1（後書き）

6 / 2 改稿しました。多少表現が変わりましたが、内容に変化はありません。

7 / 2 8 大幅改稿しました。内容に変化はありませんが、量が増えました。

1 1 / 1 0 改稿の上次話をまとめて1話に。話数変更されました。

長くなつた己の影を引き連れて、ラウルは村の南、トゥルネイ山に向かつて大股で歩いていった。

（ありえない！ 衝動的に剣を買うなど、全くもって有り得ない！  
しかもあの剣を、金の代わりに使うなど！）

黒剣を買つたため、手持ちの金がほぼ尽きた。この春からずっと働き詰めだったのでそろそろ休暇を取ろうと思っていたが、それもこれでお預けだ。それどころか、この先かなり身を入れて働かなければならなくなった。

ラウルの仕事は護衛である。襲われないような態勢を整えることが第一ではあるが、いざというときには真つ先に飛び出して、依頼人や商品を守らなければならない。その時思うように身体が動かなければ、依頼人はおろか自分の身すら守れない。そのため護衛士は、常日頃からの鍛錬と、武器の習熟に力を入れていた。

ラウルの武器は剣だった。だというのに肝心の剣を新調した挙げ句、それまで愛用していた物を質草にしてしまったのだ。これではこの新しい剣に身体が馴染むまで、そうそう仕事も入れられない。

己の愚かさには本当に腹が立つ。

けれど、とラウルは腰の剣に手を触れた。

腹が立つことは事実だが、この剣を手に入れたことを後悔はしていない。今はそれよりも、嬉しさの方が勝っていた。

少々軽くはあるが、黒剣はほどよい重みで腰に治まっている。

皮を張っただけで柄にも鞘にも装飾のないこの剣は、無骨という

言葉そのものだ。だが中身がすべてとばかりに余分な物がすべて省かれたこの剣を、非常に好ましいとも感じていた。

これを身体の一部として自由に扱うことができたなら、どんなに素晴らしいことだろう。

想像するだけで、頬が勝手に緩んでしまう。

それでも一刻も早くこの剣に慣れなければならぬのは確かかとだったので、ラウルは足取りも軽く村はずれの森に向かっていったのだ。

ひやりと冷たい風が頬をくすぐり駆け抜ける。

標高の高いこの場所は、日が陰ると途端に気温が下がってくる。森の中なら言うまでもなく、外套なしでは肌寒さを覚えていたころだ。

カユテの村からトウルネイ山へと続く森へ少し入った場所には物置のような小屋がある。そこは猟で山へ入る村人達のための休憩所のようなもので、前は開けた広場になっていた。そして広場の周辺は樹々に囲まれているため、ここは人目に触れずに鍛錬するにはもってこいの場所だった。

ただ人気がない故に、この小屋にはまれに「ならず者」が居着くこともある。油断はできないが、もっとも今は守るべき相手もない。無法者がいたらいたで、好きなだけ暴れてやるう。

そうでなくともすぐに暗くなる。今日は「慣らし」程度に留めておこう。そして鍛錬の後は身体を冷やさないようにしなければ。

そんなことを考えながら、ラウルは森の中の細い小道を進んでいた。

ふと、前方からかすかな声が聞こえてきた。

日も暮れようとするこの時間、こんな森の中に村人が居るはずもない。これは明らかに「外」の人間だ。

ただの旅人なら構わない。だが村人に危害を加えるような者であつたなら、それは阻まなければならなかつた。そしてラウルの手に負えないような人数なら、村へ危険を知らせなければならぬだろ  
う。

「護衛士」の顔になってラウルはそつと、気配を殺して近づいた。

樹々の後ろから窺うと、そこには4つの人影があつた。3人の男が少し小さな人影を、小屋の方へ誘導しながらしきりに話しかけている。

男達は鎧のない、小さめの筒状の帽子をかぶっていた。一樣に筋肉質で背はさほど高くなく、幅広の剣を佩いている。裾の長い上着の下から見える下履きは足首の部分で窄まっており、日に焼けた肌に黒い髪、と典型的なアクサライ人だつた。

見たところ山賊の類ではないようだが、ただの商人でもないだろ  
う。

そして小柄な方はフードで頭が隠れて顔立ちはわからないが、ほつそりとしていた。剣を佩いているようだが、外套に隠れて詳細はわからない。その膝下までの外套から覗くのは、くたびれた皮の長靴<sup>ブーツ</sup>。身なりからはアクサライ人ではないようだ。

3人と1人、揉めている様子はないが、知り合いでもないようだ。小柄な方は戸惑っているようであるし、そもそも一般人ならこんな時分にここには来ない。

いったい何をしているのだ、と樹々の影に紛れ、ラウルは声が届く位置まで近づいた。アクサライ訛りのある公用語と、男性にしてはやや高めだが綺麗な公用語が聞き取れる。

「この先に、ちょっとした小屋があんのさ」

「あんちゃんも宿にあぶれたんだろ？一緒に泊まってけ」

「……良いのですか？」

「遠慮すんなつて。食事は俺が持つて来てやつからよ、それまで休んでりゃ良い」

「そついう訳には……」

「カユテは初めてなんだろ？日が暮れてからじゃ、迷っちゃう」

「ここらは俺たちによ庭みたいなものだからよ」

「そつですか？……ご厚意、感謝いたします」

少年のその言葉に、ラウルは頭を抱えなくなった。

声には怯えも戸惑いもなかった。あつたのは、純粹な感謝の意だけだ。

言葉遣いからも、少年が上流階級に属する者であることが伺える。ヘタをしたら貴族かもしれない。それが一人でふらふらと出歩いた拳げ句、人買いもどきに攫われようとしている。このまま放っておけば、行く末は火を見るよりも明らかだ。

それにしても、この少年も少年だ。男の一人に背中を押され、もう一人に肩を抱えられ、先導する男の下卑たその眼差しの意味に気がついていないのだろうか。

（護衛は一体なにをしている！）

一定の身分を持つ者のそばには常に護衛がついているが、その気配すらないことにラウルは無性に腹が立った。こんな世間知らずを放置するなど、現役護衛士としては文句の一つも言つてやらねば気が済まない。

だがとりあえず、今はこの少年の方が先だ。

「おい」

ラウルは外套を左背に跳ね上げ、佩いた剣を見せつけるようにしてゆっくりと近づいた。

「その手を放して貰おうか」

突然現れた強烈な威圧感を放つ長身の男に、男達は滑稽なほど狼狽えた。

「な、なんだてめえ！」

「どっから来やがった！」

「手を離せと言っている」

あまりにもありきたりなその台詞に、ラウルは失笑した。

そして軽く睨んでやると、男達はひつと声をあげて少年から一歩下がる。それでもリーダー格と思われる男は、腰が引けながらも愛想笑いを浮かべていた。

「あんた、同類かい？ だったら俺たちと……」

「俺は護衛士だ」

最後まで言わずに、ラウルは更に一歩を踏み出した。

左手で剣の鞘を持ってみせれば効果は覲面だ。男達は雑魚らしく、捨て台詞を吐いて逃げてゆく。

「……けっ！ 護衛だったら目を離すんじゃないねえ。この三流が！」

何度も後ろを振り返りつつ、男達は街道の方へ小走りに駆けて行



った。

他にもアクサライ語でなにやら悪態をついていたが、所詮は負け犬の遠吠え、痛くも痒くもない。

そんな男達を冷ややかに見送って、ラウルは少年に向き合った。

「坊主……来い」

声をかけるが、少年はゴロツキどもの去った後を見つめたまま、固まったように動かなかった。どうやらやっと危険を認識したようだ。

「村まで送る。 どうした、腰でも抜けたか」

その声にゆるゆると頭を振った少年はフードの奥からラウルを見つめ、どこまでも巫山戯た言葉を口にした。

「あの人達は、今晚どこで休むのでしょうか。 こんな山中で、不逞の輩に襲われたりはしないのでしょうか？」

邂逅・2（後書き）

8 / 2 1 改稿しました。

（人が良い　　というよりも『オカシイ』と表現すべきだな、これは）

ラウルは呆れ、大きく息を吐いて天を仰いだ。

攫われかけていたというのに、この少年はそれに気付いていないようだ。しかも己を攫おうとした相手のことを、本気で気遣っているときだ。

こんな少年の「お守り」をする護衛士に、ラウルは心から同情した。護衛対象が「これ」では相当苦勞するだろう。なぜならこういう輩ほど、彼らを撒くことに夢中になるからだ。恐らくこの少年も、そうして「自由」とやらを満喫した気になっているのだろう。なぜ護衛がつけられているのか、彼らはそれを理解しようとしてもしない。なんとも愚かなことだ。

ひとこと文句を言ってやるうかと思っただが、ラウルは首を振って口を閉じた。

（　　いや、止そう）

自分も護衛を生業としているせい、つい熱くなってしまったようだ。この少年が「そう」だと決めつけるのは早計だ。これまでの経験から、ほぼ間違いなく「そう」だとしても、例外というものがある。

そもそも自分は無関係なのだ。これはそんな人間が無責任にどうこう言う話でもない。なによりこれ以上関わるつもりもないのだから、下手に口を出すべきではないだろう。自分にできることといえ

ば、気の毒な護衛を陰ながら応援することと、この「荷物」を無傷で送り届けることくらいだ。

この少年との付き合いも、ほんの一時のこと。ならば多少のことは我慢しよう。

結局新調した剣に慣れるどころか抜くことすらできず、「荷物」だけが増えてしまった。お預けを食らったようで残念な気がしないでもないが、不幸な子供を作らず済んだのだ。それで満足すべきだろう。

ここはさつさと「荷物」を届け、心残りを無くすべきだ。

そして明日から思う存分この剣を振るえばいい。

では届け先は、と考えて、ラウルは迷わず宿を選んだ。

多少なりとも身分ある者ならば、護衛や従者と共に村長宅で世話になるのが一般的だ。そこで内密に、といったところでこんな辺境では意味がない。たとえ口止めしても村人全員が家族のようなこの村のこと、あつというまに噂は広がり、貴人の来訪を皆でひっそり楽しむことになる。

口止めというのは「外」の人間に対するもので、身内は別、というのが村人たちの考えなのだ。

だが先ほど宿の女将は、そんな素振りは見せなかった。あの一家とは懇意にしているから、なにかあれば耳打ちしてくれるはずだ。

それが無いということは、「催し物」は無いのだろう。

とすればこの少年は、忍んで来たということだ。

すると話はさらに簡単で、彼らはごく普通に宿に泊まることになる。「外」の人間がうるついても目立たない場所が宿しかないという意味で、この村には選択肢など存在しないのだ。

たとえ民家に世話になったとしても、それはすぐ村人たちの知るところとなる。そして護衛対象が消えたとしたら、護衛士はやはり宿で情報を集めるだろう。

いずれにせよ、宿で待つのが一番だ。

様子を見ると少年は、いまだゴロツキどもの消えた方向を心配そうに眺めている。それに声をかけ、顎をしゃくって促すと、ラウルは村へ向かって歩き出した。

森を抜けると空は鮮やかな朱に染まっていた。そこには少々気の早い幾つかの星々が、藍に変わろうとする空で盛んに瞬いている。道の脇の下草からは、これからが我らの時間とでもいうのだろうか、身体全体を震わせる甲高い虫の音が、そこから響いていた。

無言で歩みを進める護衛士の後ろを、少年はちょこちょこ小走りになりながらついてきた。特に足を速めたわけではなかったが、少年はラウルの胸までの身長しかない。歩幅の違いを配慮するべきだったと少し歩みを緩めれば、少年はにこりと笑んでラウルを見上げた。

「……おい」

「はい」

やはりおかしな少年だ。

変声前の高い声が、弾んでいる。

はい、とただそれだけなのに、怯えや嫌悪は全くなかった。それどころか嬉しくて仕方がないというようだ。犬だとしたら、盛大に尾を振っていることだろう。

「いや……なんでもない」

ラウルは口元を手で押さえ、今度はゆっくりと歩き出した。

胸の内がむず痒いような、何とも妙な気分だった。

向けられているのは、明らかかな好意だ。

でもそれがなぜなのか、わからない。この子供は自分がどれだけ危険だったか、理解していないのだ。助けられたなどと思ってもいないだろう。

ならばなぜ、と隣を見下ろすと、気付いた少年がラウルを仰ぐ。

外套のフードは被ったままだというのに、その奥からは親しみを込めた視線がこれでもか、と飛んでくる。

こんなふうには初見で好意を寄せられたのは、初めてのことであった。恐れや怯えなら慣れたものだが、出会い頭の親愛の情というのはこれまで一度もなかったことだ。

それゆえラウルは困り果てた。

この少年を、どう扱って良いのかわからなかった。

意識して歩幅を緩めると、今度は無意識のうちに眼が少年を追うことに気がついた。

なぜかと考え、ほどなくして思い当たる。

少年の何気ない振る舞いが、流れるように美しいのだ。

つま先から接地する滑らかな歩き方、前を見据えて背筋を伸ばし、胸を反らせたその姿勢。ただ歩いているだけなのに、優雅としか言い様がない。

市井のものは、こんな風には歩かないし歩けない。これは、にわか仕込みでできる所作ではない。

ただ歩くだけでも眼を惹く。こんな身のこなしをするのは、上流の貴族でしかありえなかった。

（ なんなのだ、この子供は。怖がるどころか懐いてくる。敵つ

い顔の見知らぬ男と二人きりで、警戒心はないのか？)

不機嫌そうに口を結んで歩いてみても、少年は変わらなかつた。ここにこと、それはもう嬉しそうについてくる。

まるでカモの雛のようだとラウルは思う。生まれて初めて見た生き物を、親だと思つてついて回るあの習性だ。

まるでラウルが親鴨であるかのように、少年は全幅の信頼を寄せていた。

「俺に、ついてきても良いのか？」

「……………どういふことでしょう？」

尋ねれば、一拍おいて少年はわからない、というように小首を傾げた。

フードに隠れて表情はよく見えないが、どうして？ と全身で訴えている。

ラウルはさらに困惑した。

これは大物なのか、それともただの馬鹿なのか。

「さっきのゴロツキどものように、俺はあんたを攫つて売っぱらうつもりかもしれんぞ？」

意地悪くにやりと笑つてそう告げれば、少年は「え？」と言つて、ふう、と落胆したように息を零した。

「……………そういふ、ことでしたか……………親切な人たちだと……………思つていたのに」

「……………」

やはり気付いていなかったのか。

こいつはやはり、馬鹿の方がもしれない。

そもそも鴨は警戒心が強いのではなかったか。餌付けもしないうちからこれでは、あつという間に食べられてしまうではないか。そんな懸念を感じ取ったのか、少年は両手をぐつと握りしめ、ラウルの前に立ちはだかった。

「ですが！ 貴方は信頼に足る人です」

「……どこにその保証がある」

やれやれ、と両手を広げてみせると、少年はわずかに口を尖らせた。

その仕草も子供らしくて面白かった。笑いをこらえながらもじつと少年を見つめていると、その両手にまた力が込められる。

そしてなぜわからないのかと、むずかるように少年は言った。

「……その剣を、持っているからです」

視線の先には、手に入れたばかりの黒剣があった。これのどこが証になるのかと眉をひそめたラウルに、少年は自らの剣を差し出した。

装飾の無い、鍔が通常よりも小さい細身の片手剣 手に取ってみるまでもなく、それはラウルが買ったものと同じものだ。

「貴方の剣とわたしの剣は、双子なのです。ですから、貴方が悪い人であるはずがありません！」

少年は、そう断言した。

その姿は自信と歡びに満ちている。

だがラウルは、剣を手にしたその興奮が、しおしおと萎れていく音を聞いた気がした。



(このお人好しと、俺が同じ……?)

意味不明な理論を展開する少年を前に、ラウルは黒剣を手に入れたことを初めて深く、海より深く後悔した。

再び無言で歩き出したラウルの後ろを、小走りで少年はついてきた。

「あの……」

足を止めて睨みつけるが、少年は全く怯まなかった。それどころかいそいそと外套のフードを取ると胸に手を当て足を引き、優雅に腰を曲げて礼をとる。

「お礼が遅くなったうえ、顔も見せずに失礼しました。助けてくださって、ありがとうございます。……心からの感謝を。あの……」

名前を覚えて頂けないでしょうか、と困ったように尋ねられて、ラウルは答えられなかった。

眼と口をぼかんと開けて、間抜け面を晒しているとわかっていたが、とても声が出なかった。

ラウルは見惚れていた。

どこの宮廷儀礼かというような場違いな礼ではなく、少年の、その顔に。

遠く、地平の彼方へと駆け抜けようとする陽の残した最後の光が、その身を照らし、浮き上がらせる。

濡れたように艶やかな黒髪と、同じ色に煌めく瞳。

雪花石膏の肌にはまっすぐ通った鼻筋と、ほのかに色づいた唇が完璧な位置に配置されている。うなじのあたりで切り揃えられている髪は額から両耳にかけてがやや長く、顎の下辺りで毛先が緩く波うって、少年に優しくも儂げな印象を与えていた。

世の中にはこんな、美しいとしか言い様のない人間も存在するの  
か。

30余年生きてきて、ラウルは初めて「見惚れる」という言葉の意味を実感していた。

「……ラウレンティス・ルシंगाー。ラウルでいい」

「はい、ラウルさん。わたしのことはカイル、と呼んでください」

誤摩化すように名乗ると、少年はそれはそれは嬉しそうに微笑んだ。

濡れたように潤む黒い瞳。低い位置から首を傾げて見上げてくるその姿は、まるでか弱い小動物だ。それは餌付けもしていないのに、勝手に懐いてすり寄ってくる。

目眩がした。

駄目だ、囚われるな。

どこかでそんな声が聞こえたが、遅かった。

頬が熱を持ち、胸が高鳴る。

これを邪険に扱うことなど、どうしてできよう。小動物は、可愛がるために存在しているのだ。

ラウルは緩む口元を手で押さえ、視線を逸らして呟いた。

「……『ラウル』と。『さん』はいらない」

「はい。……ラウル。ではわたしのことも、カイルと呼んで……」

ぐう

「あつ……」

少年は、咄嗟に腹を押さえて俯いた。漆黒の髪の間から覗く頬が赤く染まって見えるのは、夕日のせいだけではないだろう。

「……腹が、減ったか」

「……はい……」

消え入りそうに小さな声で呟くと、恐る恐るといった様子で闇色の瞳が見上げてくる。

懐いてきた小動物を、無碍に振り払うことはできなかった。

くすんだ金髪をかき上げて、ラウルはひとつ大きく息を吐いた。

「ではカイル、食事に行くか」

「はい！」

空が朱から藍へと色を変える中、二つの影がカユテの村へと伸びていった。

邂逅・3 (後書き)

7 / 3 ちよっぴり改稿しました。

8 / 25 大幅改稿しました。

## カユテ村の夜・1

( 不愉快だ )

かつてないほどの不快感と疲労感が、ラウルに重くのしかかっていた。

今日は本当にろくなことがない。

ロバには舐められ、武器屋ではほったくられ、ゴロツキどもには三流呼ばわりされ、拳げ句の果てに「大荷物」を背負い込んでしまった。

自分の意志の及ばないところで勝手に物事が進んでいるような、そんな気持ちの悪さが身体中を這い回っている。

何故こんなことになったのか、どこで間違ったのか、いくら考えても答えは出ない。鬱憤を晴らそうにも当たる相手は無く、酒に逃げるしか道はなかった。

( やってられるか )

手にした蒸留酒を一気に飲み干して、ラウルは熱い息を吐きだした。

カイルと名乗った妙な少年を連れ、ラウルが宿に着いた時には夜の支配が天の全域に及んでいた。

さほどの距離ではないとはいえ、四方八方から鳴り響く虫の音の中を歩いてきたのだ。宿の前で道に落ちる窓の影を踏み、漏れくる屋内のざわめきを耳にした時は、人の気配にどこかほっとさせられた。

ラウルは少年に、いくつか細々としたことを言い含めた。そして少年が頷く事を確認してから入り口の取っ手に手をかける。

カユテ村唯一の宿、「銀の鎖亭」では宿と食堂と酒場が兼用になっている。

1階が食堂兼酒場、そして入り口と対角になる位置に、2階の客室へと続く階段がある。今晚は少ないとはいえ客室が埋まっているだけあって、食堂のテーブルは宿泊客と村人で、ほぼいっぱいになっていた。

酒や食事を饗する場所がここしかないということと、辺境とは思えないほど食事が美味しいので、この宿は村人たちにも人気が高いのだ。

扉を開けると、小振りのカウベルがからん、と鳴った。

ラウルは頭を下げた。扉をくぐる。

一歩中に足を踏み入れたと同時に食堂は一瞬にして静まり返り、値踏みするような視線が集まってきた。だがすぐに興味を失ったように逸れて、それぞれの話題に戻っていく。

ラウルはそれを確認してからカイルを招き入れ、カウンターの奥へと向かった。階段のすぐそばで、テーブル席からは背中しか見えない位置だ。ここならこの少年がフードを外しても、客から顔は見えないだろう。

この子供を人目に晒すのは、冗談抜きで危険だった。

これほどの美貌であれば、男女を問わず「商品」としての価値は計り知れない。相手が貴族であっても、それどころか貴族であるからこそ、手に入れたいと願う人種は少なからず存在する。そういつ

た輩ほど手段を選ばないので厄介だ。

先ほどのゴロツキどももカイルのこの顔を見ていたら、あれほどあっさり引き下がりはしなかっただろう。日が暮れかけた森の中だったことも幸いだった。この幸運が尽きぬうちに「荷物」を届けてしまわねば。

そう、この少年はあくまで一時預かりの「荷」であって、自分の物ではない。

ラウルは自嘲した。

せつかく懐いたこの小動物を、手元から離しがたいと感じている。けれどもこれは、迷い込んだ仔猫を保護することと変わらない。保護者が来たらすぐに引き渡さなければならぬものだ。

だが、なによりもまずは食事だった。

先ほどからカイルの腹がきゅうきゅう鳴いて、小さな溜息が漏れている。その様子があまりにも切なげで、これを放っておけなかった。

「いらつしや……」

カウベルの音に厨房から出てきた女将がラウルとカイルを交互に見つめ、大きく安堵の息をついた。

「ああ坊や、無事だったんだね！ 村長さん家には誰も来てないって言うし、どうも筋の良くないのがいたって聞いたもんだから気になつてたんだよ」

「ご心配おかけしました」

「さあさ、座って！ お腹空いているだろう？」

笑って椅子を勧める女将に、ありがとうございます、と微笑み力

イルは外套を脱いだ。ラウルが自分のものと一緒に椅子の背にかけるが、その間も女将は突っ立ったままだ。常ならくるくるとよく動いているのに、と怪訝に思っただけで見てみれば、女将は眼と口を大きく開けて、頬を真っ赤に染めていた。

「女将、食事を頼む」

「……………」

「女将」

肩を軽く叩くとびくん、と身体を震わせ、女将はやつと正気に戻ったようだ。頬に手を当て熱を移しながら、何度か大きく深呼吸をした。

「……………ああ、びっくりした。あんた、またなんて子を連れてきたんだい」

「成り行きでな」

「まったく。年寄りをそんなに驚かせないでおくれよ」

「そんな年でもないだろうに」

軽口を叩くラウルにお世辞は結構だよ、と言って頭を何度か振ると、女将はきよとんとしていた少年に優しく話しかけた。

「もう安心だね。この護衛士は顔はそりゃあ怖いけど、なかなか腕が良いんだよ」

「……………ラウルは、怖くありませんよ？」

眼を瞬かせてそう言ったカイルに破顔一笑すると、女将は大きく頷いた。

「ああ、そうだね。待ってな、とびきり美味しいのをご馳走してやる



よ！」

「頼む」

上機嫌になった女将が厨房に消えるのを見送ってから振り返ると、黒い瞳と目が合った。

「あの……本当にあれで良かったのでしょうか……？」

おずおずと問いかけてくる少年に、ラウルはああ、と頷いた。

ここではあの大仰な挨拶は止めるようにと言ったのだ。礼の言葉に微笑むだけでじゅうぶんだと。カイルは、相手の機嫌を害さないかと心配だったようだ。けれど女将は喜んでいただろう、と指摘して、やっと安心したようだ。

ふにゃ、と笑んで肩の力を抜いた途端、また少年の腹がぐう、と鳴った。慌てて腹を押さえるが、もう遅い。思わずくつと喉が鳴れば、はっとしてラウルを見上げ、そして頬を染めて俯いた。

本当に、面白い。

この子の護衛は、常にこんな仕草を目にしているのだろうか。この少年は類を見ないほどの世間知らずであるから扱いには気を使うだろうが、それでも楽しさの方が勝りそうだ。

「……………」

ラウルは口元を片手で覆い、緩んだ頬を引き締めた。

これ以上はいけない。あまり深入りしては、手放せなくなってしまう。見据えるのは夢ではなく、現実でなければならぬのだ。

未だ、カイルの護衛らしき人間は現れない。どこか別の場所にいるのか、それともどこかで撒いてきたのか。食事の前にこれだけは聞いておかなければならなかった。

「それで、カイル。護衛はどこにいる？」  
「護衛……護衛は貴方、ですよね？」

香ばしい匂いが店内に満ちているせいか、少年は腹に手を当てたまま、なんとも切なげな表情を浮かべていた。頭の中は食事のことでいっぱいになっているのだろう。話し方もどこかぼんやりして、心ここに有らずといった風情だ。

「俺は護衛士だが、あんたに雇われた訳じゃない。あんたの護衛はどこかと聞いているんだ。従者でも付き添いでも良いが、どこにいる？」

わたしの、と呟いて少年は首を傾け、しばらく考えた。

考えることでもないのだろうが時折鼻をひくつかせているところを見ると、食事のことをひとまず頭から追い払うのに苦労しているようだ。

やがて顔を上げるとカイルはラウルを見上げ、困ったように眉根を寄せる。

「それなら、いません」

「……いない？」

「わたしに護衛はいません。必要ないので……腕には自信がありますから。それに従者……のような者とは、はぐれてしまって」

「すると、一人か？」

「そうなりますね」

ラウルは呆然とした。

ありえない。

こんな世間知らずの「お貴族様」がたった一人、供はおるか護衛も無しにこんな辺境まで無事に来られるはずがない。もしそんなこ

とが可能であれば、護衛士などとうの昔に廃業だ。しかもカイルの場合、剣の腕がどうこう言う以前に問題がありすぎる。

だがこの子供に、そんな嘘をつく必要があるとも思えない。第一、ここでラウルを騙したところでなんの益も無いはずなのだ。

「では聞くが。　どうやってここまで来た？」

「はい、徒歩で来ました。まず宿を取れと言われていたのでこちらにお邪魔したのですが、生憎と空気がなくて。それでどうしようかと思っていましたら、先ほどの『ゴロツキ』の方々にお会いしたのです」

あの方達、今頃どうしているのでしょう　攫われかけていたのだと知っても、いまだ暢気なことを呟くこの少年に、ラウルは拳を握りしめた。

落ち着け、この子供は、こういうヤツだ。筋金入りの箱入りで、己を傷つける人間など世の中にいやしいと思っっている。深呼吸をしる。決して悪気はないはずだ

大きく息を吸って、そしてゆっくりと吐いてから、ラウルは質問の仕方を変えた。

どうも嫌な予感がする。

「訊き方が悪かったな。どこからこの村まで歩いてきた？」

「はい。トウルネイ山の中腹にある、鍛冶師のお爺さんのお宅からです」

なんでもないことのように答えるカイルに、ラウルはまた愕然とした。

それは全くの予想外の答えだった。

北方公路はカユテの村をほぼ東西に走っている。

村の南方には偉大なるトウルネイ山が眼前にそびえ立ち、北を見れば大陸一の霊峰シャンティイーを彼方に望むことができる。そしてここトウルネイ山地からは、シャンティイーへと続く高く険しい山々が連なっているため、人はそうそう住めないし、移動しようとする物好きもない。カユテに来るには公路沿いに、西のアルトローラ帝国側からならブースの街、東のアクサライ王国側からならトウルグの村を経由するしかないのだ。

確かにトウルネイ山の奥深くには鍛冶師が住んでいると聞いたが、まさかそこから来たとは。

にわかには信じられない話だった。

「……それでその剣か」

「ええ。何もわからなかったわたしに、あの方はとても親切にしてくださいました。この剣も、その時に頂いたのです。一振りは護身用として、もう一振りは売って路銀にしろ、と」

カイルは愛おしげに腰の剣を見つめ、そっと触れた。そしてゆっくりと闇色の瞳でラウルを見上げ、口を開く。

「ですから武器屋のご主人には、この剣に相応しく、大切にしてくれる方に譲ってくださいとお願いしたのです。あの方の剣を手にしたのがラウルで良かった。本当に、ありがとうございます」

少年は瞳を潤ませ、まっすぐにラウルを見て微笑んだ。

感謝と愛しさと信頼と、そのすべての想いに満ちた透き通るように美しい、それは輝くような笑みだった。

ラウルは息を呑んだ。

ああ、駄目だ。

そうやってあまりにも簡単に気を許すから、自惚れてしまいそうになる。

つい先ほどまで、この小動物を手放したくないと思っていたが、これでは手放せなくなってしまう。

「おまえは、どうしてそう……」

不意に頬に熱を感じ、ラウルは思わず口に手を当て低く呻いた。そのまま反対側へと身体を向けて視線を逸らせると、カイルが腕にそっと触れてくる。

「ラウル……もう少しだけ、我慢してください。すぐに食事が来ますから、ね？」

「ぐふっ！」

少年の胸の内を端的に表したその言葉に、ラウルは盛大に咽せたのだった。

カユテ村の夜・1（後書き）

8 / 28 大幅改稿しました。

## カユテ村の夜・2

げほげほと咳き込みつつ滲んだ涙を拭っていると、目の前にグラスが差し出された。ありがたい、と中身を一気に飲んで、ラウルは更にまたひとつ咳き込んだ。それは乳精に蜂蜜と柑橘果汁を加えた、サーレという甘い飲み物だったのだ。

蜜入りは苦手だと知っているくせに、と恨みを込めた視線を向けるが女将は全く気にした様子もない。

「随分と仲良くなつたもんだねえ」

大丈夫ですか？ とラウルの背中をさすっていたカイルにも同じものを渡し、女将は感心したように頷いた。一体いつから見られていたものか、口元が笑いをこらえるように歪んでいる。

「ははっ、そう睨むんじゃないよ！」

ぷつと吹き出してそそくさと厨房に消えた女将だったが、湯気の立つ皿を手に、またすぐに戻ってきた。

ラウルたちの食事ができあがったようだ。

カウンターと厨房を忙しなく行き来して、女将は料理の載った皿を二人の前に次々に並べてゆく。

出されたのは、山羊乳のチーズ、芋と野菜を合わせてすりつぶしたエズムと色とりどりの温野菜、薄く切った羊肉の香草焼き、鶏肉に下味をつけて油で揚げたカナト、3種類の豆のスープ、小麦粉を練って薄く焼いたピデ、挽肉と野菜の煮込みと、随分と盛りだくさ

んだった。二人分にしては量が多い気もするが、残ってもラウルが片付けると踏んでいるのだろう。

並べられてゆく料理に、カイルは瞳を輝かせ、手を叩いて喜んだ。

「……凄い！」

「足りなかつたらお替わりもあるからね。遠慮するんじゃないよ！」

「アクサライ風ですね。とても美味しそうです」

「カユテの郷土料理さね。さ、食べな！」

にっと笑って少年の背中をぽんと叩き、女将は足早に戻っていった。厨房から料理を運び、注文を受けながら空いた皿を戻してと、毎日この時間は多忙を極めるのだ。

カイルの視線はすでに料理に釘付けで、これでは話をするどころではないだろう。ラウルもひとまず食事にすることにした。

ピデにチーズと羊肉を挟んで包み、それをそのままカイルに渡す。少年は、こくりと喉を鳴らして渡されたピデを見た。そのまま食べるのだろうと思っていたが、両手で持ったピデとラウルの顔を交互に見て、泣きそうになっている。

食べたいが、どうすれば良いのかわからない。

そんな様子でピデを見つめ、再び小さく喉を鳴らした少年に、ラウルはああ、と頷いた。

貴族の子なら、手掴みで物を食べることなどないだろう。食べられないのも無理はない。意図したわけではないが、「お預け」させてしまったようだ。

「この辺りでは、ここうやって食べる」

ラウルは自分でも同じものを作って右手で持ち、そのまま豪快に齧りついた。羊肉にチーズの塩気が丁度良く、肉汁がピデにしみ込



んで、これもまた旨かった。

ラウルが頷くと、少年の顔がぱっと輝く。

手本通りに右手でピデを持ち、カイルは小さな口をそれでも精一杯開けて齧りついた。だがやはり、持ち方が甘い。肝心の具が反対側へ逃げてしまい、皮しか口に入らなかったようだ。ピデから飛び出た肉を恨めしげに見つめ、微妙な顔でカイルは皮を飲み込んだ。そして今度はピデを返して両手でしっかりと持ち、齧りつこうと口を開ける。

ところがそこではっと固まり、少年は恐る恐る、目だけで隣を見上げてきた。

この食べ方で大丈夫なのか、とラウルの反応を窺っているようだ。食事のマナーを気にする必要などないというのに、やはり気になっってしまうらしい。

口を開けたまま真面目に待っている少年が「よし」と許可が出るのを待つ仔犬のようで、ラウルは面白くて仕方がなかった。目を細めて笑いながら、どうぞ、と示してやると、途端に猛然と食べ始める。

精一杯口を開けてピデに齧りつき、頬張る姿はまるでリスかなにかの小動物のようだった。具を落とさないようにと視線は手元に当たたまま、それはもう懸命という言葉そのままに食べている。

「可愛いねえ。……まるでリスみたいだ」

思ったそのままを耳元で囁かれ、ラウルはどきりとして振り返った。するとそこには女将が空いた皿を腕に乗せ、人の悪い笑みを浮かべて立っている。

「なにを……」

「いい子じゃないか。大事にするんだよ」

言うだけ言って、女将はまた厨房に戻っていった。

肩をすくめ、ラウルは少年の姿を眺めながら鳥唐揚げをひとつ、口に放り込む。

ぱりつと揚げられた皮の中は、まだ熱かった。ぷりぷりとした肉が噛む度に口の中で踊り、噛み締めるほどに旨くなる。肉の旨味を最大限に引き出すこの味付けが、この宿の名物だ。

羊肉を挟んだピテを食べ終えた少年が、ラウルを振り仰いだ。

こういった田舎料理は初めてだったのだろう。黒い瞳は生き生きと輝き頬を上気させ、喜色満面といった様子だ。

「わたし、こんなに美味しい物を食べたのは初めてです！」

「……そうか。なら、今度はカナトはどうだ？ ここの名物だ」

カイルのフォークをカナトに突き刺し、小さな手を取り柄を握らせる。

どうやって食べるのかと再び首を傾げる少年に、ラウルはそのまま齧るよう促した。

カイルは両手でフォークを握り、恐る恐る口に運ぶ。

一口齧ると大きな瞳がさらに開かれ、そしてくしゃりと頬が崩れた。

右手でカナトの刺さったフォークを持ち、左手で頬を押さえ、口を閉じながらも笑み崩れるという器用な真似をして、カイルは幸福に浸っている。

最初の一口をじっくり味わい飲み込むと、少年はラウルを見上げて歡喜の声を上げた。

「……美味しい！」

「だろう？ 好きなだけ食べると良い」

「はい！」

少年は、残りのカナトを夢中になつて食べ始めた。その様子は微笑ましく、眺めているだけでも心が暖まる。まるで親鴨になった気持で雛を見つめながらも、ラウルはそつと拳を握りしめた。

少年の手は細く、柔らかかった。

変声前だとしても細すぎる手首と指。このぐらいの年ならば、もう少し骨が太くても良いはずだ。それに上着の襟と髪に隠れてはいるが、首も華奢で。

そして、この服。

明るい場所をよく見ると、この子の服は随分とくたびれていた。黒が褪せたような色の外套は毛羽立って所々汚れているし、仕立ても良くない。青鈍色の上着も袖口がすり切れている上に短くて、まるで大きさが合っていないかった。おそらく靴も同様だろう。カイルは中身に対して酷く不釣り合いな、襪はく褌はくと言つても良いものを纏まとっている。

確かに一人で歩くなら、下手に上等な服よりも古着の方が良いだろう。だがそれにも限度というものがある。この服はあまりにも酷過ぎて、いつそ哀れになるほどだ。

連れがいるなら、こんな格好はまず絶対にさせない。

(一人……というのは間違いない、か。……それに)

ヨーグルトソースをたっぷりつけた温野菜を口にしながらも、ラウルは思考を巡らせた。

この子の傍は楽しくて、手放したくないという気持ちはある。

しかしそれは「帰さない」という意味ではない。ましてや金にならないからといって、今更放り出すつもりもない。先ほど女将がちよっかいをかけてきたのは、それを心配してのことだろう。だがそんなことをされなくとも、ラウルは「持ち主」に届けるぐらいのこととはしてやるつもりだった。

けれど。

(届けるとしても どこに行けばいい?)

「トウルネイ山で保護された、従者とはぐれた貴族の子供を預かっています。特徴は黒髪黒目、眉目秀麗で世間知らずです」

治安維持を担う警備隊にこんな届けを出しても、マトモに取り合ってくれるとは思えない。それどころか、かえって誘拐の嫌疑をかけられるのがオチだ。

「荷物」を「持ち主」に届けるだけのはずが、どうしてこんな面倒なことになってしまったのだろうか。

それにしても、本当に嬉しそうによく食べる。

面倒ごとは沢山だが、それでもこの子は無事に返さなければ。

そんなことを考えながらラウルは少年を眺めていたが、不意に視線がかち合った。

どうした、と視線で問えば、闇色の瞳を何度か瞬かせ、カイルはばつが悪そうに俯いた。

「あの……すみません」

頬を薔薇色に染め、いったい何を詫びているのかと首をひねると、そつと羊肉の皿が差し出された。

「その、わたしばかり食べてしまって……ラウルも、どうぞ」  
「ああ……」

いつの間にか、肉は半分以下に減っていた。結構な量があったはずだが、考え込んでいる間に食べてしまったようだ。

好きなだけ食べさせるつもりだったから、それは一向に構わないのだが……そんなに物欲しそうな顔をしていただろうか。

ラウルはするりと頬を撫で、差し出された羊肉を口にした。カイルを見れば、今度は挽肉と野菜の煮込みに取りかかったようだ。カトラリーを優雅に繰っているさまは、やはり庶民とは思えない。そしてその発音の仕方からも帝都か、もしくは聖都辺りの出身だろうと見当がつく。しかしいずれもこの村からはかなりの距離があり、子供が一人で歩くには無理があった。

(トウルネイ山の鍛冶師、と言っていたな)

路銀を得るために剣を託された、ということはこの子は金を持っていなかったということだ。確かにあの鍛冶師の剣を売れば、それなりの金になる。帝都までなら護衛をつけ、そこそこ安全に旅することができるはずだ。

(では、その鍛冶師とはどうやって知り合った?)

この周辺に貴族やその別邸があると話す話は聞いたことがない。この子がどこからか迷い込んだにしても、トウルネイ山の中腹まで行けるかという点、それも疑問だ。

(そうでないなら、かどわかされたか)

おおいにあり得る。

あのゴロツキどもに、何の疑いもなくついていこうとした子供だ。本人はそうと認識していなくとも、誘拐されていた可能性は十分にある。

だがいずれにしても、身一つで登れるほどトウルネイ山は容易い山ではない。

ラウルはひとつ息を吐いた。

想像するだけでは埒があかない。やはり本人に直接聞かなくては。

「……カイル」

「はい」

声をかけると、少年はぴくりと身体を強張らせた。そしてすぐに布で口を拭き、膝に手を乗せ姿勢を正し、伺うようにラウルを見上げる。

「そう改まるな……食べながらで良いから」

「そう、ですか？ あ……美味しくて。気が付いたら、無くなっ  
てしまいました」

すみません、と小さく呟きカイルはそっと目を逸らす。

今度はどうやら料理を食べ尽くしたことを叱られると思ったよう  
だ。

逸らされた視線の先を追えば、鳥唐揚げとチーズと羊肉の皿はほ  
ぼ空になっていた。いつの間に食べたのか、ラウルの軽く倍は腹に  
納めている。この小さな身体のどこに入っていくのやら、と呆れも  
したが、食べ盛りとはこんなものだろう。まだ食べ足りないその様  
子に苦笑しつつ、残った羊肉をすべて皿に乗せてやる。カイルは礼  
を言い、まだ覚束ない手で最後のピデに包みだした。

美味しいですと頬張る姿に眼を細め、ラウルは優しく切り出した。

「カイル、家はどこだ？ 従者ともはぐれたそうだし、送っていこ  
う」

コツを掴んだのか、注視しなくとも中身を落とさず食べられるよ

うになった少年は、驚いたように眼だけをラウルに向けた。そしてそのままの格好で口を動かし中の物を飲み込むと、サーレを一口飲んで、ほう、と息を吐く。

そのまま静かに目を閉じて、ゆっくりと開いた瞳はどこか遠くを見つめるようだった。

懐かしむような眼差しの中に、一瞬だけ悲しみの色が過る。そして紡がれたのは、ラウルが想像だにできなかった言葉だった。

「ありがとうございます。でも、わたしの家はとても遠くて……馬でも船でも辿り着けないところにあるのです」

カユテ村の夜・2（後書き）

8 / 30 大幅改稿しました。



### カユテ村の夜・3

「わたしの家はとても遠くて……馬でも船でも辿り着けないところにあるのです」

夢見るような眼差しで、左腕に手を添えカイルは静かにそう言った。その様子はピテを頬張っていた時とは別人のようだ。

ひどく大人びて、儂げで、このまま今にも消えてしまいそうで胸がざわめき不安に駆られ、咄嗟にラウルの手が伸びた。

「……熱でもあるのか？」

「あ、信じてませんね？」

額に当てられた大きな手を両手で外して、カイルはぶうと頬を膨らませた。

「悪かったな。で、なんの謎掛けた」

外された手の親指と人差し指で膨らんだ両頬を押すと、ぷすつと音がして空気が抜けた。ついでにむつと突き出された唇を、指の背でつまんで引つ張ってやる。カイルはむうむうとうめき声を上げながらラウルの袖口を引つ張って抗議したが、そんなものは仔猫がじやれつくようなものだ。痛くも痒くもない。

ひとしきりその顔と柔らかい唇の感触を堪能してから手を離すと、カイルはぶはつと息をつき、涙目になって口を押さえた。

「……酷いですよ、ラウル」

「大人をからかうのが悪い」

「からかってなどいけませんよ？」

「なら、そんな『遠く』から、どうやって来たか？」

山羊が登るような崖の上か、と訊けばそれも違つと否定する。では場所とは問えば、わからない、だ。この子の話はあまりにも曖昧で、現実味がなさすぎた。尋ねるラウルの声も、つい呆れ混じりになつてしまふ。

だがカイルはいたく真剣な顔で小首を傾げて指を顎に添え、記憶を探り、言葉を選びながら語りだした。

「詳細は思い出せないのですが……あれは、連れ出されたというか……『襲われた』というのが一番近いでしょうね。そう、寝込みを襲われたのです」

すっかり温くなつてしまつたサーレをまた一口飲んで、カイルは淡々と物語る。その様子は、まるで夢の中の出来事を話しているようだ。

「抵抗する間もありませんでした。幸い連れはかるうじて逃がすことができたのですが、わたしは逃げ切れなくて。……連れ込まれた先で運良く魔術士の転送陣を見つけたので、迷わず飛び込みました。それで出た先が、たまたまあの方の庵のそばだったので」

ラウルは唸つた。やはり厄介ごとに巻き込まれていたようだ。巻き込まれた、というよりむしろ当事者か。

だが「襲われた」との自覚があつただけでも上出来だ。無自覚だとしたら、これの従者があまりにも気の毒すぎる。

けれど、とラウルは眉をひそめた。

なぜこの子は、こんなにも落ち着いているのだ。

襲われたのは自分だというのに、これではまるで人ごとではないか。

襲われて、怖くはなかったか。逃げたといっても追っ手がいるかもしれない。それで不安にはならないのか。剣はあってもたった一人で知らない場所を彷徨って、金も持たずに心細くはなかったか。鍛冶師とやらに会わなかったら、どうするつもりだったのか。

すべて虚言なのか。そう疑ってしまうほど、カイルは平然と過ぎていた。

ラウルは目を凝らし、じっと様子を窺った。

表情は、変わらない。だが綺麗に色づいていた頬が、色を無くしている。左腕に当てた手にも、わずかに力が込められている。緊張しているのだ。

ならなぜこんな、あえて平気な顔をしているのだ。

胸の奥底からどろりとした不快感が沸き上がる。それを押さえようとラウルは腹にくぐと力を入れたが、疑問はどうしても拭えなかった。

「……だとしても、襲った奴は『馬も船も使わずに』どうやってそこまで行った？」

「それこそ、魔術ですよ」

カイルはぼんと手を合わせた。

できなかつた問題が解けたと報告する子供のようになり、その高い声が弾んでいる。黒い瞳を輝かせ、口元には笑みすら浮かべ、新しい出来事に興味津々といった様子で喋りだした。

「術式や触媒などの詳細はわかりませんが、そうとしか考えられません。そもそも魔術には……」

「……いい加減にしろ！」

ラウルの中で、何かが振り切れた。

吐き出した言葉と共に、どん、と拳を打ち付ける。その衝撃に皿ががちやりと音を立て、小さな肩がびくりと竦んだ。はつとして、驚きと悲しみをないませた眼でラウルを見上げたカイルだったが、すぐに口を噤んで顔を伏せた。

ラウルの声も拳の音もさほど大きくはなかったが、一瞬にして食堂の中は静寂に包まれた。女将は声をかけようとしたが、びりびりと肌を刺すような怒気の前に、近づくことさえできなかった。

ややあつて村人達がちらりほらりと席を立ち、宿泊客も次々に自分の部屋に戻って行った。女将の咎めるような視線や、階段を登ってゆく客の舌打ちや非難に満ちた眼差しをあえて無視して、ラウルはカイルを睨みつける。

「おまえは　どこまで人を馬鹿にする？」

己の意に反して連れ去られたとまるで他人ごとのように語り、拳げ句魔術の所為とは笑わせる。ラウルは魔術なるものに詳しい訳ではないが、それでも長年護衛士などをやっている一般人よりは触れ合う機会も多くなる。魔術士にも知り合いがいるが、人や物を瞬時に移動させる、そんな魔術は聞いたこともない。

襲われたということは、この子自体が狙われたということだ。己がどれだけ危うい立場にいるのか、そして自分を含め、剣を託した鍛冶師やこの女将にどれほどの心配をかけているのか　これはカイルまるでわかっていない。それどころか人を小馬鹿にするような態度を取って、故意に人を遠ざけようとする。

なぜ大人を頼ろうとしないのか。ラウルの胸が、締め付けられるように痛む。

頂垂れた少年の表情は、前髪に隠れてよく見えない。泣いているかもしれない、そう思ったがこのまま口を嚙むことなどできなかった。

「攫ひきわれたというなら、警備隊に保護を求めるべきだろう。必要なら帝都まで連れて行ってもいい。だがまず第一におまえのすべきこととは、身の安全を図り、家族に無事を知らせることではないのか？」

その言葉に、カイルの身体がひくりと揺れた。膝の上に置いた手をぎゅっと握りしめ、弾かれたように顔をあげる。

深い闇色の瞳は濡れてはおらず、それどころか射るような鋭い眼差しでラウルを正面から見返した。

「今は、そんな些事に構ってはいられません」  
「些事だと……？」

静かな、だがカイルの強い言葉にラウルの拳がぎり、と音を立てた。

「そうです。そんなことをしている暇はないのです」  
「巫山みんざん戯たけるな！ そんなことだと？ 大事なことだろう！？ どれだけの人間が、おまえを気に掛けていると思っっている！」

窓枠がびりびりと震えるほどの一喝だった。普通の人間ならとうに言葉を無くし、震え上がるような剣幕だ。だがカイルは怯まなかつた。

「わかっています！ それは申し訳ないと思っています。けれどわたしはどうしても、サリフリに行かなければなりません！」

「サリフリ？ なぜそんなところに行く必要がある！」  
「それはっ……わたしの個人的な問題で、貴方は知らなくて良いことですよ！」

吐き出すようにそう言つて、カイルはふいと顔を背けた。これ以上話したくない、話せないというように、唇を強く噛んでいる。

それは差し伸べた手を無碍に振り払うような、ひどく身勝手な言い分だった。頭に血が上っていれば、このまま少年を見捨てただろう。だが瞳が逸らされるその刹那、ラウルは気付いてしまった。

決意の中に揺らぐ、かすかな光。それは不安と怖れだ。なのにその小さな灯火を閉じ込めて、相手を想う強い煌めきで覆い隠そうとしている。

この子は、ちゃんと理解しているのだ。

知れば巻き込むからと、わざと怒らせるような真似をして。まだ瞬ったばかりの雛だというのに、いっばしの大人の真似をする。世間のことなど何も知らないくせに、矜持だけは一人前だ。

なんと強情な子供だろうか。嚴重に隠された心の底から本心を引き出すには、こちらも本気で懸からねばならない。

ラウルは腹にぐっと力を入れ、目の前の「少年」に向き直った。

カユテ村の夜・3（後書き）

8 / 3 1 改稿しました。

## カユテ村の夜・4

サリフリは東の大国、アクサライ王国の都だ。北方公路と中央公路の終着地で、大陸東部最大の都市でもある。トウルネイ山地を越えればアクサライ王国だが、王都は東の海に近い場所にある。そのためここからサリフリに向かうなら、広大な草原をほぼ横断することになる。

カユテの村から徒歩でほぼ一月　準備もなしに、気軽に行けるような場所ではない。

カイルは身を固くして膝に置いた手を見つめ、じつと息を潜めていた。ラウルは椅子を引き、身体全体を少年に向ける。その一瞬、小さな身体が強ばった。視線はそのまま膝に当て、しかし全身でこちらの動きを探っている。

ラウルが呆れ、席を立つのを待っているのだ。けれどそんな考えなど、お見通しだった。恐れを完璧に隠せなかった時点で、この子は勝負に負けたのだ。ラウルはじつと動かなかった。少年からは、どうして、なぜと戸惑う気配が漂ってくる。

握りしめられた小さな白い手を見守りながら、ラウルは静かに息を吐いた。それから怯えさせないように、努めて冷静な声を出す。

「……一人で行くつもりだったのか……？」

凶星を指され、ぐっと息を飲んで少年は押し黙った。眼光鋭く見つめていると、十分すぎるほどの時間を置いて、白い顔がかすかに頷く。

ラウルは右手を伸ばし、その艶やかな黒髪にそっと手のひらを載



せた。触れた瞬間ぴくりと身体は強ばったが、何度か優しく梳いてやると、だんだんと力が抜けてきた。もう片方の手をひやりとした頬に添え、ゆっくりとこちらを向かせる。もう一度頭を撫でてから、両手で頬を包み込むようにして顔を引き寄せた。

眉根を引き絞り、唇も固く引き結んで眼だけを逸らしていたカイルだったが、何度か名を呼んでやると小さく息を吐き、観念したように視線を合わせた。

覗き込んだ闇色の瞳の中は、確固たる決意と不安、そして心細さで揺れている。「何もわからない」と言っていたのだから、それも当然だろう。だがそれでも「行く」という意思は固く、揺るぎそうにない。

ならば、とラウルは心を定めた。

「俺は……」

押し殺した声に震えが混じる。呼吸を整え、ラウルはもう一度、強い意志を言葉を載せた。

「俺には故郷に弟妹がいる。一番下の妹は、おまえと同じぐらいの年頃だ」

覗き込んだ闇色の瞳の中に、翠の瞳の男がいた。眼を細めると男の輪郭は徐々に小さく華奢になり、やがて思い出の妹に重なって見えてくる。家を出たとき、あの子はまだ幼かった。きっと今頃の子よりも大きくなっているだろうが、どうしてもこの「カイル」という子とだぶってしまう。

含むことなく無条件でラウルを慕ってついてくる。この子は妹と同じだった。

「故郷には……護衛士になってからは一度も帰っていない。だがそ

れでも彼女が困っていると聞いたら助けてやりたいと思うし、何を  
おいても駆けつけるだろう。      カイル、それはおまえも同じだ」

その言葉に、美しい白い顔がくしゃりと歪む。眼の縁を赤く染め、  
どうして、と唇を戦慄かせながらも少年は大きく息を吸った。それ  
から一度きつく閉じられた目蓋は、歯を食いしばりながらもゆるゆ  
ると開かれる。潤んだ漆黒の瞳に照明の光が反射して、まるで夜空  
の星を閉じ込めたかのように瞬いていた。けれど今にもこぼれ落ち  
そうだった涙は零れなかった。少年は唇を強く噛み、必死になって  
耐えていたのだ。

「……ありがとうございます、ラウル。貴方は優しいひとですね。  
その言葉は、とても嬉しい」

頬に添えられた両手を取るとそっと握り、カイルはでも、と続け  
て微笑んだ。もう一度、すうと息を吸い込みぐっと溜め、震えを押  
さえながらゆっくりと、静かに静かに言葉を紡ぐ。

「わたしは貴方を巻き込むつもりはないし、貴方もわたしには、こ  
れ以上関わらない方が良いのです」

手にした2つの大きな手をラウルの膝にそっと戻し、カイルは自  
分の外套を手にする、椅子を引いて立ち上がる。

ラウルは動けなかった。戻された両手から視線を逸らせぬまま、  
低い声が地を這うように漏れだした。

「……どこに行く？」  
「ご馳走さまでした。とても美味しかったです。奥方、食事の代金  
は？」

その問いに答えること無く、カイルは振り返って女将に問うた。  
客室へ続く階段のそばではらはらと成り行きを見守っていた女将は、二人を交互に見やりながら手を横に振る。

「い、いや……この人から貰ってるから」

「……そうでしたか。重ね重ねお世話になりました。ラウル、ありがとうございます」

今度はただ頭を下げるだけだったが、それでも優雅に礼をとり、カイルはふわりと微笑み踵を返した。

そしてすぐに眉根を寄せて口元をきつく結び、ぐっと耐えるように顎を引く。あくまでも独りで行く、とその決意は変わらない。けれど俯くことなく前を見るその姿は、こうなっては痛々しいだけだ。ラウルの中で押さえ込んでいた不快感が、胸の奥底から再び沸き上がってくる。今度は止められなかった。いや、止めなかった。

「どこに行くのかと聞いている！」

椅子が、大きな音を立てて後ろに倒れた。

ラウルは立ち上がり、逃がさないとばかりに片手でカイルの腕を掴む。その弾みで小さな外套がばさりと落ちた。厚手の上着の下に隠された腕は、力を込めればあっさりと折れそうなほど細く華奢だ。まだ親の保護が必要な年なのに、こんな細い腕で、たった独りで、本当にサリフリに向かうつもりなのか。

怒りと悲しみと苛立と、そのすべてがラウルを苛む<sup>なぐさ</sup>。

「空いている部屋は無いということですので……っ。先ほどの小屋にでも行って、休みます！」

男の腕を振り払おうと、カイルは身をひねって暴れた。しか

しラウルの胸ほどの身長しかないのでは、体格差がありすぎる。髪を乱して必死に抵抗しても、護衛士たる男はびくともしなかつた。二人のどちらを止めたものかとおろおろしていた女将だったが、息を切らしながらの少年の言葉に眼を丸くした。

「ちよつと坊や……！」

「……っ！ 馬鹿か、お前は！」

今度こそ、くすぶっていた怒りが爆発した。

ラウルは落ちた外套を拾って暴れる頭に被せ、強く腕を引く。空いたテーブルに置いてあったランプを手に取り、はなして、ともがく身体を引きずるように階段を登り、部屋に向かった。

鍵を開けてカイルを部屋に押し込み、ランプを壁のフックにかける。扉を閉めると、息を荒げながらもやつとカイルは大人しくなつた。

広いとも言えない室内は、弱々しい光に照らされている。薄暗い中で、寝台に置いてあった荷物を手早くまとめる男をカイルはじつと見つめていた。

まとめた荷を床に置いたラウルは、立ち上がってテーブルの下を指し示す。

「そのこの桶で手足を洗える。水は少ないが我慢しろ。上に置いてあるのは飲用だ」

傷むのだろうか、掴まれていた腕を押さえながら、カイルはなぜとラウルを見上げた。

「ここは、貴方の部屋でしょう？」

「そうだ。部屋は狭いが寝台は広い。お前一人入れたところで、休

むのに障りはない」

「……でも」

「邪魔になるようだったら遠慮なく追い出す。良いな？ ……おとなしく寝てる」

そのまま部屋を出ようとしたラウルの背中に、戸惑いを含んだ声がかけられた。

「……貴方は？」

「……下で、飲み直してくる」

立ちすくむその姿を一瞥し、ラウルは部屋の扉をそっと閉めて鍵をかけた。

少年は、その身の不幸を嘆く訳でもなく、大人に助けを求めるわけでもない。怖くて不安で寂しくて、それは隠そうとしても隠しきれないほどなのに、援助を申し出れば頑かたくなに拒絶する。だがそれは明らかに、ラウルを災いから遠ざけようとする意思だ。また襲われるかもしれないという、その可能性が否定できないと知っているのだ。その上で、たった一人でサリフリまで行くと言い張る子供に腹が立って仕方がなかった。

(ゴロツキどもには簡単について行くくせに……)

扉を閉める前、縋るような眼で立ち尽くしていた白い顔が、ラウルの眼に焼き付いて離れなかった。

カユテ村の夜・4（後書き）

9 / 1 改稿しました。

## 大人の時間

ラウルが階下に戻ったとき、女将は使用人の娘と二人で後片付けをしていた。常ならばまだ酒を嗜む客が残っている時分なのにと、いささか申し訳ない気持ちになる。顔をあげた娘がラウルに気付き、引きつった笑顔を見せて皿を抱え、そそくさと厨房に戻って行った。どうやらこの娘にも随分と怖い想いをさせてしまったようだ。

気まずい思いを抱えたまま先ほどの席に腰を下ろすと、女将が小さなめのグラスを3つと蒸留酒の瓶をカウンターに置いた。

「……すまなかった」

ぽつりと零せば、女将はやれやれというように、ひょいと肩をすくめてみせた。

「もう勘弁しておくれよ？」

「　　気をつける」

「ちよつと先にやっててよ。終わったらうちの人も来るからさ」

力なく笑って仕事を再開した女将に了承の意を伝え、ラウルは酒を注いで一気に呷った。

強い酒だった。

胸の中心を下ってゆく酒が、じりじりと粘膜から水分を搾り取ってゆく。溢れる苛立ちを溜め込むように、腹の中がかつと熱く燃え上がった。

（今夜はいい。だが夜が明けたらどうする？）

あの子は一人で旅立つだろう。そして目的地にたどり着くこと無く、その旅は終わる。わかっていながら、どうすることもできない。いや、どうにかしようとしていないだけではないのか？

もう一度、半透明の酒をグラスに注いだ。

どうするのか、どうしたいのか……考えても考えても、光を弾いて揺らめく液面のようにラウルの思考は乱れるばかりでまとまらない。

がたん、と椅子を引く音に目を向けると、宿の主人が隣に腰を下ろしたところだった。

「注いでくれるかい？」

差し出されたグラスに酒を注ぎ、二人は軽くグラスを合わせた。

「終わったのか」

「ああ、ここんとこずっと遅かったからね、まあ、たまに早仕舞いってのも良いもんだ」

嬉しそうに酒を舐める主人だが、そのまま頷く訳にもいかないだろう。

口を開きかけたラウルの目の前に、どん、と水の入った大きめのグラスが置かれた。

「もう言いつこなしだよ」

言いながらカウンターの向こうから女将が顔を出し、酒瓶をひよいと手に取った。手酌で自分のグラスを満たしていくと飲んだが、盛大に顔をしかめて口を拭う。



「強過ぎじゃないの、これ」  
「もとからこういう酒さ」

けほ、と咽せる女将に苦笑する。奥に果実水があったはずだといふ主人に頷いた女将が厨房に下がるのを見て、ラウルは気になっていた事を尋ねてみた。

「手伝いの娘は？」

「うちの息子が送ってったよ。どうも良くないのがうるついでるって聞いたからねえ」

追い払ったとはいえ、あのゴロツキどもがこの辺りに居ないとは限らない。だがここの息子が送って行ったのなら大丈夫だろう。ラウルは安堵の息を漏らした。

「ねえ、ラウル……あなた」

カウンターを挟んだ正面に、椅子を持ってきた女将がよいしょと腰を下ろした。片手に果実水の入った大振りのグラスを持って、ちびりと飲みつつぽつりと呟く。

「あなた、あの子の護衛なんだよね？」

「……いや、違うな。たまたま『筋の良くない』連中に連れ込まれそうになっていたのを助けただけだ」

「ええ？」

「なんだって？」

乱暴されなかったのか怪我はないのかと慌てる二人を宥めるために、ラウルは事実を告げた。

「寝る場所と食事を世話してやると言われたのを、真に受けてついで行ったようだ」

はあ？と目を見開いて声を失った主人と女将は、たっぷり時間を置いた後に、はあ、と深く肩を落とした。

「……良いとこの子だろうとは思ったけど……そんなだったら、引き止めとけば良かったよ」

女将の声に、後悔の色が混じる。

「あの子、あんたが出てった直ぐ後に来てね……うちにはもう空きがなかったから、村長さんちに行ってみれば、って言ったのさ。あそこなら広いし、子供一人ぐらい泊めてくれるだろうってね。それがまさか……」

「でもまあ、何事もなく良かったよ。本当に。色々と世話をかけるねえ」

「そうさね、ありがとうよ。ラウル」

「礼を言われるような事はしていない」

苦虫を噛み潰したような顔になったラウルに、二人は笑ってグラスを傾けた。

女将は最初の一口が効いたようで、すでに頬をほんのり赤く染めている。暑い、と手で顔を仰ぎながらも酒を舐め、ラウルと主人に酒を薦めて確認するような言葉を漏らす。

「ねえ、あの子……貴族さまだよ」

「……恐らくは」

グラスを転がしながら、ラウルは応じる。

「貴族さまってのは、あたしらみたいな田舎者とは口も利かないものだとばかり思ってたけど、あんな子もいるんだね。うちの料理を美味しい美味しい、ってたくさん食べて」

「おや、そうだったのかい？ そりゃ嬉しいねえ」

厨房に籠りきりだった主人が頬をゆるませた。女将もカイルが可愛くてならない、というように目を細めている。

「二人で一緒に帰って来たから、あたしゃてつきりあんたが護衛についてくれたんだとばかり……」

「あれを保護者に届けようとしただけだ」

「でもさ、その保護者って……」

かららん、と入り口のカウベルが鳴った。

咄嗟に腰を浮かしたラウルと宿屋の夫婦が見つめる中、のっそりと入ってきたのは武器屋の店主だ。

「なんだ、もう店じまいか？ 今日はやけに早いじゃねえか」

「ついさっきまでは、これでも盛況だったんだけどね」

がらんとした店内を見回し零した店主に、女将は笑って肩をすくめてみせた。

「……ふん」

店主はラウルを認めると目をすがめ、ずかずかと歩いてきた。そして無造作に、宿の亭主とは反対側の席に座る。

「親父さんは、なんにする？」  
「なんでも良い。強いのをくれ」  
「はいよ」

席を立った女将に目もくれず、店主はカウンターに肘をつき、探るようにラウルを検分した。

「親父さん、今日はどうした？　こんな時分に珍しいねえ」  
「ああ、この坊主に用がある。……確か暇だと言ってたな？」

ラウルは無言でぎろりと睨んだが、店主はまったく動じなかった。

「依頼でも入ったか？」

「……いや」

「仕事があるんだが」

「親父さん、その話はちいと待ってくれ。こっちもいま取り込み中でね」

「ああ？　坊主は黙ってる」

武器屋の店主に坊主呼ばわりされた宿屋の主人が、その迫力に一瞬怯んだ。店主はそれに畳み掛けるようにして一気に切り出す。

「実はな、カイルつつうガキがいてだな」

「「なんだって？」」

その場にいた全員が、互いの顔を見合わせた。

「…………で？」

先を促す武器屋の店主に、ラウルはしぶしぶ口を開いた。

「連れて行くといったら、断られた」

「ほ！ そりゃあいい！」

目をまんまるに見開くと、店主は破れ鐘を叩いたような声で笑い出した。主人に大声を窘められて手で口を塞ぎ、それでも息を漏らしながら身体を丸めて膝を叩いている。

真っ赤になつた顔をようやく上げると、店主は意地の悪い笑みを浮かべてラウルを冷やかした。

「で、お前さんはすごすごと引つ込んで、こつしてヤケ酒煽ってるってわけか」

「……………」

「そつむくれるなよ、坊主。ほれ、伝言だ」

ずい、と無遠慮に差し出されたのは、灰色のざらりとした紙だ。二つに折られたその紙を開いてみると、そこには短くこつ書かれていた。

『対の剣の持ち主へ』

片割れを目的地に送り届けてやってくれ。

ランドル』

「…………なんだ、これは」

「鍛治師の爺おぢいからの手紙だ。あの小僧がその剣と一緒に持って来た。小僧が言うには『この手紙を剣と一緒に渡すよう、言われてきました』だよ」

はっ！ と息を吐いて店主は続ける。

「何度読んでも何が何やらさっぱり分からなかったが、小僧が出てつてすぐにお前が来た。なあ、これはどういうことだ？」

その問いに答えられるものは、誰もいなかった。

奇妙な沈黙が落ちる中、酒をまた一口飲んで、店主は吐き出すようにラウルに告げる。

「それを売るつもりはなかった。だがそれでも、と望んだのはお前さんだ」

ラウルは顔を伏せ、唇を噛んだ。眉間に皺が寄り、グラスを握りしめる手に、知らず力が込められる。

「だからあん時は、あえてこれは渡さなかった。小僧と会えるかどうかもわからなかったしな。ところがどうだ、ちゃあんと面倒見てるじゃねえか」

店主は大きく息を吐き出して、今度は水をがぶりと飲んだ。

「なあ……『特級護衛士』さまが『たまたま』暇で、『たまたま』こんな辺境まで来て、『たまたま』あの剣を手に入れて、『たまたま』小僧を拾ってつて、どこにそんな『偶然』があるんだ、ええ？」

そう、いっそ怖いぐらいに「偶然」が重なり過ぎている。ま

るで台本通りに劇を演じる役者のようだ。

いくらなんでも出来過ぎだ、そう言っつて、店主は両手を広げて頭を振った。

「俺あ、得体の知れねえもんには逆らわんことにしとるんだ。意地を張つても碌なことにならんからな」

腹をくくれ、と肩を叩いた店主に、ラウルはぼつりと零した。

「……だが俺が受けたところで、あいつが了承するとは思えん」

「だつたらその手紙を見せてみる。小僧は否とは言わんさ」

「あたしもあの子に言っつてみるよ。あんたと一緒にいるのが一番安全なんだつてね」

「なあ、ラウル。頼むよ」

同時に三方から迫られて、流石のラウルもいささか身を引かざるを得なかった。そしてそれを狙つたかのように、武器屋の店主は小さな革袋を押し付けてくる。

「それが駄賃だ」

「おい、誰も受けるとは……」

「断られたら返してくれ。いずれにせよ村を出る前に店に寄れ。小僧にもそう言っつてある」

言っただけ言っつと銅貨を置いて、店主は上機嫌で席を立つて出て行った。

残されてラウルは唸つた。機嫌は下降する一方だ。

( 不愉快だ )

かつてないほどの不快感と疲労感がラウルを襲う。

口バには舐められ、武器屋ではぼったくられ、ゴロツキどもには三流呼ばわりされ、拳げ句の果てに、勝手に「大荷物」を背負い込まされてしまった。

剣のこともカイルのことも、すべて自分で決めたことだ。この選択に後悔はない。なのに己の意志の及ばないところで一方的に物事が進み、否応無しに巻き込まれる。そんな気持ち悪さがどうしても拭えない。

一体何が切っ掛けで、どこで間違った選択をしたのか、いくら考えても答えは出ない。鬱憤を晴らそうにも当たる相手はどこにもなく、酒に逃げるしか手がないうときだ。

(やっつけられるか)

グラスの酒を一息に飲み干して、ラウルは大きく息を吐きだした。

酔いはまったく感じなかったが、そろそろ休むという宿の夫婦にラウルも部屋に戻ることにした。

短い？燭を載せた皿を手に部屋に戻り、扉をきしませないようそつと開ける。思った通り室内は暗く、カイルは既に休んでいるようだ。

灯火をテーブルの上に置いて、水を一口飲んだ。酔えなくとも、多少なりとも眠れれば良い。少なくとも量の酒精は、それを可能にするはずだった。

剣帯を解き、剣を置こうとしてラウルは気が付いた。寝台には使われた形跡がなく、そこにカイルの姿が見当たらないのだ。



どきりとした。

階下にいた時に、誰かが出て行く気配はなかった。よもや窓から抜け出したのかと咄嗟に窓に手を伸ばし、厚手のカーテンを開けてみるが鍵はかかったままだ。ならばどこへ、と目を凝らして室内をよくよく見ると、寝台の向こう側、壁との狭い隙間に黒い塊があった。もしか、と寝台に乗り上げて覗いてみれば、案の定、カイルだ。寝台から落ちたのかと思っただが、外套を着込んだまま剣を抱えるようにして眠っているところを見ると、最初からこうしていたのだろう。身動きも取れないような狭い隙間にすっぽりとはまり込んで、頭だけを寝台に預けている。

(……寝てるとは言ったが、なぜこんなところで……)

こめかみがずきずきと痛むような気がするが、酒の所為だけではない。あるまい。

何度か名を呼んで肩を揺すってみたが、頭がぐらぐらと揺れるばかりで目覚める気配は微塵もなかった。仕方なく外套の襟を掴み、ラウルはカイルを寝台に引き摺り上げた。意識の無い人間はひどく重く感じるものだが、予想に反してこの子の身体は驚くほど軽い。

靴と外套を脱がせてから膝裏と背中にも手を回し、頭の位置を整える。このままでは寝難かろうと上着を脱がせてベルトを抜き取り、シャツのボタンを首元からひとつひとつ外して　ラウルの疑念は確信に変わった。

薄闇の中に、「少年」の白い肌がぼんやりと浮かび上がる。呼吸と共にゆっくりと上下する胸は、柔らかな曲線を描いて生地を押し上げていた。

やはり、と身体から力が抜けた。寝台に座り込んでカイルの前髪を払い、手首を取って手のひらから指にかけて、そっと触れる。

細い指の爪は綺麗に整えられており、指も手のひらも滑らかで柔らかない。ラウルのものとは明らかに違う、それは労働を知らない手だった。

(……持つなら剣よりも、刺繍針の方がお似合いだな)

本来なら髪を短く切ることも、こんな襷褌ほろをまとうこともなく、それこそ結い上げた髪を飾り立て上等なドレスを着て、優雅に微笑んでいるはずだったろうに。

それが攫われこんな辺境へと来た挙げ句、一人で王都を目指すなど　　あまりにも無謀過ぎる。

(まったく、とんだ『大荷物』だ)

ラウルも上着を脱いで楽な格好になると、そろそろ寝台に潜り込んだ。

かつて弟妹にしたように、上掛けでカイルの首元の隙間を埋め、胸元を優しく叩く。満ち足りたような寝顔を見ていると、凝っていた不快感が徐々に薄らぎ、消えていった。

逆らえない「何か」に捕われたのだとしても、やりようはいくらでもある。そうやって幾多の危機を乗り越えてきたからこそ、今の自分があるのではないか。

一度大きく息を吐いて、ラウルはゆっくりと目を閉じた。

呼吸と共に、冷えた空気が胸の内を満たしてゆく。窓を閉めていても甲高い虫の音が、いくつもいくつも重なるように響いてくる。耳元からはすずすと、規則正しい小さな寝息。

故郷では、何度も弟妹たちとこんなふうに一緒に寝た。両側からそれぞれに手を取られ、寝返りすら打てなくなっても幸せだった。

「あのとき」は手放してしまっただが、今は違う。自分は成長し、強

くなった。もう二度と、同じ轍は踏まない。踏んではいけない。

思考が徐々に、薄れてゆく。虫の音も遠ざかる。身体の手を  
闇に委ねるその一瞬、遠い故郷の風景が、脳裏を過っていった気が  
した。

大人の時間（後書き）

9 / 2 改稿しました。

## 出立・1

燃え立つような朝焼けに、トゥルネイ山の威容が影となって浮かび上がる。木々の向こうに迫る山肌は朱に染まり、だがみるみるうちに白い靄に隠れていった。

夜にはあれほど盛んに鳴いていた虫の音も、今は足下からちらほらと聞こえるだけで、朝を喜ぶ鳥の声に取って代わられている。

夜明け前に眼を覚ましたラウルは、鍛錬のために森に来ていた。部屋ではカイルがまだぐっすりと眠っていて起こすのは忍びなかったし、この早朝ではまだ武器屋は開いていない。

新しい剣に早く慣れるため、と理由をつけて宿を出たのは、陽が昇るまでの時間をじっと待つことが出来なかったラウルの弱気だろうか。

ポケツキヨツキヨツキヨキヨ……

ケキヨケキヨケキヨケキヨ……

森の中に、甲高く鋭い鳥の声が響き渡った。

辺りに立ちこめていた霧も薄まり、空もだいぶ明るくなっている。トゥルネイ山地の西側に位置するこの村は、山の影に入ってしまうために日の出が遅い。だから村人たちは、毎日この鳥の声で朝を知るのだ。

ラウルも鳥の声にはっとして、夢中で振るっていた剣を止めた。いささか呆然として、手にした黒剣に目を向ける。

確かに長さが足りないことは否めないが、それを補って余りあるほどの素晴らしい剣だった。今朝初めて手にしたばかりだということにあつという間に手に馴染み、これまでの剣と同様に、己の意思を正確に伝えることができるようになった。

高い金を払っただけの価値はある。

そう認めざるを得ない出来に満足して、ラウルは剣を腰に納めた。顔を挙げ、空の色を確認してから村に向かって歩き出す。

この時間なら、あの子も起きているだろう。宿に着くまでに、あの頑固者を納得させるだけの理由を考えなければ。

これが目下のところ、一番頭の痛い問題だった。

「まだ起きてこない？」

「そうなんだよ。どうしたんだろううねえ」

お腹を壊したりしていないだろうかと、女将が心配そうに階上を見やる。

すでに宿泊客のほとんどが出発し、食堂は人もまばらになっていた。宿の朝は忙しい。あの子は大丈夫だろうかと気にしながらも仕事に追われ、気がついたらこんな時間になっていたのだ。

「今朝方まで変わったところは無かったが……」

「まだ寝てるのかね？」

「今日中に国境まで行っておきたい。……様子を見てくる。悪いが、食事の用意を頼む」

部屋の鍵を受け取り階段を登ろうとして、ラウルは思い出したように付け加えた。

「それと、カナト鶏唐揚げをあるだけ出してくれ」

「……起きているか？」

よもや着替え中ということもあるまいが、念のためにとラウルは手の甲で扉を軽く叩き、拳一つ分ほど開けてから声をかけた。

「ラウル……？」

「入っても？」

「……どうぞ」

朝日の満ちた部屋の中で、カイルはすっかり身支度を整え窓際に佇んでいた。顔を扉の方向に向け、ラウルを認めると花が綻ぶように微笑みかけてくる。

夕べのことなどすっかり忘れたように、雛が親鴨を追うように、とてとてと、それでも優雅に寄ってきた。

「おはようございます」

顔色も悪くなく、しっかりとした声にラウルは胸を撫で下ろした。どうやら食べ過ぎて腹が痛んだわけではなさそうだ。

「何をしていた？」

「トウルネイ山を、見ていました。陽が昇る時って、山の色がどん

どん変わっていくんですね。雲も凄いい勢いで流れていって、空の色がとても……綺麗」

カイルはまた眩しそうに眼を細め、首を巡らせ窓越しに空を見上げた。

どうやらラウルが出て行って、間もなく目が覚めたようだ。それからずっとこうして空を見ていたのだろうか。

「起きてたんなら降りてこい。女将が心配している」

「すみません」

「……謝るな」

「すみません……ここから出ていいものか、わからなくて……」

また一つ謝ると、ぽつりと言葉が零れ落ちた。

なぜ、と開きかけた口を遮るように、カイルはぱつと振り向き身体ごと斜めにして、ラウルを下から覗き込んだ。

「貴方こそ、どこに行っていたのですか？」

「……森へな。剣を慣らしに行っていた」

「ええ？ ……どうして誘ってくれないのです？ わたしだってまだ慣らしてないのに、ラウルばかり、ずるい」

「ずるくない。お前はぐっすり寝ていたろうが」

「……起こしてくれば良かったのに」

口をとがらせ恨めしげな目で見つめられて、ラウルは大きく肩を落とした。微睡んでいたところを無理矢理に起こされて、恨めしいのはこちらの方だ。それでも寝ている子供のすることを、いちいち気にしていたら切りがない。どうせ覚えてもいないのだ。指摘するだけ無駄というもの。

ちょうど胸の当たりにある小さな頭に手を乗せて、ラウルはカイ



ルを促した。

「さて、行くぞ」

「……どこへ？」

「腹が減ってるだろう？　まずは、食事だ」

きよとんと見上げてくる顔に、口の端を引き上げてみせる。案の定カイルは眼を輝かせ、はいと元気に返事をした。

昨夜と同じ席に座った二人の前に、今朝も豪華な食事が並ぶ。

パンに色とりどりのジャムと数種類の白チーズ、ヨーグルトに果物、卵とトマトのスープ、腸詰め、サラダ……そして鶏唐揚げ。<sup>カネト</sup>

この時点でも、この子を引き止める未だ有効な手だてを見いだせないまま、ラウルは考えながら食事をした。一方カイルといえば朝から旺盛な食欲を見せ、女将を大層喜ばせている。

子供には食べたいだけ食べさせようと、そう思っていた。だがしかし、積み上がった皿を前にして、ラウルは流石に口を出さずにはおれなかった。

「おい、程々にしておけ。……動けなくなる」

「山登りするのですから、たくさん食べておかないと」

そうは言ったものの、カイルは少し考えるような素振りを見せ、果実水を飲むとフォークを置いた。

「でも、ラウルの言う事ももつともですね。腹八分目にしておきます」

「……八分目、ね……」

皿の山を見ただけで腹が膨れてしまったラウルは、早々に食事を切り上げ紅茶を飲んでいた。鶏唐揚げカナトを含め、残った料理のいくつかは、夜用にと包んでもらうことにする。

食べきれないことを悔やむように見ていたカイルは、また夜も食べられる、と喜んでいた。

可愛らしい小鳥のさえずりに、甲高い鳥の声が混じる。

食堂の窓からは目映い陽の光が降り注ぎ、床とテーブルに斜めの格子模様を作っている。その輪郭は時にすう、と薄れ、また元に戻り、これを幾度も繰り返し返していた。

不意に、鳥の羽ばたく音がした。同時に嘎れた高い声が長く響き、山の方へと消えてゆく。

それが合図となってしまった。

「……もう、お別れですね」

食事の後の紅茶を口にして、カイルは満足げに目を細めていた。鳥の声が消えた後、ふと思い出したようにそう呟くと、ぎこちなく微笑みラウルに向かって頭を下げる。

「わたしはそろそろ行きます。……お世話になりました」

「待て！」

席を立とうとしたカイルだが、強い言葉にびくりと首を竦ませた。咄嗟に上げた右手を握りしめ、ラウルは痛ましげに眉をひそめる。

「いや、すまない。……もう乱暴はしないから、少し話を聞いてくれないか……？」

ことさら落ち着いた声音で語りかければ、闇色の瞳を揺らし、カイルは再び座り直した。一度ラウルをじっと見つめた後は視線を逸らし、固く口元を引き結ぶ。話を聞くだけ、決心は変わらないと、暗にそう言っていた。

「……実は昨晚、依頼を受けた」

静かに告げると、膝に置かれた白い指がびくりと動く。身を固くしてわずかに俯いた胸元に、依頼主からだ、そう前置きして厚手の紙をそつと差し出す。見覚えのある紙に、美しい顔が怪訝そうにしかめられた。

「読んでみる」

恐る恐るそれを手に取ったカイルは、折られた紙を開いて息を呑む。漆黒の髪が、さらりと頬を滑り落ちた。唇が戦慄き、なぜ、と言葉が零れ落ちる。

理解できないというように、何度も何度も文字を追っていた顔が、やがてくしゃりと歪められた。そのまま手紙をそつと畳み、慈しむように胸に当てる。

「どうして　どうしてあの方には、全部わかってしまうのでしょうか  
うね……」

カイルは俯き声を震わせた。そして唇を噛み締めながら、溜め込んでいたものを少しずつ、少しずつ吐き出してゆく。

「わたし……本当は、不安でした。ひとりで、ちゃんと行けるのか  
……って。でもサリフリには、どうしても行かなければならなくて  
だから、あの方の剣を持つ貴方が一緒だったらって……そう願わず

にはいらなかった。でも」

このような状況下では、どういった行動が正解なのだろうか？

ラウルの両手が宙を彷徨う。

小さく震える少女を慰めたいと思うのだが、どうして良いのかわからない。これが男なら如何様にもできるのだが、少女と知ってしまつたら、途端に混乱してしまう。

新しい紅茶をポットに入れて持ってきた女将が、その姿を見るなりラウルの後ろに回って足を蹴った。素人ながら、なかなか鋭い蹴りだった。

女将は鼻息を荒くして、朴念仁の護衛士を睨みつけた。ふんと鼻を鳴らしてカウンターにポットをそつと置き、手を伸ばして震える子供を抱きしめる。身体の強ばりが完全に解けるまで、女将は十分に時間をかけて背中を撫でさすった。それから膝をつき、白い頬に手を当て目線を合わせ、カイルににこりと微笑みかける。

「ね、どうしてこの人と一緒に行くのが嫌なんだい？」

「……怖いのです。一緒にいてラウルに何かあつたらつて。それにわたしは何も返せない。だから、これ以上甘える訳には……」

「何言つてるのさ、そんなこと気にすることないんだよ。好きでやつてることなんだからね。この人にとつてはね、坊やが泣いたり怪我したりすることの方が、よっぽど辛いのだ」

勝手に気持ちを代弁されたラウルの眉間に皺が寄る。これで安々と説得されるようなら、誰も苦勞はしないのだ。

慈愛の込められた眼でカイルに微笑みかけながら、女将はゆっくりと言ひ聞かせる。

「……それにこの護衛士はね、腕は立つし大陸中を回っているんな

ところに行っているから、連れていけるとそりゃあ便利なんだよ？  
美味しいものも色々知っているしね」

「……………」

闇色の瞳が揺れている。あれほど頑にラウルを拒んだというのに、  
「美味しいもの」の効果は絶大だった。ラウルはぎり、と歯を食い  
しぼる。やはり小動物には餌付けなのか。

涙をこらえるように、潤んだ黒い瞳が一度伏せられた。少しする  
と、視線が女将からラウルに移される。

「…………ラウルは、お兄さんでしょう？」

「ああ、そうだな」

「お兄さんに何かあったら、きょうだい弟妹が悲しみます。だから…………危険な  
ことに、巻き込みたくないのです」

「でもね。護衛士つてのは、坊やについていなかったら安全ってわ  
けでもないんだよ？」

「それは…………そうかもしれませんが」

戸惑うカイルに、女将が優しく微笑みかけた。流石「母親」だけ  
のことはある。子供の扱いが、断然巧い。

「聞いたよ？ 坊や、剣には自信があるんだって？」

「はい。それなりに扱えます」

「だったらこの人を連れて行って、守ってやってくれないかね」

おい、と声を出しそうになったラウルを、女将は視線だけで鋭く  
制した。

「ね、あんたもそう思うよね！」

振り向きざま、今度は後ろ蹴りが飛んだ。辺境の宿屋においてお  
くには勿体ないほどの、良い蹴りだ。

向こう脛に決まった蹴りに、流石のラウルも顔を歪ませた。

「あ、ああ。そうだな……　　つつ！」

それきり黙り込んだラウルのつま先に、踵落しが決まる。何をす  
る、と顔をあげた先では、女将が壮絶な笑みを浮かべていた。

まるで熱のない炎を纏っているかのようなその姿に、ラウルはな  
ぜか、恐怖を覚えた。ぞくり、と背中が震える。ちりちりと毛が逆  
立って、悪寒が首筋を這い登ってくる。

逆らってはいけない　雄の本能が、激しくそう告げていた。

「……お、俺のことを、守ってくれないかなあー」

ラウルの引きつった顔と声に気付いているのかいないのか　恐  
らく全く気付いていないだろうカイルは、神妙な顔をして頷いた。

「確かに一人なら、わたしが守ってあげられます。ラウル……ついで  
きて頂いても良いですか？」

からららん

軽快なカウベルの音と共に閉じた扉の向こうから、宿屋一家の笑  
い転げる声が聞こえてくる。

無然としたラウルを余所に、大量の料理を抱えたカイルの足取り  
は、いたく軽いものだった。



出立・1(後書き)

9/3 改稿しました。



## 出立・2

「おばさん……『おばさん』って呼び方、素敵ですね」

「……そうか？」

「はい。『おばうえ』でも『おばさま』でもなく『おばさん』というのはなんだかこう、暖かい感じがします」

宿を出てからのカイルは、ひどく上機嫌だった。

対するラウルは、この上もないほどに不機嫌だ。

俺のことを守ってくれないかな　なぜこんなことを口走ってしまったのか。

先ほどの失態は、記憶から早々に消し去ってしまいたい。

(だというのに……)

宿を出る時を思い出し、ラウルは深く深く息をついた。

夜に食べるんだよ、と手渡された大量の料理に礼を言うカイルに、女将はひとつだけ、と注文をつけた。

「これからは『メレクおばさん』って呼んでおくれよ」

「……メレクおばさん、ですか？」

「そうさ。『奥方』なんて他人行儀な呼び方は、止めておくれ」

「わたしがそう呼んでも……良いのですか？」

「勿論だよ！」

瞳を瞬かせるカイルを胸に抱きしめて、女将は頬擦りした。

「ここは何もないところだけれど、いつでも帰ってきていいんだからね」

「はい……ありがとうございます。行ってきます、メレクおばさん」  
「はいよ、気をつけて行くんだよ」

頬を染め、はにかんだようなその笑顔に、宿屋一家はあつという間に骨抜きにされた。

カイルは厨房から出てきた主人、息子と使用人の娘、それぞれに挨拶を交わし、そこまでは良かったのだ。

それから彼らは奇妙に顔を歪ませ、なんとも言えない微妙な眼差しでラウルに向き合った。

「ら、ウル……あんたも、つく。気をつけてな」

宿の主人が頬をひくつかせながら、右手を差し出してきた。

その後ろでは両手で口を押さえ、涙さえ浮かべた息子たちが前屈みになって震えている。

「くそ……っ！」

どうやら一部始終を見られていたらしい。羞恥で顔が燃えるようだ。

ラウルは銀貨を一枚、叩き付けるように置いて礼を言うと、文字通り宿を逃げ出したのだった。

強い日差しの中を、さらさらと風がそよぐ。

カユテの村を東西に貫く「北方公路」を二人は東に向かって歩いていった。

太陽が山の向こうから顔を出し中天を迎えるまでの間、この街道を歩く旅人はまずいない。そもそもこの「北方公路」が寂れているということもあるが、アクサライ王国に行くものは早朝に旅立っているし、また国境から来るものはまだ辿り着かない。帝国側から来る旅人達も同様で、今は丁度、旅人達の空白の時間帯だった。

乾いた土の上を歩きながら、カイルはよほどその言葉が気に入ったのか、おばさん、おばさん、と繰り返して呟いている。料理の入った袋を胸に抱え、ちょこちょこ歩く姿はやはり小さな動物のようで、どこか微笑ましく感じられる。

その姿を眺めながら、経過はどうあれこれで良かったのだと、ラウルはほっと胸を撫で下ろした。これからも、この子の傍に居てやれる。雛を手放さずに済んだことが嬉しくて、ラウルの心も浮き立つようだ。

あとはそう、この子の保護者に知らせてやれば良い。

「カイル……手紙を書かないか？」

「手紙？」

「親父さん……武器屋でなら、預かってくれる。家族には無事を知らせた方が良い」

カイルが立ち止まった。外套のフードに隠れて表情は見えないが、きよとんと首を傾げているようだ。

「　　いませんよ？」

「なにが？」

「ですから、家族が、です」

ラウルの足も止まった。

「おまえ、だつたら家は」

「帰れないって、昨日言ったじゃないですか」

「いや、そうではなくて……誰かお前を知っている人　　それこそ後見人にでも」

「……ラウル　　こちらへ」

袖を引くカイルに連れられて、街道を逸れた。村の中とはいえ辺境だけあって、一步脇道に逸ればそこには畑が広がっている。畑を取り囲むように植えられた樹の下は風通しも良く、陽射しを吸って熱くなった外套が、あつというまに冷えてゆく。

土留めの丸太に座ったカイルに促され、ラウルも隣に腰掛けた。

「ちゃんとお話ししてませんでしたね。わたしは……わたしには、家族がいません。家族と呼べる人は、兄だけです。　　そしてその兄も、ずっと昔に亡くなりました」

「それは……」

口をつこうとした謝罪の言葉を、カイルは柔らかい微笑みで制した。

「ラウル。わたしは兄に愛されて、そしてじゅうぶんに長い間、一緒に過ごしました。兄に会えないのは寂しいですけど……もう悲しくはありません」

フードの陰から覗くその瞳は潤んでいるように見えたが、涙は零れなかった。そういえば、とラウルは思い出す。

昨日から、何度かこの子は涙ぐんだが、それが零れ落ちる事はついになかった。唇を噛んでこらえ、泣き出すのを必死に耐えていたように見える。

泣いて哀れみを誘うような真似はしたくない　そう、言われた気がした。

「そうか……」

「それにね、何か誤解があるようですけれど、わたしは貴族ではありませんよ?」

思いもよらない告白に、ラウルの眉がぴくりと上がった。

カイルも困ったように見上げてくる。

「だが、市井のものでもないだろう? ……その、物腰が」

「これは、兄が教えてくれました。言葉遣いから細かい所作まで全てです。……わたしは、普通ではありませんか?」

「いや……」

ラウルは目を逸らした。

確かに「普通」とは言いがたいが、カイルの「兄」の気持ちも分かる。妹とは、可愛いものだ。それが無条件に懐いてくるなら、なおのこと。ラウルは思ったようにはいかなかったが、カイルの兄も、理想の妹に育て上げようとしたのだろう。もっとも、それが成功したかどうかは不明だが……

「良い『お兄さん』だったんだな。兄上が……好きか?」

「はい! 兄はわたしの誇りです」

カイルは満面の笑みを浮かべ、胸を張って自慢した。

前を歩くカイルが、時折振り返ってはふふ、と笑う。

「わたしと兄は本当に良く似ていて、双子のようにそっくりだったんですよ?」

兄のことを話すカイルは、本当に幸せそうだ。

大好きな兄の話をできて嬉しい、と言った。ずっと一人だったから、と。

連れは? と聞けばカイルは疲れたように肩を落とし、遠くを見つめるような眼差しで呟いた。

「彼らは良く尽くしてくれますけれど……少し、度が過ぎることがあります。向こうもわたしを探していると思うのですが ラウル、少しの間一人になりたい時って、ありますよね?」

あまりにも憔悴したようにそう言うので、それ以上は聞けなかった。

カイルの世界は、亡くなった兄を中心に廻っている。そのせいか「兄」という存在が傷つくことを、ひどく恐れているようだ。

巻き込みたくない そう言って申し出を拒絶したのは、ラウルが「兄」だったせいもあるのだろう。

ふと、ラウルの脳裏を何か<sup>よ</sup>が過った。

世俗を断ち、ごく限られた人間のみで育てられる子供……  
ひたすらに純粹で、疑うことを知らず、ただひとつの目的のため  
に生かされる。

そんな話がなかっただろうか。

ずっと昔に聞いたような気がするが、思い出せない。

ラウルは眉をひそめた。

陽炎にも似たそれを捕まえようと思考の手を伸ばしたが、意識を  
向けた途端、それは滲むように消え失せた。

出立・2(後書き)

9/3 改稿しました。



## 白の宮の紅い瞳・1

綿<sup>わた</sup>をちぎったような雲が次々に、駆け足で太陽の前を横切つてゆく。その度に陽の光が遮られ、輝かしい世界をほんの一時、影の中に落とし込む。秋がすぐそこに迫っているとはいえ、まだまだ陽は強い。流れる影は外で働く人々に、ほんのわずかな休息を与えていた。

舗装のされていない土の道を、大小二つの影が東に向かって歩いていった。

帝国の東の边境、カユテ村の丁度中ほどにさしかかった時、小さな影がくるりと振り向き大きな影を仰ぎ見た。

身体に少し大きめの剣を佩き、膝下までの外套をまとい、頭はフードに覆われている。胸には大きな荷物を抱え、後ろ向きになりながらも危なげない足取りで、隣の大きな影を見上げていた。

小さな影は、良いことを思いついたと言わんばかりに身体を弾ませ、ラウル聞いて、と話しかけた。

「わたし、やっぱり手紙を書こうと思います。……武器屋のご主人に、お願いすれば良いでしょうか？」

「……手紙？」

「あの方に……ちゃんとラウルに出会えましたって、報告したいのです」

はにかんだような声音からは、同時に浮き立つような気配も感じられる。初めての経験に、心も身体も弾んでいるようだ。嬉しくてたまらない、といった様子のカイルに、ラウルの頬も自然と緩む。

「それは、その剣の？」

「ええ。随分心配していただいたので……」

「それがいい。きっとランドル師も喜ぶ」

出発が思ったよりも遅れてしまったが、手紙を書く時間が取れないほどでもない。武器屋の親父には文句を言われるかもしれないが、それだけのことだ。なにも問題は無いだろう。

「だが、その後は少し急ぐぞ。大丈夫か？」

「もちろん！」

確認すれば、元気な返事が返ってくる。眼の縁に皺を寄せてラウルが頷くと、今度は踊るように、カイルはまたくるりと回って歩き出した。

この大陸は、中央部を南北に貫くトゥルネイ山地によって東西に分けられている。

そして大陸の中で大国と呼ばれるのは3つ。

「世界の中心」とも謳われ大陸一の歴史と伝統を誇る、大陸西部のアルトローラ帝国。大陸東部の「草原と遺跡の国」、アクサライ王国。そして大陸南部の商業国家、テネルス王国。この三国はトゥルネイ山で国境を接し、この数百年、穏やかな関係を築きあげていた。

アルトローラ帝国の首都はイエーツ。大陸最大の湖、内海とも呼ばれるヴェッツィ湖に面した巨大な都市である。このイエーツの人

口が大陸最大であることに間違いないが、さらには政治、経済、魔術、学問と、あらゆる面で最高峰の知識と人材が、この都市に揃っているという。

「最高のものを求めるなら、イエーツに」  
建国以来のこの言葉に、偽りは無かった。

帝都イエーツには皇帝が住まうため、当然ながら城がある。名をカーフレイ城と言い、街ひとつそのまま納めたかのように、広大であった。

そしてこの城には、色を冠した四つの宮がある。

そのひとつ、政務を行うこの「白の宮」は、宮殿内でも最も広大な面積を占めていた。名前が示すそのままに、白で統一されたこの建物は、何事にも大陸一を誇る帝国に相応しい威厳を放っていた。

知らぬものが足を踏み入れれば、その偉容にまず言葉を無くす。

高い天井には細やかな模様が隙間なく彫られ、白い石の床には傷もなく、染みのひとつも見当たらない。壁にもまた、ところどころに玉で彫られた花々が飾られ、これだけのものを整えるのに一体どれほどの時間と労力が費やされたのかと、考えれば気が遠くなるほどだ。

そんな中を、いかにも見窄みすぼらしい格好をした男が歩いていた。

埃にまみれ、見た目よりも機能を重視した服をまとったその男は、宮殿内の雰囲気と臆することなくずかずかと歩を進め、ある扉の前で足を止めた。

扉の両脇に立つ騎士が、男を認めて扉を開く。

「ザカライア・モーブレイ、入ります」

落ち着いた低い声で、男は名乗った。

栗色の、やや癖のある短髪に濡れた土色の瞳と無精髭、加えて厚

い胸板に太い手足とくれば、茶色い熊を容易く連想させられる。だが人に威圧感を与えないのは、その人好きのする顔故のことだろう。くるくると表情豊かによく動く瞳は笑うと目元に皺を刻み、だが視線は油断なく辺りを見回して、物腰にも隙がない。

今も招き入れられた室内をざっと見渡してから、部屋の主の元にゆっくりと歩み寄った。

正式な騎士の礼をとり、重厚な執務机の向こうに座る若い男に頭を下げる。

「身なりも整えず、このような格好で罷り越しましたこと、誠に恐縮の至り」

「ああ……呼びつけたのはこちらです。楽になさい」

「あ、そう？ それじゃ、遠慮なく」

若い男が応接用の長椅子を指し示すと、ザカライアと名乗った男はそこにどっかと腰を下ろした。

ついでに「喉乾いてんだよね。なんか冷たいの、ちょーだい」と注文までつける。部屋に居た従僕は素知らぬ顔で一礼すると、飲み物を用意するため出て行った。

そんな男の態度はいつものこと、というように、上司であろう若い男の方は気に留める素振りもない。

テーブルの反対側に座って男に従僕の持ってきた冷えた果実水を勧めると、世間話でもするような軽い口調で話しかけた。

「ところでザック。モーゼルはどうでした？」

「あー……恐らく『シロ』だろ」

「おや、そうですか」

「確かになー、怪しいっちゃ怪しいが、ありゃあ仕事に入れ込み過ぎて、周りが見えなくなってるだけつつつか」

がしがしと頭を掻いて果実水をかぶりと飲み、ザックは「おお、  
そうだ」と手を叩いた。

「ハーシユも似たようなところあったら？　ほら、昔……」  
「ザカライア？」

言い難い本名でわざわざ呼ばれた上に、ふふ、と微笑まれて、ザ  
カライア　　ザックは目を逸らして黙り込んだ。

この年下の上司、ハーシユ・ラスンはまだ23という若さにも関  
わらず、宰相補佐という要職に就いている。しかも100年に一度  
と言われるほどの天才で、宮廷魔術師でもあった。さらに灰白のま  
つすぐな長髪に薄い水色の瞳、整った顔立ち、と天が二物も三物も  
与えた恵まれた男だ。残念なのは表情筋の動きが悪いため、初対面  
の人間には爬虫類のような印象を与えてしまうことだろう。

今も口元は僅かに弧を描いているが、視線は底冷えするほどに冷  
たく、元々の顔が美しいだけにより一層、迫力が増している。

「モーゼルの件は、もう良いでしょう。それよりも」

手を上げて人払いをすると、ハーシユは席を立ち、執務机から一  
枚の紙を取り上げた。

す、と差し出されたのは厚手の上質な紙で、滑らかなその表面に  
は流麗な筆跡で文字が記されていた。そして最後に、ザックの目の  
前の宰相補佐兼宮廷魔術師の署名がなされている。

「……なに、これ？」

「見てわかりませんか？ 命令書です」

「命令書って……『速やかに任務を全うせよ』って何の任務だよ。任務は終わったんじゃないの？」

「新たな任務ですよ。決まっているでしょう？」

長椅子に戻ったハーシユは、今度こそ本当に心から微笑んだ、ように見えた。

「……俺、たつた今帰ってきたばかりなんだけど？」

「知ってますよ。モーゼルから呼び戻したのは私です」

「荷も解いてないし、風呂にも入ってない。……髭だって剃ってないし」

「丁度良いじゃないですか。そのまま行きなさい」

「おい待てよ！ 理由ぐらい、言え」

ザックはこの宰相補佐兼宮廷魔術師とは付き合いが長い。幼い頃から一緒に学んで気心も知れているせいも、含むことなくつき合える数少ない「友人」だ。だが「騎士」という道を選んだにもかかわらず、このハーシユという男は権力を笠に着て、ザックを自分の手駒として遠慮なくこき使っている。表向きは「宰相補佐兼宮廷魔術師専属騎士」という訳のわからない肩書きを貰っているが、要は私的な雑用係だ。「騎士なら体力が有り余っているでしょう？」と大陸中を駆けずり回され、そのうえ凡人には理解できないことを調べさせられている。今回のように、明らかに重要な案件の調査、というのは極めて稀だった。

特定の若い女性ばかりが煙のように姿を消す この事件について調べていたはずなのに、モーゼル公の職人魂に触れただけで終わってしまった。なんともお粗末な顛末だ。

だがしかし、全く成果がなかった訳でもない。それを突然切り上げて、別の任務というならばそれ相応の理由があるはずだ。

だというのにこの宰相補佐兼宮廷魔術師殿は、それをたった一言で片付けた。

「事は急を要します」

「理由になってねえだろ！」

あー、と両手で頭を掻き回せば、まったく仕方ないですね、と呟いてハーシユは優雅に無駄に長い手と足を組んだ。

「私が最近『陣』の研究をしていたことは知っていますね？」

「ああ、図形や文様で魔術を使うってヤツだろ？」

「……そう。まだ火を熾したり、冷やしたり、といった簡単な術しか使えませんが。そら、貴方が今使っているグラスにも刻まれていますよ」

示されたのは、グラスの底だった。ただの装飾かと思ったが、どうやらこれが「陣」というものらしい。

「これで冷やしていた訳か。へえ、便利だな」

「使いこなせれば、ですね。……これがなかなか難しい」

「お前がそんなこと言うなんてなあ」

一見すると単純な図形の組み合わせに見えるが、なんでも冷やす加減や効果の持続を設定するのが面倒なのだそうだ。もっとも、一度設定すれば壊れるまで使えるということではあるので、一長一短といったところか。

難しいというのは、その「陣」が同じでも、使う人間によって効果が全く異なるということらしい。

「俺に魔術の説明をされてもなー。よく使ってる『呪文』とはどう違うのさ?」

「そうですね……一番のメリットは、いちいち『呪文』を唱えなくても、あらかじめ『陣』を描いておけば瞬時に術が発動する、という点でしょうか」

「……それって、『魔石』とどう違うわけ?」

「『魔石』よりも応用が利きます。条件付けをしてやれば、自動的に術を発動させることもできそうですよ?」

にい、と形の良い唇が引き上げられ、薄い水色の瞳が怪しい光を放ちはじめた。

「最近『物質の移動』についても研究してまして」

「……」

「『陣』を用いて人や物を遠く離れた場所に一瞬で移動させる理論上は、可能です」

「おい、ちよつと待て。それって……」

ごくり、と喉が鳴った。

何かが繋がるうとしていいる。まさか、それは

「それを実証しようとしていたわけですが、まだ完成にはほど遠かった『陣』を、起動して使った者がいましたね」

今やハーシユの瞳は禍々しい紅に輝き、そしてザックの背筋は凍ったように冷えていった。



白の宮の紅い瞳・1 (後書き)

9 / 3 改稿しました。

## 白の宮の紅い瞳・2

そこに己を出し抜いた相手がいるかのように、ハーシユは虚空を睨みつけた。薄い唇が歪み、紅い瞳が輝きを増してゆく。

悪寒がザツクの背中を走り抜ける。

表情の乏しいこの男がこれほどまでに憎しみを露あつらにすることを、ザツクはこれまで見たことがなかった。自分に向けられた感情ではないとわかっていても、全身の毛がぞわりと逆立ち、歯の根が合わず音を立てる。

ふと、吐く息が白くなっていることに気がついた。見ればテープルにも霜が降りている。

( 震えがきたのはこれのせいだよ！ )

ザツクは立ち上がり、腹立ちまぎれに目の前の頭を平手で叩いた。

「てめえっ……！ 妙なモン垂れ流すな！」

ぺち、という音と共に灰白の頭はがくりと前に傾いて、それきりぴくりとも動かなくなつた。

十分手加減して叩いたつもりだが、打ち所が悪かつただらうか。

「おーい、ハーシユ………？」

恐る恐る声をかけると頭が振られ、灰白の髪がさらりと流れた。

ハーシユははずると長椅子の背にもたれると、天井に顔を向けて片手で眼を覆う。

「……少々、取り乱しました」

震えを含み、吐き出すように呟かれた言葉の中には、押さえようもない苛立ちが含まれていた。

これまで「天才」の名をほしのままにし、万事そつなくこなしていたこの年若い男は、魔術で先を越されたことがそうとう悔しかったのだらう。

「お前は研究だけしている訳じゃねーんだ。宰相補佐の仕事だって暇じゃないんだし、それで遅れを取っちゃうことだってあるだろ？

これはしょうがねえ」

「……そんなことではありませんよ」

ぼそりと漏らすと手のひらを眼に当てたまま、ハーシユは何事かぶつぶつと呟いた。

冷えきっていた室内が、みるみるうちに温もりを取り戻す。相変わらず見事な腕前だ。「杖」無しにここまでできるのは、こいつくらいだらう。

凍えるような寒さからやっと解放されて、ザックは安堵の息を吐いた。だが寒さに慣れた身体には、元の気温は少々息苦しく感じられるのも事実である。

「あのさ、もう少し涼しくしてくんない？」

「……」

せめて可愛らしく見えるようにと首を傾けて「お願い」すると、ハーシユはちらりと紅い瞳を覗かせて、何も言わずに呪文を唱えてくれた。

「冷えた部屋ん中であっつい茶を啜るって、最高だよなー」

今度は上等な紅茶に焼き菓子を出してもらって、ザックは存分に小腹を満たしていた。

茶器には勿論、保温の「魔術陣」が刻まれているから、茶が冷めることはない。

しばらくの間、長椅子に沈んで眉間を揉んでいたハーシユもようやく落ち着いたようで、紅茶で口を湿らせると姿勢を正した。一旦目を閉じてから開いた瞳には理性が宿り、色も薄い水色に戻っている。

「ともかく、『転送陣』　これが完成すれば、善くも悪くも世界が変わります。この意味が、わかりますか？」

「ああ、わざわざ荷車押す必要はなくなるし、ムカつく奴がいたら目の前に飛んでって、こっ」

ザックは首の前で、指を横に滑らせた。

「　　ってことだろ？」

「そう、その通りです」

よくできました、というように眼を細め、ハーシユは大きく頷いた。

「我がアルトローラ帝国は、今でこそ『魔術士の聖地』として栄えています。その昔　千年近く前でしょうか　その頃は、アクサライこそがその『聖地』でした。『大魔術師エルリア』……この名を知っていますか？」

「いや」

聞いたこともない、とザックが頭を横に振るとハーシユはまた、満足げに大きく頷いた。

「神々から賜った、見えざる力 『魔力』を人として初めて使ったとされる人物ですが……彼はもはや伝説として伝わるのみですから、魔術士でもない貴方が知らないのは当然ですね。では、『イドリース』『エミーネ』『デイルク』これは？」

「それは知ってる。魔術の基礎を築いた、偉大なる三大魔術師だ」

「そう、彼らはいずれもエルリアの弟子としてアクサライで学び、魔術を大陸中に広めました。そして最後に 『カイル』」

「……それは知らんな」

「エルリアの最後の弟子です。彼は、エルリアの術を継いだと伝えられています。この二人については資料が本当に少なく、ここまで調べるのにも随分苦労しましたよ」

聴衆が素人一人、というささやかな講義と研究発表にも、ハーシユはじゅっぶん満足したようだ。先ほどの激昂ぶりが嘘のように穏やかに、会話を楽しんでいる。

ところでそれがどうした、と尋ねそうになって、ザックは慌てて口を閉じた。こういうとき、迂闊に質問するとハーシユは機嫌を損ねるのだ。そして「貴方の頭の中に詰まっているのは筋肉ですか？ 退化しないように、もう少し使ってあげなければ」などと理屈をこねて、面倒な仕事を押し付けてくる。

たった今、これから新たな任務の内容を聴こうとする時に余計な仕事まで追加されては堪らない、とザックは必死になって考えた。

「伝説の魔術師と……今回の任務……って、おい、まさか……」

察しが良くて助かります、と微笑んだ宰相補佐兼宮廷魔術師は、あっさりと解答を口にした。

「エルリアは魔術を『陣』という形で使っていたそうですね？ あなたには、これを調査してもらいます」

「待て待て待て！ お前、さっき『伝説』とか言ってたか？ そんなもん、素人がどうやって調べんだよ！」

「アクサライの宮廷魔術師を訪ねなさい。彼は長年古代魔術に関して研究していますから、きっと力になってくれるでしょう。紹介状はこれです」

懐から取り出した書状を差し出して、ハーシュは厳命した。

「期限は三ヶ月。それまでに成果を。なにも無い、では済みませんからね。手に負えないことがあったら、その都度指示を仰ぎなさい」  
「ちよーっと待てよ、おい。宮廷魔術師ってことは、王都か？ サリフリか？ 行くだけで1月近くかかるだろうが！」

「そうですね。でも、やりなさい」  
「ふっざけんな！」

薄い水色の瞳がわずかに色を増した。宰相補佐兼宮廷魔術師は、深刻な顔をして声を潜めた。

「……時間がありません。あの『転送陣』を使える人間がいる以上、我々がそれを知らないでは済まされぬ。悪用されてからでは、遅すぎる」

「……遅かったじゃねえか」

武器屋の前では、店主が腕を組んで仁王立ちになっていた。いったい何時からこうしていたものか、ぎろりと二人を一瞥すると、ふんと鼻を鳴らして店の中に入って行く。

扉を支え、カイルを先に入れて後をついてゆけば、店主はちらりと振り返った。

「随分と懐いたようだが……巧い具合に口説けたのか、ええ？」

「ご主人、わたしはラウルを口説いたりしていませんよ？ お願いして、ついてきて頂いているのです」

大真面目に答えたカイルに、店主は眼を丸くして振り向いた。そして一拍後に、ぶほっ、と吹き出し腹を抱えて笑い出した。

「……そうか、そうか！ 坊主はすっかり尻に敷かれとるといっわけだな！」

「尻に敷くつて……むぐ」

「……頼むから、少し黙っててくれ」

どんな言葉が飛び出るか予想のつかない口を塞いで、ラウルは大きく息を吐いた。どうもカイルと知り合ってから溜息が多くなった気がする。

豪快に笑いながら、店主は奥から袋に入った荷物を持ってくると、カイルに無造作に手渡した。

「小僧、取りあえず必要になりそうなものを詰めておいた。街道を行くならこれで十分だろう」

ありがとうございます、と受け取って、カイルは渡された袋をじっと見つめていたが、何を思ったか、またとんでもないことを口にした。

「背負うのではなく、ラウルのように肩から掛ける方が良いのですけど……」

「「だめだ!」「」

二人の声が重なり、同時にラウルの頬が引きつった。

(こん畜生……! この親父、知ってたな)

「どうして?」

瞳を瞬かせ、きよとんと首を傾げるカイルは全くわかっていないようだ。

まがりなりにも男装しているくせに、ささやかにでも存在している胸の膨らみを強調するような真似を、どうしてしなければならぬのか。

それを指摘したところで、この子が一体どんな行動をとるのか、恐ろしくてとても訊けたものではない。とりあえずは無難なところで、とラウルは模範的な回答を試みた。

「転んだ時に手が塞がっていたら、危ないだろう?」

「……あの」

カイルの声が低くなった。受け取った荷物と食糧の入った袋を大事そうに胸に抱えながらも、ラウルを上目遣いに睨んでくる。

「ラウル 貴方、わたしがいくつだと思っているんですか?」



「いくつって……まだ子供だろう？」

「わたしは、とつくに成人してます！ ……確かに、世情に疎いところもあると思いますが……」

最後の方は消え入るような声だったが、それでも大人だと主張したいらしい。だが頬を薔薇色に染め、口をへの字に曲げているようでは、可愛らしくはあっても大人びているとは言い難い。

ラウルは胸の辺りにある小さな頭に手を載せ、宥めるように何度か撫でた。

「冗談も程々にな。第一、こんな小さくてもまだまだ大人とは言えんだろう？」

「ラウルが大きすぎるんですよ！」

「……そうか？」

「そうです！」

だん！

文字通り、鍋が踊った音にびくりとして目をやると、店主が作業台に手を打ち付けて、悶えていた。

（ またか ）

笑いを過ぎて呼吸困難に陥った店主は、作業台を叩くことで衝動をやり過ぎそうとしているらしい。

「あの、ご主人……？ 大丈夫ですか？」

そしてまた、カイルが馬鹿丁寧に構うものだからますます店主は痙攣し、笑いの発作は当分治まりそうにない。

ここまで笑われるようなことはしていないはずだが、カユテこの人間は一体なにがそんなに可笑しいのか、ラウルにはさっぱりわからなかった。

それにしてもこの親父ときたら、どうしてくれよう　苦々しく思っていたところに、ひゅーひゅーと物騒な呼吸音がしてきて、ラウルは慌てて店主の背中を強く叩いた。

「…………げほっ…………」

「おい、息はできるか？　少し落ち着け」

手布で口を押さえ、涙で顔をぐしゃぐしゃにして、顔を赤黒く染めた店主が無言で頷いた。

（どいつもこいつも　どうしてここまで出来るんだ？　いつか笑い死ぬぞ）

「ひゃっ…………み、ず…………」

水を飲んでくるから待つてろ、と手を振る親父がよろよろと奥に消えたところを見計らって、ラウルはカイルを呼ぶと、耳元に口を寄せた。さんざん人を出汁にしてくれたのだ、多少反撃しても構うまい。

囁かれた内容にカイルの目が見開かれ、やがて忍び笑いが漏れてきた。

「…………やってみます」

戻ってきた店主に渋い顔をされながらも手紙を書き、カイルはそ

のざらりとした灰色の紙を手渡した。

「お願いします。ご主人……これをどうか、あの方へ」

「ああ、安心しな。爺じいにや、ちゃあんと渡しとくからよ」

「じゃあな、親父。また縁があつたら　カイル」

頷いたカイルは、荷物をラウルに預けると、店の外に出てきた店主の首にぱつと抱きついた。

「サリフリに着いたら、メレクおばさんに手紙を書きます。勿論、おじさんにも」

だから、待っていてくださいね　そう耳元に囁かれ、店主の眼と口が限界まで開かれた。

ふわりと微笑んでカイルが身を離せば、湯気が立ち上るかのよう  
に顔を真っ赤に染め上げて、店主はよろめき尻餅をついた。

その様子にやった、と二人は手を打ち合わせ、店主に向かって手を振った。

「ありがとうございます、お元気で！」

「……やられた！」

呆然と座り込んでいた武器屋の店主は、二人が見えなくなる頃に  
ようやく身を起こし、額をぱちりと叩いて笑いだした。

## 北方公路・1

カユテの村を東に進むと、しばらくはだらだらとした登り坂が続  
き、やがて街道は森へと入る。

トウルネイ山地の西、アルトローラ帝国側を覆う古い森は主に針  
葉樹から成り、大人3人でやっと抱え込めるほどの大きな古木が数  
多く生えている。人の手の入っていない森は深く、街道を一步外れ  
ればそこには低木やシダ類、枯れ枝などが積み重なって、不用意に  
人が入り込むことを拒んでいる。そして昼でもなお薄暗い森はひや  
りとした冷気を孕み、外とは完全な別世界を築いていた。

その古い森を太い樹々に導かれるようにして、北方公路は東に向  
かっている。

道はだんだんと狭くなり、踏みしめられて乾いた土は徐々に湿り  
気を帯びてきた。坂の中にときおり段差を交え、うねりながら街道  
は、眼前の険しい山々に向かって伸びてゆく。

影のようにそびえ立つ古木の向こうに深い蒼の空と白い雲、そし  
て全てを圧倒するかのように覆い被さる山々が見える。

足取りも軽く先を歩いてきたカイルはふと立ち止まると、背伸び  
をしながら右手へぐるりと見回して、ぐるりとラウルを振り返った。

「昨日はあんなに晴れていたのに……今日のトウルネイ山は、曇っ  
て見えませんか」

「頂上が見えることの方が珍しいらしいぞ?」

「そうなんですか? ではわたしたちは、運が良かったということ  
ですね」

足が並ぶとフードの奥から一度ラウルに微笑んで、また前を見て歩き出す。

慣れない山道にすぐに音を上げるかと思ったが、なかなかどうしてカイルは健脚だった。流石に口数は少なくなつたが、荷物を背負つて疲れた素振りも見せずに黙々と歩いていく。

街道の前にも後ろにも人影は見当たらず、すれ違った旅人も数人だった。国境の砦までの距離を示した道標を見て、この分なら日が暮れる前には辿り着けるだろうからと、ラウルは休憩を提案した。

二人して荷を降ろし、街道わきの倒木に腰を下ろす。ところがカイルは水音がすると森の奥を覗き込んだ。休憩なのだから休めば良いのにと、じっとしていられない様子にラウルは苦笑する。

「……これからのことで、いくつか確認したいことがあるんだが」「はい。なんででしょう」

すぐに膝を揃えて姿勢を正し、いたく真剣な眼差しで見上げてくる顔に、ラウルはまた苦笑した。

「そう畏まらなくて良い。……襲われた、と言つたな。理由に心当たりはあるのか？」

一瞬何のことか、という顔をしたカイルだが、すぐに沈痛な面持ちで顔を伏せた。

「わかりません……あの時は、逃げることで精一杯で……他のことを考える余裕はありませんでしたから」

「……辛いことを、すまない」

握りしめられた白い拳にそつと手を重ねれば、いいえ、とフード

から覗く黒髪が横に振られる。

過程がどうあれ逃げられたということは、襲った者はまだこの娘を諦めていない可能性がある。いや、ここは「可能性」ではなく、「諦めていない」とすべきだろう。さらった娘がこうしてここにいると知れば、また襲ってくると思った方が良い。

「それから、『カイル』というのは誰の名だ？」

「……知り合いの名前です。すみません　わたしは貴方に、本当の名も言えません」

紅い唇を引き結んで俯くと、カイルはまた拳を握りしめた。

「言いたくない」ではなく「言えない」か

ひとつ頷いて、ラウルは隣に座る小さな肩に軽く手を載せた。

「気にするな。その名からお前が連想されなければ良いと、そう思っただけのことだ」

「それは、大丈夫だと思うのですが　ラウル、あの、実は……」

ちらりと視線を寄越すと少女はまたすぐに手元を見つめて口籠った。こちらの顔をうかがいながら、上着の裾を弄って口を嚙む。一瞬ラウルを見上げて口を開け、声を出せずに口を閉じ、そして俯き上着の裾を揉みしだく。何度かこれを繰り返してやっとのこと口を開いたと思っただが、それでもカイルは言い淀んだ。

「もう、ご存知かもしれませんが……ええと、わたしは実のところ、ですね」

「女だな」

え、と弾かれたように上げた顔が、みるみるうちに赤く染まる。

「なんだ、隠していたのか？」

「いえ、そういうわけでは……髪は切ってしまったから、この方が目立たないと……いうだけの、ことで、その」

まだある、というようにもじもじと指先を絡めていたのを促してやると、少女は何かを決意したように勢いよく顔をあげた。

「あの！ 実は今朝、目が覚めたら寝台にいて……」

寝ている間に何かされたのかと、そういう心配をしているのだろうか。

ラウルは肩を落として眉間を押さえた。そんな眼で見られるとは、はなはだ心外だ。

「ああ、寝苦しそうだったから、上着は脱がせてベルトを外したが？」

それがどうした、と殊更に平静を装えば、慌ててカイルは違うと言った。そんなことではないのだと。なら何が問題なのかとそう聞けば、とても大事なことだという。はて、と首をひねるラウルに頬を赤く染めてカイルは尋ねた。

「わたし、貴方を蹴ったりしませんでした、か？ 以前、兄が……その。寝相が悪いと、そう……言っていたものですから」

「……蹴りは、なかったな……ああ、確かに」

寝相……今朝がた微睡んでいたところを叩き起こされた、「あれ」は寝相と言っているものだろうか。

ラウルはちらりとカイルを見遣る。両手を胸の前で握りしめ、ど

きどきと審判を待つその姿はまるで餌を前に「お預け」された子犬のようだ。

「ほ、他になにか、ありましたか？」

その様子が可笑しくて、笑いを堪えようとラウルは腹に力を入れた。すると眉の間に皺がより、口元もぐっとへの字に引き結ばれる。はらはらしながら窺っていたカイルの身体が、その拍子にびよこんと跳ねた。

もうこれ以上、息を止めているのは限界だった。

ラウルは腰についた埃を払って立ち上がり、荷物を肩にかけながら大きく息を吐きだした。

「……さて、そろそろ行くか」

「あつたんですね？ わたし、一体なにをしたのですか！？」

待ってください、と慌てて荷に手を伸ばす少女を置いて、ラウルは構わず歩き出す。片手で押さえた口元から、塞き止めきれない呼気がぶふつと漏れた。

「ラウル！ ちょっと……！」

壁と寝台の間にはまり込んで寝ていたのは、寝相が原因だったのか。大人だと主張するなら、成人男性に対してあまりにも無防備なのも問題だが、それよりも。

その「兄」とやらが、どんな顔をして妹にあのことを告げたのかと思うと

不意に、肩が揺れた。押さえ切れずに腹の底から次々に沸き上がってくるものが、徐々に肩を大きく揺らす。



「ええ？ そんなに可笑しかったのですか？ 教えてください！」

焦りを含んだ高い声と低く抑えた笑い声が、古い森の中に響いていった。

(……帝都を出て…… 2日半でスウォンジー、で、そこから5日でブース……俺、結構頑張ってる？)

アルトロローラ帝国において、たった一つの貴重な肩書きを持つ唯一の騎士 宰相補佐兼宮廷魔術師専属騎士ことザカライア・モーブレイ、通称ザツクは東に向かってひたすら馬を走らせていた。

結局あのまま休むことなく年若い上司、ハーシュ・ラスンの執務室を飛び出して、こうして馬上の人となっている。あれから1週間が過ぎたというのに、ハーシュの言葉が頭にずっとこびりついて離れなかった。

「で、誰よ？ お前を出し抜いた奴って」

そんなことを訊いたのは、この若き天才の鼻を明かしたのはどんな人物だったのだろうかという、ちょっととした興味からだだった。

だがそれは、彼の矜持を大層酷く傷つけた出来事だったようだ。形の良い眉がひくりと上がり、膝の上に乗せられた拳が震えるほどに握りしめられる。薄い水色の瞳のふちが、仄かに赤く染まり

ハーシュはそれを解放するのを、必死に耐えた。

「すべて私の失態です。……弱った女と違って油断しました。現在、最重要参考人として追っています。……まだ足取りは掴めていません」

「……は？ 女？ ……最重要参考人って？」

「例の事件ですよ」

ハーシュは忌々しい、と吐き捨て流麗な眉の間にしわを寄せた。例の事件というと、ついこの間までモーゼル公国で調べていた、女性の失踪に関する件だろうが

「あのさ、次の任務って……そいつを探すことも含まれてるワケ？」

「まさか。たった一人で女を探せなどと、そんな無謀な事は言いません。あなたにやって欲しいのは、さっき言った通りです」

伝説の魔術に関する調査。それだけで良いと口では言うが、感情が納得していないのがただ漏れた。言ってみるよ、とザックはそう促した。

両方の目頭を右手の指で押さえながら、ハーシュはちらりと己の騎士を見た。

「……もし もしも、です。その女を見つけたら、すぐに拘束してください。私はあの女が赦せるとは思えませんが、『転送陣』に関して協力を得られるのだったら、土下座でもなんでもしてみせます」

「協力してもらうのに、拘束するってーのもどうなのかね？」

その眩きは帝都まで届くことなく、  
辺境の乾いた風の中に消えて  
いった。

北方公路・1（後書き）

9 / 4 一部改稿しました。

## 北方公路・2

「この辺は随分と涼しくなってるんだなあ」

ザックは大きく息を吸って、吐き出した。

イエーツとは大違いだ。向こうは夜になってもまだ蒸して、風が吹いても生温い。だというのにこの辺境はからりとして、昼でも日陰に入ればひやりと涼しい。帝都を発って8日目、辿り着いたトゥルネイ山地の麓では、もう秋の気配が漂っている。

大地に根を張るように広がった丘陵地帯のただ中で、ザックは「例の女」について考えていた。

(黒髪に銀の瞳。髪を切って逃げたから、男装している可能性がある。そして『あの事件』の被害者である可能性も高い)

緩やかな登り坂を速歩で馬を進めて見上げれば、蒼く高い空が眼に眩しい。綿のように流れる雲は、前方の山々にぶつかりひしゃげ、渦を巻く。

その雲と同じように、耳にまとわりつく言葉。

「一度見たら忘れられないほどに、美しい、女……」

普段からあまり感情を露にすることのないあの天才に、あそこまで憎まれたうえで「美しい」とさえ言わせたのだ。相当な美貌に違いないだろうが、性格は悪そうだ。

(まあ、巧い具合に目の前に現れる、なんてこたあねえだろうが)

国境前の最後の村が見えてきて、休憩と遅めの昼食に心惹かれるのか馬の速度が早くなった。

薄暗い森の中に甲高い鳥の声が長く尾を引き響き渡った。間を置いて、遠くからそれに応える声も聞こえてくる。

そうやって鳥たちが鳴き交わすのを聴きながら、北方公路を歩く二人も色々な話をした。

「そもそも、何故サリフリに行くんだ？」

「向こうで少し、調べたいことがあります。それからお会いしたい方がいるのです」

「調べもの？ それなら帝都の方が良いんじゃないのか」

帝都イエーツの大図書館は、子供の小遣い程度の入館料を支払うだけで、身分や出身を問わず誰でも入ることができる。

そしてここには世界中のありとあらゆる文献が揃っているとも言われており、一般公開区域には学者も大勢うろついている。そのためローブを纏った者に尋ねれば、大抵のことはそれで解決してしまう。

それはそうなのですが、とカイルは首を傾げた。

「イエーツには遺跡が無いでしょう？ わたしが調べたいものは、そこにあるものですか」

「……遺跡、ねえ」

お手上げだった。ラウルも一般教養は身につけているが、専門分野になるとさっぱりわからない。遺跡で何を調べようとしているのか尋ねたところで恐らく欠片も理解できないだろう。

「そういえば、この剣も遺跡からできているんですよ？」

その言葉になに、と腰の剣をみれば、カイルは自分の剣をすらりと引き抜くと鋼灰色に輝く刀身をまっすぐに掲げて見せた。

「これは、遺跡の外骨格を削りだしたものだそうです」

「ガイコツカク？」

「そう。遺跡の外側を覆う、一番固い部分です。これはどんな炎にも溶けることなく、そしてどんな金属でも貫くそうですよ？」

そんな恐ろしく固いものを、気が遠くなるほどの時間をかけて丁寧に研いだものが、この黒い剣なのだそうだ。

確かに普通の剣とは違っている。そう感じてはいたが、遺跡とは想像すらしなかった。

「<sup>にわか</sup>俄には信じられんな……」

「では、試してみますか？」

言うなりカイルは道端から拳ほどの大きさの石を手にとると、軽く上に放り投げて無造作にそれを切った。

とっ、と音がして落ちたそれを拾ってみると、断面はつるりと滑らかだ。

「見て下さい。刃こぼれは全くありません」

「ああ……」

無邪気に笑って見せられた欠けのない刀身よりも、ラウルにとっては石を粘土のように切った、その技量こそが信じ難いことだった。本当に何気ない動作で、それこそ額にかかった髪を払うようにカイルは剣を一閃した。剣に自信があるというのもあながち間違いない。これは素人の剣ではない。

だが「慣らし」もしていない剣でこれだけのことができる技を、この娘は一体どこで学んだというのだろうか。

昨晚触れた手の平には、剣ダコはおろか、肉刺マクの一つもなかったのだ。

「それでも雑に扱うと少しずつ傷ついてしまうそうですから、欠けたりしないように大事に扱って下さいね？」

にこにこ上機嫌で微笑むカイルに、ラウルは曖昧に頷くことしかできなかった。

「……え？ 食いもんが無い？」

「そうなんだよ、ごめんなさいねえ。料理はちよーっと切らしちゃっててね。パンとチーズぐらいならすぐ出せるんだけど。他のはまだ仕込み中だよ」

「あ、そーなんすか。じゃあ、それで」

帝国料理もこれでしたらくは食べ納め、ということ遅い昼を兼ねて村唯一の宿屋に寄ってみれば、この仕打ち。

頑張ったのに、報われない。食事だけがささやかな楽しみだった



のに、と少々やるせない気持ちになったがまずは仕事優先だ。

夜にはご馳走が出せるけど、どうする？ と聞かれたが、急ぐからと断った。

パンにチーズとハム、そして果物が少々。

晩飯にと包んでもらったのも、同じもの。

こんなことならブースでもっと、ちゃんとした食事を山ほど食べてくれば良かったと後悔したが、もはや後の祭りだ。

旨いがどこか味気ない そんな食事をもそもそと食べ、こちらは満足げに鼻を鳴らす馬を引いて、ザックは雑貨屋へと向かって行った。

樹々の隙間から漏れ来る光のモザイク模様の中で、徐々に長くなりゆく影を踏み、足下に注意を向けながらただひたすらに坂を登る。秋も近くなつたこの時期は、日が傾くと急激に気温も下がってくるがそれでも歩いて熱を持った身体には丁度良い塩梅だ。

「サリフリに居るのは、知り合いか？」

「いいえ。お会いしたことはありません。ただ助言を頂ければ、と思ひまして」

「それは誰かと訊いても？」

急な登り坂にできた、古木の根が作った大きめの段差に足をかけたカイルにラウルは手を差し出した。素直に乗せられた手を握ってひよいと引けば、小さな身体はあっさりと乗り上げる。

「……背が高いつて、便利ですね」

「大きすぎるのも問題だ。鴨居とは一生仲良くなれそうもない」

冗談めかしてそう言えば、それもそうですね、とカイルは笑い、そしてぽつりと呟いた。

「会いたいののはフート・セレネルという方で……アクサライの宮廷魔術師だそうです」

「セレネル！？……あの？」

踏み出しかけたラウルの足が止まった。確認するように腰を屈めて聞き直すと、黒い瞳がぱちりと瞬く。

「お知り合いですか？」

「知らないのか？ 魔術『師』と呼ばれる魔術士は何人かいるが、その中でも特に高名な3人のうちの一人だ」

魔術を扱えるものは一様に「魔術士」を名乗ることができる。

だが魔術を使える者の絶対数がそもそも少ない上にその力はまちまちで、一言に「魔術士」といつても、個人の能力差は比べようもないほど激しい。そのため魔術士の中でもとりわけ力に長けた者々を人々は「魔術師」と呼んでおり、中でもアクサライ王国のセレネル、アルトローラ帝国のラスン、テネルス王国のメリカントは、当代の3大魔術師と呼ばれていた。

「そうでしたか……そうすると、お会いするのは難しいのでしょうかね」

「いや、俺の師がサリフリで『組合』の……」

そこまで口にして、ラウルはぎり、と歯を食いしばった。

まただ。また、この奇妙な「偶然」だ。背筋から首筋にかけて何かが撫でていったような、嫌な感触が肌を伝う。

突然黙り込んで眉根を寄せた背の高い護衛士を、心配そうに少女は覗き込んだ。

「どうか、しましたか……？」

「いや……なんでもない。俺の師が向こうにいるから、その伝手を頼ればあるいは、といったところか」

一度頭を振って歩き出せば、後方から感嘆の息が漏れ聞こえてきた。

「ラウルは凄いですねえ」

「人ごとではないぞ。お前はこれから俺の弟子になるのだから」

「……弟子、ですか？」

怪訝そうに首を傾げ見上げてくる少女を振り返るとラウルは口の端を引き上げた。

「臨時休業」と殴り書きされた灰色の紙が扉に鋏で止められて、そよと風に揺れていた。

「……おい、なんだよ、こりゃ」

胃腸薬が底をついていることに気が付いたのは、3日ほど前だった。

アクサライでは食事に香辛料を多く使うので、念のため準備しておこうと思っていたのだがブースではつい買いそびれてしまったのだ。帝国内ではごくありふれたものだから、どこでも買えると高をくくっていたのが裏目に出てしまった。

村唯一の雑貨屋に向かつてみれば、どういふわけか閉まっている。しかも薄汚れた看板を見ると、書かれていたのは……

「ガリプ武器店？」

雑貨屋、ではなかったのだろうか。

宿屋で訊いた場所は、ここで合っているはずだ。周りにもそれらしき店はない。諦めきれずに馬を連れて周辺をうろろろとしてみたが、やはり他に店はない。

おかしいおかしいと首をひねっていたところに、村人と思われる女性の二人組が歩いて来たので訊いてみた。

「ああ、親父さんとこね。確か昼前までは開いてたと思ったんだけど」

「そういや腰が抜けたと嫁さんが」

「そういや、そうだった！ まったく、あの親父さんが腰を抜かすなんてねえ」

「一体なにをしたもんだか」

「それがさあ……」

なんだか話が逸れてきたので、ザックは礼を言ってその場を辞した。

「はあ……辺境ってのはこれだから」

店主が急病では仕方がないとわかっているにもかかわらず、感情がどうにも納

得できない。これまでの疲れがどつと押し寄せたような気がして道ばたの木陰に腰を下ろそうとしたが、なぜか愛馬には気力がみなぎっていた。

行くぞ行くぞと先を急かす元気一杯の馬に引きずられるようにして、不運の騎士・ザカライア・モーブレーはカユテの村を後にしたのだった。

ブース地方のとある田舎貴族に、美しいと評判の娘がいた。

彼女は幼い頃から騎士に憧れ剣を習い、やがては都に上がって騎士になるのだと、そんな夢見る娘だった。

ところが年頃になると、待ち構えたように縁談が持ち込まれた。借金を抱えた親は乗り気だったが、誰が父親と同年の男と結婚などできようか。だが娘の意思をまったく無視して話はどんどん進み、ある日突然、式は一週間後と告げられる。そのあまりにも急な話に娘は怒り、ついに家出してしまう。

意思のない人形のように生きることを強制されるならば、いつそ全てを捨てて別の国で新たな人間として思うままに生きたい。そう決心した娘は、たまたま出会った護衛士に強引に弟子入りを果たし、共に旅することになる。

「　　というのはどうだ？　護衛士なら身分を問われないし、女もまあ、いないこともない。これならそれほど無理がないと思うが」  
「　　凄いい、ラウル！　よく考えつきましたね」

頬を上気させ手を叩いて賞賛され、ラウルは少々気恥ずかしい思いで鼻の脇を掻いた。

「まあ……俺も似たようなものだったからな」

「ええと……ラウルも母上と同じ年の女性から結婚を申し込まれたのですか？」

いかにも気の毒、といった哀れみの眼で見つめられ、慌てて力一杯否定する。

「違う！ 強引に弟子入り、からだ。俺はサリフリの護衛士組合に所属しているからな。弟子を取るなら、そこに登録するのが自然だろっ」

「ラウルは……アクサライ人には見えませんか？」

日に焼けてはいるが、元々は白い肌にくすんだ金の髪、濃い翠の瞳は、どこからみてもアクサライ人ではない。心底不思議そうな顔をするカイルの頭に、ラウルは頬を緩めて手を乗せた。

「ああ、出身はニールだが……師がアクサライ人なんだ。籍を移しても良かったが、そのままになっているな」

国境の砦への最後の急な坂を登り切れれば、残す道のりもあと少し。きらきらと輝く光の欠片は随分と柔らかさを増して、今や後方から弱々しく降り注いでいる。

朱から淡い紫に染まった森の中で、フードの奥の闇色の瞳が真剣な色を宿すのが見て取れた。

「わかりました。わたしは貴方の弟子、ですね？」

「そうだ。このことは絶対に忘れるなよ？ そして誰に訊かれても、本当のことを話してはいけない。今後どんなに親しくなった人間にも、だ」

「はい。そうです。」

北方公路・2（後書き）

11/11 多少手を加えました。



## 国境の砦・オノレ

藍の空に、薄い藤色に染まった雲がたなびいている。

森の中から光の欠片が消えたころ、ラウルとカイルは北方公路の国境を守る、オノレ砦に辿り着いた。

山中に突如として開けた場所に太い古木を従え石造りの大きな門が建ち、そのすぐ向こうに迫り来るのは見渡す限りの絶崖。そして首が痛くなるほど仰向いても頂上が見えないこの山の向こうが、アクサライ王国だ。

巨木の森を抜けると突然視界一杯に広がるまるで山がのしかかり襲ってくるようなこの光景に、大抵の者は眼を丸くする。

前を歩いていた少女も例に漏れず、息を呑んで立ち尽くした。

「ここが、国境……　これからこの山を、越えるんですね」

圧倒され、呆然と呟く声に、くすりと笑みがこぼれ落ちる。

「そんな面倒なことはしない」

え、と振り向いたカイルに、ラウルは前方の砦を親指でちよいと指差した。

「門の向こうに、トンネル隧道がある」

「隧道……？」

「そうだ。だからアクサライまでは、ほんの一刻ほどで抜けられる」

ラウルと砦を交互に見つめ、それから遠大な崖をぐるりと見渡して、カイルは大きく肩を落とした。

「なんだか、騙された感じがします」

「初めて来たヤツは、皆そう言うな」

今夜は砦の中で休ませてもらうぞと、ラウルは笑って促したが

「……高くないですか？」

砦の兵士に向かって、少女は通行料が高いと文句をつけた。

「すまないね、坊や。砦の中で休むには、銅貨1枚、余計にかかるんだ」

「それにしても、ちょっと、これは……」

「高くない」

身分証を返してもらって、ラウルは帝国銅貨5枚を支払った。

「申し訳ない。コイツは少々世間知らずで」

「最初はみんな、そう言いますよ。……お弟子さんですか？」

ラウルよりいくつか年上なのだろうその兵士は目尻に皺を寄せ、まるで小動物を愛でるようにカイルに微笑みかけている。いささか複雑な気持ちになりながら、ラウルは警戒して毛を逆立てた仔猫のようになつた頭に手を乗せた。

「ええ、つい最近弟子にしたばかりで。まだ何も知らないものですから」

「そうですか。……坊や、『特級』の護衛士なんてそうそういないんだぞ？　ちゃんと師匠の言うことは聞いておけよ」  
「……はい」

構い倒したいと顔に大書きした兵士に頭を下げ、二人は砦の門を潜って中に入った。

それぞれに貸与された毛布を持って、宿泊者用の小屋に向かう。警らの途中なのか、行き交う兵士たちはカイルを見ると、皆一様にはじけるような笑顔になった。確かに大きな荷物を背負い、2枚の毛布を両手で抱えてよたよたと背の高い男の後をついてくるさまは微笑ましいことだろう。夜は冷えるし今日はあんだ達しか泊まる人はいないようだから、と言って受付の兵士が1枚多く貸してくれたのだが、どうやらこれが目的だったようだ。辺境の山奥で子供を見かけることなど皆無だろうし、娯楽も乏しいのだろうが本人が気付いたらなんと云うやら。

(……これでも正規軍、のはずだが……)

カイルが追いついてくるのを待って、ラウルは大仰に天を仰いだ。

オノレ砦の門の中は、半円形の広場になっている。

今は厚い木の扉で閉じられていて見えないが、広場を挟んで門の正面に位置する崖に隧道があった。

広場を囲うようにして兵士たちの宿舎、食堂、馬房、倉庫などが並び、崖側の一角に宿泊者用の建物が2つ建てられている。そこは煉瓦造りの小振りの平屋で土間と板間しかないが、板間には囲炉裏が切ってあった。土間で靴を脱いで、一段高くなった板の間で食事

をしたり休んだりするようになっていた。

宿のように個室があるわけでも食事が饗されるわけでもないが、それでもここは山中で夜を明かそうとする旅人達にとって、獣に怯えずに身体を休めることができる唯一の場所だった。

小屋の窓を開けて空気を入れ替え、備え付けの食器と薬缶を洗い、火を熾して湯を沸かす。

とりあえず荷を解いて一息つこうと板の間に入り、薄い座布団の上に腰を下ろしたのだがカイルはまだ納得していなかった。

「……やっぱり、高いですよ」

「高くない。こんな山の中で正規軍の護衛付きで眠れる寝床を銅貨一枚で買えるなら、安いもんだ。それに水も使えるし、火もある」

「でも、わたし一人に帝国銅貨3枚って……」

「それは仕方ないな。通行料が半額になるのは交易商や護衛士、他には医師や魔術士ぐらいだ。それにしただって組合に登録して身分証を持っていないと」

それでも不満を隠そうともせず、カイルはじとり、とラウルをねめつけ、ふう、と溜息をついた。腰に巻いた蓋付きの布の物入れから小さな革袋を取り出すと、中からテネルス銅貨4枚を取り出してそつと差し出してくる。

「……これ、わたしの分の通行料です。ありがとうございました」

革袋をまた丁寧に仕舞って両手で膝を抱え、そこに顎を載せるとカイルはぼそりと呟いた。

「途中、どこかで働かないといけませんね」

「……サリフリに急ぐんじゃないのか？」

「急ぎたいのは山々ですけど……先立つ物がないと、どうしようもありません。おじさんは、これだけあればサリフリまで行けるだろうと仰っていたのですが、ちょっと、足りないと思うのです」

(足りない……?)

ラウルは腰の黒剣を購うのに、武器屋の親父に帝国金貨で7枚と提示された。

手持ちの金が足りずに以前使っていた剣を質草にしまったが、それでも帝国金貨で5枚弱は支払った。

そしてその黒剣は、カイルが武器屋に売った物だ。あの親父がいくらがめついいとはいえ、少なくとも金貨2、3枚はカイルに渡しているはずだ。だから、金が足りないはずなどない、と思っていたのだが 嫌な予感がする。

「おい、その剣を売って 親父からいくら貰った？」

「テネルス銅貨を13枚頂きました」

びき、と頬とこめかみが引きつった。

金貨でもなく、銀貨でもなく、銅貨。しかもテネルスの。帝国銅貨にしてたったの10枚ちよっと。帝国銀貨なら、半枚ほど。

わざわざこんな計算をしなくとも、わかっている。

カイルはタダ同然で、この黒剣を、売ったのだ。

「それだけ、か？」

「はい。わたしは本当に何も持っていなかったのです、この服や荷物全部込みで、残りがこれだけ……」

「そんな襪はくし、全部合わせて銀貨1枚もあれば十分だ！」

わかっていたはずだったのに、忘れていた。コイツは途方もない

世間知らずだ。村を出る前に確認すべきだったのだ。それをむざむざと

「くそっ！ あのじじい……っ！」

怒りのあまり、ラウルは拳を床に打ち付けた。

「……あの、どうぞ」

いまだ腹の虫の治まらないまま腕を組んで黙っていると、おずおずと湯気の立つ茶が差し出された。いかにも趣味の悪い茶器だったが皆の備品では文句も付けられない。

香りだけは良いその茶を手に取り一口含んで、ラウルは眼を見開いた。

「旨い……」

「本当に？ ありがとうございます」

ほっとしたように、カイルがにこりと笑顔を見せた。自分でも一口飲んで、美味しい、と満足そうだ。

「どうしたんだ？ この茶葉は」

「おじさんから頂いた荷物に、入ってました」

「武器屋（ぶきや）がそんな上等な茶葉を扱うとは思えんが……」

「ええと、お茶は……これですね」

差し出された茶葉は湿気ないようにと缶に入った、ラウルも良く知っているごくありふれた物だった。

それが淹れ方一つでこんなに味が変わるとは、茶というものは侮れない。

感心しながらまた一口飲んでみると、カイルが小さくなって頂垂れていた。

「すみませんでした」

「……なにが？」

「お金が……足りなかったようで。内訳を、ちゃんと訊いておけば良かったのですよね」

「いや、これは俺の落ち度だ。気にするな」

「ですが、やはり足りないでしょう？」

結局、武器屋の親父が「駄賃」として置いて行った革袋の中身も全て銅貨だった。

カユテの村を出る時に宿屋に銀貨1枚を置いてきたので、現在の手持ちはラウルのテネルス銀貨が4枚、銅貨が18枚、帝国銅貨が7枚に、カイルのテネルス銅貨が9枚だけだ。

サリフリまでは節約すれば行けないこともないだろうが、着いた途端に文無しになる可能性が高い。

「わたし、ちゃんとお返ししますから……」

すっかりしょげかえったカイルを見て、腹立たしい気持ちもどうにか治まってきた。

「心配するな。どうせ使い道もなかった金だ。まあ、ルツカレ辺りで？」

不意に、外が騒がしくなった。

馬のいななきと、兵士たちの怒鳴り声。

何事かとしばらく耳を澄ませてみたが、それきり静かになってしまった。

「なにかあったのでしょうか……?」

「わからんが、念のため」

外套を、と言いかけたところで、どこどかと近づいてくる足音が聞こえてきた。

「カイル!」

「はいっ」

カイルが身をよじって外套を手を取ったと同時に、無情にも扉が開く。

「邪魔するぜえー」

入ってくるなりそう言って、ぱたりと板間に倒れ込んだのは熊のような男だった。



大きな荷物と毛布を板間に放り投げると、無精髭をまだらに生やした熊のような男は仰向けにごろりと転がった。

「あー、つつかれた！」

「「……………」」

「……………」

足だけを土間に置いて両手を大きく広げ、板間で大の字になった男はぎよろりと視線だけを先客の二人に向ける。

「……………あのさ、なんか言つてよ。俺、馬鹿みてえじゃね？」

「「こ、こんばんは……………」？」

「「こんばんは」

「……………」

「……………」

「「つかー！ これだから田舎者は！」

両手で栗色の頭をかき回し、男はよつと声を出して起き上がった。毛を逆立てた仔猫そのままに、びくりと身をすくませたカイルがラウルの背に隠れてそつと顔をのぞかせる。

「取って食ったりしねえって」

にか、と目元に皺を寄せて笑った男は長靴ブーツを脱いで剣を外し、ラウルの正面に胡座をかくと片手を軽く上げた。

「ザックです。一晩よろしく！」

(……何者だ?)

生成りのシャツに色あせた緑の胴衣、濃い茶の上着に下履き剣を佩いていることを除けばごく普通の「どこにでもいそうな男」だ。だが身のこなしに隙が無い上に、このザックと名乗った男はそれとなく二人の様子を伺っていた。

カイルを狙っているならばこちらでも対処しなければならないが、国境砦の中では、できることは限られてくる。

(よりもよって、こんなところで )

下手を打ちたくないのだが、はたしてこの子はそれを理解しているだろうか。

余計なことは口にしてくれるな、と祈るような気持ちでラウルは姿勢を正して座り直した。

「私はラウル、護衛士で……こっちが弟子の  
「カイル、といいます」

胡座をかいて座っているラウルの背中で膝立ちになり、その肩に両手を添えカイルはぴよこりと頭を下げた。

「……ぶふっ！」

その様子を見るなり男はおかしそうに吹き出した。

「りよ、猟犬の後ろにくつついてる仔猫……っ」

兵士たちの例え通りだ。

砦の門が閉まる時刻ぎりぎりに駆け込んだのでさんざん文句を言われたが、火急の用だと騎士証を見せて無理矢理押し通った。

その際に子供がいるから静かにしろだの怯えさせるな脅かすなど注文をつけられたので、興味を引かれてこちらにきてみれば、思いもかけない「掘り出し物」がいるではないか。

いかにも有り合わせの古着といった丈の合わない襷袢を纏っているが、この辺境には似つかわしくもない艶やかな黒髪の、輝くばかりに美しい たぶん、きつと、ほぼ……女、というよりは、少女。なるほどこれはハーシユが「一度見たら忘れられない」と口にするのも良くわかる、類い稀な美貌だ。

まだ「例の女」と確定したわけではないが、ザックが小屋の扉を開けたとき顔を隠そうとでもいうのだろうか、この暖かい室内で外套を手にして固まっていた。後ろ暗いことがある証拠だ。

聞いた通りの美貌に短い黒髪、男装　　こんな「偶然」がどこにある？

（　　しかも『カイル』だと！）

こみあげてくる笑いが止まらない。

瞳の色は違うがそんなもの、魔術でいくらでも色を変えることができる。

厄介なのは、また「転送陣」とやらで逃げられることだが、その前に薬で眠らせてしまえば問題ない。

護衛士がいたのは意外だったが、それも皆内でならどうとでもなる。

（ついだと思っていたが、のこのこ向こうから出てきてくれるとは！）

少なくともここでは下手な身動きは取れないだろう。

ころりと手のひらに転がり落ちてきた幸運と、なにも知らずに小動物のように首を傾げる女……というよりむしろ少女の様子に、ザツクの笑いはますます止まらなくなつた。

笑い転げる男を見て苦々しい顔をしたラウルとは対照的に、興味津々といったように男を眺めていたカイルはひとつ頷くと、また茶を入れ始めた。

悪趣味な茶器をひとつ加え、3人分の茶を用意してそれぞれに配る。

「あの、騎士さま……お茶をどうぞ」

器に手を伸ばした男二人の動きがぴたりと止まつた。

だがそれも一瞬のことで、一人は素知らぬ顔で茶を啜り、もう一人は大仰に手を叩いた。

「お、おおー？ 気が利くな、坊主！」

音を立てて茶を啜つた男は、動揺を完璧には隠し切れていなかった。

( やはり、騎士か )

「こりゃ、うめえ!」

茶葉はなんだとか、どうやって淹れたのだとか、ザックと名乗った男は、言い逃れるかのようにカイルに尋ねている。

( 一体、なにを探っている? )

ラウルのその冷ややかな視線に誤摩化せないと踏んだのか、ちらりと視線をよこすと男はあっさり騎士であることを認めた。

「それにしても、よく俺が騎士だってわかったな?」

「その剣の紋章が……葡萄の葉が太陽を守っていますよね」

にこ、と微笑んでカイルが示したのは、ザックの剣だった。

剣の柄頭に彫られている太陽の紋章が、葡萄の葉で縁取られてい

る。  
これはアルトローラ帝国皇祖の「葡萄の蔓で覆われし、光輝く卵から生じた」という伝説に由来するもので、皇家に忠誠を捧げた騎士が好んで用いる意匠だった。

誰が最初に考えたものか、皇家を守る葡萄の葉たらんという本人の決意を表したもので、公に認められたものではない。また、それを言いふらすような者もないため、この意匠の意味を知ることとは身近にそいつった騎士がいることをも示していた。

ザックの瞳に再び探るような光が宿る。が、口調はあくまで軽かった。

「お? 詳しいな。誰に訊いた?」

「葡萄は美味しいですから!」

「……は？」

にこにこ満面の笑みを浮かべ、両手を合わせて少女は力一杯宣言した。

「赤い葡萄も美味しいのですが、わたしは、緑色の方が好きなのです」

「要するに、腹が減ったということだな？」

「……へ？」

「凄い！ ラウル、良くわかりましたね」

カイルが喜び、渋面のラウルが頷く。

そこではザックの理解できない会話が、勝手に進んでいた。

「そろそろ食事にしよう」

「俺……ぜんっぜん意味わかんねえ……」

「それが普通だ。……俺もわからん」

「えー、あんた今、普通に会話して」

「……勘だ」

高度な暗号かとも思ったが、どうやらそうでもないらしい。

理解できないのも当然、と睨むような顔で慰められても、ザックはまったく嬉しくなかった。

## 帝国の騎士・2

カイルの担いできた荷袋からは、油紙に包まれた料理が次々に出てきた。

大量の鳥唐揚げカナトに羊肉、温野菜。ハムに腸詰め、パンにチーズ、オレンジ、干し無花果。

料理は全て、そのまますぐに食べられるようにと木製の串に刺さっており、カユテ村の宿「銀の鎖亭」の暖かい気遣いを感じられた。これらの料理を見たカイルは感動のあまりしばし言葉を失い、騎士も一人で運んだのだと聞くとなかなかやるじゃねえの、と感心したようだった。

「こりゃあまた、随分と美味そうだな……」

早く食おうぜ、と急かす騎士の前から、ラウルは料理を遠ざけた。

「あんたは騎士だろう？ 宿舎の方で食事が出るんじゃないのか」「あ、突然押し掛けてきたから、用意してねえって言われた。当然そうなると踏んでたからな、ちゃんと準備してきたし」

勿論、これは嘘である。

兵の宿舎に行けば、少なくとも隊長と同程度の食事は出されるはずだ。

だがここを離れるつもりなど、ザックには欠片もなかった。この護衛士も油断がならないが、それ以上にカイルと名乗るこの子供の得体が知れなかった。天才魔術師たるハーシユを出し抜いたことといい、先ほどの切り返しといい、馬鹿なのかそうでないのか、全く

つかみどころがないのだ。そしてそれ以上に「例の女」であるという、確たる証拠が欲しかった。

このまま国境を越えてアクサライに抜けてしまえば帝国の威光も意味をなさなくなってしまう。だからその前、今夜のうちに片を付けたい。

「騎士つつつてもな、これでなかなか大変なのよー」

ほら見るよ、とザックは自分の包みを開けてみせた。

パンとチーズとハムが少々に、オレンジが1個。軽食と言ってもいいような、いかにも佻しい品数だ。

座布団の上に両足を折り曲げて座り、膝の上に手を乗せじっとそれを覗いていたカイルだったがそれはそれは美しい笑みを浮かべて顔を上げ、首をわずかに傾けた。

「それでは騎士さま、一緒に食事をいかがですか？」

「お？ いいねえ」

騎士の方はひどく嬉しそうな顔をしたが、これまで見たこともない、その作り物じみた笑みがラウルにはひっかかった。

(なにか 企んでいるな)

きっと碌でもないことに違いない、そんな予感がしたのだが、やはりそれは間違っていないかった。

「もちろん、食事代は頂きますよ？」

「……金、取んの？」

「ここまで運んだ手間賃も弾んでくださいね？」

「……あのさ、袖振り合うも他生の縁って、知ってる？」



「今、わたしには、振る袖がないのです！」

右手を握りしめたカイルにずっと笑顔のまま迫られて、流石の騎士もたじろいだ。頬をひくつかせ、胡座をかいたままずると尻を引き摺りながら這ってきて、ラウルの方に顔をわずかに傾けほそりと囁く。

「……随分すっかりしてんのな、あんたの弟子って」

「……いや、なんというか……申し訳ない」

ラウルはそつと視線を逸らした。そして今更ながらに思い知る。

( 子供の前で、金の話をしてはいけない )

高えよ、と文句を言いながらも、騎士は帝国銅貨3枚を支払った。どこで覚えてきたのか「そのぶん、サービスしますね」とカイルはほくほく嬉しそうだ。

一体どんな「サービス」をするつもりだ、とラウルは口をへの字に曲げた。

早く食事に使いたいだけなのか、それとも「サービス」の一環なのか、カイルは率先してラウルの指示に従っている。料理を大皿に盛って小分けの皿を配り、果物も綺麗に盛りつけた。相変わらず備品の皿は悪趣味だったが、それでもこれだけ揃うと統一感まで出てきて面白い。

「炭が少し、足りませんね」

土間で炭入れを覗いていたカイルが、困ったように振り返った。串を炙るための炭を持つてくるよう言ったのだが、箱の中には小さな炭が1本しか入っていなかったのだ。

囲炉裏に串焼き用の網をかけながら、ラウルはちらりと騎士を見た。だが男は「俺、客だもーん」と言っただけにやにや笑っただけで、動く気配は微塵も見せない。

「わたし、貰ってきます。ええと、明かりがついている建物に行つて聞いてみれば良いですよ。」

砦の中とはいえ、すでに外は真っ暗だ。子供を一人で外に出す時間ではない。カイルをこの騎士と二人にするのは心配だったが無茶をできないのは、お互い様だ。

すぐに戻ってくれば良い、ラウルはそう判断し、靴を履こうと板間のふちに腰掛けたカイルの隣に腰を下ろした。

「いや、俺が行く。ついでに水も汲んでくるから……とりあえず先に始めててくれ。肉は強火の遠火で、脂が浮いたら裏返す。いいな？」

それと、と騎士から見えないようにカイルの耳元に口を寄せ、ラウルはそつと囁いた。

「……忘れてないな？ 余計なことは喋るなよ？」

「はい。大丈夫です」

カイルは深い翠の瞳をじっと見つめると、ひとつ小さく頷いた。

囲炉裏の前で膝に手を添えて座り、少女は小さな炎で炙られている串を真剣な眼差しで見つめていた。

アラバスター  
雪花石膏のように透き通って滑らかな頬は、熱に煽られほんのりと、いかにも健康的な色に染まっている。濡れたように艶やかな黒髪と長い睫毛に縁取られた闇色の瞳は炎を弾き煌めいて、まるで天の星を封じたかのようにだ。

（黙って座ってれば、絶世の美少女、と言ってもいいかもなあ）

ひたむきに肉の串を見つめるその様は、まるで

（まるで……なんだ？）

騎士は一度、頭を振った。その一瞬、誰かの顔が脳裏をよぎった気がしたが思い出せない。

いや、とザックはもう一度頭を振った。そんなことよりも。

厄介な護衛士が出て行った絶好の機会だ。巧い具合にこの少女から、確たる証拠を引き出さなければならぬ。

胡座を崩してごろりと横になり、左手で頭を支える。右手で背中を掻きながら、ザックは少女の様子をうかがった。

「なあ……カイルって言ったっけ？」

「はい」

「これから、どこに行くんだ？」

「サリフリです。……護衛士の、登録をしますから」

「なんだあ？ 坊主、護衛士になりたいのか」

「はい」

串をじつと見つめたまま、カイルは律儀に返事をする。  
あまりにも素直なその様子に、思わず口から笑みが漏れた。

(余計なことは喋るなって、言われてんのにな)

かなり潜められた声だったが、護衛士の声は聞こえていた。  
ふん、と鼻を鳴らしてザックは小屋の扉に目をやった。

娯楽の乏しい辺境のこと、ここらの人間は毛色の変わったものを  
構わずにはいられないらしい。どれだけあの護衛士が睨んでも、兵  
どもはひるむことなどないだろう。当初はなんと迷惑な奴らだと煩  
わしく感じたものだが、今はこれほど心強いものもない。

まだ十分に時間はある。ゆっくりと確実に、追いつめてゆけ  
ば良い。

「へえ、護衛士、ねえ……女なのに？」

「……はい」

「ふーん？」

少女はちら、と視線を向けたが、またすぐ串を見守る作業に入っ  
た。女と見破られても、焦りもしないし驚く様子もない。想定済だ  
というように、ただじつと静かに肉に脂が浮くのを待っている。

自分が被害者だから、追われているとは思ってもみないのか、と  
ザックは嗤った。

この少女が「例の女」なのだとしたら、馬鹿としか言いようがな  
い。

世界で只一人、唯一無二の術を持ちながら、こんな辺境で地を這

い泥にまみれ、護衛士などになると言う。

(……ありえねえ。『愚か者』って言葉がぴったりだ)

ハーシユから「逃げた」のは10日以上も前になる。その間にさつさと帝国から出てしまえばこうして捜索の手も及ばずに、その術でもって遙か高みにまで上り詰めることができたはずなのに。

真実「あの事件」の被害者だということのなら、まずは警備隊に保護を求めるはずだ。それをしないということは、「できない」理由があるのだろう。

例えばそう、帝国に仇なすような、そんな理由が。

ザックの口元が弧を描き、濡れた土色の瞳が怪しい輝きを帯び始めた。

「なんでサリフリなわけ？ 随分と遠いじゃねえの」

「……ラウルが、向こうの組合に所属しているそうですから……それで」

「じゃあ……魔術で行こうとは思わんの？」

「魔術、ですか？」

「そ。それで一気にサリフリまで」

魔術、と聞いて振り向いた少女が、くすりと笑った。

ふ、と身体から力を抜くと向きを変え、足を横に流して座り直す。だらしなく横になった騎士に向かって柔らかな笑みを浮かべ、子供に道理を言い聞かせるようにカイルはゆっくりと語りかける。

「そんな魔術、ありませんよ？」

「……へーえ？」

「そうですね、空を飛ぶことはできるでしょうけれど……遠く離れた場所に一足飛び、というのは無理だと思います」

「……なんで？」

「物には質量があるでしょう？」

「シツリヨウ？」

聞いたこともない言葉だ。

先ほどのように混乱させる言葉でもって煙に撒くつもりかと訝しみ、肘について身体を起こしたザックに対し、カイルは身振り手振りを交えて必死になって説明し始めた。

「なんと言ったら良いでしょうか……ええと、例えばこんな、大きな丸太があったとします。それを持って運ぶのは、重くてとても大変です。ですが、水の中に入れると軽くなったように感じますよね？」

「まあ……そうだな」

「重さが変わったような気がしますが、丸太は丸太のままなので、質量に変わりはありません。……と、厳密には違いますが、つまり、そういうことなのです」

「あー……さっぱりわからんなー」

「うう……そうですね……」

カイルは溜息をつくと面白いほどに頂垂れ肩を落とし、そして拗ねた。

膝を抱えてころん、と後ろに転がりザックの方を向いてぱたりと横になる。頬にかかる髪も払わずに、口をとがらせ半身を起こした騎士を見上げると、言い訳のように呟いた。

「こついつお話は、わたしよりも兄の方が上手かったです」

「なんだおまえ、兄ちゃんがいるんだ？」

「はい！ わたしの兄は」

不用意に吐いたこの言葉を、ザックは死ぬほど後悔した。  
途端に元気になったカイルはがば、と身を起こし、それから延々と、喜々として兄自慢を始めたのだ。

最初は相槌を打っていたザックもやがて、留まる所を知らない話に嫌気がさしてきた。

「兄はなんでも知っていて、それはもう」

「待て待て、ちょーっと、待て。な？ おまえ、魔術士？」

「わたし、魔術が使いません」

「じゃー、なんでそんな詳しいの」

「兄が話してくれました」

「……兄ちゃん、か」

「はい」

それでね、とまた始まりかけた兄自慢をザックは力一杯遮った。  
不満げに少女は口を噤んだが、次の言葉にぱちりと瞳を瞬かせた。

「俺の知り合いでさ、そういう話が好きな奴がいてな。イエーツに居るんだけどよ？ なあ……会ってみねえ？」

「……………」

闇色の瞳が揺れている。話したい、けれど、とその心情が手に取るようにわかってザックは可笑しくなる。

自ら帝都に行くといえば、あの護衛士も文句は言えないだろう。  
そうなれば良いと願ったが、少女は誘惑を振り切ったようだ。ふるふると頭を振り、胸の前で両手を合わせ、決意を秘めた眼でまっすぐにザックを見つめてきた。

「すみません、わたしはまずサリフリに行かなければ……でも用事が済んだら、是非その方にはお会いしたいですね」

「……その用事って、なに？」  
「ひ・み・つ、です」

唇に人差し指を当て、うふ、と少女は微笑んだ。  
その様子は大層愛らしいものだったが　おい、と追求しかけて、  
ザックは言葉を飲み込んだ。

(こつもあつさりボロを出されると、それはそれで……困る)

自分は魔術士ではないと言い、そのくせやたらと魔術に造詣が深い。宮廷魔術師とも対等に議論できるような、そんな感じさえする。さらに護衛士になるためサリフリに向かうと言っておきながら、本当の目的は「ひ・み・つ」

(だからあの護衛士は『喋るな』って言ったんじゃないやねえの)

栗色の頭を右手でかき回し、ザックは仰向けに転がった。

この少女が「例の女」なのか、わからなくなってきた。

このまま拘束することは簡単だ。

拘束して、兵に命じて帝都まで移送すれば良い。それだけの権限が自分にはある。

だが、ザックは決断できなかった。

少女の言葉が、その表情が、ひどく胸をざわめかせる。

「イエーツには、一度行きたいと思っています。兄の……兄のお墓が、そこにあるから……」

両手を胸に当て、祈るように少女は俯いた。

それから顔を上げると遠くを見ようとすると、わすかに  
眼をすがめて言葉を紡ぐ。



彼方にある言葉を手繰り寄せ、啓示を受けた神子のように、ゆっくりと静かに流れる言葉はまるで天上の音楽のように静謐で、神々しい。

「昔、兄が言っていました。 時を遡ることができないように、空間という壁もまた、越えられないものなのだ。人は、時間と空間の軛くわから、逃れることはできないのだから」

少女はまた、瞳を伏せた。固く握りしめられた上着の胸元には皺が寄り、白い手はかすかに震えてさえいる。

なにかを悔いるように、酷く辛そうに、強く目蓋が閉じられた。白くなるまで引き結ばれた唇がやがて解れると、囁くような言葉がこぼれでる。

「時間を戻す、そんな魔術があつたら良いのに。そうしたら……」

その先は消え入るように空気に溶けて、ザツクの耳には届かなかった。

ぱちり、と囲炉裏で炭が爆ぜた。

小屋の中には苦しいほどの沈黙が満ちている。

床にぺたりと座り込み、背中を丸めて胸に手を抱き込んだ少女はあまりにも痛々しくて、見ている方が辛くなる。ザックは身を起すそつと手を伸ばした。

「……泣くなよ……な？」

固く無骨な指で傷つけないよう、ゆつくりとその滑らかな頬に指を滑らせる。少女が逃げないことを良いことに、しっとり柔らかい肌に張り付いた黒髪の一房を、耳の後ろに梳いてやった。

カイルは大人しく身を任せ、大きな手のひらにすり寄るような気配すらみせた。ひやりとした頬に温もりが移るころ、影を落としていた睫毛が震え、煌めく瞳が顔を出す。

色を取り戻して紅くふつくらとした唇が、縋るような音色で男を呼んだ。

「騎士さま……」

切なく訴える闇色の瞳に射抜かれて、不意に男の胸がざわめいた。少しぐらいなら、許されるだろうよ

何が許されるのか、何に許しを乞っているのか意識もせず、ザックは呼ばれるまま、もう片方の腕を少女の背中に回すとその小さな身体を壊さぬようにそつと力を込めた。

切なく揺れる黒い瞳が近づいてくる。警戒の色など欠片も見当た

らない無垢な瞳が可笑しくて、ぎこちなく口元が歪んだ。確かにこれは、「一度見たら忘れられない」イキモノだ。

呼んだのは、コイツの方だ。

ザックの口元が、わずかに引き上がった。

(まったくどうなっている！ ここの兵どもは！)

ラウルのはらわたは煮えくり返っていた。

炭を貰いに行っただけなのに、なぜこんなに時間がかかるのだ。

「足りませんでしたか？ すみませんねえ」

兵舎の扉を叩き、炭がほとんど無いことを告げるとそう言っただけで食堂に案内された。そこまではまあ良い。

だがそれからが問題だった。

今すぐ持つてきますからまあまあどうぞ、と強引に椅子に座らせられ、なぜか茶まで出された拳げ匂、兵どもに周りを取り囲まれて強引に「オノレ砦謹製陶器」の感想まで求められた。たかが一介の護衛士に奴らはなにを求めているのか、まったく理解できない。

果ては「毛布は足りてますか？」「お子さんはお幾つですか？」

「お菓子は何が好きですか？」「馬に触ってみませんか？」などと自分の子供ではないと言っているのに一向に聞きやしない。無理矢理菓子を持たされて上着のポケットは膨れたが、どう考えても明日そのツケが廻ってくる。

やっと解放されて追加の炭を貰い、水を汲んで小屋から漏れるほのかな明かりを見た時は、やっと帰ってこれたと胸が熱くなったも

のだ。

水の入った桶を足下に置き、扉を開けようと取っ手を引く。やや重い扉は一度引いただけでは開かず、もう一度強く引くことでやっとラウルを迎え入れた。

「遅くなっ……………」

「…………ラウルっ！」

小屋の中に足を踏み入れた途端、どん、と黒い塊が胸に飛び込んできた。それは胸の下辺りにしがみつき、ぐいぐいと身体を押し付けてくる。

いったい何の遊びだ、と目線を落とすと髪を乱した小さな身体が、ふるふると震えていた。

「？」

咄嗟に抱き込んで頬に手を当て顔を上げさせようとしたが、少女は首を振って嫌がった。だがラウルの手のひらは、そこに濡れた感触を伝えている。

泣いて、いる？

小脇に抱えていた箱が足下に落ち、中から炭が散らばった。足が桶にぶつかり水がこぼれた感触があったが、娘の涙の前にそんなことは一切どうでも良くなった。

何故、どうして、何があった？

夕べはこぼれなかった涙が、なぜ堰を切ったようにあふれている？  
艶やかな黒髪が、こんなにも乱れて

「…………貴様……………」

落ち着け、と頭のどこかで声がした。しかし囲炉裏の向こうで中腰になった男を見た瞬間、綺麗さっぱり消え失せた。

怒りのあまり、目の前が赤く染まる。

しがみつくとカイルを庇うように身体の向きを変え、男の一挙一動も見逃すまいと肩越しにしかと見据える。そしてザックと名乗ったあの騎士の、どんな動きにも対応できるように身体中に神経を張り巡らせた。

「待てよ、旦那。落ち着こうぜ」

「……何をした……？」

へらへらと笑いながら、騎士はそろりと腰を浮かせた。

その動きに合わせてカイルを背に押しやり、ラウルは重心をわずかに落とす。

騎士はあからさまに肩の力を抜いて両手を広げたが、そこに全く隙はない。たとえ何が起きても対応できるとそんな自信が感じられた。

「おいおい……だから、落ち着けって」

「……つく」

「ええい、おまえも泣くな！」

背後で、しゃくり上げる声があった。

ずっと涙をこらえていたこの娘が、口も利けないほどに泣いている。ラウルの背にしがみついて、声を殺して嗚咽を漏らし、小刻みに震えてすらいるではないか。

この娘が、どれほど「泣く」ことを我慢していたと思っているのだ。

それを「泣くな」などと、随分と簡単に言ってくれる。

「泣かせたのは、お前だろっ……?」

「え? ……違う、誤解だつて!」

「誤解なものか。俺のいない間に、こいつに何を」

「ふっ……く」

「待てよおっさん! 話を聞け!」

「……これのどこに、話だけの余地がある?」

ラウルの口元に、うつすらと笑みらしきものが浮かぶ。

その様子に騎士は頬を引きつらせ、じり、と一步後退した。騎士が下がった分だけラウルは間を詰め、二人の間の空気がじわりと密度を増してゆく。

「あーあー、あー! だから落ち着け! 暴力反対!」

「ラウ、……ルっ」

「これを見る!」

涙声に気が逸れた一瞬の隙をつき、騎士は囲炉裏に素早く手を伸ばすと串のようなものを手に取って突き出した。

串に刺さった肉を見事なまでに再現した、どこまでも光を吸い込む真っ黒な、それは 炭。

どう見ても、炭だった。

うつと声を詰まらせ、カイルはまた背中からラウルにしがみついた。とん、と頭が背に当たる感触がして、絞り出すような声が響いてくる。

「お、にくがっ……!」

「……にく……?」

にく、とは「肉」のことだろうか。その肉がいたいどうした。

訊こうにも腹に回された手は解けず、それどころかますます力が込められる。握りしめられた白い拳を両手で覆って摩ってやると、ひっく、と息をついたカイルがしゃくり上げながらもやっこのことで言葉を絞り出した。

「メレク、おばさん、のっ……鶏唐揚げカネトがつ！」

ここから先は言葉にならず、少女は大きな背中に顔を埋めて泣きじゃくり、背中を取られたラウルは動くこともままならず立ち尽くし、一人ザツクが大きく安堵の息を吐いた。

護衛士が、無言で肉の刺さった串を炙っている。

その後ろでは手布を顔に当てた少女が座り込み、ひつくひつくとべそをかいていた。

一方騎士は炭になった串を手にとって、矯めつ眇めつ眺めていた。「元」が本物であるから当然とはいえ、ふつくらとした形をそのまま残して炭となった肉は、炭になっても旨そうだ。衣に混ぜられた香辛料のざらざらとした質感、鳥皮がめくられて丸まったさまはおろか、肉の繊維の一本一本までが精密に再現されており、焦げて黒く縮んだ肉とは明らかに違っている。

「……これも一種の『才能』ってヤツだよなあ」

ついそんな声が漏れてしまったら、冷たい眼で護衛士に睨まれた。少女の方も、またじわりと目に涙を溜めて、今にも溢れそうになっっている。

「いや、すまん！……もう泣くなよ、な、な？」

そんなつもりでは無かったのだと両手を合わせて何度も頭を下げながら、ザックは荷物に入れてきたあるモノを思い出した。

子供に効くのは古今東西やはりこれ、といそいそ荷を手繰り寄せ、中から拳ほどの紙の包みを取り出して、少女の前にそつと差し出す。

「な？ これをやるから、もう泣くんじゃねえぞ？」



膝の前に置かれた包みに眼を落とし、カイルはひとつ瞬くと、不思議そうにザックを見上げた。

瞬いた拍子に涙がほろりと零れたが、それが最後の一粒だった。今はただ男の意思を計りかねているだけのようだ。

「騎士さま……？」

両手で握りしめた手布を口に当て、眼の周りと鼻の頭を赤く染めて首をかしげるその仕草は、少女をひどく幼く見せる。

つい先ほどはもっと大人びて見えたのに、同じ台詞でもこうも印象が違ってくるものかとザックは可笑しくなってきた。

「騎士さま……」

衝動に突き動かされるように引き寄せた身体は暖かく、そして柔らかかった。

切なく揺れる黒い瞳が徐々に大きくなり、やがて視界一杯に広がった夜の闇は一度ばかりと瞬いた。

重そうな睫毛だ、と感心して見ていたら、闇はまたばかりと瞬き訴えた。

「騎士さま……お肉を、裏返してもいいでしょうか？」

「……にく……？」

「はい。良い匂いがしてきました」

唐突に肉、と言われ、少女の頬に添えられた手のひらがびくりと

動く。

先ほどから囲炉裏ではちぱちと音がするのは、肉から落ちた脂が跳ねているせいかな。

今更ながらに己の格好に気が付いて、いささか居たたまれない気持ちになつた。中腰になつて少女を腕の中に囲い込むなど、これではまるで無抵抗な小動物に襲いかかる、熊そのものではないか。

ザックはゆつくりと背中中に回した腕を外す。取り繕うような笑みを張り付かせて少女と視線を合わせれば、煌めく黒い瞳の奥できゆうと切なく腹が鳴つた。

(そついや、腹が減つたつて……なんだかなあ)

これまでの疲れがどつと押し寄せてきたような気がして、ザックは目の前の黒髪を無造作にかき回すと囲炉裏の方に目を向けた。

「……確かに腹あ、減つたよな……」

「はい……とても」

頭を鳥の巣のようにされて、一瞬ぼかんとしたカイルだったが至極真面目な顔で頷いた。

己の身に何が起きようとしていたか、全くわかっていないその様子にザックはほつと胸を撫で下ろしたが、少々残念な気がしないでもない。

「脂、浮いてるなー」

「では、裏返してもいいですか？」

「おうよ、やってくれ」

逸る気持ちが抑えきれないのか、乱された髪をまともに整えもせずカイルは両手をぎゅ、と握りしめ、いそいそと囲炉裏の前に座り

直した。

「……それでは」

ひとつつ宣言して、そろそろと右手を串に伸ばす。そして白い指が串を握り込んだ瞬間、それは起きた。

ぽふん

気の抜けた音と共に白い蒸気が上がり、一瞬のうちに串は食物とは別の物体に変化した。カイルは呆然と、右手に持ったモノを見つめている。

「……ええ？ ……どう、して……？」

それは、細部まで実に良く再現された、肉の形をした炭だった。

カイルは右手の「炭」と網に乗った肉を何度か交互に見比べた。そして眼にくつと力を入れ、新たな串を返そうと、今度は左手を素早く繰り出した。

ぽふん

手が触れた瞬間、またしても軽やかな音と共に蒸気が上がり、少女の手にはやはり精巧な炭が残った。

「おい……？」

かつては肉だった炭を両手に持ったきり動かなくなった少女を訝

しみ、膝をついて顔を覗き込んだところでザックはぎよつと身を引いた。

大きな黒い瞳から、大粒の涙が溢れ出ていた。頬をつたった涙はぱたぱたと音を立てて膝に落ちてゆく。後から後から湧き出る涙は、少女の下衣に大きな染みを作りながら広がった。

「……………」

「おい、ここで泣くのかよ……………」

マズい。

これは非常に宜しくない。

いくら兵が足止めをしていると言っても限度があるというものだ。もうそろそろ、あの護衛士が戻ってきてしまふ。戻ってきて、この泣き顔など見たらいったいどうなる？

ザックの背中を、ひやりとした汗が伝い落ちた。

ここはなんと少しでも泣き止ませなければ。

「おい、泣くなよ。……………な、な？」

入り口の方で音がしたのは、少女を慰めようと手を伸ばしたその時だった。

ひいつ、と咄嗟に声をあげなかったその時の自分を褒めてやりたい。だがその一瞬の隙について、カイルは串を囲炉裏に投げ出すと、護衛士の胸に飛び込んで行ったのだ。

たかが串2本のことで、あやうく殺し合いになるところだった。そうならなかったのは、ひとえに運が良かっただけ。あの殺気は本物だったし、もし大事になっていれば、お互い無事では済まなかっただろう。

(このおっさん、中々やりやがるしな)

伊達に護衛士などしていない、ということか。

今も熱心に肉を炙っているように見えるが、意識はずっとこちらに向けたまま、何かあれば直ぐに動けるようにとずっと気を張っている。それすら注意深く窺わなければわからなかっただろう。

(……こーいう子供を持つと、大変だねえ、『おとーさん』は)

「物」が突然変化する　このような奇妙な事例を、ザックは良く知っていた。

それは年若い上司であるハーシユ・ラスンが満足に言葉も喋れなような幼児であったころ、度々見かけた光景だった。

幼児の興味を引くもの　やはり菓子が多かった　を持たせて火のそばに連れて行けばそれは一瞬で見事な炭になり、また水の近くに歩み寄れば、湿気るを通り越してどろどろに溶け落ちた。菓子を手にして上機嫌だったハーシユは突然の出来事に当然のように大泣きし、それと知っていて連れ回したザックはこっぴどく叱られたものだ。だがその頃はザック自身もじゅうぶんに子供であったため、懲りずに様々なものをハーシユに与えては、主に炭を作って喜んでいた。

後にハーシユはこの現象について、自分の扱える魔力を制御できなかったせいだと言っていたが、カイルのこれも、同じことではないだろうか。

(才能はあるんだろうよ。だが、使い方がわからんってところか?)

やはりこの少女は「例の女」でないのだろうか。あるいは本物だったとして、偶然「転送陣」を起動したか

取りあえず、今回は報告だけに止めておこう。目的地は同じなのだ。ハーシユの意見を聞いてからでも遅くない。

そうと決めたザックは、にか、と笑って紙の包みを指差した。

「まあ、開けてみるよ」

「はい……」

両手で持った手布をきちんと仕舞い、少女は丁寧に紙の包みを開けて、眼を丸く見開いた。

赤、緑、紫、橙、黄……包まれていたのは、色とりどりの丸い飴だったのだ。

「……これ」

「どうだ、美味そうだろう？ 都でも評判の店で買ってきたんだ」

「でも、騎士さまの分は……？」

「俺は大人だからな。別に無くても平気だ」

「わたしも、大人ですよ？」

「嘘をつけ！」

小さな額を指で小突けば少女は口を尖らせた。だが直ぐに口元は笑みを浮かべ、眩しいものを見るように、眼を細めて手元を覗く。

「本当に、良いのですか？」

「ああ、漢に二言は無い！ ちなみにな、葡萄味は紫だ」

「ありがとうございます……！！」

萎れていた花が生き返ったように、少女は華やいで礼を言った。

それは胸がじわりと暖かくなるような、そんな満面の笑みだった。

親しみを込めて「おじさん」と呼んでやれ。その方が親父も喜ぶ。

カユテ村の武器屋を出る時に、確かにそう知恵をつけた。

それがどうやらカイルの中では「『おじさん』と呼ばば相手は喜ぶ」と変換されたらしい。

今もそうだ。

感謝の気持ちに加えて相手を喜ばそうと、ただそれだけの純粹な気持ちで悪気など全くないはずだった。

飴を貰って途端に機嫌を直したカイルは、最大限の感謝を込めて騎士に向かってこうのたまったのだ。

「ありがとうございます、おじさん！」

その言葉に、ザックは笑顔を張り付かせたまま、ぴしりと見事に固まった。

「……カイル、そういうときは『お兄さん』だ」

「そうですか？ ……だってお髭が」

凍ったように動かなくなった騎士を心底不思議そうに眺めつつ、少女は冷静に指摘した。

ラウルは炙った肉を皿に盛り、カイルに向かって座り直した。こういう時にはきちんと教えておかないといけない。確かに武器屋の親父は髭を生やしていたが、それが「おじさん」と「お兄さん」の違いではないのだ。

「若くても、髭は生える」

「ええ？ でも、ラウルは……」

「俺はそれほど濃くないし、色が目立たないだけだ」

「オレ、まだぎりぎり20代なのに……そっちの方がおっさんだろ  
うがよ！」

自分はまだ若い、とわめく騎士に、カイルは更に追い打ちをかけた。

「違います。ラウルは『お兄さん』です！」

「……ひっでえ……」

「……カイル、それ以上言ってくれな……」

「俺、おれ……もう、立ち直れないかも……」

「なんと言ったら良いか……重ね重ね申し訳ない」

騎士はその体躯に似合わないほどに盛大に拗ね、カイルに背中を見せて小さくなった。

ラウルは最大限の努力をしたが、「おじさん」と「お兄さん」の違いを教えるのは、中々に骨が折れる作業だった。



## 夢の道・1

「ザック……お兄さん？ お肉をどうぞ」

「おまえさあ、いちいち疑問形にするなよな」

差し出された皿から羊肉の串を一本取って、騎士は少女をねめつけた。カイルはカイルで、慥然としながら鶏唐揚げカネトの串を手に取ると、うるんな目つきでザックを見遣る。

「……騎士さまには弟妹オウチがないのに」

「だから、『お兄さん』と『兄』は別物だと」

「あー、わかった、わかった！ チビ、おまえはこれから俺のことは『ザックさん』と呼べ。いいな？」

「兄」という言葉に一体どれほどのこだわりがあるのか、カイルは気安く「お兄さん」と口にするのを嫌がった。この少女の兄馬鹿ぶりはザックも身をもって知っていたので、「おじさん」呼ばわりされなければそれで良いと名前を呼ばせることにしたようだ。

チビと言われて眉をひそめたカイルだったが、「お兄さん」とは認められない者をそう呼ぶ必要がなくなっただけで、こちらも不満は解消されたようだ。「そうします」と言っただけでこりと微笑むと、優雅な仕草で肉を食べ始めた。

あまりにも大人げない二人のやり取りに少々閉口しながらも、ラウルはほどよく暖まった串を火から下ろす。

「これで最後だ」

結局その日の夕食は、囲炉裏の左端に座ったラウルが串を焼き、真中のカイルがそれを左右に配る、という形で進んでいった。カユテの村から運んできた山盛りの肉はすべて無事に炙り終わり、残っているのはたった今皿に載せた3本の串だけだ。それをカイルが1本ずつ、各々の皿に丁寧に分けてゆく。

「待てよ、なんか少なくてねえ？」

「いや、これで全部だ」

ラウルの宣言に、最後と言われた肉をまじまじと見つめ、ザックは不思議でならない、といった顔をした。

「だけだよ、あれだけの肉が全部なくなるはずが……」

「見ての通り、どこにもないが」

「そりゃー、そうなんだけどな？」

首を伸ばして油紙の中に一片の肉もないことを確認すると、無精髭の生えた顎を撫でながら、ザックはしきりに首をひねった。

確かにあれほどの量であれば、通常なら2食分以上あると考えるだろう。　そう、通常ならば。

「ご馳走さまでした。それではお茶を、入れますね」

いったいどここの習慣であるのか、カイルは両手のひらを合わせて食後の挨拶をした。それから空いた皿を簡単に片付けると食事に関しては唯一マトモにできる、「茶を入れる」作業に入る。

「腹は膨れたか？」

「はい。健康のためには腹八分目って言いますし、ちょうど良い量でした」

満足げに眼を細めたカイルと空っぽになった大皿、それぞれの前に置かれた小皿の上の串の数を順に見て、ザックはまさか、と呟いた。

「……まさか、とは思っただがな？」

「そうだな、気持ちのよい食べっぷりだったな」

「はい。とつても、美味しかったです」

「だってよ、チビは、ちまちま啄んでる感じで……」

「現実を見てくれ」

ザックの疑問ももつともだった。

昨夜はそんな余裕はなかったが、改めてカイルの食べ方を観察してみると、それはもう凄いの一言の尽きた。食べる仕草は「優雅」と表現できるほどに洗練されているのだが、ふと気が付くと料理が消えているのだ。だが決してカイルは料理を丸呑みにしているわけではなかった。むしろ味わって、ゆっくり食べているように見えるところが恐ろしい。これならいつそ「魔術だ」と云われたほうがよほど納得できるだろう。

「俺たちが1本食い切る頃には3本目を口にしていたな」

「マジかよ……ありえねえ」

騎士も護衛士も、食べる速度が遅いわけではない。職業柄、早いと言ってもいいほどだ。可憐な少女が大人の男二人よりも早く食べるとは、にわかには信じがたい。しかもいったいあの細い身体のごくに、あれだけの量が詰まったというのか。そのうえまだ食べられると言っていた。何がどうなっている、と先ほど引き寄せた身体の大きさを思い出しながら、ザックは両手で輪を作り、茶を淹れているカイルの胴回りと比べてみた。

「……わからん。なあ、チビ。ちよつと上着を捲つて……」

ぎろり、と護衛士に冷ややかな眼で睨まれて、ザックは慌てて身を引いた。

「じよ、冗談だつて。本気にするなよ、おとーさん」

「ラウルは、お父さんでもありません」

「チビもなー、いちいち真に受けるなよな？」

ふん、と頬を膨らませたカイルはそれでも茶を配り終わると、騎士と護衛士に向かつて貰った飴を差し出した。

「デザートです」

ころころころ、と口の中で飴の転がる音がする。

囲炉裏を中心にして右側の二人が顔をほころばせ、左端の一人はやや渋い表情で口を噤んで黙っていた。

「おいひいれすね！」

「だろ？ これはな、イエーツでも評判の飴なんだぜ。本物の果汁を贅沢に使ってるんだとよ」

「そうなんれふか……」

「帝都の東側のな、オールコック通りに店があるんだが……」

口の中で飴をころころ転がしながら、きらきらと瞳を輝かせて話

を聞いている少女を、ザックはもう一度誘ってみた。

「もう少しで収穫だからな。葡萄を使った生菓子なんかもたくさん出てくる。……どうだ、イーツに行ってみねえ？」

「はい！ ……用事が済んだら、必ず行きます」

もご、と頬の方に飴を移して、カイルはしつかりと返事をした。その眼にもはや迷いはなく、決意は変わらないようだ。

「やっぱダメか、と小さくごちて、騎士は肩をひよいとすくめた。それから茶を一口含んで満足そうに頬を緩めると、ずいと身体ごと護衛士の方に向き直った。」

「なあ……あんたら、サリフリまで行くんだって？」

「……ああ、そうだが」

「いったいどこまで喋ってしまったのかとラウルは静かに瞳を閉じ、心持ち顔を伏せた。この騎士は、娘を帝都へ連れて行きたいようだ。カイルは断ったがこのまま引いてくれるだろうか。相手は帝国の騎士だ。そしてここはまだ帝国領内で、騎士の懐の内と言っていい。まさか帝国がこの娘を襲い追っているとは考え難いが、用心に越したことはない。」

ふと、ラウルは心配そうに見つめてくるカイルの視線に気がついた。そう、この娘は理由も何もわからず突然襲われたと言っていた。身ひとつで逃げてきて、不安にならないはずがない。だがこうして己が護衛としてついた以上、何者からも守ってみせる。だからもう、胸を痛める必要はないのだ。

そんな想いを込めて、ラウルはカイルを安心させるよう微笑み返した。

（連れて行くというなら、きちんと理由を示すべきだ。それができ

ないなら何があっても渡せない)

栗色の頭をぐるりと掻いて、騎士は胡座をかき直した。最前までの緩んだ顔は姿を消し、口元を引き締めて護衛士の眼をしつかりと見つめ、膝に手をつき頭を下げる。

「いや、すまなかった。俺は疑うことが仕事でな。チビが悪いわけじゃねえんだが……任務の途中なんだ。だから微かにでも手がかりになりそうなことがあれば、なんだって疑ってかかる。それで不快な思いをさせたなら、申し訳なかった」

「……それで、疑いとやらは晴れたのか？」

それは、とザックは言い淀んだ。落とした視線を足下から徐々に上げてゆくと、護衛士と正面からぶつかった。強く揺るがない静かな深い翠の瞳には、嘘や誤摩化しは許さないと意思が込められている。気を抜けば腹の奥まで暴かれそうだ。

一度唇を噛んで目を落とし、口を開きかけたところで少女が「あのね」と口を挟んだ。

「ザックさんは、女なのに護衛士になりたいと言ったわたしのことを、心配してくれたのです。それで帝都に行こうって、誘ってくれました」

だから、と護衛士に顔を向けて、カイルは静かに微笑んだ。

「ラウルが心配するようなことは、なにもありません……本当に。わたしもイエーツには行きたいと思っていますから」

なんで、と零れそうになった言葉を、ザックは辛うじて飲み込んだ。

ラウルの方も、それとわかるほどに眼を見開いて凝視している。

騎士は、カイルを疑っていると言った。そしてその疑いはまだ晴れてはいないらしい。なのになぜ、理由も訊かず無条件に己を疑う相手に信頼を寄せられるのだ。

騎士と護衛士二人の視線を受けて少し小首をかしげながらも今度は騎士をじっと見つめると、少女は決意を口にした。

「けれど、今は駄目です。わたしにはどうしても為さなければならぬことがあるのです。……だから少し、待ってください。それが終わったら、必ず帝都に行きますから」

すべてをまつすぐに貫くような、それは強い瞳だった。

こんな眼を自分は良く知っている　ザックの脳裏に、ある晴れた日の出来事が蘇った。

剣の柄頭に刻んだ紋章、これを三人で誂あつえて、分け合ったときのことだ。あのときザックの眼に映る友人たちは、揃って同じ瞳をしていた。なにごとにも揺るがず、惑わされず、生命をかけてこの決意を守りぬくと誓い合ったときと同じ、まっすぐな眼。この少女も、なにか譲れないものを持っているのだろう。ならば今はその言葉を信じてもいい。

ザックはにやりと口の端を引き上げると、手を伸ばして黒い頭をかき回した。

「あんな、チビ。おまえをどうこうするってワケじゃあねえ。任務の内容は機密だから言えねえが、決しておまえに不利になるようなことあしない。俺は……俺たちはな、おまえみたいな子供に大人の不始末を押し付けるような、そんなことはしねえんだ。もしそんな奴がいたら、俺がぶっ飛ばしてやる」

首を竦めて見上げる少女の黒い瞳と驚愕に見開かれた護衛士の翠の瞳に気がついて、今度は恥じらうように騎士は栗色の髪をかき混ぜた。

「くそ、柄でもないコト言っちゃった」

頬を染め、ふいと顔を反らした騎士は、口の中に残っていた飴をがりり、と噛んで飲み込んだ。



## 夢の道・2

騎士はぐい、と茶を含み、二拍置いてからごくりと飲み込んだ。ふはっ、と息を吐きだして、手の甲で口を拭う。それから口を引き結び、膝に手を当てずいと身を乗り出した。

そこにはいるのはもはや、照れて頬を染めた若者ではなかった。「帝国の騎士」としての自負と責任を負った、一人前の男だ。

「護衛士殿」

改まって呼びかけられて、ラウルはわずかに胸を反らせた。それを見て目尻に皺を寄せ、人なつこい笑みを浮かべるとザックは実は、と切り出した。

「実は私も目的地はサリフリなんだが、少々急いでいる。どの道を行くのが早いのか、助言を貰えないだろうか」

「ザックさんも、サリフリへ？」

先ほどのことなどすっかり忘れたように笑顔を見せたカイルに、騎士は頬を緩めて頷いた。

いちいち素直に反応するのが面白い。やはり、小動物はイイものだ。

「そうなんよ。俺の上司って奴がまた人使いが荒くてな、たった3月でサリフリまで行って、やることやって帰ってこいってさ」

「それは……大変ですね」

「おうよ、この仕事が一とんできたかどうかで、来年度の給料

が決まっちゃうからな、力入れてやらなきゃならん」

あつという間によそ行きの仮面を外した騎士に、ラウルは苦笑を  
禁じ得ない。どうやらこの騎士は、猫をかぶるのが苦手らしい。じ  
やれ合うような二人を見守るように眺めていたのだが、ふと気がつ  
いたことがあった。

「今からなら、再来年度ではないのか？」

「……へ？」

「再来年……？」

カイルはともかく、当事者の騎士の方が理解していないように見  
えるのはどうということだろうか。首をひねりながらもラウルは理由  
を説明してやった。

「新年度といったら、もう10日もないだろう？ だったら給料然  
り、予算はとづくに決まっているはずだ。知り合いの騎士は、夏前  
に評定があると言っていたが」

「……うそだろ？ 俺……そんなの知らねえ……」

「ザックさん？」

眼を見開いて顔色をなくし、騎士はわなわなと震えだした。そし  
て震える両手をじつと見つめていたかと思うと、カイルを押しつけ  
どたどたと這ってラウルの膝に縋りつく。

「なあ、評定ってなんだ？ 給料ってどうやって決まるんだ？」

「人伝に聞いたただけだ。宮仕えはしたことがないから、詳しくは知  
らん」

「なんでも良い！ 教えてくれ。頼む！」

熊のような騎士に迫られラウルは大きく仰け反った。濡れた土色のつぶらな瞳が潤んでいるが、まったく可愛いとは思えない。

三十路も間近な大の大人が、なにを今更。

鼻息が頬にかかるほどに詰め寄られラウルはふいと顔を背けるが、騎士は膝に手を載せたままぶつぶつと呟きだした。

「給料未払いになったら、どうしよう……俺……」

「ザックさん……」

分厚い肩をぐいと押して、ラウルは少し距離を取った。抵抗もせずに呆然と座り込む騎士は、気の毒といえないこともない。帝国のような大国で、俸給が支払われないことはまずないだろうが、万が一、ということもある。

「借金でもあるのか？」

「いや、借金はねえが……給料が入らなかったら、可愛いお姉ちゃんといイコトでき」

ぐき

ラウルはザックの左頬を、右手で押して向きを変えた。できることなら口を塞ぎたかったのだが、どういうわけか右手が拒んだのだ。そのため騎士の首は妙な音を立て、囲炉裏の方に曲がっていった。

「……ってえ！ なにすんだ、おっさん！」

「それはこちらの台詞だ」

「なんだよ、お茶目なジョークじゃねえか」

遅かったか。

ラウルはそつと顔を逸らして眼を閉じた。見たくない、そう思っ

て眼に手を当てたのに、右手の方から華やいだ気配が感じられる。

「……ザックさん、わたしもイイコトしたいです」

ああ、やはり。

期待に胸を膨らませ、きらきらきらと瞳を輝かせたカイルの顔が眼に浮かぶ。指のわずかな隙間からそつと覗いてみると案の定、薄暗い小屋の中が、そこだけ光り輝いているようだ。

「楽しいコトなのでしょう?」

じりじりとにじり寄るカイルは、まるで毛糸玉を前にした猫のようだ。そして騎士は、いや、とかその、とか言いながらじわじわと後退している。

この部分だけ切り取って見れば、美少女に襲われる野獣、といったところか。台詞だけならかなりキワドイのに、艶めいた雰囲気があったくないのはどうしたことだろう。

世にも珍妙なこの光景を、ラウルは腕を組んで傍観することに決めたが、ザックの方はそれどころではなかった。

「……おっさん。悪かった」

「なあ、ホント、心から反省してる。だからコレ、どーにかしてくれ」

「これも良い機会だ。存分に遊んでもらったらいい」

「はい。ザックさん、楽しませて下さいね?」

「ちよっ……なにがどうなって……」

帝都でないとできない遊びなのだ、と苦しい言い訳をひねり出すまで、ザックはなす術もなく「遊んで」と迫りくる少女から逃げ回

ったのだった。

「それで、地図はあるか？」

「……ああ、ちよつと待ってくれ」

疲れ切った様子のザックが、床にのろのろと地図を広げる。ラウルも自分の地図を広げて隣に並べ、向かい合わせになる位置に腰を下ろした。カイルも一緒になって地図を囲み、2つの地図を興味深そうに眺めている。

ザックの持つ地図は大陸東方を中心として詳細な地形が描かれたもので、紙には張りがあつてまだ新しい。街道に沿つて所々に書き込みも見られるが、印刷された文字を隠すほどではなかった。

対してラウルの持つ地図は上質の子牛皮製で、ザックのものより大きく、大陸全土を描いたものであつた。元は上質でも使い込まれた皮には染みも目立ち、年代物だということが素人目にも良くわかる。加えて至る所に様々な色のインクで書き込みがなされ、地図は文字と図形で埋まつていた。地図一面がまるで暗号のようにもみえ、これを読み解くことは持ち主以外には不可能だろう。ラウルが護衛士になつて20年近く経つ。この地図には、それだけの歴史が詰まつているのだつた。

「……凄えな」

「まあ……随分長いこと使っているからな」

「組合」に所属する自由契約の護衛士は、出会えば街の酒場などで必ず情報交換をする。食事を共にして酒を酌み交わしながら、地図

を見せ合いそれぞれの持つ情報を共有していくのだ。そのため各地の情勢や気候の変化には、誰よりも詳しいと云われていた。もちろん中にはガセもあるが、そういった情報を流した者は、それ以降誰からも相手にされなくなる。情報が己の命を左右することを、誰よりも良く知っているのもまた、護衛士なのだ。

ラウルはカイルに一度目を向けると、地図の中央部を指し示した。騎士にとっては今更だろうが、この少女への説明も兼ねて復習してもらおう。

「オノレ隧道を抜けてから、まずトウルグの村に向かうだろう？  
北方公路は、そこからソマを通りルツカレに繋がっている」

トウルネイ山の北側を起点として帝国側に緩く弧を描きながら、南東のルツカレの街へ向かってラウルの指が動いてゆく。

「ここで中央公路と合流するわけだが……君は馬を持っていたな？」  
「ああ、足の強い、良い馬だ」  
「ならば」

ラウルはザツクの地図に描かれた、太い街道を指でなぞった。

「やはりルツカレから中央公路を行った方が早いだろう。道も整備されているから馬も歩きやすいだろうし、なにより安全だ」  
「ふむ……裏道はない、ということだな？」

「そうだ、と頷くラウルに遠慮がちな声が掛けられた。

「あの、いいですか？」

ザックが顎を握っているのを真似しているのだろうか、顎の下に拳を当て、カイルは神妙な顔で地図を指差した。

「トウルグからこう、まっすぐサリフリに向かったら、一番早いのではないだろうか」

確かに北方公路から中央公路へ抜けようとする、アクサライ王国の中央部を大きく迂回する形になる。一直線に向かった方が早いと考えるのは、当然のことだった。

ラウルは大きく頷き、トウルグの東を指差した。

「そうだな、確かにその通りだ。だが地図には描かれていないが、この辺りの山岳地帯は地質が脆い。道がないわけではないが、よく崩れて通れなくなる」

そして、と指はトウルグとサリフリの丁度中間辺りで円を描いた。

「この辺りでは部族間で争いがあるらしく、どうもキナ臭い」

「そうでしたか……」

「それにここのところ、井戸が涸れたという話を良く聞く。アクサライ人は遊牧の民だから、これも争いの原因になるのだろう」

「確かにな。街道沿いの連中と違って、遊牧の民って奴あ他国の人間を嫌うからな。通り抜けるだけだっつっても、聞いちゃくれねえかもしれない」

「そういうことだ。結局、街道を行くのが一番早い」

栗色の頭をかき回してぼやいたザックの意見を、ラウルは頷くことで肯定した。どこか嬉しそうに眼を細めて頷くさまは、まさしく弟子を導く「師」の顔だ。よくできたな、と暖かい手のひらで頭を撫でられるような、そんな感触を思い出してザックはどこか面映く

なり、鼻の下を指でこすった。

「井戸は北方公路沿いには、こことここ。ソマ近くのこの場所は涸れたらしい。ルツカレに出るまでは乾いた土地が続くからな、水の残量には気を使え」

「ふむ……いや、助かった。こういう情報は、やはり護衛士でないとわからんものだな」

護衛士でなければ得られない情報を、ラウルはこうして惜しげもなく晒してくれる。その上ザックが間違った位置に印をつけようとすると、また丁寧に訂正してくれるのだ。さらにはここで情報料を、と言わないところがいかにもこの男らしい。

(チビが懐くのも、ちいとはわかるって あれ?)

やけに静かになったと思ったら、カイルは船を漕いでいた。ゆらり、ゆらり、と頭が傾いだかと思うとラウルの方にこてん、と倒れる。肩にもたれかかってきた少女を、護衛士は静かに受け止め、髪を梳いて慈しんだ。

「あれ? 寝ちまった?」

「今日はずいぶん歩いたし……気も張っていたんだろう」

「へえ、可愛い顔しちやってまあ……」

闇に縁取られた白皙の顔、すっきりと伸びた鼻梁の下に、ふっくらとした赤い唇。梳かれてさらり、と流れた黒髪が頬にかかる。その影が幾分顔の輪郭をすっきりと見せ、短い髪も相まって少女を中性的に見せていた。

幸せそうに眠るその顔を眺めていたら、唐突にある人物の名が脳裏をよぎった。



ザックは愕然とした。水底から浮かび上がるように、はつきりと形を為したその名はどう考えてもありえないものだった。他人の空似だ、そう思うのだが記憶の中のその面差しは、目の前の少女と重なって離れない。

「なあ、コイツ、帝都に親戚がいるとか……聞いてねえ？」

「……親戚？」

疑問が咄嗟に口をついてしまった。栗色の頭をかき回し、ザックは言い淀む。

「いや、なんつーか、俺の知り合いにな、どこか似てるような気がするってさ……」

「……知らないな」

毛布を手繰り寄せ、くたたりとした身体を丁寧に包む。荷で作った枕を頭の下にあてがうと、娘はもそもそと動いて居心地の良い場所を探し出した。こちらに背を向け横を向いて丸まると、身体はそれきり動かなくなる。ラウルは毛布と外套でさらに小さな身体を包み込み、自分も寝支度を始めた。

そうだ、親戚。なぜそのことに思い至らなかったのだろう。家族はいない、独りだと言っていたから、親類のことなど考えもしなかった。縁者がいるのなら、何故そちらを頼ろうとしないのか。あるいは頼れない事情があるのか。いずれにせよ、確認するのはこの騎士と別れてからになるだろう。

「それに……触れるな」

「ケチケチすんなよ、おとーさん」

寝入ったカイルの頬をつついて遊んでいるザックに忠告だけして、ラウルは毛布を引き上げ眠りについた。

ふわり、と身体が宙に浮き、天地の感覚が曖昧になる。眼を閉じそのまま身を任せていると、指の先から解ほどけていくような、そんな感触が身体中に広がった。意識は身体の枠を越え、どこまでも、どこまでも広がって、やがて白い世界に辿り着く。

見渡す限りの、優しい白。

柔らかな光の満ちたその世界に、ザックはひとり漂っていた。

ふわふわゆらゆらと揺蕩たゆたう白一色の世界の向こうに、虹色の雲が見えてくる。

(ハーシュ……?)

そうだ、あれはハーシュだ。年下の上司で、幼い頃からの、親友意識を向けると虹はどんどん大きくなり、やがて中に人影が見えてきた。

まっすぐな灰白の髪、文官の長衣を纏ったすらりとした立ち姿。

秀麗な顔には薄い水色の瞳、薄い唇。

赤、青、緑、黄、桃、橙、紫……虹、と思ったのは色とりどりの雲のような塊で、ハーシュの周りをゆらりゆらりと、軽いステップを踏むようにして踊っている。

これが、魔術士の見る世界。

「力持たぬ者」が決して知ることのない、力に満ちあふれた、極彩色の世界だ。

いわゆる「魔力」を持つものは、程度の差こそあれ、この色とりどりの世界の中で生きている。そしてこの雲の量と色の濃度は、魔術士「力持つ者」の力量に比例すると云われていた。そのためハーシユのように強い魔力を持つものは、常にけばけばしい色をついた霧の中で生きていくようなもので、それは日常生活を酷く困難にするものだった。

視力が悪いわけでもないのに目の前の物が見えない。これはどれほど不便なことだろうか。彼の場合はその力が強過ぎたため、比較的早い段階で魔術士としての教育を受けることができた。だがそれでも一般人と同じように生活するために、随分と苦労していたように思う。

さらにはその強大な魔力、天才的な頭脳、そして端正な容姿ゆえ、ハーシユは幼い頃から大人たちの思惑に翻弄されてきた。一時はかなり深刻な人間不信に陥ったものだが、今はこうして立ち直り、国の要職に就くまでに成長した。

なにを為しても「彼は天才だから」と、そう評されることが多いが、ハーシユ・ラスンは決してそれだけの人間ではない。生まれ持った能力に見合った努力を惜しまない人物だと、ザックは良く知っていた。

「ハーシユ！」

ザックが大きく手を振って呼びかけると、水色の瞳がわずかに細められた。「変わりありませんか」と、目元がそう言っている。応えるように、ザックはもう一度、両手を広げて大きく振った。

それを見たハーシユの顎が、わずかに引かれた。これは満足している表情だ。だが疲れているのだろうか、彼の眼の下には隈らしきものも見える。まだ若いからといってあいつは良く無茶をするから、後できつちり釘を刺そう。

「ハーシュ、ハーシュー！」

口に手を当てなおも呼びかけると、彼の人はわずかに笑みを浮かべ、両手をほんの少し広げてみせた。動きに合わせて、足首まで覆う白い長衣がふわりと揺れる。衣が揺れるのに呼応するように、虹色の雲もふわりふわりと楽しげに、弧を描いて動き出す。

雲を蹴散らし文字通りハーシュの前に飛び降りて、ザックはまず、極めて重大で重要な案件について相談することにした。

「ハーシュ！　なあ、俺の給料って、どーなってるの！？」

「開口一番、なんですか」

水色の瞳が片方だけ歪み、こめかみがひくりと動いた。雲の動きがぴたりと止まり、そっと二人から距離を置く。

「毎年、契約書にサインするんだろ！？」

「……してるじゃあないですか」

ハーシュはこめかみを指で押さえて低く呻いた。  
いまさら何を言っているのだ、この男は。

ただでさえ頭の痛くなる案件をいくつも抱えているというのに、夢の中でも頭痛がするとはいったいなんの冗談だ。

そんなハーシュの苦悩も知らず、ザックは呆けたように口を開けた。

「うつそ……」

「こんなことで嘘を言ってどうします。この間城に来た時に、きちんと署名したでしょう」

「……え？　なに、あれって、契約書だったの？」

「……内容を知らずにサインしていたと？」

「あ、いや……細かい字がびっしり詰まっていたから、ついテキストに」

ちっ、と美しい顔に似合わない舌打ち音がした。

こめかみを押さえながら、ハーシユは剣呑な目つきでザックをにらむ。

あれがそうだったんだ、と栗色の頭をかき回すザックに、ハーシユは「はああ」と殊更に大きな息を吐きだした。がくりと肩を落として両手を投げ出し、ぐじぐじと陰気臭い愚痴まで吐き始める。すると虹色の雲さえ、くすんだ色になって足下近くでわだかまった。

「長期出張中だからと契約遅延の理由書まで書いて、ただでさえ少ない予算をこれ以上減らされないようにと財務官とやり合って。さらにはモーゼルから届いた意味不明な請求書の稟議を通すのに、どれだけ苦労したとっているのでしょうかね、私の騎士は。こんなことなら年俸の桁をひとつと云わず、ふたつほど減らしておけば良かったですよ」

どうやらハーシユは宰相補佐兼宮廷魔術師という仕事だけでなく、ザックの雑多な事務仕事まで引き受けていたらしい。

「それで？ わざわざこのために私を呼んだのですか？」

冷ややかな視線に晒されて、ザックは慌てて否定した。

「いやいやいや、ちゃんと仕事してるから！」

「とてもそうは見えませんか？」

「こちらは寝る暇もないほど忙しいのですがね？ こうして繋がっ

ているということは、貴方はもう寝ているわけですね？ 羨ましい限りですね、と止まらない愚痴を遮るために、ザックはまず結論を言った。

「見つけたかもしれん」

「……何をです？」

「『例の女』」

「……！！」

滅多に感情を露にすることのない水色の瞳が見開かれ、ハーシユは言葉を失った。

「そんな、まさか」

「俺もまさかと思ったさ。だけどな、そいつは男装した黒髪短髪の女で、『カイル』と名乗ってやたらと魔術に詳しかった。目の色は黒だったが、これは大したこっちゃねえだろう？ おまけに顔もめちゃくちゃ可愛いし、黙ってりゃ、すごい美少女……こんなのにいると思うか？」

「確かに条件は合いますね……けれど」

ハーシユは首をひねった。

「可愛い」や「黙っていれば」というのは、なんだろうか。

確かにあの「女」は例えようもなく、美しかった。だが少なくとも「可愛い」と表現されるものではなかったはずで、一言で云うと「性悪」が一番合っているはずだ。

それはザックも感じていたようで、栗色の頭をなで回しながら困ったように眉を下げた。

「お前が言っていたのと、イメージがイマイチ違うんだよな、チビは。金にがめついし、凄え量食うし……」

ふわふわと目の前に漂ってきた黄色の雲を、ザックは片手で払って肩をすくめてみせた。ハーシユは少し考える素振りを見せたが、すぐに宰相補佐兼宮廷魔術師の顔になって頷いた。

「詳しく聞かせて貰いましょうか」

「阿呆ですか」

話を聞くなり、ハーシユは言った。

「……なんだよ、いきなり」

「阿呆だから、阿呆と言ったのです。それとも、馬鹿と言った方が良かったですか？」

「だから、なんでそーなる！」

はああ、とまた大きく息を吐いて、年若い宰相補佐兼宮廷魔術師は、呆れたようにザックを見つめた。

「『必ず行くから待っている』　これは、どう考えても我々に対する宣言ではないですか」

「へ？」

「ザカライア、子供の使いではないのですから……もう少し、頭を使ってください。　貴方は、便利な伝言係にされたのですよ」

「えええ！？」



これは吃驚だ。あのチビが、そんなに器用だとは思ってもみなかった。

顎を落として眼を剥いたザックに、ハーシユの溜息が重なった。記憶の中の「女」は美しく、性悪で、ずば抜けた頭脳を持っていた。なのに己の信頼する騎士の話から窺えるのは、亡くなった兄に心酔する少し変わった美しい少女の姿だけで。

「女」と「少女」、二人の姿は重なるようで重ならない。その隔たりに、二人はほとほと困り果てた。

「実際に会ってみれば早いのですが……」

「じゃあ……やっぱり拘束しとく？」

「……いえ、限りなく黒に近いのですが……確定はできません。やめておきましょう」

非常に重要な案件なので慎重に進めたい。そう言うハーシユがいつになく弱気な気がして、それが少し不思議だった。

「状況証拠的には十分じゃねーの？」

「その状況が問題なんですよ」

この白い世界の果てを見極めようとするかのように、水色の瞳がわずかに細められた。ほっそりとした顎が心持ち上を向き、薄いが形の良い唇が開かれると、溜息のように言葉が零れる。

「あれから12日、ですか。……瀕死の人間がいたとして、動けるようになるまでどのぐらいかかるでしょうね？」

「程度によるだろうがな、まあ、起き上がるのに少なくとも10日はかかるんじゃないの？」

頭の後ろで手を組んで、ザックは並び立つハーシユと同じ方向を

見渡した。この夢の世界はどこまでも白く、そして優しい。二人だけの世界には色付きの雲がときおり視界を横切るだけで、他には何も見えなかった。

「我々が見つけたとき、あの女は瀕死と言って良い状態でした。どれだけの血を流したのか見当もつきませんが……手足には無数の刺傷、体温も低く脈も微弱で。医師と魔術師が必死になって治療してやっと生命を繋いでいる状態で……」

ザックは瞠目し、隣の男を注視した。わずかに低い位置にある水色の瞳には、女を気遣う様子がありありと浮かんでいる。どうということだ、と問うような視線に気が付くと、その端正な眉は困ったように歪められた。

「まる2日、生死の境を彷徨っていましたよ。それが、眼を覚ましたと聞いて様子を見に行ってみれば……っ！」

一瞬にして、水色の瞳が紅く染まった。ぶわり、と雲が膨れ上がり、ザックの視界を賑々しい色で覆ってしまう。両の拳を握りしめ、唇を歪めて震わせながら、ハーシユは憎々しげに吐き捨てた。

「……あんな屈辱は……初めてですっ！」

いったい何をされたのか、宰相補佐兼宮廷魔術師の顔をすっかり脱ぎ捨てただの「若造」に成り下がり、聞くに堪えない言葉でハーシユは「女」を罵った。

非常に珍しいことではあるが、女を「性悪」と称したのは、この男の私怨であるらしい。

栗色の頭を掻きながら、ザックはげっそりと肩を落とした。

「落ち着けよ」

夢の中であるというのにどこか寒々とした気配を感じ、ザックは宥めるように、若造の肩を軽く叩いた。

はっと我に返ると眉間を押さえ、ハーシユは何度か深呼吸をしながら力を込めて眼を閉じた。ゆっくりと開いた眼の色は元の水色に戻り、そこには憂いの影が滲んでいる。

「で、どうでした？ その『カイル』の様子は」

「すっげえ元気。健康そのものって感じだぜ？」

「……そうですか」

ほっと、胸が撫で下ろされた。

その安堵の息は、何に對するものだろう。少女が「女」でないことか、それとも「女」が無事だったことに対するものか。それを示せばこの年下の上司はきつと怒るだろうから、ザックは笑いをこらえながらも黙って見守った。

そんな不穏な空気を感じ取ったのか、ふと、ハーシユが顔を挙げて呟いた。

「……瞳の色は、どうでした？」

「黒」

あまりにもあっさりとした返答に、秀麗な顔がしかめられる。

「暗闇で確認しましたか？」

「……いや、寝る前に覗いてやろうとしたんだが、おとーさんが眼を光らせててなー」

できなかつた、と頭を掻いたザックに、落胆したように首が振ら

れた。

「肝心なことでしょうに」

「それよりもだな。もっと大切なことがある　チビは、似てるんだ」

給料に氣をとられてつい忘れていたが、こちらの方がよほど極めて重大で重要な案件だ。

「……誰に？」

「おまえ、顔を見たんだよな。思い出してみる。その『女』、誰かに似てると思わねえ？」

ハーシユは腕を組むと形の良い眉をひそめて俯いた。

漆黒の髪、青白い肌、瘦けた頬。優雅な弧を描く眉の形、長い睫毛、閉じられた瞳。すらりと伸びた鼻梁、色をなくした唇の形

その顔の輪郭、目鼻の位置は、確かにどこかで見たような気がする。それもつい最近、城内で。

あの場所は、どこだった？

「あ、あ……まさか」

水色の瞳が、愕然と見開かれた。

予想外の顔が、脳裏に浮かびあがった。

だがそんなことは有り得ない。絶対に。その可能性はないはずだ。けれどもあまりに似過ぎている。

何度否定しても、二人の顔は重なって離れない。

まさか、あの女は。

だがなぜ、今になって。

なぜ、この時期に。

この想像が現実のものだとして、少女は一体何をする気なのだ。

「……行き先は、サリフリだと言っていましたね？」

厳しい顔で、ハーシュは問うた。

そこに個人の感情は、一切みられない。

冷酷で厳格な宰相補佐兼宮廷魔術師がいるだけだ。  
身を引き締めて、ザックも応えた。

「ああ、確かだ」

「では泳がせて、彼女が何をするつもりなのか確認してください」  
「わかった。俺は先に行つてていいんだな？」

「ええ、護衛士がついているのなら安全です。責任を持って送り届けてくれるでしょう。貴方はまず、サリフリへ。予定通りに『魔術陣』について調べてください。そしてもし」

もし、と続けた言葉に、二人は顔を見合わせ頷いた。

そろそろ戻る、と言ったザックに気をつけて、とハーシュは別れの言葉を述べる。

「こちらは今、眼が回るほどに忙しいのです。だからこれ以降は、連絡は取れないと思ってください」

「ああ、おまえもちゃんと寝とけよ？」

わかっていますよ、と口癖のような言葉を吐いて、ハーシュはうつすらと微笑んだ。

「彼女が、我々の敵にならないことを願っています」  
「……ああ、そうだな」

ザックも軽く手を挙げ別れを告げた。

天地の境が曖昧になり、虹色の雲に覆われたハーシユの姿がどんどん小さくなってゆく。

ひとつ息を吐いてザックはゆっくりと眼を閉じた。

意識が闇に覆われる寸前に、先ほどの言葉を繰り返す。

もしその「為すべきこと」が帝国くにに仇なすものだとしたら、  
全力で叩き潰す。今度こそ、遠慮なく。

## エピソード・1

がくり、と頭が落ちかけて、老人ははっと眼を覚ました。椅子に座ったまま、ついうたた寝をしてしまったようだ。

寝ている間にもしやと期待を込めて寝台を窺うが、何も変化は見られなかった。今度は少し不安になって、ぴくりとも動かない青白い顔に、そつと耳を近づけた。

頬にかすかな息が当たり、ほんのわずか髭が揺れる。

生きている。

ほう、と安堵の息を漏らし、老人はまた古い椅子に腰掛ける。

ここ数日、暇さえあればこうして寝台の前で過ごすのが老人の日課になっていた。

星から転がり落ちてきたのは美しい少女だった。

「少女」というのは適当でないかもしれない。細くて軽いが身長はそれなりにあつたし、女性らしく丸みを帯びた体つきもしていた。

だが長い睫毛の影を頬に落とし、こんこんと眠り続けるその姿は「女性」というよりも「少女」といったほうがしっくりくる。

びしょ濡れの泥まみれになりながら池から引き上げて、4日経つ。少女は未だ、一度も眼を覚ましていなかった。

濡れた綿を少女の唇にそつと当てる。

ひび割れかさついた唇が、水を含んでその一瞬だけ艶を増した。

意識がない身体にせめて水分だけでも摂らせようとこのような方法を試したが、はたしてこれだけで良いものか、老人には判断がつかなかった。

（他人ひとに関わるつもりはなかったが……）

突如として現れたこの少女が何者なのか、わからない。けれども未来さあのある命がむざむざと散りゆくのを許すことは、どうしてもできなかった。

だがここは人里離れた森の奥深く、老人は独りで暮らしており「人」の世界からは隔絶している。一番近い村までも、獣道をかき分け歩いて半日ほど。膝の悪い老人には、少女を運ぶことはおろか助けを呼ぶことすら無理だった。

掛布の中から少女の腕を取り、巻かれた布をそつと外して様子を見る。

（なんと、惨い……）

少女は深い傷を負っていた。

濡れたように美しい黒髪は無惨にも肩の上で刈り取られ、ざんばらになっっている。

そのうえ釘を打たれたかのような無数の傷が、膝から下、肘から先に点々と穿たれていた。今でこそ薄く皮が張り、ほのかに肉の色を透かしているだけだが、助けた当初はいつ血が吹き出すかと冷や冷やしたものだ。

怪我は治りかけている。しかしまだ鮮やかに残るその痕跡が、いっそう痛々しく感じられた。

そしてもうひとつ、少女の左腕には不自然な傷があった。

肘の少し先を何かが貫通したようで、同じ痕が内側に抜けている。



血は止まっているが傷口は黒く変色し、周辺がうつすらと赤味を帯びていた。だがそこに熱はなく、腫れてもいない。化膿しているようでもなく、ただ墨を落としたかのように、黒く染まっていた。

老人は深く嘆息した。

こんな傷は見たことがなかった。どうすることもできず、消毒だけしてもう一度布を巻く。他の傷も同じように処置をして、元の椅子に座り直した。

そして何度も呼びかける。

「戻っておいで」

くたりと力の抜けた白い手を握り、老人は静かに少女を誘いざなつ。

「戻っておいで。嬢ちゃんの世界は、こちら側だ」

少女は人形のように眠るのみ。

ただ、そこに苦悩の表情が見られないことが、老人の唯一の慰めとなっていた。

また不意に、老人はぼかりと目が覚めた。

目の前にあるのは、闇。

時刻は夜半を過ぎて、どれだけ経っただろう。室内のどこもかしこも闇に沈み、目蓋を開けても閉じても何も見えないことに変わりはなかった。

なぜ目が覚めたのかと首をひねりながらも、ここ最近の習慣に従

い寝台の方に顔を向け、老人は危つく声を上げかけた。

少女が眼を開けていた。

瞬きもせず、ぼんやりと焦点の合わない瞳がじつと天井を見つめている。

色は銀。

闇に慣れた老人の眼には、それは淡く浮き上がっているようにも見えた。

（魔術士　なのか？）

闇の中で瞳が淡く光を放つ、これは魔術士の特性だ。

老人も久しぶりに目にしたが、この光景は確かに奇怪と言えた。

魔術士は数が少なく、彼らに対する理解は低い。ゆえに暗闇で光る眼は恐れられ、忌避された。神の使いとして崇められる一方で、彼らは災いを呼ぶ者として殺されることもあるという。

この少女も「そう」だったのだろうか。

そう考えればあの星も、手足の傷も納得できる。

（人間というのは……どこまで愚かなのか）

他人と異なる世界で生き、眼に見えぬ力を行使する「魔術士」は確かに特異といえる。だがそれは、彼らを傷つける言い訳にはなるまい。宮廷に入り保護を得る代わりに国に尽くすか、そうでなければ日陰者としてひっそりと隠れて暮らすか。そんな二択しか得られない時代はじきに終わると、そう信じていた。そして老人がまだ人の世にいた頃、魔術士たちは少しずつ、人の世に受け入れられていたように思う。

いつかは、と期待し裏切られて10年。まだ不幸な子供が生まれているのだろうか。

少女の頬にそつと手を当て、老人は銀の瞳を覗き込んだ。

淡く光る瞳の中に意思は欠片も見出せない。だがそれでも少女は眼を開けてくれた。そこに回復の兆しを感じられて、じわりと胸が暖かくなってくる。

老人は少女の目蓋に手を乗せ囁いた。

「……まだ起きるには早い。もう少しだけ、休むといい」

囁れた低い声に従うように、銀の瞳は閉じられた。

胸が上下し、密やかな寝息が聞こえてくる。

もう眠れまい、そう思ったが、深く規則正しい呼吸に誘われ老人はいつの間にか寝入ってしまった。

今度は鳥の声に起こされた。

窓から漏れる光から、とうに陽が昇ったことが知れる。思いもかけず深く眠っていたようで、己のその神経にいささか呆れてしまう。

少女は、と窺うが、こちらはまだ眠っているようだ。昨日までと違つて呼気は安定し、顔にも赤味が差してきた。

まだ眼も開けていないのに。そう自分を戒めたのだがどうしても頬が緩んでしまう。「緩む」というよりは「引きつる」とした方が正確だろうか。この地に移り住んでから、老人は笑った記憶がない。そもそも人と会話をする事自体まれであったので、「笑う」ことをすっかり忘れてしまっていた。

たった今気がついたその事実に愕然としたが、それでも目尻に皺を寄せ、眼を糸のように細めがなら老人はゆっくりと少女の髪を梳

く。

「もう一度、その綺麗な瞳を見せておくれ」

そう囁くと、少女の口元が微笑んでいるような気がしてくるから不思議だ。身体の奥深くでは、暖かく小さな火が灯ったような気さえる。

どことなくすぐつたいその感触に目を細めると、少女がいつ目覚めても良いように、と老人は準備に取りかかった。

汲みたての水で作った白湯、薄めた果実水、重湯、野菜を柔らかく煮込んだスープ。

小さなテーブルの上は、これだけでもういっぱいになった。流石にスープはやり過ぎか、と思ったものの、とてもじつとなどとしていられなかったのだ。

老人は腕を組んでそれらを見下ろし、自嘲する。

他人とかかわり合いになりたくないとおれほど強く願っていたのに、こうしてせつせと少女の世話をする。まだ自分には人を思いやる感情が残っていたのかと、少々不思議な気分になった。

けれどこれも悪くない。

少女が目を覚ます前に、もう少し自然に笑えるようにしなければ。強ばった頬を揉みほぐしながら少女の方に顔を向けて、老人の心臓は危うく止まりかけた。

夜の闇を写し取ったような瞳と、ぴたりと視線が重なったのだ。

お互い目を丸くして、どれだけ見つめ合っただろうか。

口を開いた少女が不意に咳き込んだ。老人は慌てて小さな身体を

起こして背中を撫でる。

少女の身体は力が入らないようで、支えていなければ起きていられなかった。抱き込むようにして老人は胸にもたれさせ、すっかり冷めてしまった白湯を与えた。丸々4日も寝ていたのだからと、時間をかけてゆっくり飲ませ、落ち着いた頃合いを見計らってまた横にする。

もの言いたげな少女にまだ喋らないようにと言い含め、老人はこれまでのことを説明してやった。

星から転がり出てきたこと、池に落ちたこと、そして怪我のこと。大きな黒い瞳を瞬かせ、ときおり小さく頷きながら少女はじつと話を聞いていた。そして話が終わると、ゆっくりと口を開こうとする。

また咳き込むのでは、と心配した老人にわずかに微笑んで、少女は掠れた声を絞り出した。

「あ、りがとう……ござい……ます」

そう言って弱々しく微笑むと、少女はまたすぐに眠ってしまった。ほんの一言、会話とも云えないような言葉を交わしたただけだ。しかしそれは老人に、驚くべき変化をもたらしたのだった。

## エピソード・2

目を覚ましてからというものの、少女はめざましい回復をみせた。

食べて寝て、起きる度に少女は腹が減ったと訴えた。目覚めたその日は流石に白湯以外与えなかったが、翌日の朝、その潤んだ黒い瞳に負け、老人はつい、自分用の汁の椀を渡してしまった。

重湯おもゆに加えて具入りのスープでは、病み上がりの身体に負担にしかならない。我に返って青くなつた老人を不思議そうに眺めながら、少女は平気な顔で中身を全部食べ切つて、お替わりまで要求した。

腹は痛くならないか、熱が出たりしないかと、老人は身がすり減る思いで少女に付き添つた。そしてその後、具合が悪くなるどころかますます快方に向かった少女に、老人はやつと安堵することのできたのだ。

少なくとも4日は水すら口にしなかつた人間が、すぐにこんなに食べられるものだろうか。そう首をひねるほど、少女は食べた。そしてつい先日までの人形のような姿が嘘のように、瑞々しい生気にあふれていった。

少女は無邪気に笑い、つられて老人の頬も緩む。

強ばつた顔もいつしか解ほどけ、老人は自然と笑えるようになっていた。

危うい均衡の中、二人は笑みを交わす。

「あのとき」のことには触れない、それが暗黙の了解になっていた。

「ありがとうございます」と微笑みながら眠りについた少女は、森全体が夕日の朱に染まるころ、再び目覚めた。

吸い込まれるような深い闇色の瞳に呼ばれ、老人は少女の元に駆けつけ白湯を含ませる。

老人の胸にもたれかかり、咽せないようにゆっくりと時間をかけて喉を潤した少女は、何度か声を出す練習をした。それから何かを訴えるように、力の入らない手で老人の腕を搔く。掠れる声で「お話が」と、精一杯身体を反らせて顔を見ようとする少女に、老人は一度身を離れた。

まだ横になっていた方がいい、そう諫めても首を横に振るばかりの少女に、老人は折れた。背にあるだけの布団を詰め、寄りかかれるようにして身を起こしてやると、少女はまた、ありがとうございます、と呟いた。

寝台の横に置いた椅子に腰掛け、老人は少女に話しかける。

「一体、どうしたね？」

「……ここは、どこでしょうか？」

「……トウルネイ山だ。帝国側のな」

この分ならもう、身体は大丈夫だろう。弱々しいが朝よりは随分しっかりした少女の声に、老人はほっと胸を撫で下ろした。

それでも「どこ」という言葉に心が痛む。それはあえて考えないようにしてきたことだ。この傷ついた小鳥は、この場所に望んで来たわけではないのではないか。そんな不安に身体の奥がざわめきだした。

アルトローラの、と口の中で小さく呟いて、少女は首を傾けた。

「では……わたしは、国境を越えられなかったのですね」

「……国境？」

「はい。サリフリへ……わたしは、サリフリへ行かなければなりませんから」

「サリフリ……アクサライの、か？」

ああ、やはり。ここに来たのは間違いだったのか。老人の胸はつきんと痛んだ。だがなぜサリフリなのだ、と訊けば、少女ははつとしたように黒い瞳を見開いた。

「……どうして？ わからない……どうして、わたしはサリフリに行きたいの？」

「なにか、なにかに引かれました。あれは絡み付いて離れなくて。それでサラを逃がして、それが精一杯で」

「あの時」のことを思い出そうと、少女は必死になっていた。

老人は何度も止めるよう言った。まだ目覚めたばかりでまともな身体も起こせないのに、無理をするなど。だが少女はやめなかった。とても大事なことから早くしなければと、苦しみながらそう言った。

どうやら少女は「何か」に襲われたようだった。

微睡んでいたところを強引に連れ去られ、その時にあの怪我を負ったらしい。誰に襲われたのか、何があったのか、しかし少女は覚えていなかった。ただ逃げなければとその一心で、「転送陣」とやらを動かしたのだという。



「わたしは代償を払いました。あそこにあつた陣は不完全で、とても使えるようなものではありませんでしたから。それに」

ぎらぎらと、その黒い瞳に狂気にも似た光を宿し、少女はひたすら記憶を探る。恐怖を押さえ、痛みをこらえ、事実だけを抜き出して、そこから答えを得ようと悶えている。

背に当てた布団に沈み、なのに目は中を睨みつけ、まだ思うように動かない身体からは鬼気迫る執念が感じられた。

「『転送』という魔術はありません。人は、空間を越えられないのです。でも『あれ』は違いました。……空間を越えて、わたしを引いたのです。 どうして？ どうすればそんなことができるの？」

老人は魔術のことはさっぱりわからないが、どうやらあの「星」のような魔術は存在しないらしい。そして存在しない物を無理に動かしたため、少女は「代償」とやらを支払ったようだ。

「『あそこ』に行けば、答えが得られるのでしょうか。……ならば行って、確かめなければ……ああ、駄目。わたしは、サリフリへ行くのです。……約束……そう、約束したのに」

少女は酷く混乱していた。

相反することを同時に口にして、そのことに取り乱す。

その矛盾を少女も理解しているようで、それは目覚めたばかりの身体には大きな負担となってしまうた。

ふつりと糸が切れたように、少女の身体から力が抜けた。荒い息をついて目を閉じた小さな身体を、老人はそつと抱きしめる。

「もういい。……もう、お休み。今の嬢ちゃんには、休息が必要だ」

ゆつくりと、老人は少女の背中を撫でさする。

少女も徐々に落ち着きを取り戻し、やがて深く規則正しい呼吸が聞こえてきた。

もう休ませなければ。

寝台に少女の身体をそつと横たえ、老人は古びた掛布に手を伸ばす。布を引き上げ少女の首元に辿り着いたとき、節ばった老人の手に、白い手が重ねられた。

ぎよつと身を引いた拍子に、たおやかな手はほとりと落ちた。だが老人に、その手の行方は見えていない。息を詰め、じり、と老人は一步後退った。

銀に輝く瞳が、ひたと老人を見つめていた。

夕べはあれほど美しいと感じた瞳が、今はこの上もなく恐ろしい。なにもかもが見透かされているようで、醜い心の奥底を暴かれまといと老人はまた一步、無意識に後退した。

「聴き方……」

天上の鈴を転がしたような声が出た。

声の主は、間違はなく少女だ。老人が横たえたそのままの姿で、顔だけをこちらに向けている。

「賢き方……どうか、わたくしの願いを聞いてください」

老人は動けなかった。淡く輝く銀の瞳に絡めとられ、ただ声もなくその瞳に魅入っていた。

涙を浮かべ、静かに密やかに、銀の少女は言葉を紡ぐ。

「この子が為そうとしていること。それは本来ならば、わたくしが

すべきことなのです。……全ての咎は、わたくしに。けれど、わたくしは……扉を開く代償として、差し出してしまいました。わたくしの時間はもう、残されていないのです」

やがて銀の瞳から涙が溢れ、頬を伝い雫となって零れ落ちた。

「今のわたくしは、ただ記憶を持つだけの愚かな子供。遙か彼方の思い出だけをよすがにして、荒ぶる海を漂う小さな木の葉。賢き方、どうかわたくしを導いてください。どうか……」

こぼれた涙を拭いもせず、銀の少女はただひたすらに祈りを捧げる。

「本質は、変わりません。この子は、わたくし。何も知らなかった頃の、わたくしです。……どうか、どうかお願いします」

この子を導いて

その言葉を残し、銀の瞳は消えていった。

淡い輝きは徐々に薄れ、瞳は色を取り戻し、やがて漆黒に置き換わる。

闇色の瞳がやがて目蓋の向こうに隠れた時、老人はがくりと膝をついていた。

どうしようもなく身体が震えて止まらない。なんとか震えを押さえ込もうと、老人は両腕を身体に回して蹲った。

怖かった。すべてお見通しだと、そう言われた気がした。

けれど首をもたげるいびつな想いを、どうしても押さえきれない。どうすれば、どうすれば、と呟きながら、やがて老人の視界も深い闇に沈んでいった。

どさり、となにかが落ちて、ごっん、とぶつかる鈍い音がした。  
小さなつめき声と、なにかを引き摺るような、衣擦れ。

（ ああ、これは痛い ）

うつすらと目を開けて、老人は目の前の床に積もった埃を眺めていた。

そういえば、しばらく掃除をしていない。

少女の具合が良いようなら、今日は外に連れて行こう。そしてその間に掃除を……

「おじいさまっ！」

切羽詰まったその声に、老人は咄嗟に跳ね起きた。

寝台のすぐ下で、少女がもがきながら手を伸ばしていた。

まだ力が入らないだろう手足を全部使って、少女は必死に老人の元へ這い寄ろうとしていた。

「おじいさま……っ」

慌てて胸の中に抱き寄せると、少女は大粒の涙をあふれさせた。

「行かないで……あの人のところに行っては嫌！」

老人の胸で少女は叫ぶ。

「あの人は、狡い！ 自ら望んで差し出したのに、今を無くしたく

ないと足掻いて！ わたしはただ『知って』いるだけなのに。あの人は生きている兄と会って、話して、触れているのに！」

そのうえおじいさままで連れて行こうとした、そう言って、少女は大声で泣いた。

その嘆きは深かった。

兄に死なれ、ずっと一緒だったという「サラ」とも引き離された。自分は何にも持っていないのに、あの人が全部持っていったと泣きわめく。

涙を隠そうともせずしゃくり上げるその姿は、幼い子供そのものだった。

（ 確かに、子供だ ）

どこにも行かない、大丈夫だと少女を抱きしめ宥めながら、老人はあのときの言葉を噛み締めた。

どこか後ろめたい欲望が、また大きくなってくる。

この少女が「子供」というなら……  
それならば。

子供には、庇護が必要だ。

しかもこの少女は襲われたという。

危険に満ちた下界になど、帰せるものか。

だが、ここなら安全だ。こんな場所に少女がいると、いったい誰が思うだろう。

偶然飛び込んできた、傷ついた可愛い小鳥。

今は手放せない。手放したくない。

わかっているのだ。

少女はまだ若い。

いずれ巣立ってゆくだろう。

だがそれまでの間、怪我が治るまでで良い。この飛べない老鳥の翼の中で、羽を休めてくれないだろうか。

「もう泣くのは終わりだ。ほら、こんなに目を赤くしてしまって」

埃の積もった床を這ったため、少女も汚れてしまっていた。特に顔など涙の跡が埃でまだらになって、無惨なことになっている。折角の美しい顔が、これでは台無しだ。それに前髪を掻き上げれば額が赤く腫れていて、これもまた痛そうだった。

老人はまだ動けない少女を横抱きにして、膝の上に乗せた。

「嬢ちゃんが泣くと、儂も悲しくなってしまう。……儂を泣かせた  
いか？」

んん？ と顔を覗き込めば、少女はいいえ、と首を振った。

「おじいさまが悲しむのは嫌です。……もう、泣きません」

「それがいい。本当に悲しいときは、泣くもんだ。でも悲しいのが流れていったら、笑っておいで」

抱きしめた少女の身体は暖かく、そして柔らかかった。

失った大切なものが不意に戻ってきたような、そんな気がしてならなかった。

大切な大切な、宝物。

今度こそ失うまい。

「さ、そのおでこと目を冷やしておきなさい。今朝はなにか口にできそうか？ 重湯を少し、試してみるか？」

少女を椅子に座らせて、水を含ませた布を額に当てる。

目覚めてから一晩で、少女は見違えるように元気になった。  
軽いものなら手に持つことができるし、身体を起こして息を荒げ  
ることもない。

この分ならずくに歩けるようになるだろう。  
歩けるようになったなら、この森を案内しよう。間近で観るトウ  
ルネイ山は雄大で、夕日を浴びて輝くさまは、涙が出るほど美しい。  
鳥も人を怖がらないから、手ずから餌を与えることができる。  
きつと少女は喜ぶだろう。  
その笑顔を想うだけで、心が踊る。

小さな器に入れた重湯と匙を、少女に渡す。  
老人の分は、茹でた芋と具のたっぷり入ったスープだ。  
見惚れるような優雅な仕草で重湯を平らげ、じつと老人を見つめ  
ると、それも食べたいと少女は強請ねだった。

急に食べては身体に障る。  
そう言って老人は断った。

だが目の縁を赤く染め、黒い瞳を潤ませたの「お願い」に負け、  
老人は自分のスープを手渡してしまったのだった。

結局老人の心配は杞憂に終わったが、そうとわかるまでは生きた  
心地がしなかった。かつては「鬼」と呼ばれた自分に、こんなにも  
甘い部分があったとは驚きだ。

身体にまだ暖かい血が通っていたことが嬉しかった。  
少女が元気になれば、これからますます楽しくなるだろう。

眠る少女を見つめながら、老人は想いを馳せる。  
次に武器屋が訪ねてきたら、女物の服を一揃い注文しよう。  
あの小さな足に合う靴も必要だ。

どれも大急ぎで作らせなければ。この辺境でどれだけのものが揃うかわからないが、なるべく可愛らしいものを。レース、リボン、他になにがある？

そうだ、帽子が欲しい。手袋と、耳当て、襟巻きも。これから日に日に寒くなる。この場所には雪こそあまり降らないが、冬はとても冷え込むのだから。

小屋にもうひとつ部屋を作ろう。年頃の女の子がこんな爺と常に一緒では、息が詰まってしまう。寝台、机、椅子、棚。はたして少女が好むような物が作れるだろうか

老人は、強く目を閉じ拳を握りしめた。

わかっている。

自分が何をしているのか、老人は十分に理解していた。

これは代償だ。

あのととき亡くした孫娘を、いまこの少女に重ねているだけだ。

少女がいるのはほんのつかの間。

怪我が癒えればすぐ飛び去ってしまう、少女は自由な小鳥。

だがそれでも構わなかった。

ほんのいつとき、幸せな夢が見たい。

「これから」を思っただけの心を、老人は押さえることができなかつた。



### エピソード・3

ここ数日の天気は快晴。森の中では賑やかに鳥が歌い、心地良い風がそよいでいる。

木漏れ日に目を細めながら、小屋の外、南側の木陰に向かって少女がそろそろと歩いていった。

だぶついた上衣に胸の下で絞って肩から吊った下履き。その上に長めの胴衣を纏った姿はいかにも珍妙だ。街中で会ったら、振り返ってまじまじと見てしまうような出で立ちだった。

だがそれを、少女はまったく気にしていなかった。それどころか、どこか誇らしげな笑みさえ浮かべている。まだ思うようには動かない足で一歩一歩を踏みしめながら、少女は老人の元に向かっていった。

星から零れたときに少女が着ていたのは寝間着のような簡素なつなぎで、とても外で着れるようなものではなかった。これまでは洗って乾かしながらその服を着せていたが、動けるようになった今、それで済ませるわけにはいかなかった。

とりあえず急場を凌げるようにと手持ちの服を少女に合わせ、そして老人は途方に暮れた。

一番小さい服を持ってきたのに、上着の丈は少女の膝を覆い、首周りからは肩が抜けてしまう。胴回り、袖丈などもはや論外だ。

繕い物や裾上げはできても、本格的な裁縫など老人は経験したこともない。どうすれば、と頭を抱えた老人に、意外にも少女が知恵を出した。

「背と前身頃の中心を詰めれば、肩は落ちないのではないでしょうか」

後は丈を詰めればいいとの提案に、老人は一も二もなく頷いた。自分で縫えます、そう言った少女の腕は確かだった。縫い目は揃い、手も早い。ただまだ身体が辛いようで、休み休みの作業ではあった。それでも2日目には下履きもできあがり、なんとか外に出られるようになったのだ。

老人も、少女の隣で靴を作った。所詮は素人、出来上がりはどうにも不格好だったが、それでも少女は嬉しそうだった。

「できたて」の靴と服を身につけて、少女は老人の元にゆっくりと歩み寄る。丸太を削る老人のそばに腰を下ろすと、そっと声をかけた。

「おじいさま？」

「うん？」

「『カイル』と言うのはどうでしょう？」

それは誰だ、と問いただしそうになって、老人は息を呑んだ。それは、名前。

名乗れない、と言った少女が考えた、新しい名に他ならなかった。

「わたしはいま、名乗る資格がありません」

名を尋ねた時に、少女はそう答えた。

なぜ、と問えば「すべて預けてしまったから」だと言う。本名を名乗るだけの「力」がない、と。支払ったという「代償」のことを言っているのか、それを訊いても少女は曖昧に微笑むばかりで、返

事はなかった。

だが恐らくそうなのだろうと予想はできた。あの銀の瞳は、それきり一度も目にするのがなかったからだ。

少女の名を知らなくても、老人はそれで良かった。

この小屋にはたった二人しかいない。「嬢ちゃん」「おじいさま」。互いを呼ぶのはそれだけで、すべてが事足りるのだ。だからあえて、老人は名前に拘らなかった。

その少女が、名を決めようとしている。

それは、つまり

(飛び立つのは……まだ早い)

老人は、拳を握りしめた。

歩けるようになったとはいえ、小屋から池まで往復するのに少女は息を上げている。これではカユテの村まで辿り着くことさえ無理だろう。傷もまだ、痛むはずだ。

「……それは男の名だろう？ もう少し、可愛らしくても」

「でも……髪はこんなですし。いっそ男として通した方が良く思っています」

頬にかかった髪を、少女は一房つまんでみせた。

顔の両脇こそ顎より下まで長さがあるが、少女の髪はうなじのあたりでばっさりと切られている。

通常、女性の髪は長く伸ばして結い上げるものだ。短い髪は女性にとってそれだけでも辱めになるというのに、少女は嘆いたりしなかった。

「自分で切ったのですから、仕方ありません」

自分で、とは言ってもそれは逃げるためだ。

決して望んでいたわけではないだろう。なのに少女は「頭が軽くなりました」と屈託なく笑う。

見苦しくないように、と少女の髪を整えた時は、それこそ胸がち切れそうだった。できるだけ長く残そうとしたのだが、頭の後ろはどうにもならず、うなじが露になってしまった。

男物の服を纏った短髪の子供。確かにこれでは「少女」というより「少年」と言ったほうが違和感はない。そしてより安全に旅をするなら「男」のほうが都合がいい。少女の言い分は正しかった。

老人は立ち上がり少女に向き直った。

だぶついた服が身体の線を隠しているが、揃えた膝に手を置いてじっと老人を見上げる姿は、やはり女性のものだ。一見すると少年のようでも、見るものが見ればすぐ女と知れるだろう。

日焼けを知らない白い肌、襟元から覗く首も手首もか細く華奢で、掴んだら折れそうだ。

これでは街中の少年とも言い難い。これはどう見ても上流階級の子供で、たとえ女と知れなくても、一人で歩いて無事に済むとは思えなかった。

「……おいで」

老人は少女を連れて池に向かった。

幾分肩を落として歩く老人の後ろを、少女はわずかに広げた両手でバランスを取りながらついてくる。

歩けるが、その足どりはまだ覚束ない。

(やはり……まだ早い)

ずつとここに、とは言わない。だが旅立つのは靴と服を誂えてからでも遅くはないだろう。

せめて、それだけでも待つて欲しかった。

鍛冶場のそばの、池を一望できる場所で腰を下ろすと少女もそれに従った。

「……怪我の具合はどうだ？」

「はい。だいぶ良くなりました。もう歩いても痛みません」

池を眺めながらぼつりと呟く老人の言葉に、少女も同じように池を見つめてそれに答える。

「だが、その左腕の傷は……」

「これは、このままです。これ以上は多分……治らない」

左腕に手を当て、少女は傷に視線を移した。

服に隠れ、布が巻かれて見えないが、押さえた右手の下には傷があった。ちょうど肘と手首の中間あたりにある、貫通した黒い傷。

他の傷より治りが遅いと感じてはいた。だが治らない怪我などないはずだ。

「治らない……？ そんな、馬鹿な」

「そついう傷なのです、これは。……呪い……だから」

少女の言うことが、老人は理解できなかった。

「ノロイ？ それは何だ。」

なぜ、そんなものがある？

どうして、この子がそんな怪我をしているのだ。

厳しい顔になった老人に少女はふわりと微笑んで、池の左を指差した。

「わたしが落ちたのは、あの辺りですか？」

「……ああ、あの岩の上だ、見えるか？ 折れた木があるだろうか？」

「はい」

「あそこから落ちた。……なのに怪我もせず、よく、無事で……」

目を細めた老人の肩に、少女がことりともたれかかった。肩を抱くと、少女は猫が懐くように喉を鳴らして身を寄せる。

「おじいさま、わたし、幸せです」

幸せなものか。

突然襲われ瀕死の重傷を負って。そのうえ「呪い」などという癒えない傷まで負わされて。これのどこが「幸せ」なのだ。

小さな肩を抱く無骨な手に、少女の白い指が触れた。つい力が入ってしまったかと外そうとしたが、少女はそれを押しとどめた。

「あの人は、ただ『あそこ』から逃げたくて『転送陣』を動かしました。サリフリまで行けるとは、最初から思っていなかったのです」

老人は、何も言えずに口を噤んだ。

魚だろつか、時折いくつかの波紋を広げる水面を見つめながら、

少女は静かに言葉を紡ぐ。

「だからここに来たのも偶然で。……おじいさまに見つけてもらえなかったら、わたしは今ここに、こうしていませんでした」

だからわたしは運が良い。そう言った少女の言葉は、心からのものだった。

しかしそうではないと、老人は思う。

綺麗なドレスに可愛い靴、甘いお菓子に色とりどりの花々。少女ぐらいの年頃だったら、こういったものに憧れるはずだ。まるでそれらを知らないともいうようなこの小鳥が、酷く不憫でならなかった。

言葉もなく首を振る老人の皺だらけの手を、少女は強く握りしめた。

「……もうひとり、いるのです。こんなふうに呪われてしまった、可哀想な子が。その子はとても苦しんでいました。そしてあの人は約束したのです。『必ず助けるから、待っていて』って……」

目を見開いた老人に、少女は顔を歪めながらも微笑んだ。

「わたしもその子を助けない。あの人のように、なにもしない  
で後悔するのは、嫌」

家族も無く家にも帰れない。ならばここにいれば良い、老人はそう言ったが、少女はそれはできない、と繰り返すばかりだった。

あの銀の瞳、支払ったという「代償」、口にできない「名前」  
襲われたという理由も、そこにあるとしか思えなかった。

だが少女は今や、ただの子供だ。

なのになぜ、この子ばかりが苦勞しなくてはならない。

酷い怪我をした、髪も切った、まともな服もない。自分の物は、本当に何一つ持っていない。だというのに、もう一人の呪われた子のために、少女は行くという。サリフリに呪いを解く「きっかけ」があるはずだからと。

老人は少女を抱きしめた。

まるで言葉を忘れたかのように「なぜ」としか出てこなかった。

「泣かないで」と少女は老人の背に手を回す。

「この傷が、わたしは愛しい。これはあの子とわたしを繋げてくれましたし……おじいさまとも引き合わせてくれましたから」

少女の声にも涙が滲んでいた。

もう泣かないって言ったのに。ごめんなさい。

小さな声が胸元から響いてきた。

老人は、小刻みに震える少女の身体を、ただ抱きしめることしかできなかった。



## エピソード・4

アケビ、サルナシ、セリ、ユリネ。春のようにはいかないが、そこそこの収穫だ。

朝靄のたなびく中、老人と少女は森に分け入り山菜を採っていた。そもそも最初の目的は、できるだけ早く出発したいという少女の願いから始まった。

カユテの村までは徒歩で半日。せめてそれだけ歩けないなら、ここから出すわけにはいかない。そう言った老人に、少女は大丈夫、と大見得を切ったのだ。ならば歩いてみせろ、と挑発すると少女は真剣な顔でこう返した。

「ただ歩くだけでは面白くありません」

そして籠を持ち、なぜか二人で山菜を採っていた。

湧水の池から流れる小川に沿って、老人はことさらゆつくりと歩を進める。少女は老人の膝を気遣いながら、周囲をくるくると動いて食べられそうな山菜を採ってきた。生で食べられるものはその場で齧りながら、二人は歩く。試験というよりも、それはまさしく散策だった。

百合を引き抜き球根を掘り返す少女の様子に、老人は顔をほころばせる。

驚くべき回復力だった。昨日はまだ足どりが覚束なかったのに、たった一晩で、これだ。この分なら、たとえ止めても飛び出しているってしまっただろう。

(その前に、できる限りのことを)

目を細め、顎髭を撫でながら見守る老人の元へ、少女がユリネを持って来た。

小川で軽く洗われたそれは、丸々と良く太つてとても旨そうだ。今晚はこれを使ったスープにしようか。そんなことを考えながら手にした籠に入れていると、「あ」と言葉を残して少女が藪の中に分け入った。

どうした、と声をあげかけた老人に、少女は振り向くと人差し指を口に当てて「しっ」と言う。思わず口を噤んだ老人に、にこりと笑みを浮かべて頷くと、少女は腰を落として藪の奥に姿を消してしまった。いったい何をしているのか、老人が奥を覗こうとしたとき、とひしゃげた短い声が耳に届いた。

(もしや、狼でも……)

少女の声ではないが、少女の向かった先から聞こえたその声に、無性に不安になってくる。後を追おうと藪に一步踏み出したとき、弾けるような声がした。

「おじいさまっ！ 見て！」

獲れた、と頬を上気させて戻ってきた少女の右手には、雉の足が握られていた。気絶しているのか、頭と翼を下に垂らして雉はぐったりとしている。

まさか、と眼を丸くした老人に、少女は胸を張って獲物を掲げてみせた。

「立派な雉でしょう？ 今日のご飯にと思って」

ユリネと同じくこれも丸々と太った、大きな雄の雉だった。  
畏も弓矢も無しにどうやって獲ったのかと聞けば、石を投げたの  
だと少女は言う。

「石……？」

老人は吹き出した。

まさか、そんな方法で雉を獲るとも獲れるとも思わなかった。  
腹を抱えて笑う老人と一緒にあって、少女も笑う。  
昨日とは別の意味で、二人は涙を流したのだった。

その日の夜は、久しぶりの豪華な食事になった。

もちろん老人の作る料理であるから、街の食堂のようにはいかな  
い。だが塩をふって焼いただけの雉肉は、それだけでも頬が落ちそ  
うになるほど美味であった。セリとユリネのスープも、トリガラの  
出汁と秘蔵のチーズを加えたおかげで濃厚な味わいになっていた。  
コクのあるスープの中に、ほろりと甘いユリネと歯ごたえのあるセ  
リ。何とも絶妙な味わいに、二人は何度も碗を空けた。

食後にサルナシを食べて茶を飲んで、満足げな吐息を漏らした少  
女を誘って外に出る。

山と森に遮られて満天の、とはいかないが、樹々の間から覗く夜  
空では、輝く砂を撒いたように星が瞬いていた。老人は星の読み方  
を少女に教え、少女もよく話を聞いた。

そして時折視界を横切る流れ星が、二人を存分に楽しませてくれ  
たのだった。

「おじいさま、これは……？」

「使わないに越したことはないが、念のためだ」

手渡された黒剣に、少女は眼を見開いた。

それは老人がこの山奥に移り住んで間もないころ、森で見つけた不可解な金属から削りだした二振りの剣だった。これはもともと長い板のような金属が折れたものだが、鋼を溶かす炉にくべても曇りもせず、鎚で叩いてもヒビひとつ入らなかった。

鍛冶師が剣にできない「金物」などあつてたまるか、と石とも金属ともつかないこの板を、老人は半ば意地で研いだのだ。結局磨き上げたところで気力と情熱が尽きてしまい、柄にも鞘にも装飾はしなかった。ただ刃だけは極上の出来だったため、長く鍛冶場に置かれていたのだ。

少女は剣を使えると言った。

ならばこの黒剣は身を守り、旅の助けとなるだろう。

それにこの双剣は、もともとひとつだったのだ。同じ金属から削りだされた剣ならば、互いに引き合い、助け合ってくれるのではないか。

なんと自分勝手に我侭な、都合の良い願いだろう。しかも、ただの剣にこんなことを望むなど、かつての自分なら鼻で笑ったところだ。

だが老人は、そう願わずにはいられなかった。

「村に着いたらまず武器屋に行け。なに、店はここからだと最初に見える家だからすぐわかる。そしてその親父に『ランドルから』」  
だと言つて、剣と手紙を渡してくれ。それで旅に必要なものはすべて揃はずだ。いいな？ ……カイル」

その名を口に乗せてしまえば、二人の間に壁ができてしまうような気がした。それでこの時まで老人は、少女の新しい「名」を呼べなかった。

そして恐る恐る、窺うように見上げてくる黒い瞳も心細げに揺れていた。

ああ、この子にとっても同じだったのか。

老人の目尻に深い皺が刻まれ、知らず口元が緩んでしまう。

「ランドルさま……これからも『おじいさま』とお呼びしても構いませんか？」

「勿論だとも。儂のことはそんなふうにて呼ばんでくれ。それはずっと昔に捨てた名だ」

「はい。……お世話になりました。ありがとうございます……」

最後は消え入るような声になったが、少女は深く頭を下げた。

少女はしばらくそのままじっとして、それから勢いをつけて身を起こした。

生気に満ちた漆黒の瞳。

そこからは、不安も戸惑いの色も消えていた。

「それでは、おじいさま……行ってきます」

一度だけ振り返って、少女は森の奥に消えていった。

腰に一振りの剣を挿し、背に對の剣をくくりつけたその足取りにもはや迷いはみられない。

そのしつかりとした歩みに安堵しながらも、老人は胸に手を当て祈りを捧げる。

神に祈ったことなどなかったが、この時ばかりは縊らずにはおれなかった。

どうか、無事で。

少女が星から零れ落ちてわずか10日。

目を覚ましてからはほんの数日。たったそれだけで、慌ただしく小鳥は飛んでいってしまった。

老人は、雲一つない蒼い空を見上げてひっそり呟く。

「遮る物のない空で、心が望むまま存分に羽ばたいておいで。そして疲れたら、またここに」

それは飛べなくなった老人の、心からの願いだった。

暗闇を抜けて・1

目覚めが近いのか、もそもそと衣擦れの音がする。その密やかな音は近づいたかと思うと遠くなり、やがて「んっ」と小さな声が出た。

(んんっ)

吐息と言った方がいいような、小さな小さな声。それが終わると少しして、長い息が吐き出された。それから軽やかに身を起こすと声の主は大きな瞳を瞬かせ、周りをきよときよと見回している。

眼を閉じたままでも、背後で起こっていることが手に取るようにわかってしまう。ラウルは身体を動かさないよう注意しながら、必死になって笑いをこらえていた。

ふと、何を見つけたのか、息を呑む音がした。

衣擦れと、かさこそ紙を開ける軽い音。

そして

(ラウル……ラウルっ！)

潜めた声で名を呼ばれ、ゆさゆさと肩が揺らされた。

それで初めて目覚めたように顔を巡らし、あえてゆっくり眼を開ける。

目の前には早朝だというのに感動と喜びに満ち溢れた、輝くばかりに美しい顔があった。

(……おはよう)

(おはようございます。      ラウル、これ！)

声を潜め、まずは二人で朝の挨拶を済ませる。それから改めて、カイルは手にした物を差し出した。

それは、菓子だった。

夕べ寝る前に上着のポケットに入っていたのに気が付いて、隣の枕元に置いておいたのだ。

(ああ……これは昨日、皆の皆さんから頂いたんだ。後でお礼を言っておきなさい)

(はい！)

昨夜一緒に休んだ騎士は、小屋の隅でこちらに背を向け、まだ丸くなっている。彼を起こさないようにと気を使い、カイルは小さな声で返事をした。

窓の外はまだ暗い。時刻は陽が昇る寸前といったところか。だがもうそろそろ兵舎の方も本格的に目覚める頃だ。動き出しても問題ないだろう。

剣と貴重品と細々とした物を持ち、カイルを連れて土間へ向かう。長靴ブーツに足を入れながら、ラウルはタヌキに問いかけた。

「      で？      君はどうする？」

「……行く」

栗色の頭を掻きながら、騎士はのそりと起き上がった。緩慢な動きで準備をし、カイルの隣にどすんと腰を下ろす。

「おはようございます、ザックさん」

「おまえさあ……朝っぱらから、なんでそんなに元気なんだよ」



「は……?」

くそ、いつてえ、と愚痴をこぼしながらぞんざいに靴を履くと、ザックはまっすぐ扉に向かった。

あからさまに不機嫌そうなその様子にカイルは目を丸くして、ラウルの膝に縋りつく。

「わたし……寝ている間に、なにかしてしまったのでしょうか?」

「いいや、行儀良く寝てただけだ。……そうだな、彼は拾い食いでもしたのだろう」

気にすることは無い、と続けてラウルは大事なことを思い出した。三和土に足を降ろしたカイルの前に片膝をつき、闇色の瞳にしっかりと視線を合わせて言い含める。

「カイル、挨拶もできないような大人には、なってはいけない。人として、な?」

「はい、勿論です。……それにわたしは、もう大人ですから」  
「嘘をつけ!」

にこりと微笑んだカイルの言葉に、ザックが振り返って異議を唱えた。そこに翠と黒、2対の視線が突き刺さる。あれが「挨拶もできない大人」の見本だと囁かれ、国を背負った騎士はぐつと詰まった。朝の挨拶もできないようでは帝国の威信も地に落ちよう。だが彼はめげなかった。拳を口元に当て、おほんと大仰に喉を鳴らし、にやりと口元を引き上げ片手も上げる。

「俺は騎士だからな、ちゃんとして礼儀は心得てんだ。……オハヨウゴザイマス!」

「お、おはようございます……?」

「おはよう」

「……っかー！ やっぱりこれだから田舎者は！」

顔を見合わせるラウルとカイルに、両手で頭を掻きむしってザックは吠えた。この仕草はどうやら都で流行っているようだが、知らなければただの奇妙な行動に過ぎない。これだから都人は、と思っただが、ラウルは黙ってカイルを水場に連れ出した。

こんな変な挨拶は教育上宜しくない。興味を持たせてはいけけないのだ。

外は、深い霧に覆われていた。

とろりとした真つ白な雲が辺り一帯に立ちこめて、数歩先を歩く騎士の姿さえ霞ませてしまうほどだ。トウルネイ山もそこから伸びる山々も、すべてが白くとけ込んで、わずかな影すら見えなかった。眼に見えない冷たい水が頬を撫で、鼻から口から身体の中を浸食する。その息苦しさ二人の男は顔をしかめたが、少女は一人、元気がだった。

「……二人とも、まだ戻らないのですか？」

顔を洗って髪を梳かし、あっという間に身支度を整えたカイルが小首を傾げて二人に尋ねた。手にした袋を漁っていた騎士と護衛士は、顔を見合わせ曖昧に頷く。

「……あのな、チビ。男はな、準備に時間がかかんだよ」

「ああ、先に戻ってきてくれ」

どうやら彼ら二人には、これから何かがあるらしい。今度は反対側に首を傾け、不可解なものを見るように瞳を瞬かせながらも、カイルはわかりましたと素直に応じ、小屋の方へと戻っていった。

「君は…… 必要ないんじゃないのか？」

「なんつーか。これは今まで暇がなかっただけのことです……」

「アクサライなら、そのままの方が目立たんだろうに」

「…… そりゃ、そうなんすけどね？」

二人は念入りに、伸びた髭を剃っていた。

ラウルの眼と髪の色では誤魔化しようもないが、ザックなら、服を替えればアクサライ人らしくはなる。アクサライの男性は成人すると髭を立てる習慣があるから、伸ばした方が現地で馴染み易いだろう。そう言うラウルの意見はもっともだ。だがそれでもザックはしよりしよりと、耳から顎の下にかけては特に丁寧に手を入れて、濁った鏡を眺めながら髭を剃った。昨夜おじさん呼ばわりされたことが、余程堪えているらしい。子供の言うことにいちいち目くじらを立てても仕方が無い、そうは思っても笑って流せない辺り、まだまだ嘴の黄色い男のようだ。

ラウルは手早く後始末をすると、声をかけてその場を離れた。ああ、とかくそ、とか言っている騎士は、まだ時間がかかりそうだったのだ。

冷たい霧をかき分けながら小屋の近くまでくると、傍で黒い影が動いていた。警戒しながら近づくと、それは小柄な人影で、カイルだ。

一度構えて剣を振り、足を捌いて切り返す。形を変えて払って引

いて、どうやら稽古をしているらしい。

剣を扱うそのさまは、まるで舞うように優雅だった。どこかで見  
たことがある、そう感じたのも道理、それは剣を持ったときに初め  
て行う訓練の、その一連の動きだった。大人も子供も剣を扱う者な  
ら必ず行う準備運動で、通常両手で持つて行うそれを、少女は右手  
一本でこなしている。

身体の隅々まで神経の行き届いた、重心のぶれない綺麗な動き。

「腕には自信がある」というだけのことはある。  
なるほどこれは

「……中々に筋がいい」

ぎよつとして声のした方に目をやると、隣で壮年の男が腕を組み、  
じつとカイルの動きを追っていた。いつの間にもやってきたのか男は  
この皆の長で、夕べは率先してラウルを足止めしていた。まったく  
気配を感じなかったのは、伊達に皆長などしていないということだ  
ろう。だがそれにしても。

あんたが監督するのはこつちじゃない。

はつきりところ言ってしまうれば、どんなにすつきりすることか。  
だが公的権力に無駄に歯向かうのは得策ではない。ラウルはむつと  
押し黙った。

「ふむ。お父さん、どうでしょう。お子さんを帝国ていこくに預けてみませ  
んか？」

「……俺の子では、ないのだが……」

「まあ、そう言いたくなる気持ちもわかります。お父さんはまだお  
若い。ですが子供の成長とは早いものでして……」

何を言っているのか、さっぱりわからなかった。ここの連中はど  
うしてこう、勝手に思い込みで話を進めるのだ。

「冗談でなく頭痛がしてきて、ラウルは額に手を当てた。

「おっ、面白そうなことしてんじゃないかねえの」

雲の中を泳ぐようにして、ザックが戻ってきた。ラウルと隊長と、その向こうの人影を見ると、舌舐りして腕をまくる。

「よし、チビ。俺が相手になってやる」

「嫌です！」

即答だった。

呆気にとられ、動きを止めたその一瞬の間をつき、カイルはとつと逃げ出した。

「あつ、逃げんな、チビ！」

「だってザックさん、本気でやるつもりでしょう？」

「つたりめえだ！ じゃなきゃ訓練にならんだろ」

小屋の裏手にカイルは逃げ、ザックもそれを追いながら、二人は大声で言い合った。

「本気でなんて、そんなの、嫌です！」

「なんでだよ！」

「だって、剣に傷がつくじゃないですか！」

「……はあ？」

ついに小屋を一周したカイルがラウルの傍に寄ってきて、盾にした。ここで敵を迎え撃とうと、そういう魂胆らしい。ザックは呆れ、両手を腰に当てて顎を突き出しカイルをねめつける。

「じゃあおまえ、なんで剣なんか……持ってるの？」

「これは、お守りです！」

「……言い切ったな……」

くしゃとザツクは頭を掻いた。

そんなことは当然だ、と言わんばかりのカイルはラウルの背に両手を当てて、そこからひよこりと顔を出す。可愛らしく尖らせた唇がフードの奥からちらりと覗き、その様子に大人達は苦笑するしかない。剣を傷つけたくないと言ってはいても、人に向けるのが怖いのだろう。鍛錬とはいえ下手をすれば怪我をする。「手合わせ」は、ひとりで剣を振ることは違うのだ。

けれどもそれでいいと、ラウルは思う。この子はまだ子供で、しかも女性だ。他人を傷つける方法など、知って欲しくないし、知らなくて良い。

ラウルは、胸の前にカイルを引き寄せた。

「そういうわけで、どうやらコレには向かないようです」

「うーむ……居てくれるだけでいいのだが」

「一体、何をさせたいの？」

「……此処には潤いが足りんだ」

やはり目的は、それか。

湿気なら、じゅっぶん過ぎるほどありますよ？ とまた妙なことを

を言い出した口を塞ぎ、ラウルはやけっぱちな案を出した。

「……猫でも飼ったらどうですか」

「うむ。猫はな……触らせてくれんだ」

「……構いすぎでしょう」

やはりそうだろうかと呟いた皆長に、そうですと、ラウルはきつ

ぱりと断言した。

（たかが一介の護衛士が、なぜ『皆内の癒し』について世話を焼かなければならんだ）

ラウルのそのもつともな疑問に、律儀に相手をするからだ、と教えてやる親切な者は誰もいなかったのだった。

## 暗闇を抜けて・2

それから3人は小屋に戻り、彩り豊かな朝食を摂った。

持参した食糧の大部分は食べ尽くしてしまったため、朝は質素な食事になるはずだった。ところがザックが「騎士特権」とやらで牛乳と果物を兵舎から貰ってきたおかげで、そこそこ豪勢な食事を得ることができた。

「……騎士特権？」

「おうさ。国内ならな、衣食住が保証……」

そこまで言って、ザックははっとして黙り込んだ。ラウルの眼差しが凍りつく。

「ほう、衣食住が、ね」

昨夜食事が出ないと言っていたのは嘘だったと、あっさり自白したのだ。小さくなった騎士を睨みながら、ラウルはこれ見よがしに溜息をつく。

( 馬鹿め )

詰めが甘過ぎる。嘘をつくなら最後まで貫き通せと、そう言ってやりたかった。しかしその「騎士特権」とやらは考えるまでもなく、食べ盛りのカイルのために使ったものだ。昨夜の詫びのつもりかもしれないが、こちらも「食事代」を貰ったことでもある。今回だけは不問に付そう。



見ると迂闊な騎士は、ちらりちらりとラウルを窺いながら、背中を丸めてもそもそパンを食べている。その姿はまさに熊が蜂の巣を抱えているようで、ラウルは危うく吹き出しかけた。慌てて咳で誤摩化した。それをじつと見ていたカイルが「二人だけでイイコトして、狡い」などと言い出したので、誤解を解くのに苦労した。

食事の後に小屋を軽く掃除して、ラウルとカイルは出発の準備をして外に出る。ここは遠大なトゥルネイ山地の崖の下、そのため夜明けを過ぎても山の影に入ってまだ薄暗い。それでも徐々に霧は薄れ、皆の広場が見渡せるほどになっていた。

二人は毛布を返し、<sup>トンネル</sup>隧道の前で扉が開かれる時間を待つ。そこでカイルが気づいた。いつの間にかザックが消えたのだ。

ここに居ると言っていたのに、とカイルは不安げに辺りを見回し、小屋の周りを何度も探した。用を足しにでも行っているのだろうと、ラウルは気にしなかったが、ひとつ気懸かりなこともあった。良い機会だ。折角のこのタイミングを、逃す手はない。

「カイル……気付いていたか？」

「はい、なんででしょう？」

「彼の……その、変化だ」

変化、と聞いてカイルは瞳を瞬かせた。

「ザックさん、具合が悪いようには見えませんでしたか？」

「いや。彼の……顔にな」

「顔？ そういえば、頬にいくつか切り傷がありましたよね？」

あの傷が悪化したのでしょうか、と心配するカイルを安心させるように、ラウルは腰を屈めてフードの奥の瞳を覗きこんだ。

「そうではない。……気がつかなかったか？ 髭が無かつたろう？」

「あ、そういえば」

「親しい人になにか変化があったら、一応褒めておけ。彼にはそうだな……『若くなつた』とでも言つてやるといい」

「……はい」

わたしが気がつかなかつたから、ザックさんは居なくなつたとすつかりしよげ返るカイルを宥めながら、広場の隅で時間を待つ。大丈夫すぐに戻ってくる、とラウルが言った通り、ほどなくして笑顔で騎士が現れた。なんのことはない、馬を取りに行つていただけのようだ。

「おう！」

「……ああつ！ ザックさん！」

その無事な姿を発見すると感極まつてカイルは声をあげ、そしてそのまま駆け寄つた。ザックの方でも腰を屈め、両手を広げてそれに応える。

が、飛び込んでくる身体を支えようとした両手は空を切つた。カイルの目的地は、連れて来た馬の方だったのだ。

もはやカイルの視線は馬に釘付けで、ザックのことなど見向きもしない。頬を染め、瞳をきらきら輝かせて馬の姿に魅入っている。

「触つても、良いですか!？」

流石帝国の騎士が持つだけあつて、それは立派な馬だった。艶やかな黒鹿毛で額に星があり、四肢の先だけが白く抜けている。

つい先ほどまでの満面の笑みを仏頂面に変え、それでもザックはああ、と応じた。カイルは飛び上がらんばかりに喜んで、大きな馬に抱きついた。

馬の鼻すじと耳の下を搔きながら、可愛い可愛いと、しきりに繰り返して頬を寄せる。

「わたし、馬は靴下履いている子が一番好きなんです！」「  
くつした……」

ぶつと吹き出しそうになったのを、ラウルは再び咳で誤摩化した。自慢の馬を「靴下」などと評されて、ザックはいささか慥然としている。

「あのな、チビ。こいつにや『ハーシユ』って名があるんだ」「  
ハーシユ、ジュニアですか？」

「……おう」

「じゃあ、『ハーシユ』って呼びますね！」

「いやそこは、『ジュニア』の方で……頼むから」「  
ハーシユ、ね……」

ラウルがそう呟くと、ザックはそつと目を逸らす。

その名が故意か偶然かはわからない。だがいずれにせよ「本人」との浅からぬ関係が連想させられた。このザックという男、意外にも帝国中枢に近いのかもしれない。

もつともカイルには、そんなことは関係なかった。「ハーシユ」の方が呼び易いのに、と零しながら何度も「ジュニア」と声をかけ、飽きずに馬を撫でていた。

やがて時間が来た。トゥルネイ山地を貫く、オノレ隧道の扉が開かれる。この長いトンネルを抜ければ、そこはアクサライ王国だ。

そしていよいよ出発というその時に、なぜか砦の兵がゾロゾロ出てきた。それを見たカイルはお菓子のお礼を言ってくる、と元気に駆けて行ったのだが……

なぜか一人一人と握手をして、さらに菓子を貰っていた。

ラウルは唸った。再び頭痛がしてきたような、そんな気がして額にそっと手を当てる。

たった3人の出発のために、なぜ正規軍が手土産つきで見送りにくるのだ。

「……………どうなっているんだ、ここの連中は」

「おやまあ、チビ、凄えじゃねえの」

ひゅう、と口笛を吹いて帝国の騎士は暢気に笑う。

(帝国というのは、こんなにもいい加減だったろうか……………?)

この騎士と、ここの兵たちが特殊なだけだと、ラウルはそう思ったかった。

砦に駐在するほとんどの兵と挨拶を交わし、背負った荷物をずいぶんと膨らませてカイルは戻ってきた。

「ラウルっ！ お菓子をたくさんいただきました！」

「……………そうか、良かったな」

見て、と頬を紅潮させて報告したカイルの頭を軽く撫で、保護者として仕方なく礼を言う。砦長が右手を差し出し、ラウルもそれを握り返した。

「また是非、いつでも来てくれ。歓迎する」

「ええ……………まあ、いずれ」

「んじゃ、行くか」

言うなりザックがカイルを持ち上げ、ひよいと馬の上に乗せた。あんだけ食ってて、なんでこんなに軽いんだよ、と愚痴りながらもぴしりとカイルに命令する。

「いいか、チビ。お前は荷物だ。だからしばらく黙ってる」

「は、はい」

「喋るなよ？」

突然のことに、カイルは眼と口を大きく開けて固まった。だが念を押され、慌てて両手で口を塞ぐ。その姿に眼を細めて頷くと、ザックは皆長の肩に手を回した。

「隊長さんよ、あれは積み荷だ。だからこのまま通っても構わんよな？」

「む？」

「……正直な、アレがうるちよろししていると危ないし、邪魔なんだ。手綱は俺が持つからさ、荷物つてことで許可してくれ」

「うむ。……そうだな。確かに『壊れ物』ではある。……よろしい、許可しよう」

アルトローラの法では、オノレ隧道内での騎乗は禁止されている。だが暗いトンネル内で、小さなカイルが馬の周りを歩くのはかえって危険だと、ザックはそう言っているのだ。

それに皆長は柔軟に対応した。

確かに杓子定規で融通の利かないどこぞの神殿よりは、遙かにマシだ。しかし悪趣味な茶器を売ってみたり、子供に菓子をくれてやったりと、柔らか過ぎやしないだろうか。

ラウルは眉間を揉みながら、何度も自らに言い聞かせた。この騎

士とここの兵たちが特殊なだけなのだ。問題ない。

砦の兵に見送られ、一行は隧道内に踏み入った。

先頭はラウル、次いでザック。そして手綱を引かれた黒鹿毛の馬と、その背にやたらと可愛らしい「動く荷物」。荷物は馬に跨がり片手で口を押さえ、振り返りながらも片方の手を振り砦の兵たちに別れを告げる。

入り口の向こうが白い光に滲むまで、カイルはずっと外を見ていた。

薄く曇った空、ひやりと湿った空気、天に聳える数々の巨木。助けてくれた鍛冶師の老人、優しくった村の人、お菓子をくれた、砦の人たち。

そのすべてを忘れないというように、しっかりと眼に焼き付ける。

「……おっし、チビ。もう良いぞ」

声を出す許可を貰って、カイルは口を押さえていた手をやっと外した。

ぷはつと息を吐きだし深呼吸する姿に、徒歩の二人はくすりと笑う。

「なんだよチビ。息まで止めてたのか？」

「少しだけ、です。だって荷物は息をしないでしょっ？」

その言い草に、ラウルとザックはぷつと吹き出し肩を揺らした。

「もうっ、なにが可笑しいのです？」と拗ねる少女がまた面白くて、二人はしばし、呼吸困難に陥った。

あまり笑うとまた拗ねて、口を利かなくなってしまう。ラウルは

涙を拭いつつ、足を緩めて振り返った。

「ああ、カイル。眼は慣れたか？」

「……眼？」

「そうだ。何か見えないか？」

んん？ と鼻を鳴らした後に、カイルははっと息を飲んだ。

「わたしたち、明かりを持っていないのに、どうして周りが見えるのですか？」

一行はトンネルの中を歩いている。道は緩やかな弧を描いており、出口も入り口も、そこから漏れる光さえ届かない場所にいる。だといつのに辺りには、まるで海の底にいるような、深い藍の光が満ちていた。人の形がうつすらと判別できる程度だが、それでも真の暗闇ではない。

きよときよと周りを見回すカイルに、ラウルとザックは声をあげずに再び小さく肩を揺らす。

「チビ、上だ、上」

「うえ？」

言われるままに仰のいて、カイルは言葉を失った。

頭上には、満天の星。闇夜に撒かれた輝く砂が、一筋の河となつて続いている。河は緩やかにうねりながら道の先へゆるりと伸び、隧道をほのかな藍の光で満たしていた。

「……凄い……生きてる……」

呆然と呟いたかと思うと、カイルは何度も手を打ち歓声を上げた。

「……カイル？」

「ラウル、凄い！ 凄いことですよ！ これは！ この遺跡、まだ生きてる！」

「遺跡……これが？」

騎士の疑惑も護衛士の懸念も意に介さず、少女はただただ歓喜した。凄い、凄いと何度も繰り返し、最後に胸の上で両手を強く握りしめる。

よかった、これで。その囁くような声を聞き咎めた騎士が口を開くと同時に、少女が身を乗り出した。

「そうだ、ザックさん！」

「っと危ねえ！ ちゃんと座ってる」

鞍から落ちそうになり、すみません、と肩をすくめた少女は上機嫌で笑っている。あの潤んだような声は、気のせいだったのだろうか。

手綱を引きながら首をひねった騎士を、少女は今更のように褒め称えた。

「ザックさん、お髭がないと、わたしよりも若く見えますね！」

「お？ そうか？」

見え見えの世辞に、それでも騎士は喜んだ。つるりとした頬の感触が気になるのかしきりに頬を撫で、これも良いかもしれない、とそんなことを呟いた時だった。

「だから、わたしが『お姉さん』ですね？」



くすりと笑って返されて、ザツクの顎がかくりと落ちた。

「う、うつせえ！ 勝手に決めんな！」

「……まんざらでもないくせに」

またくすりと笑われて、いよいよザツクの眼がじとりと据わる。

若く見られるにも限度があると、そういうことらしい。三十路を越えれば腹も座るが、その直前というのが気になるようで、この年頃の男というのは本当にムズカシイ。

ラウルはふう、と息を吐きだした。

ここは狭いトンネルの中。馬がすれ違うのがやっとの幅で、天上だけがヤケに高い。おまけに周りは叩けば高い音が返ってくるような石。それは即ち

わんわんと、声が何重にも木霊する。それに負けないような大声で、ザツクとカイルは言い合った。しかも二人のじゃれ合いは熱を帯び、徐々に声が大きくなる。

「だーれがお前より年下だつて？ 未成年が、粋がんな！」

「わたし、とつくに成人してます！」

「あー、アクサライではそう言う部族もあつたな、確か！ …… 1  
4 だつたか？」

「ちーがーいーまーすー！」

「ちーがーわーなーいー！」

藍色の闇の中に、高低合わせた不協和音がくわんくわんと響き渡った。まるで頭の中を金棒で掻き回されるようで、馬も不満げに鼻を鳴らして幾度も頭を振っている。これ以上大声を出されると、流石に限界を越えてしまう。

ラウルはちらりと振り返り、両手で耳を押さえながらあえて大き

く息を吐き出した。「大人だと言いつける子供」と「子供と一緒になつて口喧嘩をする大人」。どっちもどっちだ。

「ふん……どちらも子供に違いない」

「……………」

それきり姦しい口喧嘩はぴたりと止んだ。しかし、ぼそぼそとした言い合いはその後も続く。今度のネタはラウルらしい。

(おとーさんは、おかーさんみたいに口煩いな?)

(だから、ラウルは『お兄さん』です!)

(チビ……ほんつとに、冗談が通じねえのな?)

(言つて良い冗談と、悪い冗談があるんです!)

(……これのどこが悪いんだよ)

(ラウルが『おとうさん』つてどこに決まつてるじゃないですか!)

(……はあ?)

(だって、『おとうさん』は勝手なことばかりして、すぐにいなくなつてしまふ人のことでしょう?)

ラウルはそんなことしないもの、と続けたカイルに、ザックは言葉を失つた。栗色の頭をくしゃりとかき回し、動揺を押し殺す。

「はは……そうだな、うん。『おとーさん』じゃなくて『おかーさん』だ。間違えちまつたな」

「ザックさん……ラウルは女の人ではありませんよ?」

「そ、そう、そうだよな。うん」

「そうでしょう?」

ね、とカイルが笑んで、ふふ、と小さな息を漏らした。そこには嘆きや憂いの色はみられない。けれど騎士も護衛士も、言葉を発す

ることができなかつた。あれほど少女が「兄」にこだわるその意味が、重く胸にのしかかる。

それきり言葉もなく、一行は静かに歩を進めた。二つの靴音と、一頭の蹄の音だけが隧道内に響き渡り、囁くような律動を刻む。

だが深刻な顔をして黙り込んだのは地を歩く二人だけで、馬上の少女はずっと天を仰いでいた。感嘆の息を何度も洩らし、時折「凄いね、ハーシュー」と馬の首筋をくすぐっていた。

ぶるり、と馬が鼻を鳴らして頭を起こした。耳がピンと立って前方を向き、心持ち足が早くなる。

人もはっとして気がついた。遙か前方に、光が見える。横から差し込む色は白。隧道内の藍とは違う、地上の光。

無意識のうちに、人馬の足が速まった。皆小走りになって光を目指す。白い光はどんどん大きくなってくる。闇に慣れた眼に光が射し込んで、じわりと涙が滲み出た。眼を閉じて、それでも駆けた。強い陽が身体全部を包み込み、目蓋を閉じても眩しくて、歯を食いしばって手をかざす。手のひらがじわりと熱を持ち、靴の底からは草を踏みつける感触がする。

息を切らして躍り出た一行に、強く輝く陽の光が降り注ぐ。そしてふわり、と涼やかな風が頬を撫でた。

「ここが、アクサライ」

眼を細めて手をかざし、涙をこぼしながらもぐるりと辺りを一巡する。

広がるのは、果てのない緑の草原。

なだらかに下る数々の丘。はるか遠くに霞む、山らしき影。

乾いた風に乗る、草の匂い。筆で佩いたような薄い雲。どこまでも高い、蒼い空。肌を刺す、鮮烈な陽の光。

カイルは、左腕にそっと手を当てた。そして闇色の瞳で遠い東の

果てを臨む。

そこはサリフリの方角だ。

「もうすぐ。……もうすぐだから……待っていて」

囁くような呟きは、そよと吹いた風に乗り、乾いた大気に溶け込んだ。

小屋を出て、また老人は空を見上げた。

今朝は曇り。じきに晴れそうだが、湿気が多い。

いよいよ本格的な雨期が始まる。そしてそれが終わればもう冬だ。そろそろ本腰を入れて、冬支度を始めなければならない。

だが老人の手は止まりがちだった。

あれから3日。少女はもう、国境を越えただろうか。

一人で泣いてはいないだろうか。

そんなことが気になって、気付けば空を眺めている。

せめて村まで送っていければ良かったのだが、どうしても膝が動かなかった。

老人は、何度も何度も祈りを捧げる。

どうか、無事で。

老人はこの10年、正直いつ死んでも良いと思っていた。いや、積極的でないにしろ、死を望んでいたといっている。

だが、今は違う。

そう簡単には死ねなくなった。

少女が残した「行ってきます」という言葉。それは帰りを約束す

る文言であつたし、なにより可愛い小鳥の願いを叶えなければならなくなつたのだ。

飛び立つ前の、それは少々やつかいな「願いごと」だ。

「……ぼんやりとしていらんな」

ずいぶんと長い間、空を眺めていた老人だったがぼつりとそう咳くと、鍛冶場に向かってゆっくりと歩き出した。

## 暗闇を抜けて・2 (後書き)

ここまで読んで頂きまして、ありがとうございます。これでひとまずこの章は終わります。

ご意見、ご感想など頂けましたら泣いて喜びます。よろしく願いいたします。

今後の予定などは「活動報告」にて。

閑話 〱 ラウルの受難 〱 (前書き)

Web拍手のお礼小話として掲載されていたものを大幅に加筆した  
ものです。

閑話　　ラウルの受難　　

＊＊　「大人の時間」のその後で　＊＊

ふわり、とラウルの意識が浮上した。

目蓋越しに覗く世界は闇の中、起きるにはまだ早い。もう少し、寝かせてくれ。そう願ったのだが首元からひやりとした冷気が染み入って、肌寒さが気になって仕方がない。上掛けの隙間を埋めようと手を伸ばせば、すぐ隣に人の気配が感じられた。

ああ、これは一番下の妹か。実家を出る時、彼女はまだ小さかったのに、いつの間にかこんなに大きくなって。独りで寝るのが怖いと言って、よくこうして寝台に潜り込んできたものだが、成長してもまだ人恋しいらしい。

肌寒いと思つたのも道理、仰向けになっているラウルに対し、隣の温もりはこちらに背を向け横を向いている。この隙間から冷気が入り込んでいるのだ。

温もりに重なるように、ラウルもごろりと姿勢を変えた。一連の動作は慣れたもの、眼を開けなくても身体が覚えている。

薄い腹に手を回し、身体を胸元に引き寄せる。冷えてしまった背中を胸の内に納め、己の熱を移してやる。身体はすぐにほかほかと暖まり、ラウルを夢の中へといざなうてゆく。

うとうとしながら、ラウルは思う。

子供というのは厄介な生き物だ。大人より体温が高いというのに四肢の先はすぐ冷える。手を探れば案の定、その指先も少々冷たくなっていた。

無意識のうちに、手が動く。



小さな肩を手繰り寄せ、顎の下に頭を置く。枕の代わりに頭の下には左腕を差し入れる。さらにより一層身体を寄せて、外気との境目の上掛けを詰めてやる。すると、ラウルのふくらはぎにひやりとしたつま先が押し付けられた。柔らかな頬が二の腕に擦り寄せられ、両手できゅっとなぐりしめられる。

温もりを求める正直なその反応に、ラウルの頬も緩んでくる。

目蓋の裏が、ぼんやりと明るくなってきた。夜明けも近い。普段ならそろそろ起床する時間だが、この手足がもう少し暖まるまでこのまま微睡んでしまおうか。そんなことを考えて、睡魔に身を任せようとしたそのとき。

「……っ！」

二の腕に鋭い痛みが走った。ラウルは咄嗟に腕を引いて飛び起きる。閉じようとする目蓋を無理矢理開いてよくよくみれば、そこにはきれいな歯形がくつきりと刻まれ、うっすらと血まで滲んでいた。

一体何が起きたのかと、ラウルは腕と寝台を交互に見やる。妹からこんな仕打ちを受けたことは、これまで一度も無かったことだ。

「……………?」

乱れた上掛けの下から、黒い頭が覗いていた。飛び起きたときに転がったのか、「それ」はうつぶせになっている。

弟妹に、こんな色の髪を持つものはいない。

なんだ、これは。いったいいつの間忍び込んで

「……!」

がつんと、鈍器で頭を殴られたような衝撃が走った。

そうだ、「これ」は妹ではない。夕べ出会ったばかりの赤の他人だ。「カイル」と名乗って少年の格好をした、世間知らずの強情な少女。

ラウルは手で顔を覆って低く唸った。居たたまれない。今すぐこの場から消えてしまいたかった。

やましいことなどしていない。これだけは断言できる。だが同衾した挙げ句に抱き寄せるなど、少女が腹を立てるのも当然だった。寝ぼけていて妹と間違えたのだ、そう言って納得するだろうか。

この年で妹と同衾すること自体、少々後ろめたいものがある。深い縦穴があつたらそこに入って蓋をしたい。二度と出て来られないように、嚴重に。

ラウルは頭を抱えて蹲った。

そもそもなぜ床で寝なかつたのだ。寝台が広いからと、欲を出したばかりにこんなことになる。酒で思考が麻痺していたとしか思えない。あの酒も、飲み過ぎだ。味わうこともせずになだめるなど、普段なら絶対にしないのに。

ラウルは悶えた。

一見するとそうは見えないが、かなり取り乱してもいた。

寝台の上で下着姿のまま、歯を噛み締め拳も握り、頭を抱えて座り込んでいるのが良い証拠だ。おまけに顔は首から耳まで赤くして、湯気まで立ち上っている。

判決を受ける罪人のように、ラウルは待った。もはや逃げも隠れもしない。甘んじて、少女の非難を受け入れよう。

しかしいくら待っても判決は下らなかつた。それどころか、くうくう穏やかな寝息まで聞こえてくる。

まさか、とラウルは上掛けをそっとめくって覗いてみた。

艶やかな黒髪を乱しながら少女は握った片手を口元に当て、うつ伏せのまま眠っている。

ラウルはほつと安堵した。強ばった身体から力が抜け、大きく息も吐き出される。この分なら、今朝のことは覚えていまい。なにか訊かれても、夢だということにしておこう。

安心すると、ぐっすり眠る少女に興味がわいた。ラウルはもう一度横になって左肘で身体を支え、少女をそつと覗き込む。右手で上掛けを下にずらすと類い稀な美貌が露になった。

夕日に照らされた顔は、はつとするほど美しかった。その後で見たあの闇色の、強い瞳。それが隠れるだけで、こんなにもあどけなさが見えてくる。そして薄暗い室内でも良くわかる、シミひとつない滑らかな白い肌。ふっくらとして紅く色づいた、柔らかそうな唇。それが時折弧を描き、うふふ、と幸せそうな息までもれる。

つられてラウルの口も、笑みを刻む。

やはり子供の笑顔というものはいいものだ。胸の内がほっこり暖かくなってくる。

手を伸ばし、頬にかかった髪をそつと払う。絹糸のような手触りが心地よく、ラウルはそのまま何度も梳いた。するり、するりと指の間を髪が滑り、まるで猫を撫でるように心地良い。

ふと、少女の手が彷徨った。なにかを探すようにシーツの上をすすする動き、大きな左手を探り当てるとその指をしっかりと握りしめる。そのままふにやりと笑むと、手のひらを表に返し、柔らかかな頬をすりりと寄せた。

「力にゃ……………」

うにゃともむにゃともつかない声で呟くと、少女はこれ以上ないほど幸せそうに微笑んだ。よほど楽しい夢でも見ているのだろう。その幸福感が伝わって、ラウルは眼を細めて少女を見守る。

少女はラウルの手のひらを頬に当て、うっとり微笑んだ。それ

からまた何度か頬を寄せ、小さな口を精一杯大きく開ける。

目標は、親指の付け根。

ラウルは眼を剥いた。まさか、先ほども

がちり、と歯のかみ合う音がして、小さな口がもごもご動いた。ううん、と不満げな音を発して眉をしかめた少女だったが、すぐに規則正しい息を立て、またぐつすりと寝入っている。

ラウルは少女の足下で、茫然と座り込んでいた。心臓がばくばくと早鐘を打ち、冷たい汗がこめかみを伝う。

間一髪、だった。本当に紙一重の差で、助かった。

少女の寝言と親指の付け根、そして歯形の残る二の腕。これらのことから察するに、どうやらラウルは食われかけたらしい。確かにこれは、昨夜鶏唐揚げをとても美味いといって食べていた。その夢を見ていただろうことは、簡単に想像がつく。

ラウルはもう一度、腕を見た。

手羽、なのか。

部位から言って、そうなのだろう。

鶏肉代わりに齧られた二の腕が、じんじんと痛みだしてくる。

その痛みから眼を背け、寝台を降りてラウルは服を身につけた。

少女はころりと寝返りを打った。今度は仰向けで、両手を頬の両脇に投げ出して眠っている。

「……………」

ラウルは深く大きな溜息をついた。

可愛い顔をして、なんと危険なイキモノなのだ。

幸せそうに眠る少女を上掛けでしっかりと覆い、固い決意を胸に

秘める。

( コイツの隣では、金輪際寝るものか )

＊＊ 「北方公路」 1 ～ 2 の間の出来事 ＊＊

高く蒼い空のもと、白い雲が流れてゆく。

雲の動きに沿って木の葉の影のモザイクが、形を変えてそよいでゆく。

目の前には巨大な崖。歩けど歩けど、その場所はまだ遠い。視界に入れると永遠に辿り着かないような、そんな気分になってくる。

けれど間違いなく、一步踏み出すごとに進んでいる。坂の向こう、点のように見える道の向こうに、オノレ砦があるはずだ。

この街道の初心者、大抵この辺りで弱音を吐く。崖が大き過ぎて距離感が掴めないのだ。そのためいくら歩いても、逆に崖が遠ざかるような錯覚に陥ってしまう。

ラウルは振り返ってカイルの様子をうかがった。

少女は視線を数歩先に当て、飛び出た根や石に足を取られないよう注意しながら歩いている。

着実に、一步一步を踏みしめる姿にラウルは安堵した。それでいい。下手に上を眺めながら歩いても、怪我の元だしいつそう疲れが増すだけだ。

足を緩めたラウルに気付き、カイルが顔をあげてにこりと微笑む。それだけなのに、少女の腰に千切れるほどに振られる尾が見えた。

黒くて短毛のすらりとした長い尾を、振るといっよりぐるぐる激しく回転させて喜びを表現している。

ラウルは頭を振った。

妄想を幻視するとは、相当疲れが溜まっているようだ。昨日の酒が残っているのかもしれない。今日は早々に休まなければ。

物思いにふけっているといつの間にかカイルが追いついて、ラウルをじっと見上げていた。

「お手」と言って手を出したら、右手をぼんと乗せそうだ。

無意識のうちに、勝手に右手が動いてしまう。喉のすぐそばまで出かかった言葉の誘惑を、ラウルはやつとのことと飲み込んだ。

危なかった。意識をしつかり保たなければ。

中途半端な位置にある右手をそのまま胸の位置の頭に寄せ、ラウルは「行くか」と声をかけた。

「わん！」

と元気な返事が聞こえた気がして、ラウルは翠の瞳を丸くした。

「…………ラウル？」

どうかしましたか、とカイルが覗き込んでくる。

ラウルはこめかみを強く押さえた。

重症だ。カイルは「はい」と言ったはずなのだ。犬のことは忘れよう。他のことを考えて、思考を切り替えなければ。

隣を歩くカイルをちらりと見下ろし、ラウルはまた思考の海に沈みこんだ。

（何故攫われたかは、わからない、か）

カイルは貴族でないと。そして資産家の娘というわけでもないらしい。すると身代金目的の誘拐、と言う線は消えてくる。

しかしカイル本人に理由があるとしたらどうだろう。

優雅な物腰。洗練された歩き方。丁寧な言葉遣い。綺麗な公用語。これらが必要になると考えて、兄が教え込んだとしたら。

本人も知らない「なにか」の理由で襲われたとすれば、すべて辻褃が合う気がする。

(……………)

考えれば切りがなかった。

真つ先に思いつくのは貴族や王族がらみの醜聞だ。次いで魔術に関するなにか。カイルは昨夜「転送陣」がどうか言っていたが、そんなものは存在しないはずなのだ。

けれど、もし。その魔術に関する「なにか」をこの娘が知っていたら。

身体の中からすべての空気を絞り出すように、ラウルは大きく息を吐きだした。

本当に、切りがない。カイル本人も知らないことを、他人が憶測だけでもの言っても仕方がなかった。

ラウルは天を仰いだ。

太い古木の隙間から、深い青の空が覗く。嘎れた声がして、鳥が一羽横切った。

この少女を得ようとして、自分ならなにを理由に挙げるだろう。

「……………ペット……………な訳はないな」

「『ペット』って、なんですか？」

ぐ、と喉の奥から妙な音がした。

口に出したつもりはなかった。だがカイルには、しっかり聞こえていたようだ。

耳慣れない言葉だったのか、闇色の瞳はきらきら輝き、興味津々といった顔でラウルを見上げ、すぐそばから覗き込んでくる。

(なんて耳聡い……)

ここで誤摩化すことは簡単だ。だが、こういう手合いにはきちんと教えないと、いつまでもいつまでもいつまでも、そしてどこまでも訊いてくるものだ。これまでの経験上、どの弟妹もそうだった。

こほん、と一度咳払いをすると、ラウルはことさら神妙な顔をして人差し指を立て、視線を合わせるように腰を屈める。

「言葉のままの意味だ。愛玩動物。おまえは見ていて飽きないからな」

「愛玩動物、ですか」

「そうだ」

「そうですか」

……納得したか。

やれやれ、と胸を撫で下ろしたラウルに、鋭く突き刺さるような質問が飛ぶ。

「でも『言葉のまま』ということとは『言葉のままじゃない』意味もあるということですよね？」

全く邪気のないその笑顔を、ラウルは直視できなかった。無言で足を速めたラウルに、カイルは抗議の声をあげる。

「ねえ、ラウル！ どうして黙ってしまっんです？」



カイルは小走りになりながらもついてきて、ラウルの袖をつんと引く。

「五月蠅い。黙って歩け」

「あ、誤摩化さないでくださいよ」

腕を払い、さらに無視して足を速めると、カイルはきゅんきゅん吠えだした。

高音が頭に響く。これは、小型犬の鳴き声だ。

「ラウル、酷い！ 待って、ちょっと待ってください！」

（ さて、どうしたものか ）

ラウルは腰に手を当て、立ち止まって天を仰いだ。どっと疲れが増した気がして、一度強く眼を閉じる。

カイルは元気に駆けてきて、ラウルの腕に飛びついた。背伸びをすると口元に手を当てて、そっとひとこと囁いた。

「……冗談ですよ？」

言うだけ言って、少女は笑いながら逃げてゆく。その逃げっぷりは見事というほかない。

（ コイツ …… ）

ラウルは震える拳を握りしめた。



閑話 〳 苦難の道 〳 (前書き)

Web拍手のお礼小話として掲載されていたものを、大幅に加筆したものです。

本編とは関係あるような、ないような。

閑話 〱 苦難の道 〱

＊＊ オノレ砦で好評発売中！ ＊＊

血が沸騰して逆流するようだ。

武器屋の親父め。この世間知らずがモノの価値を知らないことをいいことに、ぼったくるとは見上げた根性だ。次に会ったら覚えていろ。

ラウルは胡座をかき、腕を組むと口をむつつりと引き結んだ。眉の間に深い皺を刻んで目蓋を閉じるが、時折口元がひくりと動く。

カイルはこの黒剣に、どれほどの価値があるのか知らなかったのだ。それを責めるわけにはいかなかった。悪いのは、どう考えても武器屋の親父だ。

言葉にはできないありつたけの罵詈雑言を脳内で何度も繰り返して、ラウルは耐えた。

それでも押さえきれない怒気が、小屋の中にじわりと満ちる。

折り曲げた膝の上に両手を当て、カイルは肩をすくめてじつとラウルの様子をうかがっていた。こめかみの血管が浮き出るその様子に、小魚、と小さく呟き荷を漁りだす。

目的のものは無かったが別のものを見つけたようで、手にした缶と囲炉裏の薬缶、そして先ほど洗った食器を順に見て、カイルは静かに動き出した。

「……あの、どうぞ」

おずおずと、湯気の立つ茶が差し出された。

ラウルは眼を開け、目の前のものを一瞥する。

随分と香りの良い茶だったが、入れられていたのは世辞にも趣味が良いとは言えない器だ。軍の支給品にセンスを求めても仕方が無いが、それにしても酷過ぎる。

浅めのソーサーに、持ち手のない、口の広がった浅めの茶碗。先ほどは気がつかなかったが、よくよくみれば外側には「トウルネイ山地 オノレ砦」と抽象的な藍の文字がでかでかと染め付けられている。受け皿に描かれた模様も、同じような文字だ。

ラウルはそつと溜息をついた。

全体的に青味がかつた灰色の厚ぼったい陶器は、当然のように質が良くない。せつかくの茶だというのに、水色すいしょくがくすんでしまっている。香りはいいいのに、これでは味も半減だ。

「ラウル……あの。休憩、しませんか？」

恐る恐る、カイルは提案した。両手を胸の前で握りしめ、緊張している様子にラウルははつとした。

すっかり怯えさせてしまったようだ。折角の気遣いを見無駄にしてはいけない。金がないのも茶器の趣味が悪いのも、この子の所為ではないのだから。

ラウルは礼を言うと柔らかく微笑みかけた。

「……頂こう」

茶を啜り、旨いと褒めるとカイルは眼に見えてほつとした。

実際、店で飲む茶より数段良い味だった。まともな茶器で淹れたら、もつと旨かっただろうに。悪趣味な器しかないのが残念だ。

ラウルは目蓋を閉じると茶の味だけに集中した。

ほどよい苦みとコク、そしてほのかな甘み。鼻に抜ける爽やかな香り。辺境でこれだけのものが飲めるとは、思いもよらなかった。茶の味を堪能するラウルに、陶然とした声が届いた。

「素敵……」

空耳だ。

やはり疲れているのだ。今日は早く休まなければ。必死にそう言い聞かせたが、ほう、という溜息に、ラウルはつい眼を開けてしまった。そして目の前の光景を、記憶から消してしまいたくなった。

目蓋のように、自由に閉じられない耳が恨めしい。

カイルは茶碗を両手でそっと持ち、瞳を潤ませうっとりと眺めていた。

ラウルの口から、はあ、と大きな溜息が漏れる。

「それは軍の支給品だ。諦めろ」

「……でも。受付で販売してるみたいですよ？」

ほらここに、と差し出された紙にはファンシーな文字が踊っていた。

オノレ砦謹製

ティーカップ&ソーサー

(ティーポウルタイプ)

1客/1帝国銅貨

大好評発売中！

～ 詳しくは受付まで ～

ラウルは唸り、そつと眉間に手を当てた。

（この皆に駐留しているのは、帝国の、正規軍……）

軍はいつたいこの辺境でなにがしたいのか。

こめかみがずきずきと痛むのは、気のせいだと思いたい。

そしてこの悪趣味な茶器を眺めて頬を染める美少女も、見なかったことにしてしまいたい。

だが

「……欲しいのか？」

「えー……と、お金がないので、諦めます」

「欲しいんだな」

「……はい」

「今は、ダメだ。……それはわかるな？」

「……はい……」

しゅん、とカイルは萎れるように小さくなった。

その様子に、ラウルは言葉が詰まってしまふ。

なにかの罨だ。甘やかすな。どこからかそんな声があった気がしたが、聞けなかった。

「まあ、いずれ……な」

「ほ、本当ですか!？」

途端に顔を輝かせ、カイルは満面の笑みを浮かべて喜んだ。  
言葉ひとつでくるくる変わる表情に、ラウルは苦笑するしかない。

いずれ、機会があったなら。

この口約束をラウルが激しく後悔するのは、まだずっと先のことになる。

\*\*\* オノレ砦の商品開発！ \*\*\*

炭入れの箱と桶を持って、ラウルは小屋の外に出た。半円形の広場を横切って、兵舎と思しき建物の戸を叩く。

すぐに返事があり、炭が無いというに出てきた兵は眼を丸くした。

「足りませんでしたか？ すみませんねえ」

こちらへどうぞ、と食堂に案内され、まあどうぞ、と無理矢理小さな椅子に座らされた。気が付けば、周りは兵達によって二重三重に取り囲まれている。

ラウルは兵舎の食堂で、尋問を受けていた。

「いえね、最近ほら、経費節減経費節減ってそれはもう五月蠅いでしょう？」

「この皆なんかは通行量が少ないから、真っ先に槍玉に挙がってしましまして」



「以前はここも、一個小隊でもって回してたんですけどね、人員が減らされてしまいました」

「今じゃ分隊2つですよ」

「それでも仕事量は変わらないのですから、なかなか厳しいものです」

はぐっ、とその中年の兵が零すと、周りも一斉に相槌を打つ。

「そのうえ、外部資金を稼いでこいって……軍にそれは、略奪でもしろってことですかね」

「勿論そんなことはできませんから、旅人さんにね、なにか買ってもらおうと」

「それで商人の方に色々聞いてみてですね」

「ここには土も木もある、ということ、陶芸を思いついたわけですね」

「運良く兵の一人に、陶芸経験者がおりまして」

「当初はそれはもう、見られたものではありませんでしたが、最近腕を上げてまして」

「皿だけでなく、茶器まで作れるようになりました」

すると人垣が割れ、「オノレ皆謹製陶器」が次々にラウルの前に並べられる。

「……で、どうでしょう？ ご感想など頂けないでしょうか？」

「どんなことでも！ 忌憚ないご意見を、是非！」

「「お願いいたします！」」

周りから一斉に頭を下げられて、はぐっ、とラウルは項垂れた。  
なんなのだ、この兵達は。

言うだけ言って、さっさと終わらせよう。

「その前にひとつ訊くが」

「「なんでしよう!」」

「本当に、どんな意見でも良いのだな？」

「「もちろんです!」」

「では……」

ひとつ頷くと、ラウルは「忌憚ない意見」を述べ始めた。

「まずこの柄だ。悪趣味、の一言に尽きる。しかもこの内容も問題だ。『トウルネイ山 オノレ砦』。絵が描けないからとりあえず文字にした、というのがあからさま過ぎる。観光地でもなんでもない場所で、地名を書いたからと言って物が売れると思うな。しかもなんだ、この皿は。釉薬に漏れがある。ここから水分が染み込んで、染みになるだろうが。それにこの、ヘアーラインなど貫通しているじゃないか。使えんぞ、これは。そもそも陶器というものは、白くて薄いものに価値があるんだ。こんな青くて分厚く重い皿に、どれだけの価値がある？ 丈夫だけが取り柄としか思えんが、それすらも満足にできないようでははつきり言っただけ無駄だ。止めてしまえ。もし本格的に作るといふのなら、まずは土だ。焼いて白くなる土を探せ。できれば硬質磁器が良いが、無理だったら……」

あるものは頷き、あるものはメモを取りながら、兵達は身を乗り出して真剣に聞いていた。

それからしばらくの間、ポットの茶が空になるまで、ラウルの講義は続いたのだった。

「……とりあえず、そんなところだ。これらが改善されなければ、まず見向きもされないだろうな。こんなものを好んで使うのは、余程の馬鹿か物好き……」

はっとして、ラウルはまた大きく頂垂れた。

(馬鹿で物好き……そういえばいたな、すぐそばに)

\* \* 苦難の道 \* \*

「待てよおっさん、話を聞け！」

「……これのどこに、話すだけの余地がある？」

護衛士の口元に、うつすらと笑みらしきものが浮かぶ。

その様子に、騎士は頬を引きつらせ、じり、と一步後退した。騎士が下がった分だけ護衛士は間を詰め、二人の間の空気がじわりと密度を増してゆく。

「泣かせたのは、お前だろう……？」

「え？ ……違う、誤解だって！」

「五階も六階もあるか！」

その瞬間、小屋の空気は凍り付いた。

時間が止まったかのように、しん、とした永遠にも等しい沈黙が続く。

「おっさん……今時親父でもそんな寒いギャグ言わねーぞ？」

ぎぎぎ、と固まった関節を動かしながら、騎士は呆れたように口にした。

護衛士はムツとしたが、ほんのり頬を染めて俯くほかなかった。

確かにオカシイ。

どうしてこんな言葉が口をついたのか、護衛士は我がことながら全く理解できなかった。これまでこんな場面で妙な冗談を口走ったことは、30余年生きてきて、一度だつてなかったのだ。なにか悪い病を患ったような、そんな気がしてきた。そして感染源は、背中にへばりついているような気もする。

護衛士は悶えた。深い縦穴があつたらそこに入って蓋をしたい。二度と出て来られないように、嚴重に。

居たたまれない。

栗色の頭をかき回し、騎士はそのままふいと後ろを向いて赤くなつた。

哀れだった。もし自分があんな目に遭つたらと思つと、それだけで涙が滲み出るようだ。あまりにも気の毒で、とても見ていられなかった。ここは聞かなかつたことにしてやるう。

ちらりと振り返り、騎士は護衛士に向かつて頷いた。翠の瞳がはつと見開かれ、きゅ、と眉根が寄せられる。

真の男の友情が芽生えた　かにみえた。

「ラ、ラウルは……っ！　おっさん、じゃ、ありません！」

べそべそと、護衛士の背中であいていた少女が抗議した。

それだけ言うと今度は護衛士の腹に手を回し、少女はぎゅうとしがみつく。

護衛士は、再び全身を羞恥の色に染めあげた。  
騎士もまた、顔を背けてうずくまる。

なんと不憫なおっさんだ。アレの身近にいと、ああなってしまうのだからか。

背中側からぐじぐじと陰気くさい気配が漂ってくる。

今すぐこの小屋から出て行きたい。

騎士は痛切にそう願ったが、扉の前の三和士には、少女と護衛士が団子になっている。出たくとも、出られない。

目の前には旨そうな肉の山。腹もじゅうぶんに減っているというのに、とても食べられる状況ではない。

騎士は膝を抱えて丸くなった。

（俺たち、なんてカワイソウ！）

「たち」の中に、勿論少女は含まれていなかった。

閑話 〱 そして、夜が明けた 〱 (前書き)

Web拍手のお礼小話として掲載されていたものに、加筆修正した  
ものです。

閑話　　そして、夜が明けた　　

＊＊　第二の犠牲者　＊＊

「それに……触れるな」

「ケチケチすんなよ、おとーさん」

目の前で、ヒトの形をした小動物が丸くなっていた。

その白い頬はつつけば果てがないほど柔らかく、つまめばどこまでも伸びてゆく。つまみすぎると時折ふるりと顔が振られて伏せられるが、すぐに元の位置に戻ってくる。小動物は、今も重ねた両手を口元に添え眼を閉じている。よほど深い眠りなのか、いくら頬をつついて、目覚める気配は微塵もなかった。

「いい加減にしろ」

「……もーちよっと……」

「これで最後だ。……止めておけ」

無理、止められない。

口には出さなかったがそんな気配を敏感に察し、溜息をつく。護衛士は毛布をかぶってさっさと寝てしまった。こちらに背を向け少女との間に荷物を置いて、どこか突き放したような様子が少し気になる。だが五月蠅い「おとーさん」がいなくなったのを幸いに、ザツクはますます調子に乗った。

（お、面白れー……）

これは癖になりそうだ。

しっとりとした肌の感触、つづいたときのこの弾力、つまんだときの、この伸び。

こんな菓子があつたような気がするが、なんと言ったか。

夢中になつて、ふにふにと少女の頬をつついていたら、白い頬が手の甲で覆われてしまった。

防御するとは、小動物のくせになんと小賢しい。

ザックは柔らかい頬と手のひらの間に指を2本差し込んで、そつと持ち上げ外してやつた。本来の位置である口元に手を戻そうとしたそのとき、差し込んだ指が小さな手のひらに捕えられた。

細い指がやわやわと太い指を握り込み、肉刺マクのある、男の固い手のひらを引き寄せる。なにをやる気だ、とされるがままに見ていたら、やがて頬が寄せられた。

少女の口元には微笑みさえ浮かび、手のひらにすり寄ってくる仕草にザックの頬もふにやりと緩んだ。楽しい夢でも見ているのだから、そう思つてじつとしてみると、男の手のひらに、ざらりと濡れた感触が伝わった。

(なつ……なつ、舐められた!?)

眼を剥いて咄嗟に引き抜こうとした騎士の手は、がっちり捕えられ動かなかった。すでに夢の住人となつている少女は、狼狽する男の事情など知る由もない。

んふ、と鼻を鳴らして微笑むと、少女は紅く色づいた唇を限界まで大きく開けた。



かりり、と音がした。  
声にならない悲鳴が上がる。  
ふうふうと息を吹きかける音と、満足そうな溜息。  
なにが起きたのか、ラウルは手に取るようによくわかった。

(だから触るな、と言ったのだ。……馬鹿め)

ふん、と鼻を鳴らした最初の犠牲者は、そのまま毛布を引き上げ眠りについた。

＊＊ 注意事項 ＊＊ (エピローグより)

「おじいさまっ！」

りいん、と天上の鈴が鳴った。

呼ばれるままに振り向けば、遠くから少女が駆けてくる。

身につけているのは首元の詰まった長袖の、身体の線に沿って裾が広がった白いドレスだ。質素だが上品なその服が、とても良く似合っている。そして足下に届くほどの漆黒の長い髪は流したまま、少女が駆けるに従って、ドレスと一緒に左右に揺れた。

これが、あの子の本来の姿なのか。

(なんと、美しい……)

元氣一杯のその様子に老人は目を細め、皺を刻んで顔をほころばせた。

なんとも不思議な場所だった。穏やかな、優しい光に満ちた白い世界。足元からふわりふわりと漂って、まるで雲の上にいるかのようだ。

少女はその世界を飛ぶように駆け抜けて、老人めがけて飛び込んだ。

来るべき衝撃を予想して、老人は腰を落として少女を迎える。

かすかな風が頬を撫で、少女の腕が首に回った。

しかし衝撃はこなかった。

老人はその身体を抱きとめようと力を入れたが、思わぬ事態にたたらを踏んだ。前のめりになりながらも少女を抱え、転ばぬようにとくるりと回る。少女は声をあげて笑い、ドレスの裾は翻り、そして長い髪はその軌跡どおり、ゆらりと漂い宙に浮いた。

まるで羽のように少女は軽く、髪は水中にあるかのように揺らめいている。

現実では有り得ないその光景に、老人は眼を丸くした。

(夢　　なのか?)

だとしたら、なんと素晴らしい夢だろう。

その喜びのまま、老人は少女を抱きしめる。

「ふふふっ」

「ごろごろと、喉を鳴らす猫のように頬を寄せ、少女も老人にきゅうつしがみついた。

「おじいさま！　お会いできて、わたくし嬉しい！」

「……嬢ちゃん、どうしたね？」

らしくないその言い様に、はて、と老人は首を傾げた。

細い腰を支えて下に降ろし、少女と向き合い眼を合わせ、そして驚愕のあまり老人は声もなく仰け反った。

「　　っ!」

少女の瞳は銀。

あの子を導いて、と言葉を残して消えたはずの銀の少女だった。

「おじいさま？」

小首を傾げて見上げる顔は、老人の知る少女と同じものだ。ただ瞳の色が異なるだけの、まったく同じ表情だ。

老人は、やっとのことで声を絞り出した。

「……なんで、あんたが……」

「おじいさま、わたくし本当に心配で」

居ても立ってもいられなくて、来てしまいました、と銀の少女はにこりと微笑んだ。

「あの子は知識はあっても世間知らずですから。今になって、兄の気持ちが良いわかります」

頬に手を当て小首を傾げ、銀の少女はほつ、と息を吐いた。

少女の兄も、死の直前まで妹のことを気に掛けていたという。

だからわたくしも、あの子の取り扱いについて注意事項を説明いたします、と満面の笑みを浮かべて銀の少女は宣言した。

「まず、武器は一通り扱えます。逃げ足も速いので、一人にしても心配はありません。それから家事もそれなりにできるはずですが、料理だけはさせないでください。絶対に。……兄は、食材が無駄になるだけだから触れないように、と申しておりました」

「……なんだね、それは」

「さあ？ わたくしは料理をしたことがないので、わかりません」

朗らかに答えて、銀の少女はそれから、と人差し指を立てて釘を刺した。

「なにがあっても、同衾はだけはしないでくださいね？」

「儂をなんだと思ってる！」

腹を立てた老人に、少女はそれは違うと首を振った。

「ただ一緒に眠るだけでも相手の方が危険なのだとか。何度尋ねても兄は詳細を教えてくれなかったのですが、兄が言うからには、そうなのでしよう」

「……あんたいつたい、なにをしたんだ？」

「わたくしも、ずっと疑問に思っているのです。なにしろ眠っている時のことなので……」

わかりません、と明るく微笑んだ銀の少女に老人は額を押さえ、大きな溜息をついた。

「嬢ちゃんは、あんたを嫌ってる。こうして会ったと知ったら、どう思うか……」

「大丈夫ですよ、おじいさま。ここは夢の中ですから、魔力のないあの子が来ることはできませんし、絶対にバレません。おじいさま

が黙っていれば大丈夫です」

バレるバレないの問題ではない、と言いかけて老人は気がついた。

「……あなた、確か時間がないと言ってたかったか？ その、代償がどうか」

「ええ、わたくしは消えるのだと思っていたのですが……そうでもなさそうですね」

なにしろ初めての経験なものですからわからないことだらけで、と続けて銀の少女は晴れやかに、輝くような笑顔を見せた。

「まあ、それならそれで、宜しいのではないでしょうか」

(子供……というよりも「素」なのか……?)

なんだか目の前が暗くなってきたような気がする。

ああ、もう一言。一言だけ言わせて欲しいと願ったが、そのことを口にする前に、老人は深い眠りに誘われ落ちて行った。

(儂に言っても嬢ちゃんが知らなければ、意味がない……)

\*\* そして、夜が明けた \*\*

朝食後に茶を飲んでいた時のこと。

カイルがそうだ、と手を叩いた。

「ラウル、聞いてください!」

嬉しさを隠しきれないといったような、その華やいだ声にラウルもつられて微笑んだ。

「どうした?」

「わたし、夕べ凄い夢を見たのです!」

なんとなく、その内容には想像がついた。

そつと騎士の方を窺うと、明後日の方に眼を逸らし、大きな身体を固くして、じつと息を潜めている。

それを横目で見ながらも、素知らぬ振りでラウルは尋ねた。

「ほう。どんな夢だった?」

「カナト鶏唐揚げが、歩いてやってきたのです! 食べたら歯ごたえがあつて、こりこりしてとっても美味しくて!」

カイルは両手を頬に当て、その「味」とやらを思い出したのか、うふふ、と幸せいっぱいに微笑んだ。

……やはり、カナト鶏唐揚げか。確かに「あれ」は、これ以上ないほど新鮮な肉だ。歯ごたえもまた、格別だったろう。

ラウルは頷き、そしてあくまで無視する騎士をちらりと見た。

(……馬鹿め)

何を探っていたか知らないが、忠告を聞かないからこんなことになる。

ふん、と鼻を鳴らし、ラウルはカイルに微笑みかけた。

「……そうか、良かったな」  
「はい！ 2日も続けて夢でも食べられるなんて、わたし、なんて幸せなのでしょう」

胸の前で両手を合わせ、カイルはうつとりと眼を閉じた。

子供は夢の中でも味や匂いを感じているという。幻とはいえその鶏唐揚げは、さぞ美味かったことだろう。ただひとつ、妙なものを口にして腹を壊さないかが心配だったが、この分なら大丈夫そうだ。カイルの緩んだ口元に、ラウルも誘われ眼を細めた。

二人して良かったな、良かったですと浸っていると、ザックが胡乱な目つきで声をあげた。

「……なあ、チビ」

「はい？」

「おまえ、一昨日も夢で鶏唐揚げ、食ったの？」

「はい！」

「へええ……そーなんだ」

濡れた土色の瞳が、きらりと光った。つるりとした顎をさすりながら、騎士はにやりと片頬だけを引き上げる。

どうせ碌でもないことを考えているのだろう、そう思った通り、ザックは一度ちらりとラウルに視線を送ると、張り合うように問いかけた。

「なあ……どっちが美味かった？」

どちらと訊かれて黒い瞳が瞬いた。両方っつーのはダメだ、と念を押されてカイルは唸る。

「そうですね……昨日のは少し固いけれど歯ごたえがあって美味しかったし、一昨日のは柔らかくてぷりぷりして、口に入らないくらい、大きかったです」

カイルは眼を閉じた。顎に拳を当てうつん、と唸り、さんざん逡巡してから眼を開ける。そしてまっすぐに、濡れた土色の瞳を見あげて結論を出した。

「やっぱり、わたしは大きい方が好き……です」

大きさがよ、とザツクの頬が引きつった。

どうでも良いことだ、とラウルは一口茶を啜る。

そしてカイルはさらに考えて、ぽそりと小さく呟いた。

「大きくて、柔らかくて美味しくて……あれは、もも肉だったのでしょうか？」

もも肉、と聞いてザツクは眼を剥きラウルは咽せた。

「……おっさん、変態？」

「違う！」

断じてやましいことなどしていない。

ラウルは必死になって否定した。

随分イイコトしてんじゃないの、と冷やかすザツクに、カイルがいつそう追い打ちをかける。

「わたしもイイコトしたいです！」

二人でばかり、狡い。そう言って頬を膨らませたカイルに、全然



楽しくない、とラウルは懸命に主張した。しかし隣では、ザックが腹を抱えて笑い転げており、説得力は皆無と言えよう。

「そうだチビ、存分に遊んでもらえ！」

ザックは手を叩いて囃し立て、カイルをしきりにけしかける。

昨晚投げかけた言葉をそのまま返されて、ラウルはぎりりと歯を食いしばった。

( この野郎 )

だがその冷やかに敏感に反応したのは、カイルの方だった。

「ラウルもザックさんも、ひどい。……わたしで『イイコト』してたんですね」

上目遣いで大きな闇色の瞳に見つめられ、男二人はぐつと詰まった。つんと口をとがらせ、両の拳を膝の上でふるふる震わせるその姿は、毛を逆立てた仔猫そのものだ。

これ以上は、マズい。

意見の一致をみた二人は、顔を見合わせ頷いた。

本格的に臍を曲げる前に、ほかのもので気を逸らそう。

だが時すでに遅く、カイルは盛大に拗ねていた。

「……もういいです。『イイコト』しても、つまらないもの」

そういつて立ち上がると、カイルは小屋の隅に向かって腰を下ろし、膝を抱えて丸くなった。

拗ねる姿も面白かったが、ここで笑うのはさらにマズい。ではどうするか、と二人は苦笑しながら肩をすくめた。

困ったことは確かだが、それは本当に些細なこと。後で聞いたら笑い話になるような、そんな他愛のないことだ。

少女の行動は予想がつかず、見ているだけで楽しくて。ラウルはこの幸せが、ずっと続くものだと思っていた。

だがこれが、ほんの一時のことだったと二人が知るのもう少し先のことになる。

閑話 〱 そして、夜が明けた 〱 (後書き)

ここまでおつき合い頂き、本当にありがとうございました。  
次話からは新章になります。

詳しいご案内は、「活動報告」にて。

## プロローグ

むかしむかし、陽と月の神さまがまだ人と一緒に暮らしていたころ、ロタラ湾に「ロウストフト」という国がありました。

ロウストフトの王様は野心に燃え、大陸すべてを征服しようと戦争ばかりしていました。

明けても暮れても戦ばかり。

人々は家を焼かれ、畑を荒らされ、齒向かえば簡単に殺されます。罪もない民草の怨嗟の聲が、大陸中に木霊しました。

それを知った陽の神さまは、たいそう悲しまれました。

そこで王様を諫めようと、月の女神を遣わします。

王様は男です。美しい女神さまが説得したら、ころっと参って戦のことなど忘れてしまわなかなーと、そう思ったのでした。

たしかに王様は、あつという間に女神さまの虜になりました。けれど作戦は失敗してしまいます。

「世界のすべてを貴女に捧げよう」

王様はそう言って、ますます戦に精を出したのです。

もちろん、女神さまは断りました。世界などいらぬ、戦をやめてくれと、ただそれだけを願いました。

しかし王様は聞き入れません。

「すべての人間は、我々にひれ伏すべきだと思わないか？」

王様はそう言って女神さまの手を取り口づけ、そして野獣のよう

な眼でにやりと笑いました。

なんとということでしょう。

会話がまったく成立しません。しかもいつの間にか「我々」などと、勝手に仲間になられています。

女神さまは打ちのめされました。

話し合えばわかり合える。そう思って説得に来たのに、その前提が覆ってしまったのです。

そして話し合いなど無駄だ、そう思ったのは王様も同じでした。これまで王様は、欲しいものは力でもって手に入れてきました。そして女神さまも、そうやってモノにしようと考えたのです。

ところが王様は、女神様に手を出して、見事に失敗しました。なにがどうしてそうなったのか、誰も知りません。この時の記録はどこにもないので、訊いても無駄です。諦めてくださいね。

とにかく！ 女神さまは手に入らなかったのです。

それでも王様は、女神さまを諦めることなどできません。思い詰めた挙げ句、とんでもない暴挙に出ました。

なんと女神様を、城の奥深くに監禁してしまったのです。

月の女神さまが帰ってこない。

陽の神さまは、焦りました。

陽の神さまは世界を造り、生きとし生けるもの、そのすべてを守護しています。そして月の女神さまは死者を守護し、冥界へと導きます。やがて世界の終末を告げるのも、女神さまです。

戦は激しさを増し、死者は増えるばかり。なのに導き手は監禁されて、お仕事ができません。

死せる魂は、迷いました。なにせ「死ぬ」のは初めての経験なのです。死んだらどうすれば良いのか、どこに行けば良いのか、だれも知りません。死者と生者はお話しできないのですから、それも当然ですね。

そこに折悪く疫病が流行ったこともあり、世界中に死者があふれ

ました。

世はまさに暗黒の時代。

自分が生きているのか死んでいるのか、それすらもわからなかったと言われています。

このままでは生者がすべて、死者の仲間になってしまう。

時間はもう、残されていません。

陽の神さまは、苦渋の決断をしました。

力づくで女神さまを取り戻そうとしたのです。

女神さまには早急に交通整理をしてもらい、冥界への渋滞を解消してもらわなければなりません。あまりに死が近いと、人は引き摺られてしまうのです。

陽の神さまは、たったひとりでロウソフトフトへ向かいました。

城にはたくさんの方が待ち構えていましたが、そこは腐っても神さまです。文字通り兵を蹴散らして、女神さまを目指します。

陽の神さまが攻めてきた。

神さまが相手では、いかな王様でも勝ち目はありません。いま女神さまを返せば、許して貰えるかもしれない。側近はそう進言しました。

けれども王様は、女神さまを手放せませんでした。

このまま別れることになるならいっそ。そう思い詰めるほどに、女神さまを愛してしまっていたのです。

そして追いつめられた挙げ句、王様はまたしても暴挙に出ました。

「この世界が我らを認めないのなら、冥界で」

古来より何度も使い古された言葉です。独創性の欠片もありません。戦に明け暮れていた王様は、文学的な表現を苦手としていよう

です。

気の利いた言葉が出ないことに苦笑して、王様は宝剣を鞘から抜きました。

「私もすぐに後を追う。それまで大人しく待っている」

やなこつた。

女神さまはそう言いたかったに違いありません。そもそも女神さまは、王様のことが好きでもなんでもないので。なのに一方的に好意を寄せられ手込めにされそうになった挙げ句、監禁までされたのです。これで好きになれと言われても、とても無理というものでしょう。

女神さまは逃げました。でも鎖に繋がれていては、逃げようもありません。すぐに追いつかれてしまいます。

ぎらぎら光る刀身が、まっすぐに女神さまの胸に吸い込まれていききました。

王様は、宝剣を引き抜きました。

ところが女神さまの胸からは、血は一滴も零れません。

代わりに溢れ出たのは 闇。

「世界の終わり」が、女神さまに閉じ込められていたのです。

闇はあつという間に女神さまを覆いました。

そしてすぐに触手を伸ばし、王様も、城も、ロウストフトという国はおろか、世界までも飲み込もうと広がっていきます。

すべてが闇に覆われようとしていました。

ここでやつと、陽の神さまが到着しました。

遅過ぎます。女神さまがやられてしまう前に来なければ、まったく意味がありません。

なぜ遅れてしまったのでしょうか。

一説によると、陽の神さまは城の中で迷っていたということですが、しかしやはり、この時の記録はどこにも残っていません。神さまなのに迷うの？　なんて訊いても無駄ですからね。訊かないでくださいね？

話が逸れました。続けましょう。

世界はまだ生まれたばかり、終末を迎えるには早過ぎます。

陽の神さまは決意しました。

世界と、そして月の女神さまを救わなければなりません。

陽の神さまは、その力でもって世界を明るく照らしました。

かつて世界を造った時と同じように、暖かな光で人々を、世界を、女神さまを癒します。

やがて闇は小さくなり、女神さまに吸い込まれて消えました。

女神さまは目覚めます。

そして目にしたのは、陽の神さまの、変わり果てた姿でした。

陽の神さまは、力を使い果たして亡くなっていたのです。

女神さまは嘆き、そして深く哀しみました。

これまでがない、どす黒い感情が女神さまを支配します。そしてこの一連の出来事を引き起こした、ロウストフトの王様に呪いの言葉を投稿つけます。

「　其方など、消えてしまえばいい」

王様は、その時微笑んでいたそうです。消えろと言われて喜ぶとは、この王様、やはり変わっています。変態さんかも知れません。

それはともかくとして。



その日、女神さまの言葉通り、ロウストフトは滅びました。

国全体が、哀しみの業火に包まれたのです。

火の柱は天を焼き、三日三晩燃え続けました。

その様子は西の端のヘクストからも、東の果てのサリフリからも、大陸中からはつきりと見えたそうです。

そしてすべてが燃え尽きたロウストフトは、海の底に沈みました。ロタラ湾が綺麗な円を描いているのは、女神さまが燃やした所為なのです。

やがて我に返ると、女神さまは深く後悔しました。

罪も無い数多くの人々を巻き込んでしまったからです。

後悔先に立たずとは良く言ったものです。みなさんも、よくよく考えて行動しましょうね。

さて、女神さまです。

女神さまは、人の世界を去りました。

人と一緒に暮らしては、また同じことが起こるかもしれない。このようなことは、もう二度と繰り返してはいけないのだと、そう考えたのです。

北の果て、霊峰シャンティイの奥深く、人が辿り着けないその場所で、女神さまは長い眠りにつきました。

世界の終末がくるその日まで、目覚めることのない眠りです。

裏を返せば女神さまが目覚めたその時、世界が終わるといふことです。ね。

だから、「おばあちゃん」は言った。

女神さまがうっかり目覚めてしまわないよう、歌を歌って楽しい

お話をして、慰めてさしあげましょう

突っ込みどころは満載だった。

戦を終わらせるのに色仕掛けなの、とか。

そもそも神様のくせに簡単に捕まるな、とか。

交通整理の「お仕事」とやらは、どこでしていたんだ、とか。

極めつけは、女神さまを起こさないよう歌を歌って話をする、だ。もしわたしがそんなことをされたら、間違いなく飛び起きてしまうだろう。

でもそう言うと、「おばあちゃん」はひどく怒ってわたしを打つた。

女神さまへの敬意が足りない。

あの方の御許に行けるのは、とても名誉なことなのよ？

私は行けなかったのに。おまえという子は

ロタラ湾の南の端、高い高い塔の上。そこから見える蒼い空と、

果てのない青い海。そして、塔の小部屋の白い壁。

たったそれだけが、わたしの知る世界のすべて。

その世界が終わったのは、忘れられないあの日のこと。

月のない、まっくらな夜。

大人の怒声と金属の打ち合う音。

白い壁を、火が舐めるように這い登る。

崩れる天井。子供の悲鳴。

あつくてあつくて、くるしくて。

小さな手を引いて、喘ぎながらそれでも駆けた。

出口が見えて、階段を下りようと踏み出したとき、足の下がぐらりと揺らいだ。

崩れる。とつさに小さな手を抱き込もうとしたら、背中がとんと押し出された。

「  
」

振り返れば紫の瞳。

たったひとこと、口にして。

差し伸べた手を取ろうともせず、ただ綺麗な笑顔を浮かべていた。天と地が逆さまになって、紫の瞳がどんどん遠くなって。

大きな手がわたしを支え、抱きとめる。そして。

あの高い、天に向かってそびえ立つ塔が、あっけなく崩れ落ちた。

## 草原のただ中で・1

ひょう、と乾いた風が渦をまいて駆け抜けた。

切り立った山々から吹き下ろされるその風は、瑞々しい葉を震わせて灌木の枝の隙間を通り抜け、そして上空に舞い上がり、青い空に溶けてゆく。

風の生まれる山の中腹、岩と草地の境目に、オノレ隧道はぼつかりと口を開けていた。

周囲は頑丈な柵でぐるりと囲われているが無人である。この柵は隧道内に動物が入り込むのを防ぐためのもので、利用者は自由に開閉できた。こんな辺鄙な場所に割く人手はない、とアクサライはこの国境の管理を帝国側に一任しているのだ。ここ数百年の間、良好な関係を築いてきた両国だからできることである。

山から視線を転じれば、どこまでも広がる草の海。

山向こうは深い霧に覆われて、肌寒いほどだった。だというのに<sup>トシネル</sup>隧道を抜けたこの場所は、陽の光がさんと降り注いでうっかりすると眠ってしまいそうになる。

朝一番でその隧道を抜けて来た3人と1頭は、「開放厳禁」とでかでかと彫られた板が掛かる柵を外から丁寧に閉めると街道から少し逸れた草原まで移動した。そして馬が草を食む傍らで、地図を囲んで腰を下ろして小休憩を取っていた。

騎士と護衛士が王都までの最終確認を行い、少女はその話を真剣な眼差しで聞いている。サリフリまでは徒歩で一月弱。それなりの準備と心構えが必要になってくる。

少女の心はすでにサリフリへ飛んでいるのだろう。逸る心を抑えるように左手を胸に当て、その手を右手でしっかりと握りしめてい

た。視線はトゥルグとサリフリの間を何度も往復し、道のりをすべ  
て覚えようとするかのようだ。

騎士はその様子を見て苦笑すると、栗色の頭をくるりとかき回し  
た。

「なあ、チビ。俺と一緒に行くか？」

まだ言うか。

ラウルは渋面になって眉を寄せた。

騎士の方はその視線をあえて無視し、少女にどうだ、と問いかけ  
る。

カイルは地図から顔を挙げ、きょとんと瞳を瞬かせた。

「ザックさんは、お仕事でしょう？」

「まあ、そうなんだがな。……おまえひとりぐらいなら、ジュニア  
の負担にならんだろうし」

サリフリに急ぐなら馬の方が早い。だから一緒に、とザックは誘  
う。

だが少女は、いいえと首を横に振った。

「わたしはラウルと行きます。だって、ちゃんと守ってあげるって、  
約束したのです」

「ほへ……？ なに？ チビが、おっさんを守るわけ？」

「はい！」

少女は自信満々に胸を反らせて頷き返し、護衛士は額に手を当て  
嘆息した。そしてザックは顎を落とすときしゃりと顔を歪めて笑い  
出す。

面白過ぎる。根拠の無いこの自信が、いかにも子供らしい。コレ

の扱いは、やはり「おとーさん」に任せるべきか。それにコレを横から攫うような真似を、この護衛士は決して許さないだろう。

ザックはこの男と敵対したくはなかった。騎士としてコレは守らねばならない存在かもしれないが、それは護衛士に任せるとハーシユも言っていた。あいつはまだ若いが今まで間違った判断を下したことはない。心残りではあるが、今は自分の仕事を優先しなければならぬだろう。

そっか、と呟き地図を仕舞うとザックは立ち上がり、腰に手を当て伸びをした。

「おっし！ んじゃ、そろそろ行くか」

美味な草を求めて歩いたのか、馬は少々離れた場所にいた。ザックが名を呼ぶと長い耳がぴくりと動く。主人を認識しながらも、なおも草を食む姿に苦笑しながらもう一度、ザックはジュニアと名を呼んだ。

長い尾が風にそよぎ、二度三度、耳がふるりと振るわれる。

露を含んだ新鮮な葉を存分に食べ、やっと馬は満足したようだ。

口の端からはみ出た草を口の中に引き込みながら、軽い足取りで主人の元に戻ってきた。

ぶるる、と鼻を鳴らした馬の首筋をぼんと叩くと手綱を取って、ザックは二人を振り返る。

「じゃあな。俺は先に行く。……給料下げられたら敵わんからなー」

「はい。ザックさん、気をつけて」

言うなりととと、とカイルが駆け寄り、また馬にへばりついた。艶やかな毛並みの頬と鼻筋を撫でながら、名残惜しそうに別れの挨拶を交わしている。

「またね、ハーシユ」

「ジュニア！」

「……ジュニア、またね」

まったく、と愚痴りながらカイルを追いやり、ザックはひらりと馬に跨がった。

「おまえらが来る頃までに、仕事はきっちり終わらせてやる。それで旨いもんをたらふく食わせてやっからな、楽しみにしてるよ？」

「本当ですか!？」

「勿論だとも！」

闇色の瞳をきらきら輝かせたカイルに頷くと、ザックは馬の腹を軽く蹴った。馬は主人の指示通り、軽やかに歩き出す。

「また、サリフリで！」

片手を挙げて軽く振ると騎士はまっすぐに街道を下っていった。みるみるうちにその姿は小さくなって、丘の向こうに消えてゆく。手を振って見送っていたカイルが戻ってくるのを、ラウルは手元に引き寄せた。腰を屈めて眼の高さを合わせ、肩越しに南東の方角を指し示す。

「……見えるか？ あの小さな集落が、トゥルグの村だ。今日はあそこで休ませて貰う」

遠い丘の向こう、白く霞んだ草原に、いくつか角張った影が見える。そこがトゥルグの村。北方公路からアクサライ王国に入った時に最初に訪れることになる場所だ。

疲れたと思つたらすぐ報告しろ、無理はするなと言ひ含めてラウルは出発の合図をした。はい、と元気に返事をして、カイルは足取りも軽く歩き出す。

意気揚々と歩く少女を見守りながら、ラウルは気を引き締める。多少の起伏はあるものの、しばらくは緩やかな下り坂が続く。ここからルツカレまでならカイルの足でも12、3日で行けるだろう。それまでは、特に体調には気を配らなければならなかった。

巨大な山の連なりが国境となるだけあって、山向こうとは風の匂いも空の色も、土の感触さえ違つてくる。ただでさえ今は夏の終わり、寒暖の差が激しくなる時期で、大人でも体調を崩し易くなる。そうなるの特に子供はよく風邪をひくのだ。中央公路沿いなら街も大きく医者も居ようが、この辺境では病氣になつたら寝るしかない。この旅の一番の問題は、怪我と病氣だ。

そんなラウルの心配を余所に、カイルは元気に歩いていた。草むらを駆ける狐に声をあげ、延々と歌い続ける雲雀の息を心配する。小型の鷹の狩りに手を叩き、兎を見つけては弓があれば良かったのにとしきりに零す。一度石を投げて獲ろうとしたのを無理だと止めると、雉は獲れたと頬を膨らませた。

石に当たるとは間抜けな雉もいたものだ。それでも凄いな、と褒めてやれば、カイルははにかんだように笑み、次に獲つたらご馳走しますと約束してくれた。

そうやって他愛も無いことを喋りながら、二人はなだらかな坂を下つて行った。

その日は順調に進み、日暮れ前にはトゥルグの村に着くことができた。

先行するザックが話をしていたようで、二人は村人たちに熱烈に歓迎された。村長宅に招かれて夕食を振る舞われ、本格的なアクサライ料理にカイルは眼を輝かせ、相変わらぬ健啖ぶりを見せた。



腹が膨れてうとうとしだしたのを寝かしつけ、ラウルは村人たちと酒を酌み交わす。そして夜もとっぷりと更けた頃、床に入る前に様子を見ると、カイルは穏やかな寝息を立てていた。満ち足りたように眠る姿にラウルも安堵し、就寝した。

しかし次の日、カイルは動けなくなっていた。

## 草原のただ中で・2

トゥルグの村は集落と言っても良いような小さな村である。人口はわずか数十人、10世帯足らずで皆が家族のように暮らしていた。空が茜色に染まる頃、ラウルとカイルは村に辿り着いた。ここは辺境とはいえ街道沿いの村である。旅人を受け入れてくれる家があるはずだからと村の中に踏み入れれば、なぜか村長と名乗る老人が出迎えた。

そのまま村長宅に連れ込まれ、あれよあれよと言う間になぜかカイルが上座に据えられる。「ようこそお越し下さいました」と頭を下げる村長に、いったい何が、と話を聞けばザックが余計なことを吹聴していったらしい。

なんでもカイルは「殺された両親の敵を討つため、勇猛果敢なアクサライ人の助力を得ようと王宮へ向かっている西の果ての亡国の王子」なのだそうだ。そして自分は王子を陰ながら助ける騎士だと言って、ザックは去って行ったと言う。

ラウルは激しい頭痛とめまいを覚え、額に手を当て低く唸った。

確かにあの男は騎士のようだが、雇い主は帝国だ。しかも西に滅んだ国など存在しない。

まさかこんな荒唐無稽なホラ話、信じるはずもないと思ったのだが村人たちは真に受けた。そのため二人は村人総出で熱烈な歓迎を受け、拳げ句珍獣扱いで持て成された。

外套を脱いで顔を露にすれば歓声上がり、差し出された茶を啜ればどよめきが起こる。そしてまた、流暢なアクサライ語を話すと知れると周りに人が群がった。一挙手一投足を注視され、カイルは居心地悪そうに小さくなる。

もはや見せ物状態で、とても我慢ならなかった。

ラウルは誤解を解こうと必死になって説明した。しかし類似稀なカイルの美貌や優雅な物腰は、ホラ話の裏付けにしかならなかった。何を言っても「わかっていきますとも」と訳知り顔で頷かれる。

さらには羊が3頭も振る舞われ、村中が沸き立った。

お手上げだった。羊を潰すなど滅多にないのに、3頭も。ここまですられては、とても文句は言えなかった。見ればそれまでこちこちに固まっていたカイルも、村の子供たちと遊んでいる。

これはもう、村人たちに娯楽を提供したと思って諦めるしかないか。

ラウルは気持ちを切り替え、村人達と一緒に酒と食事を堪能した。

やがて篝火が焚かれ、音楽が奏でられる。宴は夜遅くまで続き、カイルも楽しそうに笑っていた。

次の朝、いつも通りに起床し身繕いを済ませると、ラウルは腰を下ろして少女の様子をうかがった。

布団は丸く盛り上がり、その隙間からは艶やかな黒髪が覗いている。一昨日は板間に雑魚寝だったが昨夜はちゃんとした寝具であったせいか、カイルはまだぐっすりと眠っているようだ。

寝かせたいのは山々だがもうそろそろ夜が開ける。陽のあるうちに、可能な限り移動しておきたかった。けれど慣れない旅で疲れているだろう少女を好きだけ寝かせてやりたいというのも、正直な気持ちではある。

もう少し、もう少しと待ってみるものの、布団はいつまでたってもびくりとも動かない。

「……カイル？」

不安に駆られ、ラウルは布団をかき分け覗き込んだ。

どきり、と心臓が跳ねる。

色を無くした青白い顔、苦しげに寄せられた眉、かすかに開いた口元。息をしているのか不安になるほどの、浅い呼吸。昨日までの瑞々しい生気に溢れた姿が嘘のように、少女はすっかり弱っていた。咄嗟に額に手を当てるが、熱はない。むしろひやりと冷たいほどだ。

小さな身体をそっと抱き上げ頬を叩く。何度か名を呼ぶと目蓋が震え、ゆっくりと開かれた。どんよりとした暗い瞳がラウルを見上げ、ひび割れた唇がかすかに動く。

ラウルは痛ましい思いで眉を寄せた。問題ない休んでいる、と伝えると、ほっとしたように目元が和らぎ再び瞳は閉じられる。

言葉は発せられなかったが唇の動きから、言いたいことは伝わった。

なにを詫びようと言うのか、ごめんなさい、と少女はそう言っていたのだ。

陽が中天にさしかかる頃、カイルは再び目を覚ました。

枕元に座っていたラウルに気がつく、眼を細めて嬉しそうにほわりと微笑む。身を起こすのを助けてやり、それから白湯を含ませた。ゆっくり飲ませて濡れた口を拭ってやると、カイルは赤ちゃんみたい、と頬を染めて俯いた。

身体からはくたりと力が抜け、とても力が入らないというのに、

赤子もなにもないだろう。病人は大人しく甘えていると寝かしつけながら頭を撫でると、カイルはふう、と頬を膨らませた。

「わたし、大人なのに」

「病気の時は、大人も子供も関係ない。……気分はどうだ？」

「……はい。もう平気です」

そう言っただけ口を閉じたが、なお物言いたげに見上げてくる。どうした、と促してやれば眉を下げてごめんなさい、とまた詫びた。

「明日には歩けるようになりますから。今日は……休ませて貰っても、良いでしょうか？」

謝ることじゃない、ちゃんと寝ているともう一度、ラウルは黒い髪をくしゃりと撫でた。子供じゃないのに、カイルはそう言ったが、眼を閉じればすぐに眠りに落ちてゆく。

その身体をしっかりと布団で包み、ラウルはじつと少女を見守った。

朝よりはマシになったが、まだ顔は青白い。風邪かとも思ったが、どうやら違うようだ。熱もなく、むしろ身体はひやりと冷たくなっている。

村人達も、心配していた。

大丈夫、疲れが出ただけだ。すぐ治る。そう言い聞かせたが、同時にそう信じたかった。

「国境を越えたから。気候が変わって……身体がびっくりしたのでしょう」

病気ではない、少し疲れたただだとカイルは言った。

しかし、本当にそれだけだろうか。

ラウルは医者ではない。人の身体や病気のことにはわからないが、それでもただの疲労ではないように感じられる。得体の知れないなにかに囚われたような焦燥感だけが募り、落ち着かなかつた。それでも夕には身を起こし、カイルはわずかながらも食事を探った。頬にも赤みが差し、復調の兆しを感じられる。心配かけてすみません、とはにかなだように微笑む姿に、皆でほつと安堵した。

そしてその夜。

夜半すぎ、ラウルは少女の声で眼が覚めた。荒い息。小さな、そして苦しげなうめき声。

カイルは、うなされていた。

ラウルは飛び起きて少女の元に駆けつけた。名を呼んで肩を揺すり、頬を叩いて意識を浮上させようと試みる。

しかし悪夢に捕われたのか少女は弱々しくもがくばかりで、一向に目覚めない。

いや。やめて。放して。

どうして、こんな。どうして。

「あるとき」だ。襲われたというその時、その記憶が少女を苦しめている。

抱き起こせば頭を振り、ラウルの手から逃れようと必死になって爪を立てる。精一杯力を込めるが、しかし指の一本も引きはがせない。

ラウルはもう一度、強い口調で名を呼んだ。

「カイル！」

はっとして、びくり、と少女は仰け反った。  
虚ろな眼を見開いて、それでも必死になって手を伸ばす。

「お兄さま……」

宙を彷徨う手を握りしめ、ラウルはあらがう身体を抱き込んだ。  
もう大丈夫、心配ないと何度も囁き、胸の内に閉じ込める。  
身体から強ばりが溶けるまで、ずっとそうして抱いていた。

やがて少女は落ち着きを取り戻し、ほう、と吐息が零れ落ちた。  
耳を澄ませば微かに寝息も聞こえてくる。

しかし身体はすっかり冷えきって、指先も足先も、氷のように冷たくなっていた。

ラウルは少女を抱いて横になり、布団を引き上げ身体を包む。  
この指先に、温もりを取り戻してやりたかった。  
手羽でも胸肉でも、好きなだけ齧ればいい。  
それで悪夢から解放されるなら、いくらでも差し出そう。

ん、と鼻から息が洩れ、柔らかな身体がすり寄ってきた。胸の下から背中へと、撫でるように片手が回されもう片方も首に回り、きゆうとしがみついてくる。宥めるように小さな肩をさすってやると、さらに力が込められた。

息苦しい。ラウルは眼を開け胸元を覗き込んだ。

「お兄さま？ わた わたくし、素敵な夢を見たのです」

「……………うん？」

広い胸に頬を寄せ、少女は幸せそうに笑んでいた。  
まだ夢から覚めたくないというように、闇色の瞳を目蓋の裏に隠したまま、カイルはその素晴らしさを語りだす。

「髪を切って、男物の服を着て、美味しいものを食べながら旅をして。真っ白な靴下をはいた馬にまで乗ったのです」

「……………」

「わたくし本当に楽しくて」

「……………」

ね、お兄さま、聞いています？ と仰のいて、黒と翠の瞳は正面から交わった。

「……………」

長い睫毛が音をたてて瞬いた。

ぱち、ぱちと何度か瞬きを繰り返すと今度は眉がひそめられ、首が斜めに傾いた。

背に回った腕が解かれて伸びて、ラウルの頬に当てられる。

その指は何度か輪郭をなぞるとこめかみで止まり、目尻をぐいと押し下げた。

「ひっ！」

「……………」

どうした、と口を開きかけた途端、少女は青ざめ飛び退いた。

エビが跳ねるように、横になったまま飛んで後退したうえ布団の中で丸まって、カイルは顔だけを表に出す。さらにぼつと音が聞こ



えそうなほど、その美貌は一瞬にして綺麗に茹で上がった。

「ラ、ウル？ どうして？ ……ええ？ 夢じゃ」

この時のラウルはただ嬉しくて。悪夢から逃れて元気になった少女に微笑みかけながら、どこか苦しいところはないかとじっと目を凝らして見つめていた。

夢と現実の狭間で混乱するカイルを宥めてやれば良かったのだ、とは後々気付いたことである。

「わ。わた、わた…わたし、じゃない。わたくし、なにを…」

陸に打ち上げられた魚のように、ぱくぱくと口を動かしカイルは喘いだ。

柳眉がひそめられ、闇色の瞳がじわりと潤む。そしてたった一言、心からの叫びを残して少女は布団に潜り込んだ。

「ラウル、酷い！」

布団の中で籠城した少女を攻略するのは、なかなか大変な仕事だった。

草原のただ中で・3

「…………ラウル？」

ひっそりと、小さな囁きが零れ落ちた。

広い背中で身じろいで、カイルはまた頬を押し付けもたれかかる。背の高い護衛士が一步踏み出すに従って、小さな手足がゆらりと揺れた。

ゆらり、ゆらりと揺れながら、男の背中で力を抜いて、少女は大人しく背負われていた。

「気分はどうだ？」

「もう、平気です。…………わたし、いつ…………？」

「昼過ぎだ。疲れが出たんだろう」

「…………そう、ですね」

「もう少し、休んでろ。着いたら起こすから」

「はい。…………ありがとうございます」

すつ、と身体から力が抜けた。

眠ったようだ。

ラウルはそれを確認すると、また足を動かした。

陽は傾いてきたが、沈むまでにはまだ時間がある。前方のなだらかな丘。今日はそこを越えておきたかった。

トウルグの村を発って7日。カイルの不調は続いていた。

朝は、まだ元気なのだ。なのに陽が中天を過ぎると途端に具合が悪くなる。顔は蒼白になり足がもつれ、歩けばすぐに息が上がる。

そして身体から力が抜け、動けなくなってしまう。

カイルの肌は日焼けを知らず、染み一つなく滑らかだ。徒歩の旅など、経験したこともないだろう。加えて慣れない気候、味気ない食事。男でも音を上げるような、過酷な旅。疲労が溜まり、体調を崩すだろうことは予想していた。

しかしこれはなんだ。これはただの「疲れ」ではない。

同じことを3日も繰り返せばそれぐらい、ラウルにも理解できるけれどカイルは慣れないだけだ、じきに良くなるとそう言って、頑として譲らなかつた。そして動けるうちに先に進もうと、焦っていた。

今日も歩いている最中に倒れ込み、そのまま意識を失ったのだ。無理もない。トゥルグを出てから夜もまともに寝ていないのだ。カイルは隠し通せていると思っっているようだが、ラウルは知っていた。

本格的な旅が始まった最初の夜。

結局、半日しか移動できずにその日はそのまま野営となった。ソマまでの道のり、井戸の位置、食糧。そしてカイルの体調。横になって眼を閉じて、頭の中に地図を描きながら考えていた時のことだ。

それは本当に微かな音で、寝入っていたら気付かなかつただろう。不審に思い、ラウルは後方、少女の方へと意識を向けた。

「う」

小さな衣擦れ、そしてさらに密やかなうめき声。

息を殺して身体を丸め、少女はじつと耐えていた。痛みが去るとそつと息を吐いて力を抜くが、またすぐに、身体は強ばり固くなる。それを何度も何度も繰り返し、やがて意識を失った。

星明かりを頼りにそつと様子をうかがい、ラウルはきつく眼を閉じた。

カイルは小さく丸まって、声を漏らさぬよう布を噛み、その上から手で押さえて堪えていたのだ。

気を失ってしまえば、そこに苦痛の色は見られない。

しかしそれまで、一体どれほど苦しんだのか。

( 一度村に戻り、回復を待った方がいいのか。それとも )

ラウルの胸は、刺すように痛んだ。

けれど次の日、カイルは笑顔を浮かべ、「早く行きましょう」とそう言って歩き出した。

遅れた分を取り戻さなければ。早く、早くサリフリへ。顔色？

気のせいです。大丈夫、歩けます。

青白い顔でひどく怠そうに、けれど必死になって、前へ、前へと足を動かし、昼が過ぎると倒れ込む。動けなくなって初めて身体を休め、そしてまた、夜になると痛みを耐えて歯を食いしばる。ラウルに知られないよう、毛布の中で丸くなって声を殺すのだ。

なぜそんなに急ぐのか。

それを問いただと、ごめんなさい、と顔を伏せ、それきり口を噤んでしまう。

弱った小さな身体に抱え込むもの。それを吐き出せない少女。そして黙って見ていることしかできない自分。

何もかもが哀しくて、身を切られるように辛かった。

そして、陽は昇る。

小鳥が啄むほどの食事を摂って、カイルはまた歩き出す。しかしすぐに、崩れるように座り込んだ。

意識を手放せばそのまま深い眠りに落ちることができなのに、夕べはずっと耐えていた。眠れなかったのだらう。

ラウルは荷を解き、剣と毛布とロープで簡単な背負い帯を作った。そこに座るよう促すと、少女は首を横に振る。

「だって、わたしの荷物も持ってもらっているのに」

そこまで甘えるわけにはいかないと、真つ青な顔でラウルを見上げ、立ち上がるうと膝に手を当て力を込める。

本当に、頑固なことだ。

だがラウルも譲れなかった。

「早くサリフリに行きたいんだらう?」

そう言えば、カイルはぐつと詰まって黙り込む。

ラウルも先を急ぎたかった。ソマで、医者に診せてやりたかった。渋々頷く少女を毛布で包み、背に括りつけると男は危なげなく立ち上がる。荷は両脇にひとつずつ、子供ひとり背負っても、ラウルはびくともしなかった。

盛り上がった肩に頬を当て、両手はラウルの胸の前で組み、揺られながらもカイルはしきりに謝った。

「ごめんなさい……わたし、ラウルに何も返せないのに……」

「見返りを求めているわけじゃない。だいたい、弱っている人間を放っておけるか」

「でも……」

「カイル。もし俺が倒れたら、どうする?」

「……助けます」

「そういうことだ。困っている人を見かけたら、助けてやれ。それで良い」

それきりカイルは大人しくなった。しかし納得はしていないようだ。

本当に気持ちだけでじゅうぶんだった。しかしきちんと形にして礼をしたいと、その気持ちはわからないでもない。律儀なことだと歩きながらもラウルはひっそり苦笑した。

「守ってくれるのだろうか？ 礼は前払いで貰ってる」

「……それは。一緒に行ってくれて。……だから」

「なら、そうだな。……サリフリに着くまでは、俺の言うことを聞いてくれ。これでどうだ？」

「……」

体調が回復するまで休めと、そう言われると思ったのだろう。カイルは顔を伏せて黙り込んだ。

「先に進むのを最優先にするから」

「それなら……」

あっさりと要求の呑んだ少女に、ラウルは満足げに喉を鳴らす。

「なら、まず最初に。……もう謝るな」

「……はい……」

胸の前で合わされた小さな手に、きゅっと力が込められる。背中に頬が押し付けられ、しばらくそうやって、カイルはラウルの背中で揺れていた。

東の空は藍に染まり、気の早い星がひとつ、ふたつと瞬いている。西に聳えるトウルネイ山は巨大な黒い壁となつて天と地を引き離す。そこから伸びる皺のひとつは丘となり、街道を越えて伸びていた。広い背中に身体を預け、ゆらり、ゆらりと揺れながら、カイルは赤く染まつてきた西の空をぼんやりと眺めている。ふと、小さな吐息のような言葉が零れ出た。

「わたし……こんなふうになるなんて、思ってもみなかった」

「誰でもそうさ。望んで病気になる奴なんて、いない」

「……ひとりでも大丈夫つて。ちゃんとサリフリまで行けるつて、そう……思っていました」

「……そうか」

「なのに、わたし……ラウルがいなかったら、何もできなかった」  
「……………」

動かない手足なんていらぬのに、そう言つて、カイルは唇を噛むと顔を伏せる。

ラウルは無言で足を進めた。一步、二歩、三歩と、最後の一息でなだらかな丘の頂上に躍り出る。

手を伸ばして背に回し、カイルの腰をぼんと叩く。

「ほら、あれがソマの街だ。これから冬支度だからな。人がたくさん集まつて、今の倍以上に大きくなる」

示したのは、北方公路がまつすぐに向かう先の街。

街道の両脇に家々が立ち並び、白く平らな屋根も壁も、夕日に照らされ優しい朱に染まつている。遠くには、ぼつりぼつりと黒い点

のように幕家が見え、やがて集まり町の一部になってゆく。

カユテやトウルグの村など、比べ物にならないほどに大きな街。カイルは顔をあげ、眼を丸くして見入っていたが、ルツカレはさらに大きいと聞いて黒い瞳を瞬かせた。

「……本当に？」

「そつだ。中央公路沿いでは、あのぐらいの街が普通だな」

「凄い……」

感嘆の息を漏らした少女に、今度は丘を下った先を指し示す。

「今日はあの窪みで野営する。明日は少し早めに出発すれば、昼前にソマに入れるだろう。そうしたら、久しぶりに旨い食事でありつける」

ちゃんとした布団でも寝られるな、そう言って首を巡らせ少女を見ると、光を弾いて輝く瞳がふわりと笑んだ。夕日のせいかな、頬に赤味が差して顔色も悪くない。午後いっぱい、ラウルの背で眠ったおかげでカイルは随分と回復したようだ。

さあ、もう少し。しっかり掴まっている、と黒い頭をくしゃりと撫でると、少女は笑いながら首を竦めた。

首に回された手を取って、ラウルは足早に坂を下り始めた。

「……このぐらいで良いか？」

膨らんだ布袋に満足して、ラウルは野営地に向かって歩き出した。体調を崩してからめっきり食が細くなった少女に、少しでも食べさせてやりたかった。丘を下りながら見つけた樹木に、これなら、



と目をつけていたのだ。それで陽が完全に沈む前にと荷物とカイルを置いて、灌木の茂みに分け入りたわわに実った果実をもちでいた。

坂を少し上ると野営地が見えてくる。荷を置いたその場所で、カイルは大人しくしていたようだ。毛布にくるまり腰掛けながら、身体をひねって静かに山を見つめている。何の感情も映さずただぼんやりと、天を支えるようにそびえるトゥルネイ山に見入っていた。

これまで度々見られた光景だ。

休憩中も、ラウルに背負われている時も、じつと山を見ていることが多かった。それは本人も意識していなかったようで、指摘すると首を傾げてわからない、と言っていた。

その姿はまるで山から来る「何か」を待っているようで、ラウルは酷く落ち着かなかった。得体の知れない「何か」が少女を連れて行ってしまう、そんな気がして不安だった。

カイル、と呼びかけようとして、ラウルははっと息を呑んだ。

影が、伸びていた。

山の陰から射す強い光が少女を照らし、類い稀なその顔を文字通り白く輝かせる。そして短くなった髪を補うように影が伸び、身体をすっぽりと覆っていた。渦をまいて足元まで伸びる、長い黒髪に漆黒の衣。

それは何者にも染まらない、闇よりも暗い黒。

あれは

(禁色……)

いや。影だ。

そう、ただの影。ああやって座っていれば、誰でもそう見える。あれは黄昏時の光が見せた、錯覚だ。

「……ラウル」

少女は振り向くと、あざやかに微笑んだ。

ラウルも微笑み返そうとしたが、頬はぎこちなく引きつった。

長い髪の少女はまるで別人のような顔で　　違う。これは「カイル」だ。世間知らずの、強情な少女。今は体調が優れないが、本来なら瑞々しい生気に満ちていて、信じられないくらいよく食べる。くるくる表情が変わって目が離せない、小動物のような子供。

そして何処かの国の、貴族の娘。

何処かの国　　ならなぜ、あの騎士はこの子を帝都に連れて行くとした？

そもそもなぜ、襲われたのだ？

なぜ、本名を名乗れない？

洗練された優雅な所作、癖のない綺麗な公用語、帝都にあるという、兄の墓。

それらが意味するのは

ひやりとした指先が、頬に触れた。

我に返って瞠目した護衛士を、不安に揺れる闇色の瞳が見上げていた。

「ラウル？」

「……ああ、すっかり冷えてしまったな」

頬に当てられた白い指を両手で覆い、熱を移して暖める。

（　　考えるな。いまはもう、これ以上考えてはいけない。この子は『カイル』……それだけだ）

無理矢理口を笑みの形に引き上げて、ラウルは少女に布袋の中を

見せた。

あつと声をあげ、カイルは眼を見開いて覗き込む。

「柘榴……こんなに」

「この辺りには、よく自生しているな。たくさんあるから、好きなだけ食べると良い」

ただし、食事の後で。

そう付け加えると、はい、と返事が返された。

声に力が戻ってきた。この分なら、そこそこ食べられるだろう。

ラウルは眼を細めると、食事の支度に取りかかった。

そして。

切り分けられた柘榴の欠片を、カイルはじつと睨んでいた。眉間に深い皺まで刻み、憎々しげに深紅の粒を見つめている。

さては綺麗にほぐされた実しか食べたことがなかったのかと、ラウルは食べ方を教えてやった。

「硬い皮をこうして持って。……そう。白い綿は苦いからな、紅い実の部分だけ、歯でこそげ取るように」

ラウルの指示に従って、カイルは柘榴を口に入れた。

一口噛むと、肩をすくめてぎゅっと眼を閉じ、そして満面の笑みを浮かべてラウルを見上げる。

すっぱいけれど、美味しい。

きらきら輝く瞳がそう言っていた。

その様子に、ラウルも心からの笑みを浮かべることができた。

こんな生き生きとしたカイルの表情を見るのは久しぶりで、嬉しかった。

カイルはネズミのように、小刻みに顎を動かしている。

妙な食べ方をするものだ。とラウルも柘榴を頬張ると、実を噛み締めて飲み込んだ。

すると、あ、と声が上がリ、同時にどうしよう、とカイルは口を押さえて青くなった。

また具合が悪くなったのかと慌てるラウルの膝に、カイルは瞳を潤ませ継りつく。

「種、食べてしまいましたか？ ……さっきわたしも、呑んでしまった」

どうしようどうしよう。おろおろと、カイルは取り乱すばかりで話にならない。

柘榴は傷んでいなかった。種は食べても問題ない。だから落ち着け。いったいどうした？ 背中をさすって穏やかに尋ねると、涙を浮かべた黒い瞳が翠の瞳を正面からぐつと覗き込んだ。

「だって。葡萄のような小さな種を一度にたくさん食べてしまうと、おへそから芽が出てきてしまうのですよ？」

ふぐつ

鼻と口から何かが漏れた。

おまけに妙なところに入ってしまい、ラウルは呼吸困難に陥った。地に伏し悶える男の背を揺すりながら、もう芽が出たの？ とカイルは必死になって名を呼んだ。

ラウル、ラウルと悲鳴のようなその声が、いつそう男を悶えさせる。

それはまるで、拷問のようなひとときだった。

そして、しばらく後。

ラウルは涙を拭いながら、種を食べても芽は出ない、と説明した。もしそれが本当だったなら、とつくに柘榴が芽吹いている。

「兄が！ 兄がそう言っていたのです！」

兄が間違ったことは一度だってありません！ カイルは顔を真っ赤にして釈明するが、説得力は皆無だった。

確かにその「兄」が本気で言ったとは、とても思えない。恐らくは食べ過ぎるなど、そう言いたかったのだろう。

しかしそれを真に受けて、少女はずっと信じていたのだ。

純粹なその気持ちを笑うのはマズい。

そう思ったが、耐えられなかった。

満天の星の下、冷たく乾いた風に乗り、腹を抱えて笑う男の声はどこまでも広がっていった。

そしてその夜、カイルはまた兄を呼んだ。

うなされているのかと心配したが、しかし漏れる言葉は「種」とか「芽」とかそういったことばかりで果てはくすくす忍び笑いまで漏れてきた。

楽しそうなその姿にラウルも安堵し、久しぶりにぐっすり眠ることができたのだった。

## 草原の街・1

斜めから、刺すような陽射しが鋭く大地を照らしている。それでも影は人の形を地面に写し、秋の気配を知らせていた。

この光が優しく円く、すべてを包み込んで穏やかになった頃、それが冬の始まりとなる。霊峰シャンテイーから吹き下ろされる冷たい風が来る前に、冬支度を済ませなければならなかった。

この地の秋はとても短く、あっというまに過ぎてしまう。

厳しい冬を乗り切るために、夏の間成果を持ち寄り足りない物を補いながら、人々は助け合って生きてゆく。そのため秋から冬が始まる直前まで、草原のただ中のソマの街は、交易の街としての賑わいを見せるのだった。

「幕家は氏族でだいぶ形が異なるし、布なんかも家族単位で模様が違ってくるからな。あの幕家が集まると、それは見事なものなんだ」

ソマの周辺に黒い点のように見えるのが、周辺から集まってきた各氏族の幕家である。中央公路沿いではあまり見られなくなってしまうが、内陸ではさらに規模が大きくなる。

かつて訪れた町での様子を話して聞かせると、カイルは黒い瞳を輝かせ、興味津々聞き入った。幕家が集まるのは年に一度と知って肩を落としたが、すぐに拳を握りしめて宣言する。

「今回は無理だけど、来年は絶対見に行きます」

そう言って、にこりと笑って歩き出した。

カイルは一晚で、これまでの不調が嘘のように回復した。量はまだ少ないが、食事も摂れるようになってきた。歩いてもふらつかないし、顔色も悪くない。本調子とはいかないまでも、復調に向かっているようだった。

街に興味が引かれるのだろう、下り坂を駆け出しそうになるのを止めながら、護衛士とその連れは、予定よりもだいたい早くソマの街に辿り着いた。

荷を担いだ男、駆け回る子供たち。馬やロバを連れた商人風の男、美しい刺繍の施された衣装を身にまとった女たち。人々が行き交う街道に面した大通りは、賑やかな喧噪に包まれていた。

建物からは可動式のひさしが伸び、その下には色とりどりの品々が並べられている。肉、野菜、果物はもちろんのこと、布の小物や革製品、毛織物から雑貨まで、果ては鶏やら羊やら、とかく売れるものはなんでも揃っているようだ。

アクサライの人々の華やかな装いが眼に眩しく映るのだろう。目を離せばどこかに飛んでいってしまいそうなカイルを連れて、ラウルは大通りから一步逸れた道に入った。

「……両替、ですか？」

「ああ。とりあえず銅貨を一枚、両替しておくといい」

「おじさんは……テネルス銅貨と帝国銅貨は大陸中で使えるって」「そうだな」

フードの奥から首を傾げて見上げてくる少女に眼を細め、頷くとラウルは説明する。

「アクサライは物価が安いから。食べ物なんかは銅貨で支払ったり

すると、釣りがないことがある」

「……ええ？」

「だから、少し小銭を作っておいた方が良いんだ」

両替しすぎると重くなるから、少しだけ。そう言いながら立ち止まったのは、店とは思えない小さな家の前だった。怪訝そうな顔をするカイルに、柱の一部を示してやる。装飾に紛れて、そこには「両替」と描かれた小さな板が掛かっていた。

中を見れば奥は高床になっており、卓がひとつ置いてある。薄暗いその室内で、ひとりの強面の老人が腰を下ろして茶を啜っていた。ラウルはフードを外すと、カイルを連れて遠慮なく中に入る。

「……なんだね、あんたら」

ずかずかと奥に踏み込んできた、いかにも外国人といった格好の二人に老人はおっくうそうに声をかけた。髪も眉も髭すらも白く染まった目つきの悪い老人は、眼光鋭く二人を睨む。

「両替を頼む」

「……いくらだ」

「テネルス銅貨を2枚」

「40シャルクになるが、良いかね？」

おや、とラウルは片眉を跳ね上げた。

「随分だな。ルツカレでは48シャルクだったが」

「向こうと一緒にされちゃ困る。ここにも相場って物があらあな」

「……そうだな。もうそろそろ、寄り合いの季節だ」

老人の瞳に、険を帯びた光が宿った。むっつりと口を結んで腕を



組み、ぎよろりとラウルをねめつける。

ラウルの方も負けてはいない。その背の高さを生かし、腰に手を当て力を込めた眼でもって、しっかと老人を見下ろした。

強面同士がにらみ合い、静かな火花が散らされる。

「……42」

「相場は46つてとこだらう？」

両手を広げて肩をすくめたラウルを見上げ、老人の眉と口髭がぴくりと動いた。膨らませた頬からゆっくりと息が吐き出され、唸るような声が低く響く。

「44だな。……これ以上は出せん」

「よし、それで」

二人は固く握手を交わし、契約の成立と相成った。

革袋から取り出した2枚のテネルス銅貨と、小さな穴に紐が通された長方形の貨幣が引替えられる。

じつと二人を見ていたカイルが促され、老人の前に歩み出た。

「……あの、おじいさん。わたしも両替してください」

両手を重ねた手のひらに、テネルス銅貨が1枚、ちんまりと乗っている。

身を乗り出して銅貨とカイルを交互に眺めた老人は、鼻に皺を寄せると大きな溜息をついた。

「……22シャルク、だな」

「はい！ お願いします」

銅貨を受け取り差し出された白い右手をがっちり握った老人は、二度三度、その手を上下に動かした。そして卓の引き出しから金を取り、ほら、と差し出し小さな手に乗せる。貨幣を受け取ると、カイルは眼を輝かせて数え始めた。

「……確かに」

「確かに！」

ラウルが再度確認したのに続けてカイルも声をあげ、ありがとうございます、と笑顔を見せた。その様子に老人は眼を細め、穏やかに祈りの言葉を投げかける。

「……陽が旅路を照らすように」

「御身にも安寧を」

「御身にも、安寧を！」

返された言葉に老人は、ほお、と眼を丸くすると頬を緩め、そして満面の笑みを浮かべて頷いた。強面が一転し、とろけるように目尻を下げた様子にカイルも嬉しそうな笑顔を見せた。そして手を振り別れを告げて、二人は両替屋を後にした。

街道から一筋外れたやや小さな道を、二人は南に向かって歩いていった。住宅地がほど近く、大通りの喧噪もここまでは聞こえてこない。等間隔に並んだ街路樹には馬が繋がれ、主人が戻るのを待っているようだ。

「……おじいさん、びっくりしましたね」

「そうだな。あの挨拶は、アクサライ人独特のものだから」

くすりと笑い、カイルは楽しかった、と上機嫌だ。

「両替つて、とつてもどきどきするものですね！」

「あー……いや、今回はたまたま、だ」

両替であんな交渉をするのは久しぶりだった。最近はどこでも相場はそう変わらないと安心していただけが、辺境ではまだまだ遅れているようだ。外国人と思って吹っかけたのだろうか、本当に油断も隙もない。

妥当な値で取引できて、やれやれと胸を撫で下ろすラウルの横で、カイルはなにやら復習していた。

「ここは田舎だから、運ぶ経費が掛かって都会よりも交換比率が悪  
いけど、これから幕家の人たちが集まってくると、テネルス銅貨の  
需要が高まるのですね？」

「……ああ、そうだ」

「だから都会と同じ率で交換できる……でも、どうしてテネルスの  
お金が欲しいのですか？」

ちゃんとアクサライのお金があるのに。

カイルのその疑問は、もっともなことだった。

それにしてもずいぶん難しい言葉を知っている。なかば感心しな  
がらも、ラウルはにわか教師となって解説を試みた。

「そうだな、やはりアクサライの外では使えない、というのが大き  
いだろう。金貨や銀貨もあるが、王都周辺でしか出回ってないしな」

アクサライ金貨があることを知らない人も大勢いる、と言うと、  
カイルは眼をまんまるに見開いた。

「帝国やテネルスの貨幣は、価値がそうそう変わらないから。そう言う意味でも人気があるな」

「……ラウルは、なんでも知ってますね」

凄いと尊敬の眼差しで見つめられ、ラウルは視線を泳がせ頬を掻いた。大した説明にもなっていないのに、と少々気恥ずかしい。

「このお金も素敵なのに」

カイルが指に挟んで掲げたのは、先ほど両替してもらったシャルク貨幣だ。長方形の表側には飾り文字で「1」と、裏側にはアクサライ王家の紋様が刻まれている。巧い具合に上端の真中に穴が空けられており、紐を通せば首飾りになりますね、とカイルは少女らしい発想をみせた。

「まあ、初めてなら物珍しく見えるだろうな。……さて、着いた」

「……ラウルの、お知り合いのお家ですか？」

足を止めたのは、住宅街の一角。塀に囲まれた小さな平屋の家だった。

庭にはいくつか果樹が実り、入り口には赤と青の2色の長い旗が掛けられている。

カイルはそれに気がつくのと、顔をしかめて後じさった。じり、じり、と後退する肩に手を当て阻むと、恨めしげな瞳が見上げてくる。

「こら、逃げるな」

「わたし、もう良くなりました」

「まだ完全じゃないだろう？ 一度診てもらおう」

この先はルツカレまで医者はいないのだから、念のため。そう言ってもカイルは頑として動こうとしなかった。

なぜそんなに拒むのか。ラウルは膝をついて小さな手を握り、俯いた顔を覗き込んだ。しかし少女は顔を背けて視線を逸らし、決して視線を合わせようとしない。

先ほどまでの上機嫌がすっかり萎れ、口がへの字に結ばれている。眉も哀しげにひそめられ、見ているだけで胸が痛んだ。

けれどラウルも譲れなかった。宥めるように声をかけると、ぼつりと本音が洩らされる。

「お医者さんは……嫌い」

「どうして？」

「……痛いこと、するでしょう？」

痛いこと、か。ラウルの目元がふ、と緩んだ。

幼い頃に、よほど酷い目に遭ったとみえる。一番下の妹も、医者と聞くと泣いたものだ。

「そんなことはしないさ」

痛くないようにしてくれと、ちゃんと伝えてあげるから。

そう言っ て微笑むと、探るような視線が交わされカイルはおずおずと口を開いた。

「……本当？」

「ああ、約束する」

「ラウル、傍にいてくれますか？」

「……もちろん、一緒についているから」

それなら。

小さく頷いた少女の手を引き、ラウルは入り口の戸を叩こうと敷地の中に踏み込んだ。  
ところが。

「やっぱり止めます！」

「往生際の悪い！ 言うことを聞くと言っただろう！」

「そ、それは……」

直前になってカイルはごねた。

そして言い淀んだ隙について少女を抱え、ラウルは医者の方に飛び込んだのだった。

## 草原の街・2

「これで？ …… 終わりですか？」

「そうだよ、坊」

「ありがとうございます……」

「世話をかけます」

「ああ、なに。元気なことに越したことはないからねえ」

ほうほうほうと医師は笑い、もしまた具合が悪くなったら、この薬草を煎じて飲んでごらんと小さな包みを差し出した。

あっさり終わった診察が信じられないというように、どことなく呆然とした面持ちでカイルは包みを受け取ると、はい、と神妙に頷き返す。

「なんだ、物足りなかったか？ なんならもつと苦い薬を出してもらおうか？」

「いいえっ！」

ふるふるつと頭を振ったカイルはまるで怯えた仔犬のようだ。

尾を丸めて頂垂れて、一刻も早くこの場を出たいと上目遣いにラウルを見上げる。

「こらこら、からかうもんじゃないよ」

そう言う医師も、皺だらけの顔をくしゃくしゃにして笑んでいた。痛かったかい、そう尋ねると、カイルはいいえ、とまた頭を振った。

「疲れたんだらうね。今日はたくさん食べて、そしてゆっくり休むと良い」

はい、と頷く姿に笑顔を見せて、医師はもう良いよ、と促した。外に出ても良いかとうかがう黒い瞳に頷いて、ラウルもほっと胸を撫で下ろす。

ひどく消耗した気がした。こうして診察を受けさせるまでが、一騒動だったのだ。

一度は了承したものの、医者は嫌だとカイルはごねた。玄関にある柱にしがみつき、やっぱり止めるとじたばた足掻く。

幼い頃の病気で苦しかった経験が、医者と強く結びついてしまっているのだらう。確かに薬は飲んで美味しいものではない。だからそれを飲めという医者は、子供にとっては大きな脅威だ。加えて医師宅には薬草の匂いが染み付いて、嫌が応にもつらい記憶を呼び覚ます。ラウルにも覚えがあるから気持ちにはわかる。けれど大人なんだらう？ とそう問えば、大人でも嫌なものは嫌だと渋る。

いったい何事かと医師が外に出てくるまで不毛なやり取りが続き、そしてやっとのことで診察を受けさせて、あっさりと片がついた。

医師の診察は、簡単なものだった。舌と喉の奥の様子を見て、下の目蓋を引つ張り粘膜の具合を見る。喉の周りも触って異常がないかを確認し、最後に脈をとってこれで終わりだ。

それはカイルにとっても予想外だったようだ。痛くないだらう、と訊かれればかんと口を開けて頷いた。不安が大きかった分だけ緊張していたようで、終わり、と告げられると洗濯された猫のような足取りで出て行った。

苦笑しながらそれを見送り、ラウルは医師に向き直る。

「どうですか？ あの子は……」



「健康そのものだよ。病気ではない感じだねえ」  
「ですが……」

これまでの症状を説明すると、医師は顔を歪めて頭を振った。

「悪いが、儂じゃわからんな。すまないねえ。こんな田舎医者には荷が勝ちすぎるようだ」

「……いえ」

「ルツカレなら、もう少し詳しい医者がいるだろう。これからも続くようなら、向こうで診てもらったら良い」

カイルが病気でないと確認できれば、それで安心するはずだったところがどうだ。胸がざわめき得体の知れない焦燥感は募るばかりで、一向に治まらない。

石を飲み込んだかのように、ラウルの身体は重かった。

よろよろと玄関から外に出ると、カイルは柱にもたれて大きく安堵の息を吐いた。よかった。そう洩らすと後頭部を柱に当て、闇色の瞳を静かに閉じる。身体からは力が抜け、背中がずるずると柱を滑った。やがて膝を曲げて座り込むと貰った薬を上着の中にしまい、誰に聞かせるともなく呟いた。

「……これは、病気じゃない。だからお薬は利かないの」

左腕にそつと手を当て、カイルはゆっくりと「そこ」に触れた。

「戻っておいで、って。あなたはそう言っているのでしょうか？ ……でも、今はだめ。このまま『あそこ』に戻ったら、わたしはわた

しでなくなってしまうもの」

少女は左腕を胸に抱き込んで、まるで幼子に言い聞かせるかのよう  
に、静かに小さく囁いた。

「あなたは帰りたいのね？　わたしも、そう」

慈愛のこもった眼差しで、少女は優しい笑みを「そこ」に向ける。

「ごめんね。すぐ戻るから。『これ』を解いたら、急いで帰るから。  
だから、待っていてね。……あなたはわたしが助けるわ」

そう、必ず。あなただけは。

宿に荷物を置いて外に出ればちょうど昼。屋台は大いに賑わって  
いた。

男はつばのない小さな帽子を冠り、ゆったりとした丈の長い上着  
を羽織っている。女は頭部を布で覆って顔だけを表に出し、やはり  
ゆったりとした胸衣をまとっていた。アクサライの衣装はみな美し  
く、華やかだ。

屋台の食べ物やら人々の服装やら商品やら、見るものすべてが物  
珍しいようで、カイルはまともに前を見ていない。それでも行き交  
う人にぶつかることなく、すいすいと泳ぐように歩いていた。

器用なことだと感心しながら、ラウルもカイルの後を追う。周り  
からは頭ひとつほど抜き出ているから見失うこともない。向こうも  
時折顔をあげ、ちらりとラウルを確認していた。食べたいものを選

びなさいと放したから、程なくどこかの屋台で立ち止まるだろう。

店を覗く様子を見守りながら、ラウルはふむ、と顎に手を当てた。二人で並ぶとカイルの頭は丁度胸の辺りになる。身体は華奢だし抱き上げれば驚くほど軽い。そのためずっと子供だと思っていた。ところがアクサライの女性と比べると、同じぐらいの背丈がある。ここの人々が帝国人より少し小柄であることを差し引いても、カイルは縦には伸びているようだ。とつくに成人しているとそう言っていたのも、あながち嘘ではないかもしれない。あまり子供扱いするのも良くないだろうか。

「ラウルっ！」

なにやら胸に抱え、跳ねるようにカイルが駆けてきた。楽しそうにいったいなにを買ってきたのか、と目元に皺を刻んで出迎えて、皺は眉間に移動した。

「こんなにあるのに、たったの2シャルクだったのです！」

「そうか、よかったな。……で、カイル。それは？」

「？ お昼ですけど……」

背丈はあっても、まだまだ子供だ。

ラウルはこぼれそうになる溜息を飲み込んだ。

「それだけで済ませるつもりか？」

「今年の初物だそうです。……一度、お腹いっぱい食べたくて」

えへへ、と愛おしそうに見つめているのは、粒の小さい赤い葡萄だ。種をたくさん食べても臍からは芽が出ないと知ったとたん、早速これか。

「それを食事にするのは、止めておきなさい」

「ええ？ どうして？」

「葡萄だけというのは身体に良くない」

「だって！好きなものを食べなさいって！」

「それとこれとは話が違っただろう？」

たしなめると、みるみるうちにカイルはしゅんと小さくなった。

見る影もなく頂垂れて、ラウルから見えるのは毛羽立ったフードの縫い目だけになる。

「こら、そんなにしょげるな。食べるなどと言っていないだろう？」

軽く肩を叩いてやると、眼の縁を赤く染めて潤んだ瞳がほんの一瞬间上向くが、すぐにまた伏せられてしまう。

少女はこぼれ落ちそうになる涙を、唇を噛みしめ精一杯耐えていた。こんな顔をさせたいわけではないのに、とラウルの胸もつきんと痛む。

確かにたった今手に入れたばかりの好物を、「食べるな」と止められたら悲しくなるのも道理だ。それにこの子は、食べ物に関して並々ならぬ執着がある。気を失うほど辛くても泣き言ひとつ漏らさぬくせに、カナト鶏唐揚げが炭になったと大泣きする。

ラウルとて意地悪したいわけではない。早く元気になって欲しいと、そう願っている。ただ葡萄だけでなく、他のものも食べなさいとそう言いたいだけなのだ。

「ちゃんと食事をしたら……そうだな、1房ぐらいなら」

耳元でそう囁けば、はっと息を呑む音がして、カイルはラウルを仰ぎ見た。真っ黒な瞳が呆然と見開かれ、瞬いた拍子に涙が一粒こぼれ落ちる。

戦慄く唇がどうして、と動いたきり言葉をなくし、カイルはそれでもじつと翠の瞳を覗き込んだ。夜空の星を閉じ込めた大きな闇色の瞳には、もはや悲しみの色はどこにもない。純粹な驚きに、何度も瞳を瞬かせている。

「カイル？」

おかしいことは言っていないはずだが、と濡れた頬を拭ってやると、くすぐったそうに身をよじり、少女は晴れやかに笑い出した。

「……どうしてラウルは、兄の言葉を知っているの？」

「兄上の……？」

はい、とカイルは頷いた。一度跳ねてくるりと回り、隣に立つとくすりとまた笑む。

「葡萄は食事の後に、1房だけなら食べて良いよって」

「そうか、兄上もそう言ったのか」

先ほどまでベそをかいていたのが嘘のように、カイルは上機嫌で歩き出した。左手で葡萄を抱え、右手でラウルの袖を引き、大通りを外れて街路樹の下までやってくる。そしてくるりと振り向き、はにかみながらも告白した。

「……今なら、一度だけならたくさん食べても大丈夫って思ったの。なのにラウルは、本当に兄のように言うものだから」

びっくりしました、とフードの下から覗く頬は薔薇色に染まっていた。一度大きく息を吸い、そしてなにかを決意したように顔をあげ、カイルはまっすぐラウルの翠の瞳に誓いを立てる。

「ごめんなさい。もう、わがまま言いません」

「我侂などと……」

そんなことはない、と言いかけたのを制して、カイルは続けた。

「兄は、間違ったことは絶対に言わなかった。だから、『一度だけでも言いつけを破ったら、いけないのです」

「……そうか」

「やっぱり、ラウルは凄い」

照れたような笑顔を見せて、そしてカイルは駆け出した。

「向こうの方に串焼きがありました。ラウル、早く！」

急がないとなくなってしまいます、と急かす少女を追いかけるながら、男の頬も知らず緩んで笑みの形が刻まれた。

少し前の調子が戻ってきた。

まずは食事。そしてゆっくり休んだら、明日はもっと元気になる。そんな予感にラウルの身体も軽くなったようだった。

羊肉と野菜の焼き飯、煮込んだ具を詰めた揚げ饅頭、鶏肉の串焼き、野菜と卵のスープ、そして葡萄。

立ち並ぶ屋台で買った熱々の料理は、木陰にあつらえられた休憩所に持ち込んだ。そして鼻の頭に汗をかきながら、一口食べては舌鼓を打ち、二人でこれも美味しいあれも旨いと分け合った。

ふつくら炊かれた焼き飯は、あっさりとした塩味だ。しかしそこには肉の旨味がしみ込んで、干し葡萄と野菜のほのかな甘みが加わり頬が落ちそうになるほど美味だった。揚げ饅頭の皮はさくさくして中は甘辛、とろみをつけた熱々の具がみつしりと詰まり、齧った時には舌を火傷しそうになった。スープは赤、黄、緑と眼にも鮮やかで、食べてみれば齒ごたえの異なる野菜が口の中で絶妙な調和をみせる。これはなんだと首をひねりながらも美味ければ良いという結論に達し、二人で腹を抱えて笑い合う。串焼きには独特の香草がまぶしてあって、カユテともトウルグとも味が違った。そして一通り味わった後は葡萄で締めだ。

久しぶりの美味しい料理はあつというまに二人の腹に納まった。そして夜は宿でまた別のものを食べようと、茶を啜りながら相談する。結局ラウルの半分ほどの量を、カイルは食べた。カユテでの健啖ぶりを知ってしまえばひどく少ない気がするが、子供の食べる量としてはそう悪くない。しかも今日は陽が中天を過ぎても調子が良いようで、始終にこにこ笑っていた。

子供の笑顔とは不思議なものだ。たったそれだけで、胸の内を暖かく満たしてしまう。ラウルもその例にもれず、自然に頬が緩むのを感じていた。

どこまでも青いソマの空。

さらりとそよぐ、乾いて澄んだ心地よい風。  
草原から拭く風が、淀んだ空気を吹き飛ばす。  
ずっと乱れていたラウルの心も、すっきりと洗われたようだった。

胸のつかえが降りると、やらなければならぬことが見えてくる。  
忘れないうちに、とカイルを連れて、ラウルはとある店に立ち寄った。

そこは革製品の店だった。馬装用の様々な品がうずたかく積み重ねられており、「馬のお店ですね！」とカイルは眼を輝かせ、ひとつひとつの品に真剣に魅入っていた。ラウルはそれを横目に別の品を検分し、そしてある物を手に取った。

「カイル、こちらへ」

上機嫌でやってきたのを、小さな丸椅子に座らせる。怪訝そうに見上げてくる顔に微笑んで、差し出したのは小さな長靴だ。

それは柔らかい子牛の皮でできた子供用の長靴で、靴の前面に細やかな模様が刻まれていた。試しに履かせてみると、あつらえたようにぴたりと合う。

「ちょうど良いな。そら、立ってごらん」

「ラウル？ これ……」

良いから、と立たせてつま先、踵、足の幅を確認する。  
出来合いにははまらずだ。しっかりした作りだし、装飾も美しい。ひとり満足していると、カイルがつんと袖を引いた。

「ラウル。わたし、靴を買う余裕は……」

「知ってる。だが靴は大事だぞ？」

「それは、そうですね」



「また明日から歩くんだ。ここは俺が出すから、痛くないのにしておきなさい」

そう言うのと、カイルはそつと目を逸らして面を伏せた。上着の裾を握りしめ、どうして、と唇が動くのに、ラウルはにやりと口元を引き上げる。

カユテの武器屋で買った長靴は、大きさが少々合っていないかった。それでも足に布を巻いて多少調節していたようだが、靴の方が耐えられなくなったようだ。トゥルグを過ぎた辺りで靴底の縫い目が切れ、つま先が開いてしまっていた。動かなければわからない、小さな穴。しかしそのまま使えばやがて穴は大きくなり、足の負担になっってしまう。昨日カイルが倒れ込んだのも、靴に原因のひとつがあっただろう。

ソマを過ぎれば街はない。ここで不備は整えておかなければならなかった。

「どうだ？ 合っているか？」

膝を上げて地面を踏みしめるように、カイルは店内を歩いてみせた。大丈夫、と頷くのを確認するとラウルは手を挙げ店主を呼ぶ。

「これを貰おう。テネルス銅貨ならいくらになる？」

「はいよ、5枚になりますね」

「！ やっぱり、やめます！」

「……やめない。これはこのまま履いていく。古い方の処分を頼む」  
「はいはい。毎度！」

声もなく悲鳴を上げるカイルを尻目にさっさと会計を済ませて外に出ると、ぐいと腕が後ろに引かれた。

「こら。危ないだろう」

「ラウル！ どうして……！？」

「なんだ、やはり合わないか？ ならもっと上等なのに交換……」

「違います！ 靴はぴったりです！」

「それは良かった。歩き易いだろう？」

「はい！ ……ごまかさないください！」

ぶっ。

柔らかかそうな頬が、綺麗に丸く膨らんだ。足を開いて腰に手を当て身体を反らし、きりりと柳眉を逆立てて、カイルは精一杯男を睨みつけた。その様子は可愛らしい以外の何者でもないが、どうやら怒っているようなのでラウルは話だけは聞いてみることにする。

腰を屈めて視線を合わせると、カイルはまずは、と丁寧に両足を揃えて深々と頭を下げた。

「長靴を買っていただいて、ありがとうございました」

「……ああ」

フードの両脇から、艶やかな黒髪が零れ出る。それを見ながら、ラウルは吹き出しそうになるのを懸命に堪えていた。必然声は低くなり、小鼻が膨らみ眉間に深い皺が刻まれる。じゅうぶん時間を置いて顔をあげたカイルはその様子に一瞬怯んだが、また仁王立ちになるとぐっと瞳に力を込めた。大きく息を吸って人差し指を立て、口をとがらせ良いですか、と前置きしてから小言を始める。

「ラウル。無駄遣いは良くないと思います」

「無駄？ なにが」

「この靴です。買うのでしたら、もっと安いのにしなければ」

やめるって言ったのに、さっさと買ってしまうのだから。値引き

交渉しても良かったのではないのでしょうか。

カイルの説教を、ラウルは感心しながら聞いていた。子供とはいえ、やはり女だ。1シャルクでも無駄遣いはできないと、随分気合いが入っている。

「それに宿だつて。……あんな高級な宿に泊まって贅沢したら、これからお金がいくらあっても足りません！」

ふむ、とラウルは頷いた。

確かにあの宿はこの街では高級な部類に入りそうだが、ルツカレに行けば中ぐらいの水準だ。けして贅沢なわけではない。それに安宿に泊まって盗みにあつたら、それこそ目も当てられないだろう。そう説明したが、カイルは納得しなかった。

「だつて。……わたしのせいでしょうか？ わたしがいるから、あんな高い……」

「高い？ なにが」

「一泊で……銅貨が3枚も」

ラウルはおや、と片眉を引き上げた。知られないようにしたつもりだったが、いつの間。

耳聴いものだと感心していると、その沈黙を肯定と受け取ったのかカイルは両手を白くなるほど握りしめ、唇を噛んで俯いてしまった。

アクサライは物価が安いから、もっと安く泊まれるはずなのに。そう呟く少女の頭に手を載せて、ラウルは腰を伸ばして立ち上がった。

「そうじゃない。俺一人だったとしても、あの宿に泊まったろうな」  
「……うそ」

「嘘じゃないさ。俺の故郷はニールだからな。どうしても風呂が恋しくなる」

「おふる……」

小さく零れた言葉をすくいあげ、ラウルはことさら明るく少女に尋ねた。

「そうだ。カイル、風呂は好きか？」

「はい！ 大好きです！」

「そうか」

それは良かったと微笑めば、少女もつられてにこりと笑う。が、すぐにはっとして、またごまかした、と口をへの字に曲げてとがらせる。

流されなかったか。

困ったものだとなラウルは苦笑した。

「わかった。ちゃんと説明するから、宿に行こう」

「本当ですね？」

「ああ、ここでは少々難があるから、部屋でな」

宥めるように肩を叩いて歩き出せば、カイルも不承不承ついてくる。けれど新しい靴の具合がよほど良いのか、徐々にその歩みは軽くなってくる。その軽やかな足音を聞きながら、怒っていたはずなのに、とラウルは笑いをこらえるのにずいぶんと苦労した。

宿はソマの街の中央部からやや東側、東西に走る太い通りに面して建っていた。木造の大きな2階建ての建物で、カユテと同じく1階は食堂になっている。ただ食堂の他にも休憩所を兼ねた広い受付があったり揃いの服を着た使用人が何人もいたりすることから、カイルは高級と思っただけらしい。

元々交易商向けの宿だから、確かに高級そうには見える。

木彫りの透かしが入った綺麗な衝立て、不思議な模様の大きな壺。調度類は帝国風なのに、壁には美しいアクサライ刺繍の施された布が掛けられ不思議な調和をみせている。

そして二人が泊まる部屋もまた、物珍しいものだった。

寝台とは言えないような低い台に敷かれた布団に小さな卓、そして絨毯の上には数枚のふかふかの座布団。

部屋に戻るとラウルは布団の上に胡座をかいた。カイルはその前に座布団を抱えて座り、提示された思わぬ話に眼を丸く見開いた。

「お湯が……使えるのですか？」

「ああ。身体を軽く流すぐらいしかできないが、それで我慢できるか？」

「もちろんです！」

こくこくと何度もカイルは頷いた。そして両手を頬に当て、夢みたい、とうつとり眩き眼を閉じる。

この地の水は貴重だ。だから風呂に入るなどめつたにあることではない。だから風呂好きにとっては、この誘いはたまらなく魅力的だろう。

やっと機嫌が直ったか。ラウルが胸を撫で下ろした瞬間、またしてもカイルははっと息を吞んで身を乗り出した。

「で、ですが！　ここで風呂なんて、やっぱり贅沢です！」

世間知らずの貴族の娘と思いきや、カイルは意外にも貧乏性だ。そのうえ贅沢は敵だとばかりに儉約に精を出す。カユテの武器屋でばられたせいで、確かに手持ちの金では心もとない。だがこの街に来るまでも出てからも、金を使う場所などほとんどないのだ。少しぐらい使っても問題ないし、それに無為に湯を使うわけでもない。

「まあ待て。ただ身体を洗うだけではない」

いいか、とことさら神妙な顔をして、大事なことだと念を押す。

「風呂のついでに洗濯をする。そうすれば、一石二鳥だ」

「……あ」

「だいたい北方公路沿いにくれば、ここで一息つくのが普通なんだ。だからお前がいてもいなくても、やることにそう変わりはない。……それに」

こちらにおいて、と目元を和らげラウルはカイルを手招いた。素直にやってきたのを隣に座らせ、懐から取り出した身分証を握らせる。

それは二つ折りにされた革製のもので、使い込まれてつやつやと光っていた。しかし表面に刻まれた模様はまだくつきりと残っており、これが護衛士の紋章だと教えてやると、眩しいものを見るようにカイルは眼を細めてそつと触れた。

斜めに掲げられた剣に重なる盾。そして盾の表面には獅子。アクサライでは獅子だが帝国だと太陽、テネルスだと錨。盾に刻まれる模様によって、その護衛士の所属がわかる。そして中を開ければ姓名、性別、生年月日、出身地、加えて髪と眼の色が記された羊皮紙が、しっかりと縫い付けられていた。

「……ラウル、34歳だったの？」

「そつだな。もう立派なおじさんだ」

そつ自嘲すれば、少女は頭を横に振って必死になって否定した。

「いいえ、いいえ！ わたし、もつと若いと思ってました」

「……世辞はいらんぞ？」

「本当です！ それにラウルは『お兄さん』だもの」

そこだけは譲れない、と鼻息荒く拳を握った少女に眼を細め、見せたいのはそこじゃない、とラウルは表紙と羊皮紙の間に指を入れた。

取り出したのは、別の羊皮紙だ。

開けてごらん、と手渡すと、カイルは折られた紙を慎重に開いて中の文字を確認し、そして眼と口をあんぐりと丸くして固まった。予想通りの反応に、ラウルはくつくつ喉を鳴らす。

「どうだ、中々のものだろう？」

「ラ、ラ、ラウル。……こ、これ！」

震える指で示したのは、羊皮紙に記された文字だ。「預かり証」と飾り文字で書かれた下に、日付と預けた金額、そして残額が載っている。残金は、5桁を優に越えていた。

「単位は『シャルク』じゃないぞ？ ちゃんと『アシエライト』と書いてあるのがわかるか？」

こくこくこく。

今度は首を縦に振りながら、カイルは2つの羊皮紙をラウルにぱつと押し付けた。

見てはいけないものを見てしまったというように、少女は肩をす

くめてぎゅつと眼を閉じている。その様子を微笑ましく見つめながら、ラウルは身分証を元の場所にしまいこんだ。

「いいか？ 今は手持ちが少なくても、ルツカレには組合があるからそこで必要なだけ引き出せる。だから金のことを心配する必要はないんだ」

わかったか、と肩下にあるこめかみをつついてやると、ゆらりと黒い頭が傾いでいった。これで納得するだろう、そう思ったのだが、戻ってくる反動でカイルは顔をあげるときつと男をねめつけた。

「でも。これはラウルが働いて貯めたものでしょう？」

「そうだな、護衛士になってから18年になるが、今まで使おうとも思わなかったから。気がついたらそうになっていた」

やれやれ、と肩をすくめてみせるとカイルはまたしても憤慨した。握りしめた両の拳で膝を叩いて頬を薔薇色に染め、ラウルこそわかっていない、と力を込めて反論する。

「だったら！ もっと自分のために使ってください！」

「なにを言う。好きなように使っているじゃあないか」

「じゃあ、靴は！ これは、ラウルには履けないでしょう？」

「……気に入らなかったのか？」

「いいえっ！ とつても素敵です！」

気落ちしたように溜息をついてみせれば、これだ。

くつと息が漏れ、肩が揺れる。

一度袴たがが外れてしまえば、もう限界だった。

俯いたままくすくす笑い出した男を呆気にとられて見ていた少女だったが、やがてはつとすると、きゃんきゃん仔犬のように吠えだ



した。

「ラウル！ またわたしでイイコトしましたね！？」

寝台で腹を抱えて笑い転げる大きな背中を小さな拳が何度も叩く。だがその軽やかな衝撃は、笑いの衝動にいつそう拍車をかけただけだった。まともにも息もできずに涙を流して悶える姿に、少女は顔全体を綺麗に紅く染め上げる。そしてふいと顔を背けて部屋の隅で小さくなって、そこでひとりで拗ねだした。

やがて呼吸を落ち着かせたラウルが「風呂上がりに葡萄」いう魔法の言葉をかけるまで、カイルの臍はずっと曲がったままだった。

「できた」

満足げに頷くと、脱衣場の桶に固く絞った服を放り込み、カイルはぐっと伸びをした。

色とりどりのタイルで埋め尽くされた小さな水場に白い裸体が浮かび上がる。高い位置に開いた小さな窓から射し込む陽射しを浴びて、少女はまさに輝いていた。

両手を天に突き出し若木のような身体をしなやかに反らせ、そして少女は左腕の黒い疵きずに眼を留める。指の先ほどの大きさだったその疵は、いまや2周りほど大きくなっていった。

無数にあった手足の傷は、ほのかに赤みが残っているだけだ。しかしその疵だけは墨を落としたように黒く、表面は不規則に盛り上がり、白い肌に異質な染みとなって残っていた。

それでもカイルはその黒い疵に手を当てそつと胸に抱きしめる。

「もう平気。……痛いのは、慣れるもの」

囁くような言葉が落ちた。疵の色とは似て異なる漆黒の瞳を閉じ、まるで祈りを捧げるように白い裸体は身じろぎひとつない。

祈りは長いようでほんのわずかな時間であった。脱衣場の外に人の気配が現れたかと思うと、木の扉が軽く数度叩かれた。

「……カイル？」

潜められていたが心配そうなその声に、少女ははっと顔をあげる。

「はい！」

「大丈夫か？」

「終わりました！ いま、出ます」

言うなりぱつと脱衣場に移動して、少女は棚に手を伸ばす。しかしその眉は、すぐに怪訝そうに潜められた。首をひねりながら水場の方に顔を出し、中をぐるりと見てからもう一度、脱衣場を確認する。腕を組んで目を閉じて、これまでの出来事を反芻すると「あつ」と小さな声が上がリ、そして少女は途方に暮れた。

「どうしよう……」

きい、と扉が開き、桶を抱えた少女が辺りをそつとつかがいながら顔を出した。すぐ隣で壁に背を預けていたラウルを認めると、ほつと安堵の息を吐く。その様子をいぶかしみながらも言いつけ通り外套を着込んでフードを被ったカイルに、ラウルは柔らかく微笑みかけた。

「どうだった？」

「……はい。さっぱりしました。髪も洗えましたし」

「そうか。洗濯は？」

「……そちらも、問題ありません」

はて、とラウルは首をひねった。

風呂場に入った時にはタイルが綺麗だの温い湯があるだのこれまでにない喜びようだったのに、今のカイルはどこか緊張しているようだ。久しぶりの風呂は、楽しくなかったのだろうか。

そう尋ねれば生真面目な顔をして、少ないながらも湯を使えることがいかに素晴らしかったかを、カイルは滔々と語りだした。

なら良いが、と屋上の物干し場に向かうために、二人は裏口から宿の中に入った。風呂場、というよりも水場と表現した方が良い小屋は、宿の裏手に設けられている。そこからは客室を通らずに屋上へと抜けることができるのだが、前を歩くカイルの様子がやはりおかしい。

右手で洗濯物の入った桶を抱え、左手で外套の前を押さえている。そのうえどこことなく内股でちょこちょこ歩いて、外套の裾と長靴ブーツの隙間からは白い素足が

(……………)

気のせいだ、とラウルは強く眼を閉じた。が、見間違いでもなんでもなく、階段を一段登るごとに外套の下からはちらりちらりと白い肌が出す。

まさか。

「おい……服はどうした？」

「……」

地を這うような低い声に、文字通り少女はぴよんと飛び上がった。

(まったく、あの娘は )

洗った服を干した後、ラウルはまた街に繰り出していった。市の中を歩きながら、頭にこびりついて離れない少女の姿を振り払おうと努力する。

本当に、己の美しさを理解していないのだから困ったものだ。

カイルは下着以外の替えは持つていなかった。久しぶりに髪と身体を洗って気分が高揚したのだろう。そのまま夢中になって洗濯して、湯上がりに着る服までつい洗ってしまったのだ。部屋に戻ってラウルの下着代わりの胴衣を差し出しそれを着て寝ていると言いつけてきたのだが、洗濯物を干すまでは自分でやると言い張った。

何事もできることは自分でやる。

それ自体は悪いことではない。美德と言っても良い。しかし裸でやることでもないだろう。

服を借りたから大丈夫。カイルはそう言うが、ラウルの大きな胸衣を纏った姿は目の毒以外の何ものでもなかった。

大きな襟ぐりから覗く胸元、すらりと伸びた白い足。身体の線が陽に透けて、どれもこれもが眼に眩しい。上から外套を着れば良いというものでもない、洗るのをどうにか布団の中に押し込んで、ラウルはやっとカイルをまともに見ることができたのだ。

買い出しに行ってくる、とそう告げれば布団に埋もれながら無念そうな顔をした。流石にこの格好では外には出られないと観念した様子に、ラウルもひとまず安堵する。もともと午後は休ませるつもりだったから、計画通りではあったのだ。

(馬を見てきたとは、とても言えないな)

ラウルはひっそりと笑みを漏らした。

ここからルツカレまでは、これまでの道のりとは趣が違ってくる。

トウルネイ山から南東に広がるミズル山地、ここを越えなくてはならないのだ。

山そのものは大したことはない。しかしなだらかな道は険しさを増し、草原はやがてごつごつとした岩地になる。ブースで聞いた通りやはり井戸がひとつ枯れたということだから、水も多めに持たなければならなかった。しかも岩地では昼夜の寒暖の差が激しくなる。大人の足なら2日で抜けられるとはいえ、ここが北方公路最大の難所と言えた。カイルもまだ本調子ではないだろう。だから馬が欲しかった。荷運び用のロバでも良い。しかし手持ちの金ではどちらもとても無理だった。

ならば徒歩の旅に備えなければならぬ。防寒具に保存食。必要なものを少し多めに購入し、ラウルは宿に戻ったのだった。

「おかえりなさい！」

部屋に入ると、頭から布団を被ったカイルが見えない尾を振って出迎えた。

どうやら窓から通りを眺めていたようだ。ちゃんと寝たかと尋ねると、はいと元気な返事があった。確かに顔色は悪くない。ラウルは頷き、買ってきた下着を手渡した。

「……ラウル。これは？」

「今日からこつちを使うと良い。これから夜は冷えるから、暖かいものにしないとね」

柔らかい綿の下着と毛織りの薄い胴衣、下履きの中に履く防寒着。靴下と襟巻き、手首まで覆う小さな手袋。それぞれにアクサライ刺繍が施され、見た目にも可愛い。上着から下履きまですべて新

調しようかとも思ったが、それでは荷が増えすぎるしカイルも気にするだろう。だからとりあえず下着だけ。けれどこれだけでもかなり違うはずだった。

目を丸くして見入るカイルに着替えておくようにと伝え、ラウルは屋上に上がっていった。

アクサライの乾いた風と強い日差しは、あつというまに布から水分を奪ってしまう。洗濯には遅い時間であったのに、服はもう乾いていた。

ラウルはそれらを無造作に取り込んだ。

干すときにも感じていたが、乾いてみるとやはりカイルの服はあまりにも古びていた。色は褪せ、所々すり切れている。下着などもごわついて、あの柔肌によくこれを我慢して着ていたものだと感心するほどだ。早々に新調したいものだが、次はどんな理由をつけようか。

そんなことを考えながら、ラウルは階下へ降りていった。

「大きさが 合わなかったか？」

部屋に戻ればぶかぶかの胴衣の上から外套を羽織り、真剣な眼差いでカイルはなにやら縫っていた。

下着の類いはある程度なら紐で調節できたはずだと首をひねれば、刺繍をしているという。武器屋から貰った荷物の中に、針と糸があったのだそうだ。

「……『カイル』？」

「はい。なくなったら困るから、名前を入れようと思ひまして」

刺繍糸でもない普通の木綿の糸で、カイルは奇妙な形の文字を縫った。下着にまですべて同じ「カイル」と縫い込み、できた、と笑ってそのまま着替えようとするのでラウルは慌てて背を向ける。

ささやかな衣擦れの音。鼻歌を歌うような弾んだ気配。  
なんだかんだと言ってはいても、やはり新しい服は嬉しいのだから。これならいっそすべて新調しても良かったか。

「ラウル、見て！ 似合いますか？」

「どれ」

うきうきとした声に振り向いて、ラウルはびしりと固まった。

買ったばかりの長靴ブーツに足の付け根までしかない下着、臍は丸出しで他に身につけているものといったら胸を覆う女性用の下着と毛織りの薄い胴衣だけ。もっとも胴衣は前を閉じていないから、覆っているのは腕だけだ。白い肌を惜しげもなく晒し、すらりとした手足も胸から腰にかけての曲線も、ほんの一瞬見ただけなのにくつきりと眼に焼き付いて離れない。必死で頭から振り払った数刻前のあの姿が、脳裏にまざまざと蘇る。

慌てて布団でカイルをしっかり包み込み、ラウルは大きく脱力した。

「人前で……裸になるんじゃない」

「裸？」

カイルはきよとんと黒い瞳を瞬かせた。

「胸も腰もちゃんと覆っているし、上も羽織っているからこれは裸じゃありません」

「下着姿も裸と言うんだ」

「でも……こんなに綺麗なのに。隠すのは勿体ないです」

布団の向こうでもぞもぞ身じろいで、裾の刺繍が綺麗なのだと足を出そうとするのをラウルは必死で押しとどめる。



「いいから服を着なさい」

「ええ？　じゃあラウル、もっとしっかり見てください」

「……見た。よく似合っている。だからせめて前を閉じる。下履きを履いてくれ」

買ってもらった服を一番に見せてくれようとする、その気持ちはとても嬉しい。しかし裸では眼のやり場に困るのだ。

渋る少女の胴衣の前をきちりと閉じて防寒着を履かせ、襟巻きと手袋をつけさせる。たったそれだけで、カイルは見違えるように美しくなった。

ここに新しい上着を着付ければ、貴族どころか王族といっても通用しそうだ。

その想像に、男の頬が強ばった。

（　　）　　違う！　この娘は王族では　　（　　）

「ラウル！　食事に行きましょう？」

ぎくりと肩をすくめると、扉の向こうから少女が顔を出していた。そうだな、と慌てて腰を上げれば布団の上に色あせた上着と下履きが残っている。

まさか。

「おい、上着は？　なぜ下も履いてない」

「外套は着ましたよ？」

「待て。それはまだ途中　　」

綺麗な刺繍が見えなくなってしまうと逃げる少女を捕まえて、外に出られるよう服を着せるのがまた一苦勞であった。

空が徐々に白んできた。

銀の砂のような星々はあっという間に西の空へと追いやられ、夜は猛々しい朝の気配に振り払われる。

果てのない草原に、瘤のようにわだかまるのは人馬の影。

馬は思う存分草を食み、人は一様に東の空を眺めていた。

地平の彼方で力強く、一条の光が煌めいた。

その金の輝きは瞬く間に天を支配し、大地をその腕に包み込む。

闇夜に道を連れぬように。

皆が無事であるように。

陽が旅路を照らすように。

至高の存在に祈りを捧げ、人はそれぞれ馬に跨がり旅立ってゆく。残ったのはたった二人。

ソマの街を発つ中で、二人だけが徒歩だった。

背の高い護衛士と、少年の格好をした少女。

少女は東の空に手を合わせ、熱心に祈りを捧げていた。

この地の果て、あの陽の下の王都サリフリ。そこで為すべきことを想い、早く早くと心は逸る。

やがて騎馬の旅人達がすべていなくなったころ、護衛士は少女を促し歩き出す。今は南へ。そしてルツカレから街道沿いに東へ向かうのが、結局のところ一番早いのだ。

右手には天まで聳えるトゥルネイ山。朝日を浴びて白く輝く山を仰ぎ、少女は振り切るように前を見る。

振り返った護衛士に微笑んで、そして二人は南に向かって歩いて

い  
っ  
た。

閑話 〳 恋する乙女 〳

夜明け前のソマの街、南の街道沿いに集まった馬たちを、カイルはずっと眺めていた。

石の上に腰掛け頬杖をついて一頭一頭をじっくりと観察し、そして時折両手を見つめてにこりと笑む。

あまりにも楽しそうなのでつい声をかけてみれば、元気な返事が返ってきた。

「そんなに馬が好きか？」

「はい、大好きです！ それにこの手袋も！」

手袋の甲の部分には、馬が図案化された刺繍が入っていた。

夕べは気付かなかったそれを今朝になって発見すると、カイルは飛び上がって喜びそしてラウルに抱きついた。

「ごろごろ懐く仔猫をぺりりと剥がし、まずは服を着なさいと背を向ける。」

胸元を覗き込めば輝く笑顔と白い肌。相変わらず目の毒だった。

服がないからと貸した胴衣は、結局カイルの寝間着となってしまう。トゥルグの村では自分の胴衣を着て寝たが、ラウルのものの方が着心地が良かったらしい。下着を買った時に、なぜそこに思い至らなかつたのかと後悔しても後の祭りだ。しかし今を耐えれば後は野宿、ルツカレで真っ先に寝間着を買えば、もうこんな思いはしなくて済む。

馬だ馬だと上機嫌のカイルの隣に、ラウルも荷を置き腰を下ろした。

交易の準備を眺めながら、二人は夜明けを待っている。

出発を前にして、馬には次々に荷が積まれていった。

毛織物や絨毯、毛皮や布の加工品が主な品で、これらをテネルス王国やアルトローラ帝国に輸出して、穀物や染料、様々な道具類、そして貴重な外貨を彼らは得る。

アクサライの民は遊牧の民である。

古来より、彼らは馬はもとより山羊や羊などの家畜と共に生きてきた。

家畜は生活の糧であり、祖先から受け継いだ財産でもある。それを手放すなど、あつてはならないことだった。ところが近年は、遊牧をやめ定住する者も増えている。街道沿いに居を構え、交易や旅人達をもてなすことで対価を得るのだ。

遊牧から遠ざかるには理由があった。

広大な平原が徐々に乾き、家畜達を養うのに十分な草を得るのが難しくなってきたことが第一に挙げられる。また、土地を巡る争いに破れ、追われたものも多かった。

当初定住を選んだ遊牧民は、誇りを忘れた恥知らずと蔑まれた。しかし交易は、人々の生活に劇的な変化をもたらした。

それは外国からもたらされる様々な品や情報であり、特に魔術を用いた便利な道具の存在が大きかった。労せず火を熾せる「点火筒」。陽の光を蓄えて、暗くなると光を放つ「蓄光球」。比較的安価なものだとこの2つが筆頭だ。定住すれば他にも様々な恩恵に預かれる。そして狼に襲われることもない。

遠い国の不思議な風習、見たこともない服や食べ物、装飾品。大陸各地に伝わる様々な物語。それらに触れて、人々は遠い地へと想いを馳せる。しかし憧れだけでは食べてはいけない。集落を飛び出したは良いが、身を持ち崩した者も大勢いるのが現状だった。

定住しても生活が安定するとは限らない。そして道具は交易で手に入る。ならばなぜ父祖から受け継いだ羊たちを手放さなければならぬのか。そう考えるのが普通であった。

「それでこの人たちは、こうして交易をしているのですね？」

「そうだな。ここはテネルスにも近いから、輸送の費用も安く済む」

アクサライの毛織物は質が良いうえ安価なので、テネルスでも帝国でも人気が高い。

そう説明してやると、そうだ、と小さな手が打ち付けられた。

「じゃあこの街で買ったものをテネルスに持っていけば、大儲けできますね！」

刺繍も絨毯も、とっても綺麗なもの。

馬の意匠を眺めながら、良いことを思いついたとばかりにカイルはまたにこりと笑う。

可愛いことを言うものだ。ラウルも目尻に皺を寄せ、膝の上で手を組んだ。

「ところが、そう巧くはいかないんだ」

え？ と黒い瞳が開かれた。夜空の星が逃げ込んだかのように、薄暗い中でもその瞳はきらきらと輝いて美しい。

笑いながら答えを教えると、星は何度か瞬いた。

「……関税？」

「そう。あんまり安い外国製品が入ってくると、その国で同じ仕事をしている人が困るだろう？ 買うなら安いものを選ぶのは、どこの国でも同じだから」

だから国では関税をかけて、国内の価格にあまりにも大きな差がないようにしてる。

そう締めくくると、カイルは少し考えことりと首を傾けた。

「でも、こっそり持ち込む人はいないのでですか？」

「もちろん、そういう輩はどこにでもいるさ。けれど」

以前目にした光景を思い浮かべ、ラウルはくつくつと喉を鳴らした。

数年前、西の小国の商人がいよいよ帝国に販路を広げようと決心し、帝都に向かう荷の護衛を受けた時だ。張り合っていた豪商もなぜか一緒についてきて、威張り散らして敵わなかった。それが帝国領に入るとき、宝石類を懐に忍ばせ申告をしなかったのだ。見つかったも賄賂が通じると思ったのだらう。だが税関で袖の下をきつぱりと断られた上、悪質と判断された。

「それで荷をすべて没収されて。おまけに罰金まで取られていた」

いけ好かない豪商が、赤青めまぐるしく顔色を変えた挙げ句ぼろぼろになって打ちひしがれていた。そしてそれを見つめる職員の得意満面といった顔。敵にはしたくないものだ、その場にいたすべての人間が思ったらう。

「悪いことはするものじゃない。ただでさえ帝国の税関は優秀なんだ。魔術を使っているという噂もあるぐらいにな」

「……魔術って、そんなこともできるのですか？」

「さあ？ あくまで噂だ。本当のところはわからない」

税関の人って凄いと感心しながら頷いていたカイルだったが、はっとして胸に手を当て刺繍の部分をそつと押さえた。

「じゃ、じゃあ、ラウル。帝国に行くときには、この手袋も税金を

取られるのですか？」

「いいや。自分で使うものなら大丈夫。少なくとも身につけていけば問題ない」

だから、とラウルは胴の周りが丸くなるよう両脇で腕を曲げた。

「時々、国境では服を着過ぎてダルマになった連中を見かけるな」

冬はまだ良いが、夏は顔を真っ赤にして本当に大変そうなんだ。

そう言っただけを膨らませてみせると、カイルはくすくす笑い出した。それでは帝国に行く時は、服を少なくしなければいけないのですね、とそんなことを言い出すので正確なところを教えておく。

関税がかけられるのは商人だけで、個人の持ち物は無税である。あまりにも荷が多すぎなければなら問題ない。それを公用語の不自由な人間が誤解をし、「身につけていれば無税」と、微妙に間違っただけが広まっていったのだ。

それを聞いてカイルは良かった、と胸を撫で下ろした。それから尊敬の眼差しで隣を見上げて眩しそうに眼を細める。

「ラウルは、本当になんでも知ってますね」

「あちこち旅しているからな。否が応でも耳に入ってくる」

「それは『特級』の護衛士さんだから？」

「うん？ 護衛士と言っても色々だな。俺は落ち着けない性分だから、こうしてふらふらしているが」

定住したい者はどこかの貴族に雇われたり、あるいは軍に入り直す者もいる。男の子が憧れるのは、やはり騎士が一番だ。組合ができるまでは、護衛士といってもその辺のゴロツキとそう変わらなかつた。

そんなとりとめのない話を、カイルは膝に手を置き真剣な眼差し



で聞いていた。

「でもラウルは、お家を飛び出してまで護衛士になりたかったのでしょうか？」

「……そもそもは実家に居難くなったただけで。護衛士というよりも、師に憧れたんだ」

「その方は……素晴らしい人なのでしょね」

「ああ、今でも俺の目標だな」

サリフリに着いたら紹介しようと約束すれば、楽しみですと少女は笑う。そして真顔になって隣を見上げ、きらきら輝く黒い瞳で翠の瞳をまっすぐに見た。

「それでも『特級』の称号は軽くないもの」

だからやっぱりラウルは凄い、と確信したようにカイルは頷く。

不意打ちに、頬にカッと血が登った。

世辞ではない。その瞳からは心の底からそう思っていることが見て取れる。だからこそ、その賞賛がこそばゆかった。

ラウルは頬を掻きながら目を逸らし、この話はもう終わりとばかりに別の話題に切り替える。

「……お前は？ 将来なりたいものはないのか？」

「わたしは……」

なりたいもの、とぼつりと呟くと、カイルはそっと目を伏せ視線を外す。それから未だ夜の気配を残す西の空をじっと見つめたかと思つと俯いた。その表情はフードに隠れてよく見えない。しかし唇は引き結ばれ、両手には力が込められている。

なぜ、とラウルの胸がつきりと痛んだ。

未来を想うのに、どうしてもそんなに辛そうに

(……ああ、そうか)

この子はひとりだ。

唯一の肉親である兄を失い、理由もわからず襲われて、一緒に暮らしていたという従者ともはぐれてしまったのだ。ずっと具合が悪かったのも、心労が祟ったのかも知れない。

そんな寄る辺ない中で、未来を夢見るなどどうしてできよう。どんなに楽しそうにしているても、忘れることなどできないだろうに。

ラウルは奥歯を噛み締めた。

愚か者め。上辺の笑顔に騙されて、おめでたいにもほどがある。

すまなかつたと手を差し伸べようとしたその時、カイルがそうだと顔をあげた。

「ラウル！ わたし……わたしがなりたいのは！」

「馬丁……ね」

少女ははにかみながらも頷いた。

想像をはるかに越えたその言葉に、ラウルの頬がぴくりと引きつる。

動揺を抑えながらもどうして、と尋ねればいかにもな答えが返ってきた。

「そうすれば……ずっと一緒にいられるでしょうっ」

薔薇色に染めた頬に両手を当て、カイルはもじもじと恥じらった。ラウルは呆気にとられたが、そこまで好きなのかと微笑ましくもあった。

「馬の世話は大変だぞ？」

「大丈夫です。お手伝いをしたことがありますから」

「そうは言うがな。夏も冬も休みなんてないんだぞ？」

「一緒にいられるなら、辛いことなんてありません！」

なんと熱烈な告白だろう。それはまさに、恋する乙女の顔だった。しかし相手は馬である。

（これを恋に恋する年頃、と言うのだろうか？）

ラウルは首をひねった。

カイルはカイルで、寝わらを入れ替えるでしょう、馬房を洗うでしょう、身体を拭いてあげるでしょう、とひとつひとつの作業を指折り数えながら、だんだんと笑み崩れてゆく。

ふにやりとした笑顔を眺め、やれやれとラウルは肩から力を抜いて天を仰いだ。

辛そうしているよりは遥かにマシだ。しかし触れてはいけないものに触れてしまった感がひしひしとするのは、どろいっわけだろう。自分だったら妹が馬丁になるなど、とても同意できるものではない。

「兄上は……なんと？」

ふと疑問に思ったことを口にすれば、少女はぴたりと固まった。

そして首を竦めて上目遣いにつかがいながら、言い難そうに口もる。

「わたし、前にも一度、馬丁さんになりたいって……そう言ったことがあるのです」

両の人差し指の先で円を描くようにすり合わせ、ぽそりぽそりと「その時」の様子を語りだす。

「そうしたら、兄は溜息をつくしサラは泣くし、ヴァルも見ることがないぐらいに渋い顔をして」

今度はむっとしたかと思うと膝を抱えてつま先をばたばたと動かしながら、どうしてダメなの、と少女は口をとがらせた。

ずっと諦めていたのですけれど、今ならサラもヴァルもいないから。

兄もね、思うように生きなさいって、そう言っていたのです。

だから、とカイルはカ一杯宣言した。

「やっぱりわたし、馬丁になる！」

寝た子を起こしてしまったか、とラウルは額に手を当てた。

カイルの従者に対してなんと詫びたら良いのだろう。

(すまない……本当に馬丁になってしまう前に、この子を迎えにきてやってくれ……)

西の空で今だ輝く小さな星に、ラウルは心からの祈りを捧げたの

だ  
っ  
た。

## 灰色の鐘の音・1

青々とした草は、やがて萎れて薄茶色になっていた。灌木すら葉を落とし、枝の先も変色して触れれば音を立ててぱきりと折れる。街道の両脇には角張った大きな岩がここに腰を据え、風が吹けば砂埃が舞い上がる。辺りには鼠といわず、虫の一匹もいなかった。聞こえるのは地を踏みしめる二つの足音。

半円形に開けた場所で、大きな影が立ち止まった。

陽は中天を過ぎて影の長さが増してくる。乾いた空気が汗を攫って不快感は減っているが、そのぶん身体は知らず知らず乾いている。水分はこまめに補給しなければならなかった。

「休憩しよう」

小さな影を座らせて、大きな影も荷を置いた。それからひとつの柘榴を割って二人でゆっくり口にする。血のように紅い実から溢れる強い酸味が、溜った疲れを和らげた。

「……思ったより酷いな」

「樹が……全部枯れてますね」

「ああ。これでは井戸も涸れるわけだ」

変わり果てているが、元々この場所は小さな休憩所だったようだ。二人の上には葉のない細かい枝が横に広がり、編み目のような影を落としている。往時には口バに引かせた荷車や、徒歩の旅人もいたものだ。それが今や影もない。皆この地を早く出ようと、機動力のある馬で一気に進むのだ。

「3……4年前とは一変したな。ここは早く抜けた方が良さそうだ。……どうだ、行けるか？」

「はい。大丈夫です」

厳しい顔でカイルは頷いた。体調が悪いというよりも、この状況に衝撃を受けているようである。ラウルは眼を細め、前方に視線を転じて口を開いた。

「ここからあの岩場の辺りはよく山賊が出たものだが……」

ぎょつとして顔を挙げた少女に、安心するよう微笑みかける。指差した遠くの岩場の方に、荷を積んだ馬のような小さな影が見えたのだ。

遠くの景色は陽に熱せられ、不規則に揺らいで影は生き物のように動いている。馬と思ったのは錯覚だった。

「あそこには井戸があるから。休憩するのに一息ついたところを襲うんだ」

けれど、とラウルは岩場の周りを見回した。

黒と白、そして灰色の色のない世界。ソマからわずか半日足らずでここはまるで別世界だ。

「この分だと山賊の類いもないだろうな。待ち伏せる間に干涸びる」

襲われる可能性は低いが、井戸は間違いなく涸れている。次の井戸までそう暢気にもしていられない。ラウルは立ち上がって荷を持った。半日ソマで休んだおかげかカイルの調子も悪くない。このま

まいけば、明日にはこの岩地を抜けられそうだ。  
埃と乾きから喉を守るために鼻から下を布で覆い、二人はまた、  
岩がむき出しの乾いた大地を歩き出す。

「……ここには、トゥルネイ山からの水脈があるはずなのに」

ぼつりと布越しに、呟くような言葉が零れ落ちた。

前を見てすっかり大地を踏みしめながらも、生命の気配の感じられないこの光景が信じられないというように、カイルは小さな胸を痛めていた。

「だから少しぐらい雨が降らなくても、樹は枯れない。深く深く根を伸ばして、樹は水を吸い上げる」

「それは、兄上が？」

「はい。……この地はすべて、見えないところでちゃんと繋がっているから。だから神から見放された土地なんてないんだよって」

歩みを止め、カイルはぐるりと周りを見渡した。

「なのに、ここは……」

起伏は少ないが、一面の岩と砂。街道沿いに植えられていた樹木も灌木も立ち枯れて、まるで冥界に迷い込んだようだった。

神の恵みを失った土地　確かにそう言えなくもない。  
けれど。

ラウルは立ち尽くす小さな背中をぼんと叩いた。縋るように黒い瞳が見上げてくるのに微笑んで、先へ進もうと促した。

「心配するな。雨が多い年もあるだろう？　今年はたまたま逆になつたというだけだ」



「そうでしょうか……」

「ああ。もうすぐ雨期だ。西から雲が流れて雨が降る。そうしたら、あつというまに緑になる」

「そう……なりますか？」

「なるさ。こういう場所は何度も見たことがある。だから大丈夫」

なにもないように見えてもちゃんと生きている。今はただ眠っているだけ。

そう言っただけで力強く頷けば、カイルもやっとなんか安心したようだ。強ばった肩の力を抜き、また一歩を踏み出した。

トウルネイ山から伸びた大地の「うねり」に皺がより、ミズルの小さな山々を形成する。

このミズル山地とトウルネイ山の間を縫うように、北方公路は南に向かって伸びていた。ソマからはほぼ平坦な道のりだが、稜線というにはなだらかな丘を越えればすぐに緩やかな下り坂になる。

すでに峰筋は目前に迫っており、そして涸れた井戸は坂を少し下った先にある。ここまで1日で辿り着けるとは思わなかったが、この分なら大丈夫。明日にはこの岩地を抜けられるだろう。

二人は黙々と足を進めていたが、ふと、カイルが立ち止まった。剣の柄を握り、わずかに左半身を開いてじつと前方を見つめている。

「どうした？」

「馬が……駆けて。とても急いでいるみたい」

その言葉が終わるや否や、稜線の向こうに土煙が上がったかと思うと数頭の人馬が躍り出た。ラウルも荷を置いて、腰の剣に手を伸

ばす。眼をすがめて様子を見るが、山賊の類いではないようだ。服装からすると帝国人。先頭にいる身なりの良さそうな軍人風の男は騎士だろうか。他に商人風の男が3人と、最後に護衛士のような男が続いていた。

平坦な岩場に出ると人馬はいつそう速度を上げ、そして二人の前をあっという間に駆け抜ける。

すまないとかなんとか、そんな言葉を置いて慌ただしく去っていった人馬を見送り、ラウルはカイルの頭から土埃を払ってやった。

「いまの人たち、どうしたのでしょうか」

「さあな。……何かあったのかもしれん」

「……良くないこと、でしょうか」

「わからない。彼ら個人の事情かもしれないな」

そうは言ったものの、「良くない事である」という確信があった。何かが起きている。

なんの根拠もない直感だが、胸のざわめきが止まらなかった。

「……わあ……っ」

フードを外して風に髪を遊ばせながら、カイルは声を上げて目の前の光景に魅入っていた。

北方公路はまっすぐ南に向かって伸びている。遠くの空には綿をちぎったような雲がぼつぼつ浮かび、薄紅色に染まっていた。坂の中腹からは徐々に産毛のような草が生え、やがて緑一色となって羊のような茂みまで生やしている。

空は燃えるような赤。地は暗く、そしてふたつの交わるその先に、ルツカレの街がある。

「そうだな。……あと3日頑張れば、今度こそちゃんとした風呂に入れるな」

「本当ですか!?!」

「ああ。たつぷり湯を張って、気が済むまで浸かっている。面白い屋台もたくさんあるんだ。夜遅くまで開いているし、美味しい料理を出す店もある。全部は回れないだろうが1日はゆっくりして、しっかり身体を休めよう。……良いな?」

「はい!」

少々疲れた顔をしていたカイルだったが、途端に元気になって歩き出した。

いったい何があったのか、ルツカレに行けば謎が解ける。逸る気持ちを抑えて二人は身体を休めたのだった。

謎は存外すぐ解けた。

「……ラウル。あれ……」

指差す先に、小さく黒い連なりが見える。

昼に軽く食事を摂った後、出発しようと腰を上げた時だ。

綺麗に縦1列に並んだ人馬。6騎が一塊になり、それが4つ。それぞれが馬に大きな荷を積んで、ゆっくりと街道を登ってくる。人も馬も揃いの服、馬装。

やがてはつきりしてきた掲げる旗には、濃い緑の地に黄色で獅子と星。アクサライの国旗だった。すると彼らはアクサライ兵か。

ならされた街道から外れ、二人は人馬に道を譲る。大小さまざまな石の転がる道の端でアクサライ兵を見送っていると、下から一騎駆けてきた。

襟元にある階級章から、この場の隊長格のようだ。

「君らは二人か？」

「ええ、私は護衛士です。弟子を連れて、サリフリへ」

がっちりとした体格で目つきの鋭いその男は、徒歩の二人をちらりと検分すると黒々とした髭を撫でた。

「……そうか。水は足りているか？」

「大丈夫です。……何か、あつたのですか？」

「我々は北に向かっている。新たな命あるまで国境を封鎖する。……戻るなら、今のうちだ」

「いいえ。私たちは、このまま。……なぜ国境を」

「その答えは持っていない。状況はルツカレで訊くと良い」

男はさらりと馬首を巡らし隊の後ろに戻っていった。

身体の奥底に、どろりとした不安感が澱のように溜まってゆく。

昨日のあの男達は、それであんなにも急いでいたのか。中央公路では一度テネルスに入らなければならぬが、北方公路からなら直接帝国へ抜けられる。あの分だとテネルスも帝国との国境を閉じたのだろう。

何が起きているのか、まったくわからなかった。

しかし軍が国境を封鎖するなど、唯事ではない。

(戦　　？　まさか。ありえない)

そんな兆候はどこにもなかった。

そもそもここ数十年、戦らしい戦など起こってはいないのだ。戦というのは歴史の中の出来事で、地方の小国同士の小競り合いや内乱など、人伝に聞いたり物語で読んだりするだけで現実味などありはしない。

(ならば、いったい何が)

思索にふけるラウルの手に、ひやりとしたものが触れた。

縮るものを求めるように、それは両手でラウルの手を握りしめる。

「メレクおばさんに……もう会えない？ おじさんにも、あの方に  
も……」

俯いて、涙がこぼれるのを精一杯我慢している声だった。  
いけない。

動揺すれば、カイルにも不安が伝わってしまう。これ以上確実な  
事はなにひとつわからないのだ。徒に悲観すべきではない。

「心配するな。本気で帝国と事を構えるなら、分隊じゃ済まない。

あれはただの様子見だ」

「でも……国境を封鎖だなんて」

「大丈夫。長くは続かないさ」

緊張のあまりすっかり冷たくなってしまった小さな両手を包み込み、ゆっくりと熱を移して落ち着かせる。すべてはルツカレに着いてから。

大丈夫、大丈夫と何度も繰り返し、ラウルはその手を強く握りしめた。

「……行くっ」

カイルは口を引き結び、こくりと頷き歩き出す。  
手をつないだまま、二人はまた坂を下り始めた。不安に駆られる  
心を抑え、一歩一歩前に進む。

ルツカレに行かなければ。わかってはいても、どうしても足取り  
は重くなる。

「……ザックさんは、どうしている？」

「大丈夫。彼は腕も立つ。安心しろ」

「でも……帝国の、騎士なのに」

歩みが止まり、深い闇色の瞳が遠い東の空の果てを臨む。

ラウルも同じように東を見据え、一晚を共に過ごした騎士の無事  
を願った。

乗っていたのは脚の強い馬だったから、もう大分進んでいるはず  
だ。

祖国から遠く離れた場所でのこの知らせ、彼はなにを想うだろう。

ふと、ラウルの耳に静かな言葉がかすかに触れた。見下ろせば、  
少女が東の空に祈っている。

ザックさん、どうか無事で。

その祈りが届くよう、ラウルもそっと眼を閉じた。

「見えてきたっ。おーっしジュニア、もう少しだ」

美味しい飯にたっぷり湯を張った風呂、そして女……は仕事中だ、やめておくか。

馬上で伸び上がって前方を確認すると、帝国の騎士、ザカライア・モーブレーは愛馬の首をぽんと叩いた。馬の方にもその興奮が伝わるようで、何を言わずともルツカレの街に向かって足を速めてくれる。

ここまで強行軍だったから、今日は一日しっかり休んで存分に疲れを癒すことにしよう。ジュニアにもたらふく食わせて、好物の林檎も与えなければ。

栗色の頭とまだらになった無精髭をひと掻きすると、ザックはルツカレへとまっすぐに駆けて行ったのだった。

## 灰色の鐘の音・2

「ああっ！ 人だ、人がいるっ！」

ソマを発つてまる3日。交易商の先を駆けたため、人影すら見なかった。

人と遭わないということは、人語を喋る相手もないということだ。愛馬のジュニアに話しかけても返る言葉は馬語である。どんなことでも構わないから人の言葉を話したかった。

目の前には切望した人間が多数。しかも動いて喋っている。幻ではないと感極まるのも当然だった。

街道の真ん中で「おはよう！」と声をかけて笑っている、馬に乗った茶色の熊。いかにも怪しいこの男の周りには、ぽっかりと空間ができていた。

それでも幾人かが曖昧に返事を返すと熊は頷き満足そうに去って行く。

危つく警備隊を呼ばれるところだったとは、茶色の熊ことザカライア・モーブレーのまったく知らないことだった。

北方公路はルツカレの西で中央公路と合流する。中央公路は流石主要な街道だけがあり、常に人や物が行き交っていた。その緩やかな流れに乗って、ザックはルツカレの街へと入ってゆく。

街は週末ということもあり、いつにも増して賑わっていた。

ここルツカレの街はテネルス国境にほど近く、中央公路、北方公



路、そして南方のロベリア半島に伸びるドリマリア街道が交わる交通の要である。人と荷が集まるこの街は、アクサライ王国西部最大の都市だった。

街は小高い丘を背にして南に向かって開けている。北側は高級住宅街。ここに領主の館もあった。そして街の中ほどを街道が東西に貫き、この周辺に大きく繁華街が広がっている。官公庁は街の東部西側には神殿と大きな公園があり、人々の憩いの場となっている。そして南側には一般市民のこまごまとした家が連なっていた。

石造りの尖った屋根は帝国風、きらびやかな丸い屋根はテネルス風、木造の平らな屋根はアクサライ様式だ。街道の両脇に立ち並ぶ様々な形の家々、人々のざわめき、かましい物売りの声。馬車が行き交い馬がいなき、露天には色鮮やかな野菜や果物、珍しい花まで揃っている。

久方ぶりの「人の世界」に、ザックの足は浮き立った。

「やーっぱこれだよ、これ！ 文明ってスバラシイ！」

くつと拳を握りしめ、男はまた歩き出す。まずは宿で部屋を取ってジュニアの世話。それが終わったら飯を食って、準備ができれば風呂でさっぱり汗を流す。

なんでもない日常が、いまは恋しくて仕方がなかった。

「……………やっぱあのおっさん……………凄え」

こざつぱりとした格好に着替えたザックは、目抜き通りを歩いていた。

愛馬の世話と風呂を済ませ、気分は実に爽快だ。そして決めた宿

も実に良かった。

サリフリまでの助言を乞うたとき、あの護衛士からそれぞれの街でのお薦めを教えてもらっていたのだ。ルツカレならこの宿、と示されたのは街の南部の繁華街のご真ん中。ごく近くに花街まであるので邪推したが、とんでもない誤解だった。こじんまりとしているが中は手入れが行き届き、従業員も丁寧だ。まだ午前中だというのに嫌な顔ひとつせず、空いている部屋へ通してくれたばかりか風呂まで整えてくれたのだ。馬房も清潔だったし良い馬だとジュニアを褒めてもくれた。そしてなによりその値段。

「これでたった帝国銅貨4枚ってんだから」

6枚が相場だと思っていたので、これはなかなか大きな差だ。

浮いた金で何を買おうか。

そんなことを考えながら、ザツクは通りの店をひやかした。

西の公園の奇妙な彫像を眺めてから神殿に寄り、見学がたら旅と給料の無事を祈ってみる。それから両替商で小銭を作ったりしていると小腹が空いてきて、屋台で軽くつまめるものを買って食う。こんなのにのんびりしたのは久しぶりだ。

やがて陽が傾くと、一気に人出が増してきた。

明日は公休日、多くの店が休みになる。必要なものは今日のうちにというわけだ。

こここのところ馬と草しか目にしていなかったため、曜日感覚が曖昧になっていた。ザツクも慌てて買い出しに走る。

念願の帝国製胃腸薬はすぐに見つけた。ここから先は毎晩宿に泊まれるだろうから、水も食料も最小限で構わない。しかも宿で弁当を作ってくれるということなので、ひとつ任せてみることにした。

それから、と考えジュニアの林檎を探したが、こちらはまだ店になかった。代わりに唐黍を数本買ってみたのだが、試しに生で食べれば意外に美味しい。確かに火を通した方が甘みは増すが、そのまま

でも瑞々しいのでつい半分ほど食べてしまった。

「……まー、人間用だ。構わんだろ」

いくらなんでも浮かれすぎだと自嘲して、栗色の頭をくるりと掻く。半分ほど芯になった唐黍を見ていたら、国境で別れた二人のことを思い出した。

強面の護衛士と、可愛い顔でも大食漢の小さな少女。あの二人はいまどこにいるだろう。

「チビたちは……もうソマに着いたか？」

食べ盛りを抱えていては食糧を持って歩くだけでも大変だろうと、トゥルグで村長に金を渡しておいたのだ。そしてくれぐれも粗略に扱わないように、少々刺激的な与太話も混ぜてみた。娯楽の少ない辺境のこと、村人達はさぞ楽しんだことだろう。その時の二人の顔を見てみたかったものだといっそり笑う。

「あいつら、今頃どうしてっかな……」

たった一晚を共に過ごしただけなのに、会いたくて仕方がなかった。あのおっさんがついていけるなら安全だ、そう思っただけでも、やはりあのチビはこの手の内に置きたかった。

(……だってよ、あんなに似てるのに)

記憶の中にある顔と、あの少女は瓜二つと言って良い。

確証は何もない。本人も知らないかもしれない。けれどあんな顔はそうそうあるものでもない。それにチビはこの紋章の意味を知っていた。恐らく同じ紋を持つ誰かが傍で守っていたのだ。

葡萄の葉で縁取られた太陽の紋。

これは皇家に忠誠を捧げた証、そしてザックの誇りでもあった。

「あれ？」

ふと閃いて、ザックははたと我に返った。

「そもそもアイツ、なんで逃げてんの？」

一時は悪巧みでもしているのかと疑ったが、アレにそんなことができるとは思えない。そして黒髪の女性ばかりが攫われる、あの事件の被害者であった事は間違いないだろう。なにか誤解があつて逃げたにしても、この紋の持ち主なら助けしてくれると聞いてはいなかったのだらうか。

それにハーシユは瀕死の少女を「見つけた」と言っていた。もしやその時には紋の持ち主はすでに……

愛馬を近くの木陰に連れ出し唐黍を与えながら、ザックは思考にふけていた。

兄はずっと昔に亡くなった。だったら血を受け継いでいるのはあのチビひとりだ。それなら余計に嚴重に守ってやらなければならぬんじゃないか？

「でもハーシユは先に行けて……確かにおっさんは護衛士だけだよ？ チビの方が大事じゃねえか。アイツの身柄を確保する方が先じゃねえの？」

確かに「転送」とかいう魔術は悪用されれば危険極まりない。けどそれをあのチビが変に使うとも思えなかった。目的地は同じなのだ。2人に同行し、その間に何をするつもりか聞き出す手もあった

はずなのに。

今となつては任務自体に無理があるような気がしてくる。伝説の魔術を調査するというのは建前で、本当の目的はもっと別の

「うおお！」

突然髪を強く引かれ、ザックは思わず声をあげた。

頭上でぶちぶち音がするのは、少なくとも数が犠牲になったたためだろう。

いってえ、と頭に手を当て顔を向けると、犯人は涼しい顔で立っていた。悪いなどは微塵も思っていないようで、ごりごりと熱心に口を動かしている。そうして髪が咀嚼されていくのはとても哀しいことだった。

「……………めっ……………ジュニア！ 俺の髪は餌じゃねえ！」

髪は男の命なんだぞ、と怒ってみせてもどこ吹く風だ。美味しいものをもっと出せと、肩に掛けられた布の袋に頭を入れようと大きな唇をしきりに左右に動かしている。

「唐黍はもうねーよ。ほら見ろ、どこにもないだろ？」

袋の口を開け、空っぽの中を見せてやる。顔を斜めにしてじつと中を確認するとザックの愛馬、ハーシユ・ジュニアは頭を挙げた。そして鼻の穴を大きく開けるとぶると首を振るってさっさと馬房に戻って行く。

目の前にいたザックは当然、まき散らされた鼻汁を頭から浴びることになった。

「うわっ！ きったねえ。俺あ風呂入ったばっかだぞ？ おまえ、

馬としてそういう嫌がらせはダメだろ！」

齧られた頭もよだれでべとべとだ。これではもう一度洗わなければならぬだろう。

主のことを綺麗に無視して割り当てられた馬房の入り口にやってくる、ジュニアは「早く開ける」と前肢を掻いた。

「……わーっ たよ」

扉を開ければまた鼻を鳴らし、ジュニアはとつと中に入って行く。定位置につくと水を飲み、そして飼葉を食みだした。口直しということらしい。

すっかり扉を閉めて大きく息を吐きだして、ザックは木陰に座り込む。

「林檎はまだ時期じゃねーんだよ。そんなぐらい、わっかんないかねえ？」

これではどちらが主かわかりやしない。

なにか大切なことが閃きそうだったのに、ジュニアのせいでそれもすっかり台無しだ。なんだったつけと頭に手を差し入れてみると、べとついた髪の毛の長さがまだらになっていた。

「ひっでえ……」

せつかく人間らしい生活を送れると思ったのに、なんだか気分が沈んでくる。

気持ちと一緒に陽もまた沈み、そして鐘の音が聞こえてきた。

低く響く重厚な鐘の音。

それがひとつ、ふたつと加わりやがてみつつの鐘が重なって鳴り

響く。

「なんだ……？　なんで3つ……」

こんな風に鳴る鐘はこれまで一度も聴いたことがない。  
通りに出て見渡せば、人々も皆一様に西の方を眺めていた。  
身体を芯から揺らす荘厳な鐘の音。

3つの鐘が重なり響き、十重二十重に木霊しているようだった。

「どづいつことだよ。……これって、まさか」

神殿の鐘が鳴ることはそう珍しいことではない。しかし通常はひとつだけ。春分、秋分、夏至、冬至。そしてその地域の祭りの日。  
その夜明けと共に、鐘が鳴る。

そしてふたつの鐘が同時に鳴るのは慶事。しかしこれは帝国皇家と王族のものであり、鳴らされるのはやはり夜明けだ。

ならば日暮れと共に鳴らされる、みつつめの鐘の意味は？

神学の授業でまつさきに習うことだが、ザックは夢見心地で聴いていた。誰もがそんなことがあるわけないと、無邪気にそう信じていたのだ。歴史を紐解いても一度もなかったことである。あくびを噛み締め右から左へ、さらりと聞き流していたものだ。

記憶の底を無理矢理探り、そしてザックはへたり込んだ。

膝が笑っている。手が震え、とても力が入らなかった。

まさか。まさか、そんなことは。

(確かめねえと……)

奥歯を噛み締め壁を伝いながらも足を前へと進めるが、ぐらりぐらりと不規則に足もとが揺らいでいる。どこをどうやって歩いたの

かもわからない。しかし気がつけば神殿前で、人の波に揉まれていた。

右も左も人、人、人。押されるままに、ザックは進む。

神殿前では神官が事情を説明しているようである。しかしこの人ごみでは何を言っているのかまったく聞こえてこなかった。

前方で、どよとざわめきが沸き起こった。それは瞬く間に広がって、ある単語のみがザックの耳に飛び込んでくる。

「……ホウ、ギョ？」

頭が理解を拒否していた。

しかし嫌が応にも不吉な言葉は次々に耳に飛び込んで、ザックの身体を浸食する。

帝国の

崩御

現皇帝

世界が突然暗くなり、歯の根が合わずにがちがちと音を立てた。身体が震えが止まらない。手も足も、自分の物とは思えなかった。

帝国歴2576年 秋風月の27日。

アルトローラ帝国皇帝崩御を告げる鐘が、大陸全土で響き渡った。





閑話 〱 とある領事館職員の記事・1 〱

\* 帝国歴2576年 秋風月 19日(金)

目が回る……キモチワルイ。

これが馬車酔いってヤツですか……

尻も痛い。じんじん熱持ってる感じがする。

それもこれもあと1日。耐えなければ。

\* 帝国歴2576年 秋風月 20日(地)

やっと新しい任地に着きました。

アクサライ王国西部最大の都市、ルツカレでございます。

これから5年間、立派にこの地で勤め上げたいと思います。

そうすれば昇進が早くなるんです！

スミマセン。「昇進」につられての国外勤務です。

思い返せば帝都を出発したのが草月の25日。ですからもう3週間以上、といえますか1月近く馬車に揺られていたわけです。長かった……。すっかり尻の感覚が麻痺してます。もうね、最後の4日間で尻の肉がそげ落ちたかと思いましたよ。

今回の旅で感じたことと言いますと、やはり帝国が一番だということですね。

いえ、帝国民だからって身びいきしているわけではありませんよ？  
道がですね、ええ。道が違うのです。

帝国内では街道は滑らかに舗装されているのでそれが当たり前だ  
と思っていたのですが、国外は違っていました。

それでもテネルス王国の首都、クリナムまではマシと言えましょ  
う。まあ、イーツ〜クリナム間には高速馬車専用道路なんてのも  
あるくらいですから、ここまではきっちり整備されているわけです。  
ところがその先となるとですね、がったがたなのです。

いえ、整備されてないわけではありません。舗装もされているし、  
ぱつと見段差が多いようにも見えませんが。しかしですね、どうしても  
も微妙な凹凸があるんです。それが馬車の中で増幅され、尻に直撃  
するワケです。

アクサライ近くなると振動が次第に大きくなってきて、何度舌  
を噛みそうになったことが。

……ああ、尻が痛い。

一応解説しておきますと、アクサライではほとんどの人が自分用  
の馬を持っているので街道は馬が歩ければ良いわけです。だから街  
道を滑らかにする、という考えがそもそもありません。荷馬車が轍  
にハマったりしなければ良いな、とその程度なワケです。

でもでも、少ないとはいえ人用の馬車だつて通っているのですか  
らもう少し整備して欲しいです。そう思いませんか？ 思いますよ  
ね！

こういう要望ってどこに伝えれば良いんですかね？

それにしても、日がな一日馬車で揺られるというのも辛いもので  
す。

2刻に1度の小休憩、食事と寝る時以外はずっと揺られているわ  
けです。本を読もうにも目が踊るし、一度やって気持ち悪くなって  
以来、ずっと目を閉じていました。それがもう退屈で退屈で。帝都

では仕事に追われてましたから、馬車で思う存分寝てやるぞ、だなんて浮かれていたのもクリナムに着くまでです。そこから先は忍耐の一言でした。

尻の下に着替えを敷くと多少楽になると聞いたのですが、ワタクシ、そんな余分の服は持つておりません。ただただ耐え忍ぶばかりでございました。

それにワタクシ平の公務員でございますから、貴族の方々のように移動するのに専用馬車などないのですよ。いえ、自腹を切ればもう少し乗り心地の良い馬車にも乗れますが、そんな金、あるわけないじゃないですか。なけなしの貯金をこんなコトに使うわけには参りません！

公費で負担してくれるのは「激安乗車券」だけですからね。

……せめて「格安乗車券」にして欲しいと願うのは、贅沢でしょうか。

それでも無事に任地に到着しました。

もう夕刻でしたが、まずは先任の皆様方にご挨拶をさせていただきますました。

帝都から買って来たお菓子は大好評で、喜んでいただけたようです。ほっと一安心でございます。

実は手荷物的大部分がお菓子だったので。

これで最初の印象が決まりますからね、気合い入れて持ってきましてよ！

蒸留酒をたっぷり染み込ませた香り高い焼き菓子です！

これなら保存も利くし、熟成させている間は移動ですからね。今が丁度食べごろで一石二鳥でございます。

で、早速明後日からの話だけど、って先輩？ 明日じゃないんですか？

暦？ …… ああつ、明日は公休日ではないですか！  
やった！

正直、膝と腰が笑ってるので明日から仕事は辛いなー、って思っ  
ていたんです。明日はお休みですね！

明後日から一生懸命働きますっ！

\* 帝国歴 2576年 秋風月 21日（陽）

お店が……軒並み閉まっています。

いえ、開いているところもあるということですが、どこにあるの  
かわかりません。

食事するにはどこ行けば……と途方に暮れていたら、先輩が連れ  
て行ってくれました！

先輩、ありがとうございますっ！

奢りだったらもつと嬉しかったです！

こういうとき官舎って便利ですね。先輩方がすぐ傍にいてくれる  
のは心強いですし、領事館の隣ですから朝もぎりぎりまで寝ていら  
れます。

え？ 夜中でも容赦なく叩き起こされるって？

まさかそんな、はは。冗談、ですよね？

……ね、先輩？ 否定してくださいよっ。

公務員って、定刻上がりじゃないんですか？ え？ 定刻で閉め  
るのは窓口だけ？ ええっ？ アクサライの人はのんびりしてるん  
じゃないんですか？

領事館に来るのは帝国人がほとんどだって？

まあ、帝国領事館ですからね。そうですね。  
帝都よりキツイ職場はないって聞いていたのに……  
ちよつと先輩！ 頭撫でないでくださいよ！ 泣いてなんていま  
せんから！  
笑わないでください！

……先輩、イイヒトなんだけどなー。  
絶対おもしろがつてるよね。うん。

ああ、部屋もなんとかしなければ。寝台の上しか居場所がありません。

……ワタクシ、荷物は少ないですよ？ 官舎は家具付きですからね。辞令が出た時点で送っておいた私物は着替えやら食器やら、少し大きめの木箱3つです。これで部屋が埋まるってのは、部屋そのものが小さいんです。

独身者用ですから、まあこんなものでしょう。  
あとは荷解きするだけなんですけど、身体が痛くて服すらまともに取り出せていないんです。なんだかまだ揺れてる感じがするんですよ。

今日は洗濯するだけで精一杯でした。

こんなとき、民間人の方なら明日から着る服どうしよう、と悩むところでしょう。

ところが公務員は違うのですよ。

ふふふ。

官服ばんざい！

上から羽織れば中がボロでもシワシワでも大丈夫！

素晴らしいでしょう？

貴方も公務員になってみませんか？

\* 帝国歴2576年 秋風月 22日(月)

聞いてください。

尻に……大きな青あざができていました！

あざの周りは茶色とも黄色ともつかない変な色のシミになっていてね！

道理で腰を曲げる度に痛みが走っていたわけです。勇気をだして鏡を見て良かった。

そして任地での初仕事は荷運びです！ 荷受けから地下室まで、運んで運んで運びまくりました。

辛かったです。ほんつともう、辛かったです。それでもワタクシ、湿布を貼って乗り切りました！

部屋ひとつ、荷物で埋めました！

箱は小さいのに重いから、ひとつずつ運ぶしかないですよ。

今日は風呂を忘れないようにしなくちゃ。

あ、先輩！ 終わりました！

明日の仕事は……え？ 明日もこれ？

\* 帝国歴2576年 秋風月 23日(炎)

あの、ワタクシ、平とはいえ領事館職員ですよ……？

帝都でも机仕事ばかりでしたから、力仕事は得意でないのです。

あ、計算は得意ですよ？

非力なのに、ワタクシどうして荷運びしてるんでしょうか。  
身体中がぎしぎし軋んでいます。

荷受けまで運んでくれたのは騎士の方なのですが、荷物を置くだけおいて、さっさと帰ってしまいました。ついでに地下室に持って行って欲しかったのですが。騎士の人なら力が有り余ってるんじゃないですか？ 服の上からも凄かったですよ、あの筋肉！

なのに、きらっきらな笑顔で帰って行ってしまいました。  
ヒドイです。

まだ尻も痛いのに。

しかもこの荷物、載ってた馬車がまた豪華でした。

ワタクシ、今ほど荷物になりたかったコトはありません！

それにしても、これは一体なんなのでしょう？

地下室で嚴重に保管されてますが、まだ開けちゃいけないんだそうですよ？

\* 帝国歴2576年 秋風月 24日(水)

ルツカレの街にも少しづつ慣れてきました。

尻の痛みも徐々に引いてきています。

湿布って素晴らしいですね！

この時期帝都はまだまだ蒸し暑いものですが、ここは乾燥して過ごし易いです。

夜もすーっと涼しくなるし、うっかりすると寒いほどです。

意外に食事もおいしいです。それに安いし。

お給料は帝国にいたときと同じ額ですから、すっごく儲かった感



じがします。

ここで精一杯貯金しなければ！

不満といえば、少々埃っぽいことと新鮮な魚が食べられないことです。魚は塩漬だけじゃないんだぞー！ と声を大にして言いたいです。まあ、海が遠いから仕方ありません。

あ、あとの変な味のする香草。あれだけはどうにも受け付けませんでした。

部屋がまだ片付いておりませんので食事は外で食べていますが、早急に自炊したいです。だってあの香草、どの料理に入っているのかわからないんですよ。

食事の度にハラハラドキドキするのも疲れます。

先輩は慣れるよ、って言うってたけど、本当かなあ？

\* 帝国歴2576年 秋風月 25日(樹)

食べてばかりじゃありませんよ！ ワタクシちゃんと仕事もします。

新人は新人なりに、先輩方の邪魔にならないように手伝ってます。やっとなれというものがわかってきました。

こういう案件は誰が担当しているかとか、その程度ですけどね。

そしてワタクシ、どうやら受付に回されそうです。

領事館で受付といえば、一般の方々が最初に目にする帝国の顔なワケです。ワタクシの言動ひとつが帝国の評判に繋がるわけですね。先輩方が築き上げた評価を落とすわけにはまいりません。心して取りかかろうと思います。

先輩方は「無理するなよ」と優しいことを仰ってくれます。けれど公務員であるからには、あまり悠長なことできません。早いところ一通りの仕事を覚えなければ。

それになんといつても、来週は新年度が始まりますから！

年度明けはなにかと忙しいのです。たくさん人が来て、この申請はどこに出せば良いのかとか、締め切りはいつだとか、他にもいざこざに巻き込まれたりする人も多いそうです。

それらの人を捌くだけでも大変なんだとか。

あ、それで受付なのか。

\* 帝国歴2576年 秋風月 26日(金)

あの大量の荷物は、全部お金でした。

地下の小部屋が2つ、天井までお金で埋まっています。

なんか震えが止まらないんですが。

怖い。

そして領事が明日大切な話があるから少し遅くなると言っていました。

なんだろう？ 嫌な感じ。

\* 帝国歴2576年 秋風月 27日(地)

もつなにも考えられない

\* 帝国歴2576年 水月 5日(地)

暦を見たら、いつの間にか新年度になっていました。まだ5日しか経っていませんが、1年分の仕事をした気がします。明日は公休日。長かった1週間も終わりです。疲れた。

\* 帝国歴2576年 水月 6日(陽)

今までできなかった荷解き、始めてみました。疲れてるんですけど、なんかこう動いてないと落ち着かないって言いますか。

いい加減服を出さないと、着替えがもうないんです。また先輩が食事に誘ってくれました。行ってきます。

あれ、なに食べたんだっけ……？  
まあいいや。

先輩に、表情が強ばってるって言われました。自然な顔ってどんな顔だろう？

怖い顔では受付として失礼ですから、頬をつまんで揉みほぐします。これって効果あるのかな……

\* 帝国歴2576年 水月 7日(月)

領事の訓示がありました。

「皆さん、ご苦労様でした。皆さんのおかげで混乱も治まりつつあります。本国の方でも落ち着きを取り戻しているそうです。新帝陛下は立派に議会をまとめあげ、十侯も新たに忠誠を誓ったそうです。お若い陛下に負けぬよう、我々も精一杯職務を全うしようではありませんか」

とかなんとか。

その他にも、家族や知人が心配しているだろうから手紙を書きなさいって。まとめて速達便で出してくれるそうです。帝都までなら10日で着くそうですよ。しかも送料は領事持ち！ 流石伯爵さまは違いますね！

ワタクシ、貴族という方がこんなにも気さくだとは思ってもいませんでした。平民とは違うんだって、壁を作っていたのはこちらの方ですね。反省してます。

え？ 領事が特殊なだけ？

気をつけるって、どういうことですか？

……先輩、なに言ってるんです？ 領事は立派な方ですよ。

\* 帝国歴2576年 水月 8日(炎)

どうやらワタクシ、なし崩し的に受付担当になるそうです。どちらかというと、裏方で書類を扱う方が好きなのですが。数字を見ていると、うきうきしませんか？　ぴたっと計算が合うと笑いが漏れてきませんか？　……そうですね。漏れませんか。楽しいのに……

領事館もだいぶ落ち着いてきました。

先週は怒濤の1週間でした、時間の流れが曖昧で。記憶が断片的にしかありません。

なにがあつたかと聞かれても、無我夢中だったとしか。

あ、そうでした！　領事のお言葉。あれは素晴らしかった！　忘れないように記録しておこう。

先週、週明け早朝に皆で集まって訓示を受けたのですが、その時のお言葉です。

「皇帝陛下が崩御されました。我々は、この国難を乗り越えなければなりません。誰もが不安になっています。なにを隠そう、この私も不安で一杯です。ですが、それを他人に見せてはなりません。我々は、いわばアルトローラ帝国そのものなのです。我々が揺らげば帝国も揺らぐ。そして不安や恐れは必要以上に伝わります。ですから常に冷静に、落ち着いていてください。帝国は変わりません。これを忘れないでください」

確か、こんな趣旨のコトを仰っておられたかと。

このときの領事にはまるで後光が射しているようでした！　ワタクシ、じんと胸が熱くなりました。

先輩だつて涙ぐんでたんですよ？

ああっ！　あの時のこと、もつとちゃんと覚えておけばっ！　書き留めておかなかったことが悔やんでも悔やみきれせんっ！

追記：さつき尻を見てみました。青かったところが茶色っぽくなっていました。いつの間にか治ってきていたようです。先週は湿布どころではなかったのに、身体はちゃんと回復してたんです。偉いなあ。

\* 帝国歴2576年 水月 9日(水)

真っ白い髭の長いお爺さんがいらっしやいました。威風堂々という言葉がぴったりの、アクサライ商人の方です。ここにこです。嬉しそうです。

ワタクシもつられて笑顔になりました。自然に笑えるって、良いですねえ。

今日はどういったご用件でしょうか？ なんてうかがってましたら、慌てて先輩が出てきました。平身低頭してます。

……あれ？

えー……

領事も出てきた!?

貴賓室にご案内ですか？

ワタクシ……失礼なコトしてませんよね!？ ね？

後から先輩に、あのお爺さん誰ですか？ って聞いたら小突かれました。

お会いしたことありましたっけ？

って、ええ？ あの時の方ですか？ 顔が全然違ってますよ！

そりゃ大儲けしたんだろって……

ちよっと先輩！ 解説してください！

なにがなんだかワカリマセン！

……はあ、お爺さんは両替商の方ですか。

だからあんなにお金を持っていたんですね。

え？ もつと持つてるんですか？ あんなにあつたのに？

ええええ！？

……ワタクシ、腰が抜けました。

実はですね、あのお爺さんにはお金を借りているのです。

誰がって？ ……一応、名目上は領事ってことになってます。それが良いのか悪いのかは別として、領事はお金を借りました。で、それをそっくり領事館に貸し付けたことになっています。

どうしてそんな面倒なことをしているかって？

お金が足りなかつたんです。

テネルスが国境を封鎖などしやがったおかげで混乱しまして。それが取り付け騒ぎにまで発展したんです。

国ではこれを見越していたんでしようね。支払が滞ることのないように、って無利子で貸し出したんです。そしたらまあ、来るわ来るわ。荷が届かなくて支払に困った人から証書を現金に替える人まで次から次へと来ましてね。地下室の小部屋いっぱい詰まっていた金貨と銀貨がどんどん減っていったんです。

流石に足りなくなってきた、どうしよう！ って時にあのお爺さんが融資を申し出てくれたわけです。しかもメチャ安な金利で。

領事館では外国人から勝手にお金を借りてはいけないのですが、本国に許可を取ってる余裕がなかったので領事が借りることになったんです。

それにしてもなぜアクサライの人が援助をつて思いますよね？

そこには深いワケがありまして、お爺さんはあの「ハーキュラ



ネウムの奇跡」の場にいたんだそうです！ 伝説をその目で見たんですよ！ いいなあ。羨ましい……

それで先帝陛下、つてあれ？ 先々帝陛下になるのかな？ まあとにかく新帝陛下のご祖父君にあらせられます先帝陛下が後見なら帝国は大丈夫つて、そう思ってたそうです。

で、お爺さんは両替商ですからあの混乱の最中、まずは暴落した帝国通貨アシエラートを大量に買ったそうです。で、テネルスの野郎が3日で国境を開いた後は、今度はアシエラートが暴騰したのでそれを売ってまず一儲け。一度に売れば値下がりますからね、余ったアシエラートを領事に貸し付け流通量を調節して、そしてじわじわ利益を上げているそうです。

一時はアシエラートがアフィニスと等価にまでなったそうですから……お爺さん、たった1週間でいったい幾ら儲かったんでしょうね……

聞いたらイケナイ気がします。

あれ？ でもあれだけのお金を貸し付けたんですよ？

どうして帝国通貨は値下がりにしないんですか？

つて先輩に訊いたら、持つてるだけじゃ無いのと同じだって言われました。

……ええと。良くワカリマセン。

くっ……また先輩に笑われた！

\* 帝国歴2576年 水月 10日(樹)

あー……ヒマです。

突然ヒマになって嬉しいかと訊かれれば、そうでもないと答えてしまう、ワタクシ根っからの貧乏人です。

まあ、嵐ですから。確かにこんな日は歩きたくありませんよね。今日は人がほとんど来ないだろうってことで、ワタクシ事務処理やってます。念願の裏方です。やっぱり数字って良いですよー！。

静かです。聞こえるのは雨音と風の音、あとは算盤を弾く音ぐらいです。

うふふ、うふ。

やっぱり算盤って良いなあ……

少し余裕が出てきたら、色々と思いついてきました。

あの不吉な鐘が鳴った次の日、部屋で呆然としてたら先輩に領事のお家、というか館に連れてかれて、職員皆で身を寄せ合ってたんです。

なんだかもう怖くて怖くて、でも領事と先輩がお茶とお菓子を配ってくれて。それで落ち着けたんですよね。

そして次の日の訓示を聞いて、ワタクシ領事についていこうって思いました。

やっぱり領事は素晴らしい人です。

そう言えば、あの日ワタクシ乱暴されましたか？

乱暴ってほど乱暴ではないかもしれませんが、胸ぐら掴まれて締め上げられたと言いますか。

んー、違うな。

締め付かれたけど向こうの方が大きかったから、結果的に締め上げられた？

それ見て先輩が裏に引き摺ってってその人を殴り飛ばしてくれたけど、公務員が民間人を殴ったりして大丈夫なのでしょうか？

え、向こうは騎士だから平気だった？ 良く知ってますね、先輩。  
……怒ってませんよ？ だってあの人、取り乱してただけですも  
ん。

立ち直ってるの良いですよね。

あ、思い出したら可笑しくなってきた。

……違いますっ。ヘンな趣味じゃありません！ あの騎士の人の  
髪型思い出しただけですって！

頭のとっぺんだけ短くするって斬新な発想ですよね。

なんでこんなコト、覚えてるんだろ。

やっぱり異常事態だったからですね、きっと。

\* 帝国歴2576年 水月 11日（金）

一夜明けて快晴。

街もだいぶ落ち着いてきました。

昨日の嵐で頭が冷えた人も多かったのだと思われます。

恵みの雨って本当ですね！

ああ、早く明日にならないかなっ。

「張りつめた糸はいつか切れるものですよ」って職員の慰労のため  
に、領事をご馳走してくれるんだそうです！

領事だって激務で目の下に隈作ってるのに。ホントこの地に来て  
良かった！

\* 帝国歴2576年 水月 12日(地)

皆で必死になって仕事を終わらせました。

今日は定時で上がりです。

鐘が鳴ったら服を着替えて現地集合。お店は繁華街にあるようなのですが、ワタクシ地理が全然わかりません。先輩が連れて行ってくれるそうです。

ここに来てもう3週間が過ぎようというのに、一人で街も歩けないなんてどこの子供ですか。決めました。明日は街の探検です！

ってあれ？ 先輩、馬なんて連れてどうしたんですか？ 仕事はもう終わりですよ？

うわっ。ちよっ……

掴まってるって！ 何するんですか！

先輩！ 公用馬の私的流用はいけません！ 規則違反ですっ！

陽は地平へとその身を降ろし、揺らぎながらも大気を染める。

西の空は燃える赤に彩られ、薄紅色の東の空にも歪な月が昇っていた。

馬車には乗っても直に馬に乗るなど初めてだ。

クララ・クレメンティアは必死になって鞍の縁に掴まっていた。

乗馬の知識など無いに等しいが、この馬は横座りになって乗るものでも二人乗りするものでもないはずだ。

どうして、こんなことに。

もうワケがわからない。

馬が足を進めるに従って不規則に身体が跳ね、ずり落ちそうにな

る。かといって腰に回された手にしがみついてもできず、クララはひたすら鞍の縁を握りしめていた。

背中に密着した温もりから漏れる息が、頭上で髪をくすぐっている。

また、笑われた。

気がついてはいたが、とても抗議の声をあげるところではなかった。

周りを見る余裕もない。

どこをどう移動したものが、目を開けた時には馬は大きな公園の中を歩いていた。

乗せられた時とはまるきり逆の丁寧さで馬から下ろされ解放されたが、しかしクララはまたすぐに柔らかく拘束された。

広い胸に抱き込まれ、背と腰を支えられる。

膝が震え、自力ではとても立つてはいられなかった。

放せ、ともがく気力もすっかり消え失せ、もはや男のなすがまま。

男 目の前にいるのは優しい先輩などではなく、これまで見たこともない目をした男の人だ。

(どうして、こんなことに?)

恋など無縁だと思っていた。

だから一人でも身を立てられるようにと公務員になった。ここで無事に任期を終えればささやかな役職を貰えるし、年金もちよっぴり多くなる。定年まで勤め上げたら帝都の片隅に小さな家でも買って、そこでのんびり過ごそうとそんな夢を描いていた。

けれど男はそこに自分も混ぜると言う。

二人なら、部屋も庭ももう少しだけ大きくなると。そして茶飲み友達に困ることもない。

だから俺を選べ。

一目惚れだったのだと、見たこともないような綺麗な顔で男は告げた。

笑み崩れたその顔を、クララは呆然と見上げることしかできなかった。

「わたしはチビでソバカスだらけだし、お世辞にも美人とは言えませんが？」

「……見た目じゃないんだ」

「がりがり骨と皮だけだし」

「これから太れば良い」

「人目がなければ、口だつてすごく悪い……」

「……知ってる」

「料理だつてたいしてできないし。……好き嫌いだつて激しいし」

「俺が作る。料理は得意だ。嫌いなものも食べられるようにしてやるわ」

あの月に誓ってひもじい思いはさせないから。

耳元で囁かれ、かっとなが熱くなった。顔は見えないだろうが耳まで燃えるように火照っている。絶対、この人にはお見通しだ。

「誓うなら、陽の神と陛下じゃないですか？」

「……この辺りでは月の女神の方。エルフィに誓うんだ……」

抱擁が強くなり、息をするのも苦しかった。

頭の奥ではがんがんと音を立てて血が巡る。わずかに目を上げれば太った月が滲んで見えた。

何もかにもがぐちゃぐちゃで、どうして良いのかわからなかった。けれど耳に当たる広い胸から聞こえる鼓動もまた乱れていて。

わたしだけじゃない。そう思ったら少し気が楽になってきた。目を和らげ、クララはそっと力を抜いて身を任せる。

「じゃあ、先輩」

とろけるような笑みを浮かべ、男はまた、クララを強く抱きしめた。

## 探し物屋の女魔術士

光の帯が目蓋に当たり、女は顔をしかめて寝返りを打った。

ころりと体勢を変えながらも薄い布団を引き上げ顔を伏せ、またすぐにすうすう穏やかな寝息を立て始める。しかし光は陽の動きと共に移動する。やがて女の目蓋を眩しく照らし、再び起床を促した。

「うっん……もう少し……」

光を避けようともう一度ころりと転がって、そして女は床に落ちた。

「……………」

一瞬眼が開いたが半分ほどでまた閉じられた。さらに布団を引き上げ顔を隠し、飛び出した足先は膝を曲げて中に入れる。

固い床の上で丸くなり、それでも女は寝続けた。

(どうする……?)

扉の前で、男はじりじりと待っていた。

断言できる。彼女はまだ起きていない。

何度戸を叩いて名を呼んでも、中から物音ひとつしないのだ。



そろそろ時間だ。今日も予約がびっしり詰まって余裕がない。遅れるわけにはいかなかった。

どうすれば、と思った途端に右手の重みが増した気がした。恐る恐る開いてみると、そこにはくすんだ金色の鍵がある。

(こ、これを使う時か？ そうなのか？)

しっかり握りしめていたためか、鍵はじつとりと生温くなっていく。

無性に喉の渇きを覚え、男はごくりと唾を飲み込んだ。

(この部屋の、鍵を開ける……)

真つ先に脳裏に浮かぶのは彼女の寝顔。しどけなく開いた唇はほんのりと赤く染まって柔らかかそうで、まるで齧ってくれと言わんばかりで……

小鼻がびくびく膨らんだ。

いかん、と男は妄想を振り払う。

(今日は遅刻できないんだ。どうしてもアイツを起こさなきゃならなくて、これはあくまで職務の一環で……)

よしんば着替え中だったとしてもそれは事故だ。わざとじゃない。決してわざと見るような真似はしない。それにこれは仕事だ。やましい気持ちなど、わずかにでもあってはいけないのだ。

(うっ……やるぞ。やってやる！)

気合いを入れて、震える指で鍵を握った。

しかしいざコトを起こそうとしても上手くいかないものである。

何度差し込もうとしてもぶれる右手を支えるために、男は両手で鍵を持った。扉の前で膝をつき、しっかりと狙いを定めてそつと鍵穴へと差し入れる。

入っ

「うぐっ！」

た、と思った瞬間扉が開き、ぶ厚い木の角が男の額をしたたかに打った。

目の前では色とりどりの火花が散り、鼻の奥がつんとする。

痛みあまり、声も出せずに悶える男に出てきた女は慌てた様子で駆け寄った。

「えっ？ やだケネス！ 大丈夫！？」

「ぐぐぐ……起きたか」

「ごめんね。まさかそんなところにいるとは思わなくて」

介抱しようとする女に、男は扉を閉めるようにと促した。

これは不慮の事故。こちらの不注意だ。彼女が気にすることではない。

何度も何度も謝りながら、促されて女は部屋を施錠した。鍵を回せばかちやりと鳴って、扉に錠前が下ろされる。

いつもの音だ。

異常なし、と自らも確認し、そして男は気がついた。前触れなしに扉が開くなどおかしいではないか。

「ジュリア？ タベは鍵、かけて寝たか……？」

「あ、あれ？ ……そういえば。どうだった、かな？」

ぎくりと肩をすくませて、女は探るように男を見た。

「部屋に入ったらすぐ締めると、いつも言っているだろ？」

「はい……夕べは、その。あんまり疲れてたから、ついそのまま寝ちゃって」

「忘れたんだな？」

低く抑えた声ではあるが、怒りの込められた男の様子に女はしゅんと小さくなった。

「ごめんなさい、と頂垂れローブをぎゅっと握りしめる。緩やかに波打った艶やかな黒髪が、さらりと肩を滑り落ちた。

「……ケネスがいるから。だから大丈夫って安心しちゃって」

おずおずと、女は胸の前で両手を合わせた。上目遣いで青灰色の大きな瞳に見つめられれば男は詰まり、それ以上の言葉を飲み込まざるを得なかった。

ぐぐ、と拳が握られたかと思うとはあっと大きく息を吐き、男は額に手を当てる。

いつもこれだ。この眼に弱いんだ、俺は。

まったく仕方のない。男は女を促した。

「行くぞ、遅刻する」

「……うん」

女がローブを被ると二人で階段を駆け下りる。

駆けると共に翻るローブは濃紺。肩から下げた荷袋の中には小さな銀の盆。三色の旗こそ表に出していないが、女は魔術士であった。

小さな公園まで駆けつけ木陰に置かれた椅子に腰を下ろし、女は必死になって差し出されたピデを頬張った。

ここ数日、こうやって朝食を用意するのはケネスの役目になっている。茶を入れて、屋台で簡単な食事を買っておくのだ。自分はその時済ませるから食べるのはジュリアだけ。二度手間で、効率が悪いとわかっている。けれどこの方が護衛には都合が良いのも確かだった。

はくはくと食べる姿を横目で見ながら、男は布で包んだ水筒を取り出し中身を器に注いで待つ。ピデの中身はチサの葉とトマト、チーズにオレフの実。そこに塩と胡椒と酢を少々。さっぱりとした味付けだ。器の中身は濃い目の茶。砂糖少々、牛の乳はたっぷり。どれもジュリアの好物だった。

アルトローラ帝国皇帝崩御。

その突然の知らせは文字通り世界を揺るがせた。ここルツカレでも街は虚脱に包まれ、そして週が明けると大混乱に陥った。

治安維持を目的としてテネルス王国がアルトローラ帝国との国境を一方的に封鎖したのだ。それを受け、アクサライ王国でも帝国との国境に警備のための人員を配置することを決定、実行された。もっとも国境を接すると言っても往来の少ない辺境のこと、アクサライ王宮ではあまり乗り気ではなかったようで、ルツカレから分隊2つが派遣されただけである。

しかし「国境封鎖」により大陸間交易の大動脈ともいえる中央公路が止まった事実は大きな衝撃となって伝わった。噂が噂を呼び、はては巨大な尾ひれがついて人々の間を駆け巡る。

帝国が各国から大使を引き上げ始めた。新皇帝が大陸全土の平定に乗り出すためだ。その証拠に帝国軍が国境に集まっている。帝国領内にいる外国人は国外退去となり、その際には財産が没収さ

れる

真偽のほども定かでない、突拍子もない流言飛語が飛び交った。人々は翻弄され、為替は乱高下して毎日のように値が変わる。はては取り付け騒ぎまで発生し、損をした者、大もつけした者、悲喜こもごもの様相を呈していた。

これに対し各都市での帝国領事館では風評を完全否定、本国からの通達として外国人の移動及び私有財産は保証されると発表した。そして資金を潤沢に供給し、この不測の事態によって金を必要とする民間人に無利子での貸し付けを行った。

そして職員達が冷静に対処したことも大きかった。

これらの処置により人心は落ち着きを取り戻し、混乱は沈静化に向かつていった。

テネルス王国による国境の封鎖もわずか3日で解除され、帝国は変わらないと徐々に浸透していった。少なくともその週の終わりに、ここルツカレの街での混乱は治まりつつあった。

ジュリアは「探し物」専門の魔術士だ。

そのためどこから聞きつけたものか、あの鐘の鳴った次の日から人々が殺到した。

交易の品はどこにあるかとかそういった話が主であったが知人の安否や果ては迷子の依頼までやってきて、彼女は寝る間もない忙しさであったのだ。とても全部の依頼はこなせないと料金を値上げしてみたが、それでも客は絶え間なく訪れる。

皆困っているのだからと朝から晩まで働いて、それがもう1週間毎日何度も魔術を使い、疲労が極限まで達しているのは明らかだった。幸い明日は公休日だ。「探し物」など止めさせて、一日ゆっくりさせてやりたい。

だが、とケネスは息を飲み込んだ。

ピデの欠片を飲み込んだのを見計らい、手にした茶を渡してやる。

ありがと、と女は受け取り口をつけると無邪気に笑んだ。丁度良い温度に冷めた茶を一気に飲み干し、膝を払って立ち上がる。

行こ？ と歩き出した後を追い、ケネスは溜めていた息をそっと吐き出した。

この3年、ジュリアは毎日職場に通っていた。

職場と言ってもただの小さな部屋である。大通りから一步入った静かな通り、そこに面した建物2階の小さな一室。扉は2つあるが中はこれまた小さな部屋が1つだけ。細長い部屋の間を厚い布で仕切ったところが、ジュリアが魔術を用いて「探し物」をする場所だ。

そこに毎日通い、依頼があれば依頼をこなし、そして彼女はあの人を捜していた。

どんなに遅くなっても疲れていても、必ず一度は彼の人を捜して魔術を使う。それは彼女の恋する相手。10年間想い続け、今なお恋い焦がれるその人に遭いたいと、その一心でジュリアは魔術士になったのだ。

けれどももうすぐ期限が来る。

それまでに遭えなかつたら家に戻る、そういう約束なのだ。

そして次の雪見月が終われば先は無。今は水月5日、残りは今月4月を切っていた。

裏口の前でジュリアを下がらせ、ケネスは鍵を明けて中の様子を確認する。仕切りの布を開ければ机と椅子しか無い部屋には隠れる場所など存在しない。しかしそれでも毎日安全を確認し、それからジュリアを招き入れる。鍵を閉め、それから二人で開店の準備だ。といっても、やることと言えば部屋の空気を入れ替え椅子と机を整えるぐらいのものである。あつと言う間に準備も終わり、ジュリアがローブを被り直して腰掛けた頃合いに、ケネスは表の扉を開けた。すでに予約客が落ち着かない様子で待っており、いそいそとジュリアの前に腰を下ろす。

仕切り布を引いてその場を離れ、ケネスも小さな机に向かって腰を下ろした。慣れない手つきで帳簿を付け始めると、布の向こうからぼそぼそと話し声が聞こえてくる。憔悴した客にジュリアが穏やかに話しかけている。この分なら今回は、ケネスの出番はなさそうだった。

護衛のはずが、ここのとこすつかり秘書兼雑務係となっている。ジュリアはそんなことはしなくて良いとケネスを止めた。しかし客のすべてが問題を起こすわけでもない。ひとりで手持ち無沙汰であるのも退屈なのだ。

納得いかないと激昂してジュリアに掴みかかるような客はごく一部だ。ほとんどは彼女の魔術に救われ安堵して帰ってゆく。まれに興奮して飛び込んでくる客の言葉は大抵これだ。

「荷が来たよ、ジュリアさん！ あんたの言った通りだ！」

ありがとう、と何度も繰り返して、そして客は笑顔で帰る。

魔術士としての腕は確か、そのうえ美人とくれば人は放っておかないものだ。外国人の、しかも魔術士ということで当初遠巻きにしていた近所の人も、最近ではジュリアちゃんジュリアちゃんと可愛がっている。

(……俺、形無しだよなあ……)

ケネスは23歳、中級護衛士だ。この年で「中級」というのは悪くない。しかしここから「上級」に上がるにはそれなりの実績が必要になってくる。

こういった都市部では、警備隊が整っているため護衛士の活躍するような大きな事件は起こり難い。だから手っ取り早く実績を上げるため、若い護衛士達は地方に向かう。大陸の3大国以外では、まだまだ護衛士の需要は高いのだ。

(護衛士としての実績、か……)

護衛士ならば、やはり「特級」に憧れるものだ。

現在特級護衛士は五十余人。半数以上は引退しているから、現役の「特級」というのは本当に数が少なく引く手数多だ。弟子入りを望むものも多いし裕福な商人が泊付けのために雇うこともある。それに「特級」ともなれば引退しても軍の指南役に誘われたりと、護衛以外の仕事も豊富にある。

ジュリアが惚れたのは、そういう男であった。

まだ子供だったケネスはジュリア好みの男になろうと護衛士を目指し、そして目的は叶ったが。

(……ヤツはその頃もう『上級』だったってんだから……)

現在の自分とは状況が違う。一概に比べられるものでもない。けれど20代半ばで「上級」まで上り詰めたという話は他にはない。

差は大きかった。

そしてその護衛士は、ジュリアを助けた功績を認められ「特級」の称号を与えられたという。

あれから10年。

あの人はもう結婚して、子供だっているかもしれない。

どこかの国で、家族と幸せに暮らしているかもしれない。

それなら良いの。

でも。

……それでも。

一目でいい。

……遭いたい。

わたしはこんなに大きくなりましたって。



こつして生きているのは貴方のおかげなんですって、ちゃんとお礼を言いたい。

ほろほろと大粒の涙を頬に伝わせ泣きながら、そう言ってジュリアは微笑んだ。

例の男がアクサライの護衛士組合に所属していると調べ上げたのはケネスだ。ジュリアは家名しか知らなかったから、ついでに名前も教えてやった。

恋敵なのに。

なぜそこまで、と自分が酷く滑稽に思えて仕方が無かった。

けれどその情報を聞いたときのジュリアときたら、月の女神も霞むほどに美しい笑みを浮かべたのだ。

その笑顔は自分のものではない。あの眼差しは感謝であって、恋慕ではない。しかし間近で見れば蕩けるほどの幸福感に包まれて、もっと見たいと願ってしまう。

もっと、もっと。

その青灰の瞳に自分だけを映して欲しいと望んでしまう。

無論、打算もあった。

期限までに「彼」に遭えなかったら、その時はケネスとのことを真剣に考えるところ約束を貰っていた。

遭わせてやりたい。けれど、それを望まない自分もいる。

(馬鹿だ……俺……)

ケネスはごつんと机に額を打ち付けた。途端にびりりと鋭い痛みが走って息が詰まる。

忘れていた。ここには今朝作ったばかりのたんこぶがあったのだ。

(馬鹿だろ……俺……)

じわりと滲む涙を拭い、男は机に突っ伏した。

目の前には水を張った銀の盆。

両手を添え、水面が動かなくなった事を確認すると女は静かに目を閉じた。

脳裏に浮かぶ、あの姿。

頬を流れる血は赤く、顔も身体も黒く汚れて煤だらけ。それでもジュリアを抱え、もう大丈夫だと微笑んだ。

身体を抱える大きな手。

揺らぎなく、しがみついてもびくともしない広い胸。

そして身体全体から立ちのぼる、深い翠の優しい陽炎。

女はそつと眼を開けた。

青灰の瞳は今や晴れた空の明るい青に輝いている。

青の瞳で水面をじつと見つめて何事かを囁くと、やがて翠の光が現れた。

ぼんやりと光ったそれは盆の縁で蛍火のように瞬くと、吹き消されたように揺らいで消えた。

呆然と見開かれた明るい青の輝きが、徐々に青灰を取り戻す。

「あの人だ……」

遭いたくて遭いたくて、ずっと探していた人物が近くにきている。当てもなく彷徨つても見つからない。でも街道の交わるこの街ならば、立ち寄ることもあるかもしれない。逸る気持ちを抑え、ずっとそう言い聞かせて待っていた。

やっと。やっと！

唇を戦慄かせ、女は両手で顔を覆うと嗚咽を漏らして蹲った。

ざあつと葉が斜めに傾ぎ、風がうねりとなって駆け抜けた。

緑の波は音を立て、幾重にも折り重なって不規則な縞模様を描き出す。

彼方の影の小さな灯火、天の星まで強い風に散らされて、それでも弱々しく瞬き返す。

西の空でほっそりと輝く月が、頼りなくも草の海の道しるべとなっていた。

また風の波が押し寄せた。

岩の影、小さな窪地で身を潜めた2つの影が大きく揺れる。波が去ればいつとき小さくなった炎は再び勢いを取り戻し、力強く輝きだした。

小さな影が夜空を見上げ、藍の夜空に白く流れる雲に、ぽつりと吐息のような言葉をもらす。

「嵐が……来るかもしれません」

「ああ。明日は少し急ぐ。……行けるか？」

「……はい」

風に体温を奪われないよう、  
2つの影はそっと寄り添い身体を休  
めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4502t/>

---

運命の環は巡る

2011年11月27日00時57分発行